

九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告5 : 箱崎キャンパス地区 : 元寇防塁

九州大学埋蔵文化財調査室

<https://hdl.handle.net/2324/4777928>

出版情報 : 九州大学埋蔵文化財調査室報告. 7, 2022-03-31. Archaeological Heritage Management Office, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第7集

九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 5

箱崎キャンパス地区
元寇防塁

調査総括報告書



2022

九州大学埋蔵文化財調査室

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第7集

九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 5

箱崎キャンパス地区
元寇防塁

調査総括報告書



2022

九州大学埋蔵文化財調査室



HZK1603地点 石積み遺構 SF01 (北西から)



HZK1805地点 石積み遺構 SF00 (南西から)



HZK1905地点 石積み遺構 SF05・大溝 SD04 (北西から)



HZK1701地点 石積み遺構 SF01 (北西から)



HZK1802地点 石積み遺構 SF130 (南西から)



HZK1803地点 石積み遺構 SF01 (南西から)



HZK1902地点 石積み遺構 SF05 (北西から)

序 文

九州大学埋蔵文化財調査室は、箱崎キャンパス跡地の埋蔵文化財調査を行うため、2015年に再編成され、同年12月に助教2名体制で始まり、2016年度から本格的な発掘調査を開始した。その過程で、1913（大正2）年に中山平次郎が踏査によって推定していた元寇防塁跡を、旧中央図書館南側で2016年8月に発見して以来、旧理学部から旧工学部にかけて石積み遺構とその背後にある大溝が一体となって元寇防塁が構成されていることが判明した。2017年には整理調査と発掘報告書の刊行を促進するために、整理調査専属の学術研究員1名を増員し、さらに2019年度からは助教3名体制で発掘調査を加速させている。この間、旧工学部二号館では、石積み遺構を含む防塁部分が15・16世紀には破壊されていたことが判明したが、大溝部分は残存しており、元寇防塁の位置を復元することができた。こうした元寇防塁の発見と新たな知見により、2020年3月には、旧中央図書館南側から旧工学部工学研究科共同研究棟にかけての石積み遺構部分について、大溝とともに国の史跡元寇防塁として追加指定を受けることができた。その後、旧中央図書館北側から旧農学部一号館までの間で石積み遺構とともに大溝を検出し、この部分も国の史跡として追加指定を2021年10月に受けている。また、旧農学部一号館から箱崎キャンパス跡地外の地蔵松原国史跡元寇防塁までの元寇防塁の位置を復元することができた。

2021年4月からは従来の助教2名体制で、箱崎遺跡群の発掘調査を継続させているが、本年度末を以て箱崎キャンパス跡地の埋蔵文化財発掘調査を終了する予定である。この後の3年間で箱崎遺跡群の発掘報告書をすべて刊行することにより、箱崎跡地の埋蔵文化財調査事業は終了する予定で、2024（令和6）年度末を以て埋蔵文化財調査室は解散する。箱崎遺跡群ならびに筑紫キャンパスの御供田遺跡の考古資料は、箱崎サテライトに拠点を置く予定の九州大学総合研究博物館に移管し、埋蔵文化財の保存と活用が図られるとともに、研究が進められる予定である。

こうした中、箱崎キャンパス跡地内で発見された元寇防塁遺跡の総括報告書を刊行することとした。大学での埋蔵文化財調査は、遺跡の保護のみならず、遺跡の価値を最大限引き出すことを努めとしなければならない。そのため、考古学のみならず、自然地理学の立場から遺跡が立地する砂丘形成の復元とともに、弘安の役（1281年）に到来した台風災害を災害史の立場から検討した。また、元寇防塁を、日本史のみならず朝鮮史や中国史の立場からあるいはモンゴル考古学の立場から、東アジア史を俯瞰する視点で見つめ直した。このような様々な専門分野から、総括報告書にご執筆頂いた学内外の専門家の方々に感謝申し上げます。このようにして、元寇防塁遺跡を単なる史跡から歴史的証言者に高め、史跡として保存・活用することにより、歴史的な意義を感じることができる市民の身近な体験の場となることを願っている。

最後に、箱崎キャンパス跡地において発見された元寇防塁遺跡を国史跡として追加指定にご尽力頂いた九州大学久保千春前総長を始めとした当時の九州大学役員会、九州大学埋蔵文化財調査委員会ならびに九州大学統合移転推進本部、さらには福岡市経済観光文化局文化財活用部には深甚の謝意を表するものである。

令和3（2021）年12月30日

九州大学埋蔵文化財調査室長
宮本 一夫

例 言

1. 本書は、九州大学箱崎キャンパス跡地において2016～2020年度に実施した埋蔵文化財発掘調査のうち、元寇防塁に関する調査・研究成果をまとめた調査総括報告書である。なお、「跡地」までが正式名称だが、本書では煩瑣を避け、「箱崎キャンパス」と表記する。
2. 本書には、2020年度に実施した HZK2005地点の調査成果を掲載する。
3. 調査主体は九州大学埋蔵文化財調査室である。
4. 発掘調査・整理作業の担当者・参加者は、報告箇所に記した。
5. HZK2005地点における検出遺構および土層の実測は、齋藤瑞穂が行った。製図は齋藤、石井若香葉が行った。
6. 出土遺物の実測は、板倉佳代子、尾座本洋子、谷直子が行い、製図は谷が行った。
7. 遺構写真は齋藤が、遺物写真は福永将大が撮影した。
8. 本書で使用した地形図は、2020年1月に調製した電子地形図25000「福岡」である。
9. 遺構図等における X・Y の数値は平面直角座標第Ⅱ系（原点：北緯33度0分0秒、東経131度0分0秒）における座標値（m）を、方位は同座標系の座標北を表す。標高値は東京湾平均海面を基準とする海拔高（m）で表す。
10. 土層の色調は、『新版標準土色帖』（2010年度版、農林水産省農林水産技術会議事務局監修／財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠して表現した。
11. 本書で使用する遺構記号は、次のとおりである。
SI：竪穴建物 SK：土坑、SP：ピット
12. 本書の執筆は宮本一夫、齋藤、福永、谷が分担し、担当部分を末尾に記した。
13. 元寇防塁をめぐる諸課題に関する研究成果について、以下の方々に御寄稿いただいた（敬称略、五十音順）。なお、これらについては第Ⅳ章に収載した。
足立達朗（本学比較社会文化研究院）、岩永省三（本学名誉教授）、鹿島薫（本学理学研究院）、佐伯弘次（本学名誉教授）、白石典之（新潟大学人文社会科学系）、原口強（大阪市立大学理学部）、福本侑（島根大学エスチュアリー研究センター）、本田浩二郎（福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課）、森平雅彦（本学人文科学研究院）
14. 表紙デザインは、石井若香葉が担当した。
15. 本書に掲載した調査記録・写真および出土遺物は、九州大学埋蔵文化財調査室が収蔵保管する。
16. 本書の編集は、宮本の監修のもと福永が担当した。

目次

巻頭図版

序文

例言

目次

挿図・表目次

写真図版一覧

I 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について

1. 2021年度の箱崎キャンパス埋蔵文化財調査体制…………… 1
2. 2021年度の調査について…………… 3

II 元寇防塁の発掘調査史

1. モンゴル襲来と元寇防塁…………… 8
2. 元寇防塁の発掘調査成果…………… 9
3. 本報告書で取り組む元寇防塁研究の課題…………… 27

III HZK2005地点（工学研究科共同研究棟東地点）

1. 調査の経緯…………… 31
2. 遺構と遺物…………… 31
3. 小結…………… 38

IV 分析と考察

- 箱崎キャンパス地区の元寇防塁位置推定の変遷要因と元寇防塁を巡る諸問題…… 岩永 省三 43
- 地学調査から明らかとなった元寇における巨大台風災害
…………… 鹿島 薫・福本 侑・原口 強 66
- HZK1905および1805調査地点出土の石積み遺構構築石材の岩石学的分析 …… 足立 達朗 89
- 箱崎遺跡の古地形復元…………… 本田浩二郎 97
- 箱崎砂州先端部におけるモンゴル襲来前後の土地利用史…………… 福永 将大 111
- モンゴル襲来と日本の対応…………… 佐伯 弘次 128
- 高麗の対モンゴル・日本関係と元寇防塁…………… 森平 雅彦 139
- モンゴル高原からみたモンゴル襲来…………… 白石 典之 163

V 九州大学箱崎キャンパス地区における元寇防塁研究とその展開

1. はじめに…………… 180
2. 箱崎キャンパス地区の元寇防塁…………… 180
3. 元寇防塁の技術的系譜…………… 189
4. おわりに…………… 190

VI 総括と展望…………… 193

写真図版

報告書抄録

挿図・表目次

I 箱崎遺跡について		(池田池)における湖底掘削調査 …………… 73
第1図	箱崎遺跡とその周辺…………… 2	第34図 大蛇池(池田池)における掘削調査結果… 74
第2図	九州大学箱崎キャンパス 発掘調査グリッド …………… 4	第35図 大蛇池(池田池)における元寇時の台風堆積物 …………… 75
第3図	2021年度の発掘調査地点と本報告調査地点 …………… 6	第36図 大蛇池(池田池)における走査型電子顕微鏡を 用いた湖底堆積物の観察…………… 76
第1表	2021年度の埋蔵文化財調査…………… 5	第37図 珪藻遺骸および黄金色藻休眠胞子の変動… 77
II 元寇防塁の発掘調査史		第38図 珪藻遺骸および黄金色藻休眠胞子走査型電子顕 微鏡写真…………… 81
第4図	元寇防塁の位置と分担国…………… 8	第39図 九州西岸を通り、大きな被害を与えた台風 …………… 83
第5図	今津地区調査地点位置図…………… 9	第40図 東アジアにおける災害発生層準と気候変動、海 水温変動との相関…………… 85
第6図	今津地区 元寇防塁第2次調査成果…………… 10	第41図 台湾中部頭社泥炭地において発見された土砂災 害層準…………… 86
第7図	生の松原地区調査地点位置図…………… 11	第42図 モンゴル西部アルタイ山地西部における地質調 査(2017年実施)…………… 87
第8図	生の松原地区 元寇防塁第1次調査成果… 12	第43図 分析対象としたHZK1905調査地点の石積み遺 構構築石材試料の産状…………… 89
第9図	生の松原地区 元寇防塁第7次調査成果… 14	第44図 石積み遺構構築石材の岩石薄片を用いた顕微鏡 写真…………… 91
第10図	姪浜・西新地区調査地点位置図…………… 15	第45図 石積み遺構構築石材試料の堆積岩類の粒子モー ド組成…………… 95
第11図	西新地区 元寇防塁第3次調査成果…………… 16	第46図 箱崎キャンパス周辺の地質概要…………… 95
第12図	西新地区 元寇防塁第8次調査成果…………… 17	第47図 博多湾岸遺跡分布図…………… 97
第13図	博多地区調査地点位置図…………… 18	第48図 箱崎遺跡 遺跡範囲変遷図…………… 98
第14図	博多地区 博多遺跡群第111次調査成果 … 19	第49図 箱崎遺跡 調査区位置図…………… 100
第15図	博多地区 博多遺跡群第68次調査成果… 20	第50図 箱崎遺跡砂丘地形復元図…………… 102
第16図	博多地区 博多遺跡群第89次調査成果… 22	第51図 箱崎遺跡周辺昭和初期地形図…………… 103
第17図	箱崎地区 HZK1603地点調査成果 …… 24	第52図 箱崎遺跡砂丘地形復元図…………… 105
第18図	箱崎キャンパス内大溝比較図…………… 25	第53図 箱崎遺跡砂丘地形復元図…………… 107
第19図	香椎地区 調査成果…………… 27	第54図 博多遺跡群砂丘地形復元図…………… 108
III HZK2005地点		第55図 博多湾遺跡分布・砂丘地形復元図…………… 110
第20図	HZK2005地点全体図 …………… 32	第56図 箱崎遺跡 調査地点配置図 …………… 112
第21図	HZK2005地点 SP01・SP02・SK03・SI04・ SK05・SP06・SP07平面・断面図 …………… 33	第57図 箱崎遺跡：11世紀後半～13世紀前半…………… 113
第22図	HZK2005地点 出土遺物① …………… 34	第58図 箱崎遺跡：13世紀後半～16世紀…………… 114
第23図	HZK2005地点 出土遺物② …………… 35	第59図 九大箱崎キャンパス内遺跡 調査地点配置図 …………… 116
第24図	HZK2005地点 出土遺物③ …………… 36	第60図 HZK1805地点 SK07 …………… 118
第25図	HZK2005地点 出土遺物④ …………… 37	第61図 HZK1802地点およびHZK1901地点A区・B区 の遺構出土遺物…………… 118
第2表	HZK2005地点 出土遺物観察表 …………… 39	第62図 HZK1803地点およびHZK1905地点の大溝出土 遺物…………… 119
IV 分析と考察		第63図 HZK1805地点の大溝出土遺物 …………… 120
第26図	『報告1』における元寇防塁推定線 …………… 44	第64図 土師器における磨耗度合の差…………… 121
第27図	元寇防塁地蔵松原史跡指定範囲…………… 44	第65図 箱崎遺跡 焼土分布域…………… 125
第28図	『箱崎方面元寇防塁平面図』における防塁推定 線…………… 45	第66図 元寇防塁…………… 139
第29図	箱崎砂州先端部における元寇防塁北端推定線の 変遷…………… 46	第67図 水城…………… 140
第30図	箱崎砂州先端部における元寇防塁推定線(岩永 案)…………… 49	第68図 阿津賀志山防塁…………… 141
第31図	工学部北端に残る防塁の高まり(↑)と防塁推 定線…………… 57	第69図 江都外城=海岸防御壁説…………… 143
第32図	理学部正面玄関東北側における石の出土状況 …………… 62	
第33図	元寇時の台風災害復元を目的とした天草大蛇池	

第70図	イ・フィインの江都城壁復元案	144
第71図	珍島 龍藏山城	148
第72図	济州島の環海長城	150
第73図	関連遺跡分布図	165
第74図	モンゴル弓の構造	166
第75図	鉄鏃	167
第76図	鉄刀	168
第77図	鉄轡	172
第78図	鉄鎧	173
第79図	馬甲の一部とみられる鉄札	174
第80図	投石機	176
第3表	分析対象試料の岩石名と粒子組成	90
第4表	箱崎遺跡発掘調査一覧	101
第5表	各遺跡の砂丘形成時期と気温・海水準の変化	109
第6表	九大箱崎キャンパス内遺跡 遺構年代	117
第7表	九大箱崎キャンパス内遺跡 井戸年代	122
第8表	1275年2月改定の異国警固番役	132
第9表	江都の城郭に関する主要学説	143

V 九州大学箱崎キャンパス地区における元寇防塁研究とその展開

第81図	今津地区元寇防塁第12次調査2区の石積み	181
第82図	蒙古襲来絵詞生の松原の場面	182
第83図	HZK1905地点 背面石列	183
第84図	箱崎砂州先端部における元寇防塁推定線	185

VI 総括と展望

第85図	九州大学埋蔵文化財調査室全調査地点・史跡元寇防塁指定範囲	194
第86図	HZK1603地点調査の端緒となった大型礫	195
第87図	史跡元寇防塁追加指定範囲（箱崎地区南地点）	196
第88図	発掘調査とジオスライサー調査から推定された模式断面	197
第89図	旧工学部二号館付近の元寇防塁遺構	198
第90図	史跡元寇防塁追加指定範囲（箱崎地区北地点）	199
第91図	箱崎砂州先端部における元寇防塁推定線	201

写真図版一覧

巻頭図版 1	HZK1603地点石積み遺構SF01/HZK1805地点石積み遺構SF00
巻頭図版 2	HZK1905地点石積み遺構SF05・大溝SD04/HZK1701地点石積み遺構SF01/HZK1802地点石積み遺構SF130/HZK1803地点石積み遺構SF01/HZK1902地点石積み遺構SF05

写真図版 1	HZK2005地点 (1)調査区全景/(2)調査区北側/(3)調査区南側/(4)竪穴 SI04/(5)土坑 SK05
写真図版 2	HZK2005地点出土遺物 1 第22図1～第24図4
写真図版 3	HZK2005地点出土遺物 2 第24図5～第25図19

I 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について

1. 2021年度の箱崎キャンパス埋蔵文化財調査体制

九州大学埋蔵文化財調査室では、本学キャンパスの統合移転事業に伴って、箱崎キャンパスにおける埋蔵文化財発掘調査を2016年度から継続的に実施してきており、その調査件数は2021年度までの6年間で28件に及ぶ。その調査研究成果については、これまで合計4冊の発掘調査成果報告書の刊行をもって公表してきている（福田・森編 2018、三阪・谷編 2019、齋藤編 2020、福永編 2021）。

統合移転事業も大詰めを迎えており、箱崎キャンパスの埋蔵文化財発掘調査も2021年度に完了することになっている。九州大学埋蔵文化財調査室としての活動は継続するが、今後はこれまで未報告となっている調査地点の整理・報告作業に専念することとなる。

こうした統合移転事業の推移を受けて、2021年度には埋蔵文化財調査体制が大きく改編された。2021年度の九州大学箱崎キャンパス埋蔵文化財調査体制は以下の通りである。

九州大学キャンパス計画及び施設管理委員会

委員長	福田 晋	理事
副委員長	坂井 猛	キャンパス計画室副室長
委員	清水 和裕	人文科学研究院長
	和田 裕文	理学研究院長
	中村 誠司	歯学研究院長
	岡本 創	応用力学研究所長
	谷 正和	芸術工学研究院長
	内藤 敏也	理事（事務局長）
	麻生 亘	企画部長
	井上 賢一	総務部長
	伊東 宏明	研究・産学官連携推進部長
	梶原 修	財務部長
	小谷 善行	施設部長
	後藤 成雅	学務部長
	中本 浩司	統合移転推進部長
	清須美匡洋	副理事（アート・デザイン、広報）
	田上 健一	副理事（キャンパス整備）

文化財ワーキンググループ

WG長	宮本 一夫	人文科学研究院教授
委員	清水 和裕	人文科学研究院長
	藤岡健太郎	大学文書館教授
	辻田淳一郎	人文科学研究院准教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授

I 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について



第1図 箱崎遺跡とその周辺（『1：25000電子地形図 福岡』を改変）

田尻 義了	比較社会文化研究院准教授
南 博文	人間環境学研究院教授
堀 賀貴	人間環境学研究院教授
渡辺 敦史	農学研究院教授
鶴崎 直樹	キャンパス計画室准教授
井上 美穂	総務部地域連携課長
亀井 肇	総務部総務課長
三原 悦侍	財務部資産活用課長
松下 栄司	施設部施設企画課長
森吉 徳和	統合移転推進部統合移転推進課長

九州大学埋蔵文化財調査室運営委員会

委員長	宮本 一夫	人文科学研究院教授・埋蔵文化財調査室長
	堀 賀貴	人間環境学研究院教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授
	辻田淳一郎	人文科学研究院准教授
	田尻 義了	比較社会文化研究院准教授

九州大学埋蔵文化財調査室

室長	宮本 一夫
助教	齋藤 瑞穂
	福永 将大
学術研究員	谷 直子

2. 2021年度の調査について

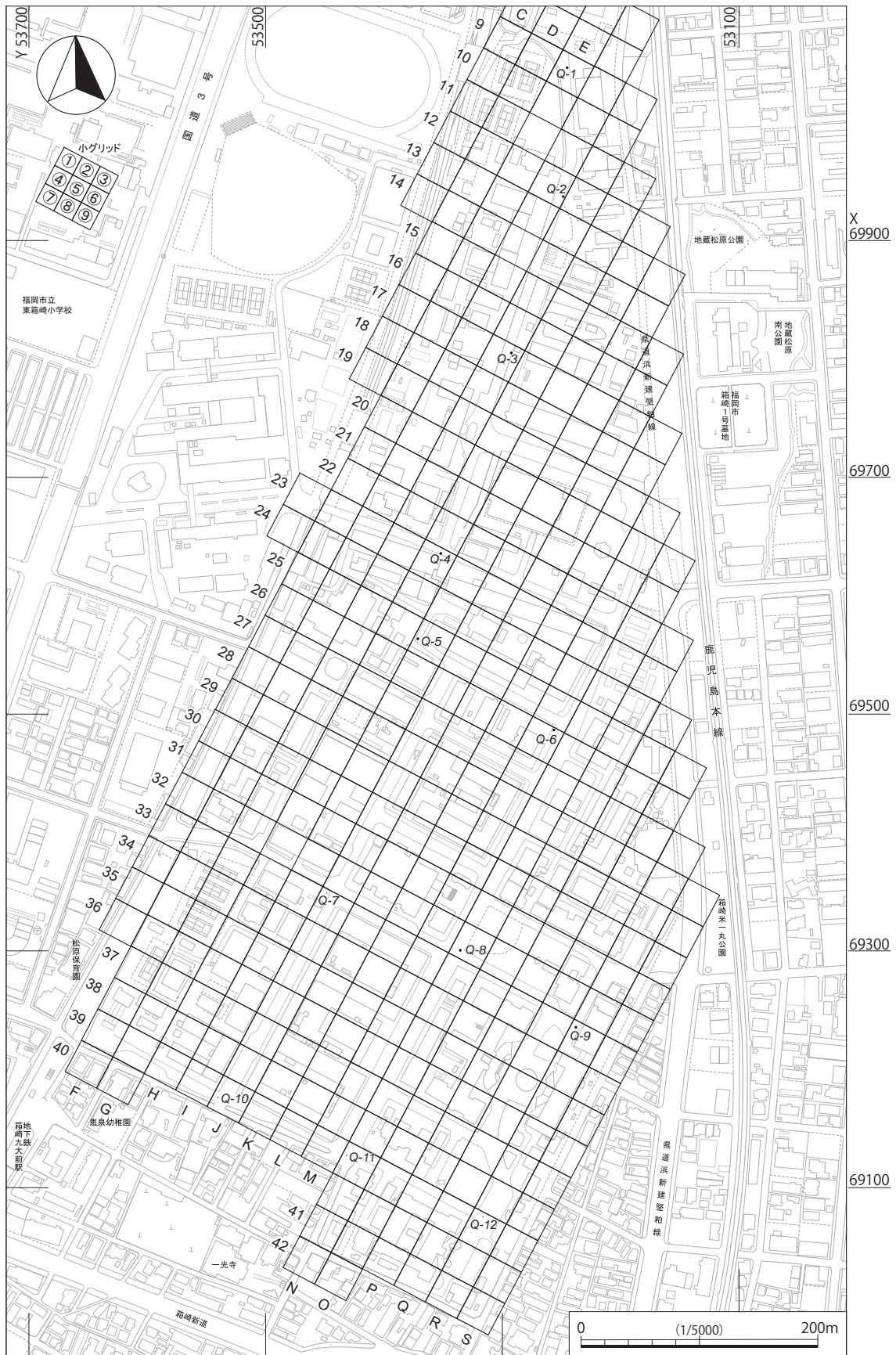
(1) 調査対象範囲と調査地点

調査対象範囲となるのは、箱崎キャンパス東側の理系地区である（第2図）。すでに当該地区には、世界測地系対応の2級基準点3点（Q-1、Q-10、Q-12）、三級基準点9点（Q-2、Q-3、Q-4、Q-5、Q-6、Q-7、Q-8、Q-9、Q-11）が確保されており、今年度もこれらを用いて正確な位置情報の記録を行った。

理系地区全体には、西鉄貝塚駅北東に原点をおく30mメッシュの大グリッドが設定されている。北から東に27.767385°傾く縦のラインと、それに直交する横のラインとで形作られており、原点から東へA～Sの記号、南へ1～42の数字が与えられている。大グリッドは10mメッシュの小グリッド9つに分割される。北西を起点として上段に①・②・③区、中段に西から④・⑤・⑥区を、同じく下段に⑦・⑧・⑨区を置く。以下、位置を説明する場合、R36-⑨区、R37-③区のように表現する。

調査地点名はこれまで、「箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス」の略号HZKを頭文字とし、事業年度の下2桁と各年度の調査番号2桁の計4桁の番号からなる名称を与えている。また、箱崎キャンパスにおける解体前の建物群との位置関係を別称として添えてきた。これを踏襲して、2021年度最初の新規調査地点をHZK2101地点と呼び、その別称を正門前地点とする。

I 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について



第2図 九州大学箱崎キャンパス 発掘調査グリッド

第1表 2021年度の埋蔵文化財調査

調査地点名	調査原因	担当者	期間	面積	内容	備考
HZK2007 船舶海洋工学実験室地点	学術研究	福永	2021.2.15～	3,200㎡	箱崎遺跡	(福岡市) 2044 箱崎遺跡第115次調査
HZK2101 正門前地点	学術研究	齋藤	2020.4.1～	1,900㎡	箱崎遺跡	(福岡市) 2101 箱崎遺跡第117次調査

(2) 箱崎キャンパスにおける2021年度の埋蔵文化財調査

2021年度の実績は、工事立会17件、本調査1件で、試掘調査は実施されていない（2021年12月現在）。

立会調査 元寇防塁推定線上でいくつか工事立会を実施している。キャンパス北側の農学部一号館付近（H18区・I18区・J18区・K18区）における建物基礎杭抜き工事、キャンパス南側の工学部二号館南側（J39区・K39区・L39区）における埋設管撤去工事のいずれにおいても、既に近現代の削平を受けており、元寇防塁の痕跡は確認できなかった。

キャンパス中央に位置する理学部一号館と二号館に囲まれた部分（K24区・L23区・L24区）における汚染土壌撤去の工事立会を実施した。本地点は、史跡元寇防塁の追加指定範囲の東側にあたり、元寇防塁を構成する大溝の陸側に相当する。地表下80cmで自然堆積層を確認できる箇所もあるが、重機による掘削痕跡など近現代の攪乱が多数見られた。白磁碗の底部片を1点確認したが、それ以外に遺構・遺物は確認できなかった。防塁の石材なども見つからない。

元寇防塁関係の調査ではないが、O31区・P31区・Q31区においても汚染土壌撤去の工事立会を実施している。そのうちQ31区では、近現代の攪乱層の中から中近世の墓石や板碑が多数出土した。それ以外に遺構・遺物は確認できていない。

本調査（第3図、第1表）2020年度までで元寇防塁関係の発掘調査は完了したため、2021年度は箱崎遺跡北端部の様相解明を目的とした発掘調査を実施した。2021年度の本調査は1件としたが、それは2021年度から開始した調査の件数である。実際には2020年度3月から調査を開始したHZK2007地点（船舶海洋工学実験室地点）も、2021年度まで調査を継続している。よって、2021年度はHZK2007地点とHZK2101地点（正門前地点）の2か所において本調査を実施したことになる。

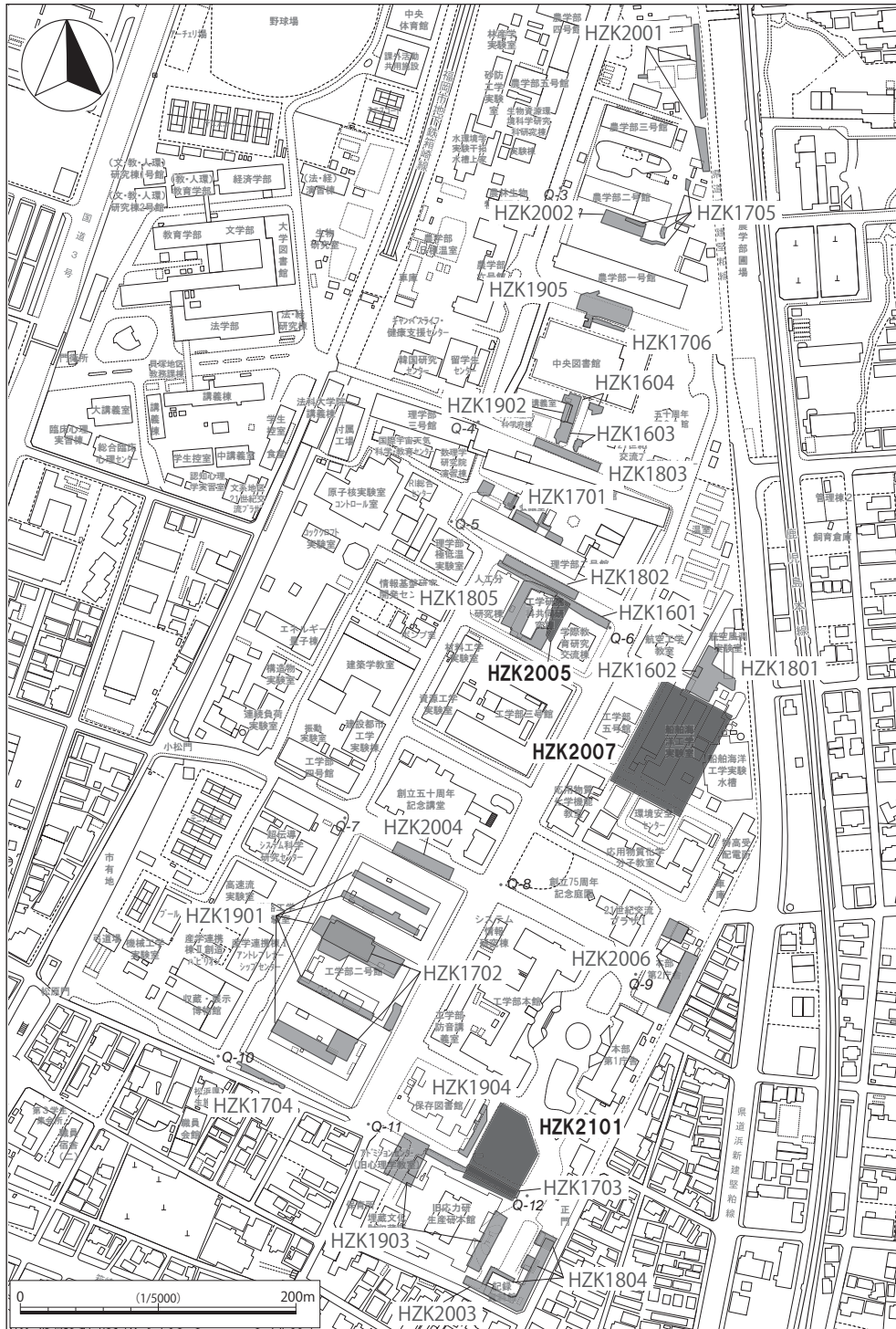
HZK2007地点は、2018年度に調査したHZK1801地点の南隣に位置している（O26・27・28区、P26・27・28区、Q26・27・28区）。中世～近世の木棺墓・桶棺墓・甕棺墓が多数出土しており、茶毘の場と考えられる火葬土坑も見つかっている。HZK1801地点でも近世の甕棺墓が多数確認されており、当該地域には中世～近世にかけての墓域が広がっていたと考えられる。

HZK2101地点は、P37・38区、Q37・38区に位置している。井戸や溝、土坑、ピットといった多数の遺構が見つかり、出土遺物は質・量ともに豊富である。周辺にはHZK1703地点・HZK1804地点・HZK1903地点・HZK1904地点・HZK2003地点が存在しており、これらの調査区でも同じような様相が確認されている。

なお、HZK2007地点・HZK2101地点の調査成果報告に関しては、2022年度以降の報告書刊行を予定している。

その他 令和三年文部科学省告示第百六十九号にて、HZK1706地点（中央図書館前北地点）とHZK1905地点（中央図書館前北地点第2次調査）の石積み遺構と大溝が、国指定史跡元寇防塁に追加指定された。大溝のみが検出された地点に関しては、追加指定の対象から除外されているものの、令和二年文部科学省告示第二十三号¹⁾で追加指定されたものと合わせて、九州大学箱崎キャンパスで

I 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について



第3図 2021年度の発掘調査地点と本報告調査地点

見つかった石積み遺構と大溝で構成される元寇防塁は、全て国指定史跡に追加指定されることとなった。

(福永将大)

註

- 1) 九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集(福永編 2021)では、「令和二年文部科学省告示第十七号」としているが、「令和二年文部科学省告示第二十三号」の誤りである。お詫びして訂正いたします。

引用文献

- 齋藤瑞穂(編)2020『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 福田正宏・森貴教(編)2018『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 福永将大(編)2021『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 三阪一徳・谷直子(編)2019『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点— 付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室

II 元寇防塁の発掘調査史

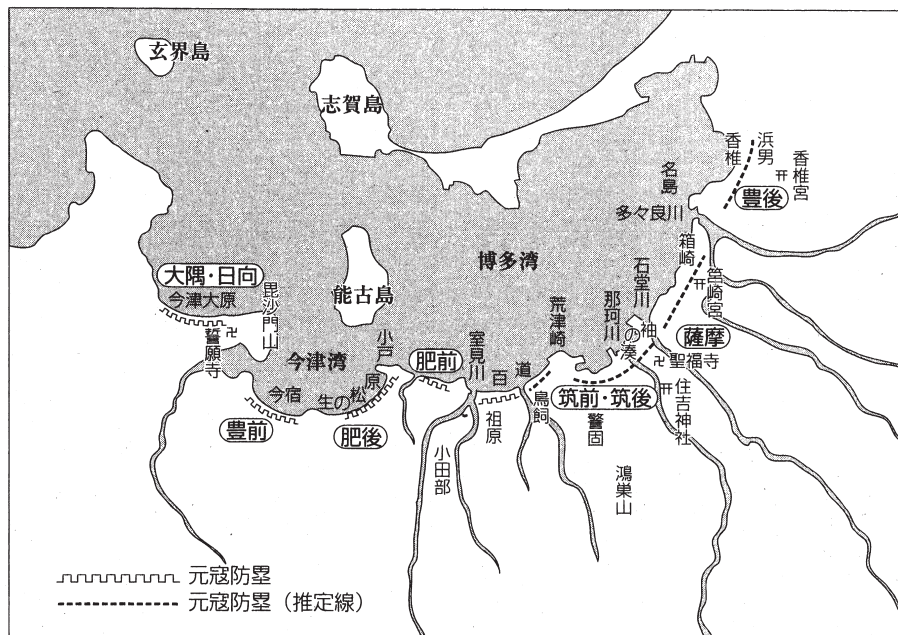
1. モンゴル襲来と元寇防塁

文永十一年（1274）十月、モンゴル・高麗の連合軍が、対馬・壱岐を経て博多湾沿岸に侵攻してきた。まず、現在の福岡市早良区鳥飼周辺が合戦の地となっており、この鳥飼浜の戦いは、有名な『蒙古襲来絵詞』にも描き残されている。その後、博多・箱崎にも戦火が及んだと考えられており、この時に筥崎宮は炎上したとされる。箱崎遺跡では、13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる焼土層や被熱した陶磁器が確認されており、これらは文永十一年の戦火によるものではないかと考えられている（榎本 2008；佐藤 2013；中尾 2018など）。資料が限られており、戦いの推移の詳細については不明な点も多いが、当時の博多湾沿岸、そして日本に激震が走ったことは間違いなからう。

この文永の役の後、モンゴルの再襲来に備えて、国内の防備体制が強化される。そうした国防強化策の一つとして実施されたのが、博多湾沿岸への「石築地」、すなわち元寇防塁の築造であった。建治二年（1276）三月頃から各国御家人に対して防塁築造の命が下され、同年八月中の完成を目指していたことが文献史料から読み取れる（川添 1971など）。場所によって遅速の違いはあれども、約半年間という非常に短い期間で築造された。

幕府は文永九年（1272）、守護に太田文の調達を命じて、寺社・荘・公領の田畠・員数・領主の名簿を注進させており、その太田文記載の田数をもとに所領一段につき長さ一寸の基準で防塁を築かせた。さらに防塁の上を立て並べる楯や旗を始め、矢などの武器・武具類も所領に応じて賦課している。防塁の築造や修理は、幕府の支配下にはない公領・寺社領・いわゆる本所一円地の非御家人にもその負担が及んだという（川添 2008など）。

防塁築造の特徴は、国ごとに分担地域が決まっていたことである（第4図）。西から見ていくと、今津は日向・大隅、今宿は豊前、生の松原は肥後、姪浜は肥前、博多は筑前・筑後、箱崎は薩摩、香



第4図 元寇防塁の位置と分担国（川添 2008）

権は豊後である。防塁の築造・修理の手順としては、守護が、その管轄内の領主に築造や修理の命令を出し、命令を受けた領主は、指定された分担の場所に人夫などを連れていき、作業に従事する、というものである（川添 前掲など）。のちに詳しく見るが、各地区によって防塁の構造に差異が見られることが、これまでの発掘調査成果によって明らかになっており（大塚 2013；川添 2008；藏富士編 2019；柳田 1984・1988など）、こうした差異は、築造・修理を負担した国の違い、あるいは同国内での担当御家人の違いを反映したものと考えられている。加えて、石材や粘土の採取地などの地理的な制約や（柳田 前掲など）、各地区の地政学的な差異（大塚 前掲）が影響していることも、容易に想像されよう。

2. 元寇防塁の発掘調査成果

元寇防塁の発掘調査は、これまで福岡市教育委員会を主体として行われてきており、各地区における防塁の構造などが明らかにされてきた。これらの調査成果については、『元寇防塁調査総括報告書』という形で既にまとめられているが（藏富士編 前掲）、ここでいま一度、各地区の元寇防塁の発掘調査成果、そして、それによって明らかにされた防塁の構造と特徴について概観しておきたい。

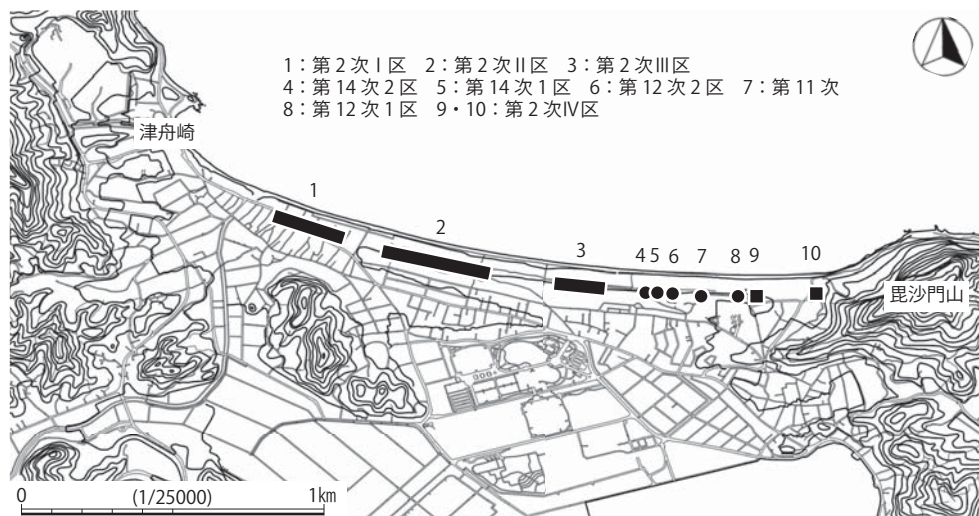
(1) 今津地区

i) 戦前の調査状況

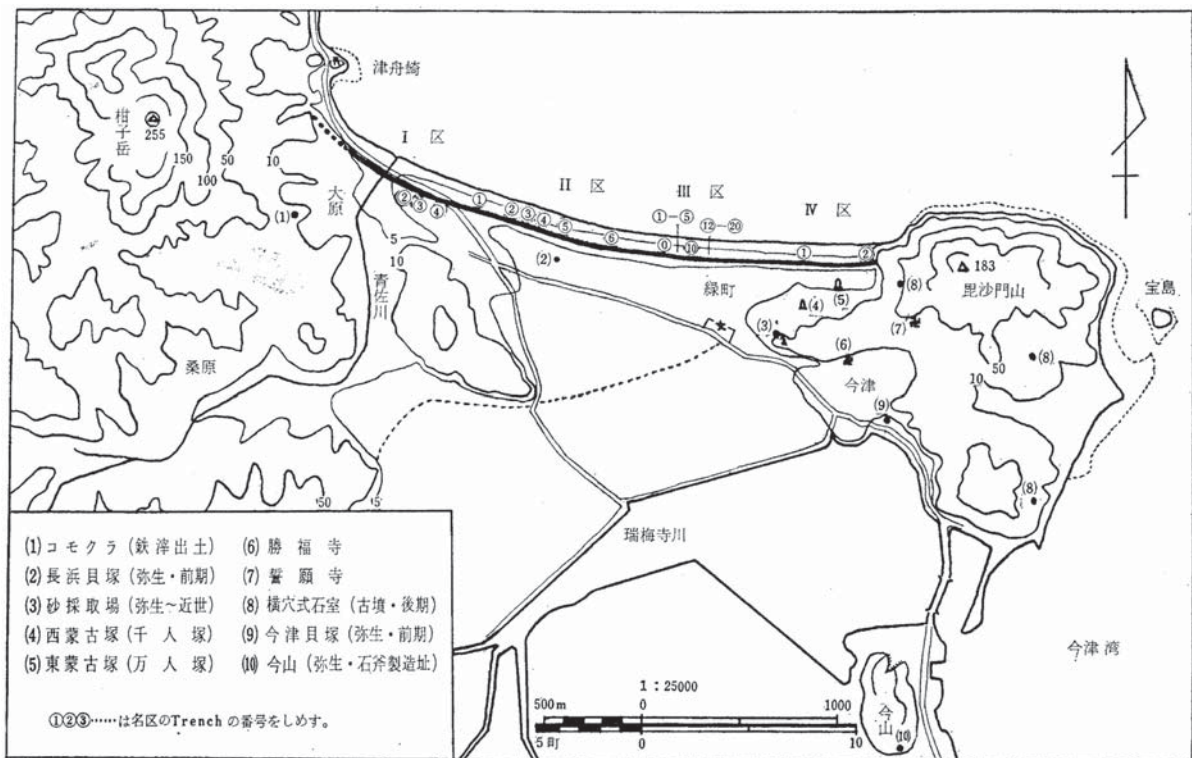
1913年に、福岡日日新聞社の主催のもと、史蹟現地講演会によって今津地区の元寇防塁の発掘調査が行われた。これが元寇防塁の最初の発掘調査である。その成果は、『元寇史蹟の新研究』（史蹟現地講演会編 1913）の中で報告されているものの、詳細については不明な点が多い。今津地区における元寇防塁の様相が明らかになるのは、1968年に実施された九州大学文学部考古学教授鏡山猛を団長とする学術調査を待たねばならなかった。

ii) 元寇防塁第2次調査（福岡市教育委員会編 1969）

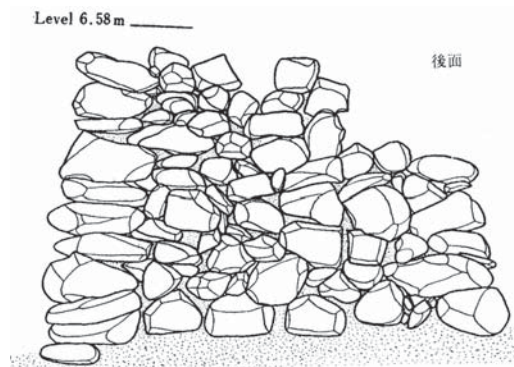
I区～IV区に調査区を分けて、さらにその中を①・②…というように細かく分けして調査を実施している（第6図a）。今津地区における元寇防塁の基本構造は以下の通りである。



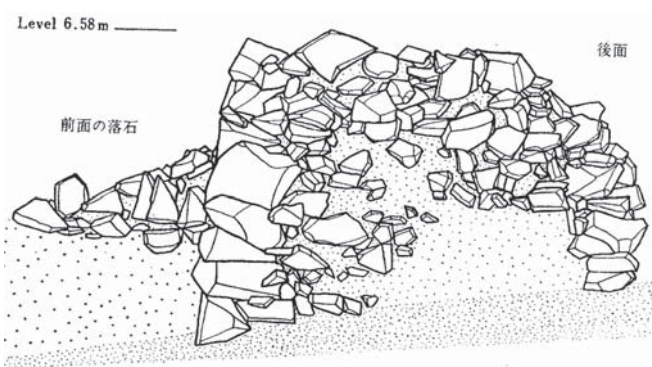
第5図 今津地区調査地点位置図



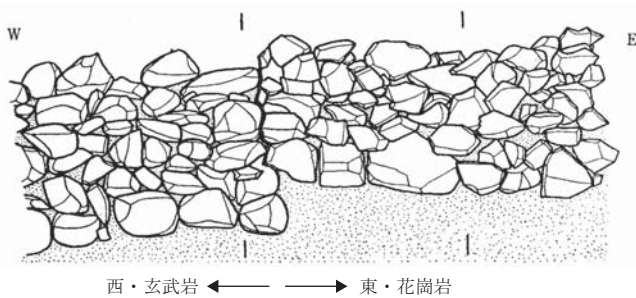
(a) 周辺地形図と調査区位置図



(b) 西・玄武岩側の断面図



(c) 東・花崗岩側の断面図



(d) 石積み後面の立面図



(e) (d) の写真

第6図 今津地区 元寇防塁第2次調査成果

- ・石積み前面（海側）の残存高2.6m（最高値は2.83m）、後面（陸側）の残存高1.45mで、基底面幅3.1m、上面幅2.5mの断面台形を呈する
- ・自然砂丘上に、底面には長大な石を前面・後面に相對して置き、その間を小石で詰める
- ・前面はほぼ垂直に立ち上がり、10～11段の石積みがなされる一方、後面は傾斜をもち、7～8段の石積みがなされる
- ・前面・後面ともに下部ほど大きな石を積む傾向にある

今津地区の元寇防塁で興味深いのは、一定区間ごとに石積みの石材と構造が異なっている点である。I区②～④、II区①では花崗岩を主な石材とし、II区②・③では花崗岩と玄武岩が接線をもって明確に分かれ、II区④・⑤では玄武岩、II区⑥では再び花崗岩と玄武岩の境界が確認されている。玄武岩を主な石材とする区間と、花崗岩を主な石材とする区間では、防塁の構造が異なっており、前者は前面・後面の間を石で詰めている一方、後者は石と砂が混在している（第6図b・c）。また、異なる石材の接線では、底面の石の高さが食い違う状況も確認されている（第6図d・e）。

こうした差異は、防塁築造の分担者が異なることを反映しているとし、II区～III区にかけて石材の境界が多くみられることから、防塁の築造が細かく分担されていた可能性が指摘されている。

石材 石積みで使用されている石材としては、花崗岩・玄武岩・変成岩・砂岩・斑岩が報告されている。先述の通り、II区①の西側は花崗岩、III区より東側は玄武岩を主体としており、II区①東側とIII区の間は、花崗岩と玄武岩は一定の単位で交互に認められる。花崗岩の採集場所としては西側の津舟崎、玄武岩は東側の毘沙門山が想定されており、最も近場で採集可能な石材を利用するという意図が見える。

iii) 元寇防塁第11次調査（藏富士 2016）

調査地点は、1968年の発掘調査のIII区とIV区間に位置する。石積みの現状確認を目的とする調査のため、多くは石積み上面を検出するに留めている。長さ20mの石積みを確認しており、検出面における石積みの幅は約2.5m。調査区の一部で行ったトレンチ調査では、高さ約2mの石積みを確認している。

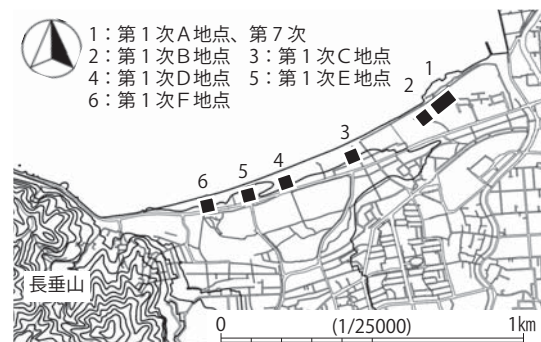
iv) 元寇防塁第12次調査（藏富士 2017）

調査地点は、1968年の発掘調査のIII区とIV区間に位置し、1区・2区の2か所で調査を実施している。1区における石積みの調査では、前面・後面のみに石を積み上げて、その間は砂を充填する構造を確認している。報文中に石材の記載はなく詳細は不明であるが、調査地点の位置からすると玄武岩を主体とする区域であると考えられ、1968年調査で示された玄武岩を主体とする石積みの断面構造（第6図b）とは様相を異にしている。

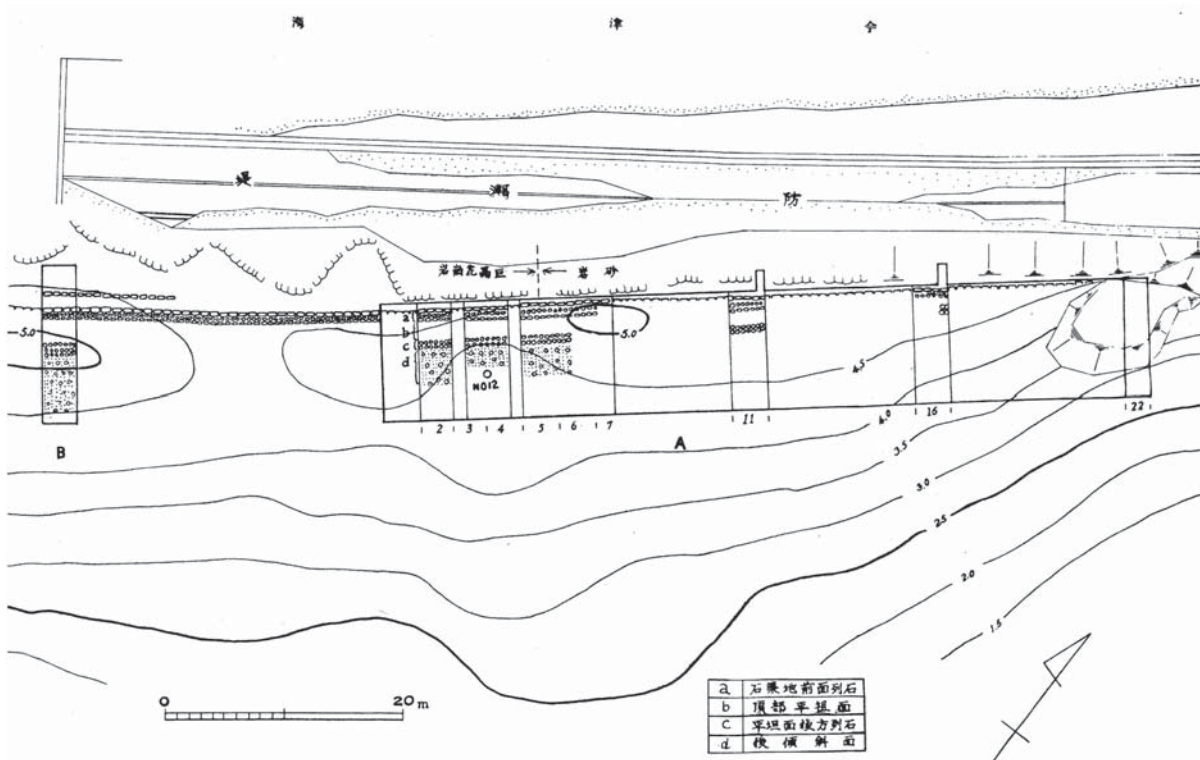
2区では、長さ6m、幅2.5mの石積みを確認している。

v) 元寇防塁第14次調査（阿部 2018）

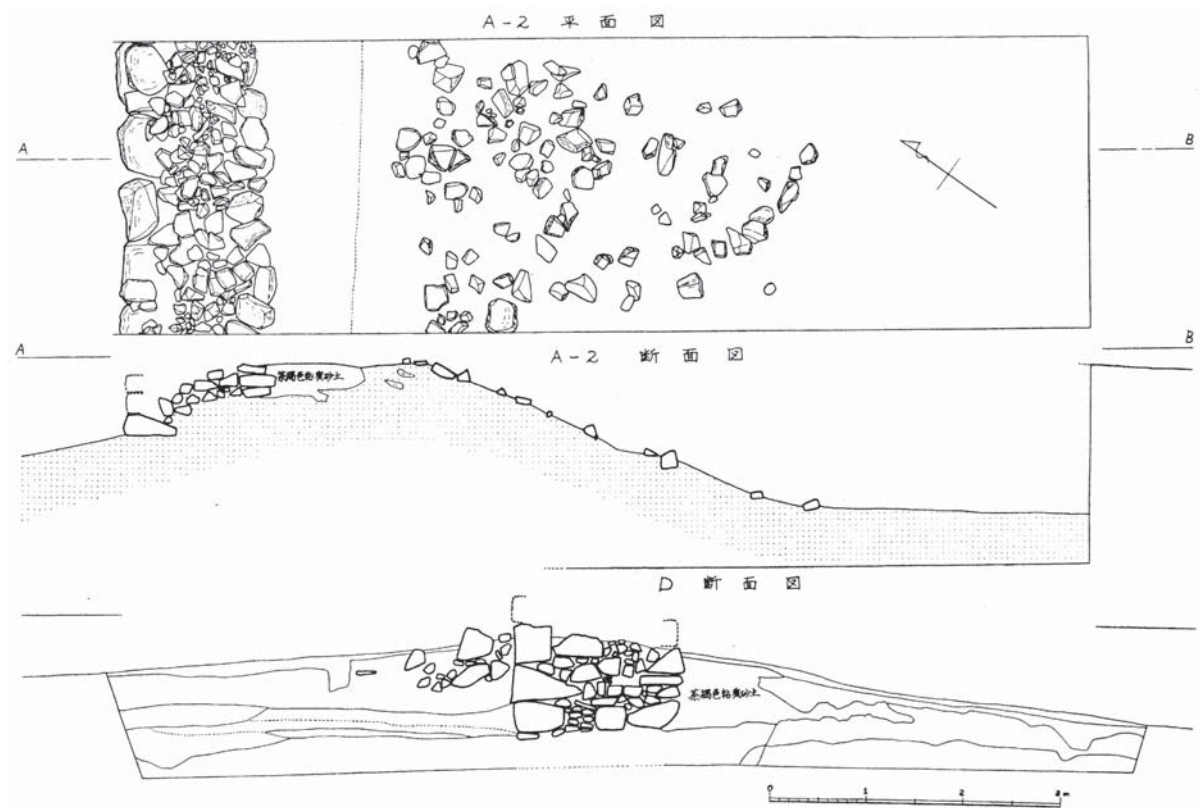
調査地点は、1968年の発掘調査のIII区とIV区間に位置し、1区・2区の2か所で調査を実施している。1区では比較的良好な状態で石積みが残っており、石積み上面幅は3m、基底面幅は3.3m、残存高1.4mを測る。石材は玄武岩の角礫を用いており、他の石材はほぼ見られない。前面は30～40cm大の石材をほぼ垂直に、後面は前面より小さな石材を傾斜して積んでおり、その内部は砂と玄武岩の角礫で



第7図 生の松原地区調査地点位置図



(a) A・B地点付近の地形と石積み出土状況



(b) A地点2区およびD地点の石積み平面・断面図

第8図 生の松原地区 元寇防塁第1次調査成果

充填されている。

2区では、石積みの石材と考えられる玄武岩の角礫が散見されるものの、後世の攪乱によって石積みは破壊されていることが判明している。

(2) 生の松原地区

i) 元寇防塁第1次調査（福岡市教育委員会編 1968）

A～F地点に調査区を分けて調査が実施されている（第7図）。その結果、A～B地点とC～F地点で防塁の構造が異なることが指摘されている。

A～B地点 前面と後面に大きな石を配して、その間を裏詰めのような円礫で充填している。石積みの幅は1.5m前後、残存高は0.6～1.8m。前面の石積みは、自然砂丘の傾斜面を掘り下げた上に築造されているのに対し、後面は石積み前面の基底部より高いレベルに石を置いて築造している。

石積み後方は、粘質土と砂丘を利用してフラットな面が作られている。粘質土の厚さは石積み前面後方の厚さと一致しており（第8図b）、石積みの補強と石積み後方の地固めの役割を果たしていると考えられる。

そのさらに後方には、自然砂丘の傾斜をそのまま利用した傾斜面が存在しており、A地点5区以西では、この傾斜面に礫石が粗雑に配されている。このA地点5区を境とした東西で、石積みの石材や構造に差異が見られ（第8図a）、防塁築造の分担者の違いを反映したものと推察されている。

A地点とB地点の間を起点に西側11.5mの区間で、防塁の前面に、さらに一列の石積みが1～2段の高さで築造されている（第8図a）。石材は全て玄武岩で、防塁の石材とは異なっており、かつ、磨滅が著しい。この石積みについては、後の補築による築造の可能性が指摘されている。

C～F地点 前面と後面に大きな石を配して、その中に石を詰める築造法はA・B地点と共通しているが、石積みの基底部が前面－内部－後面で同一レベルになっている点に差異が見られる。使用される石材も、A・B地点に比べて大きいという。

石積み後方には、基底部と同一レベルで敷かれた厚い粘土帯が、2.5m程度陸側に緩く傾斜しながら接続しており、A・B地点のような石積み－平坦面－傾斜面といった構造は確認できない。

石材 石積みで使用されている石材としては、ペグマタイト・砂岩・礫岩・花崗岩・閃緑岩・玄武岩・角閃岩・黒雲母片岩が報告されている。A地点5区より東では砂岩が主に使用される一方、それより西ではペグマタイトが主に使用される。

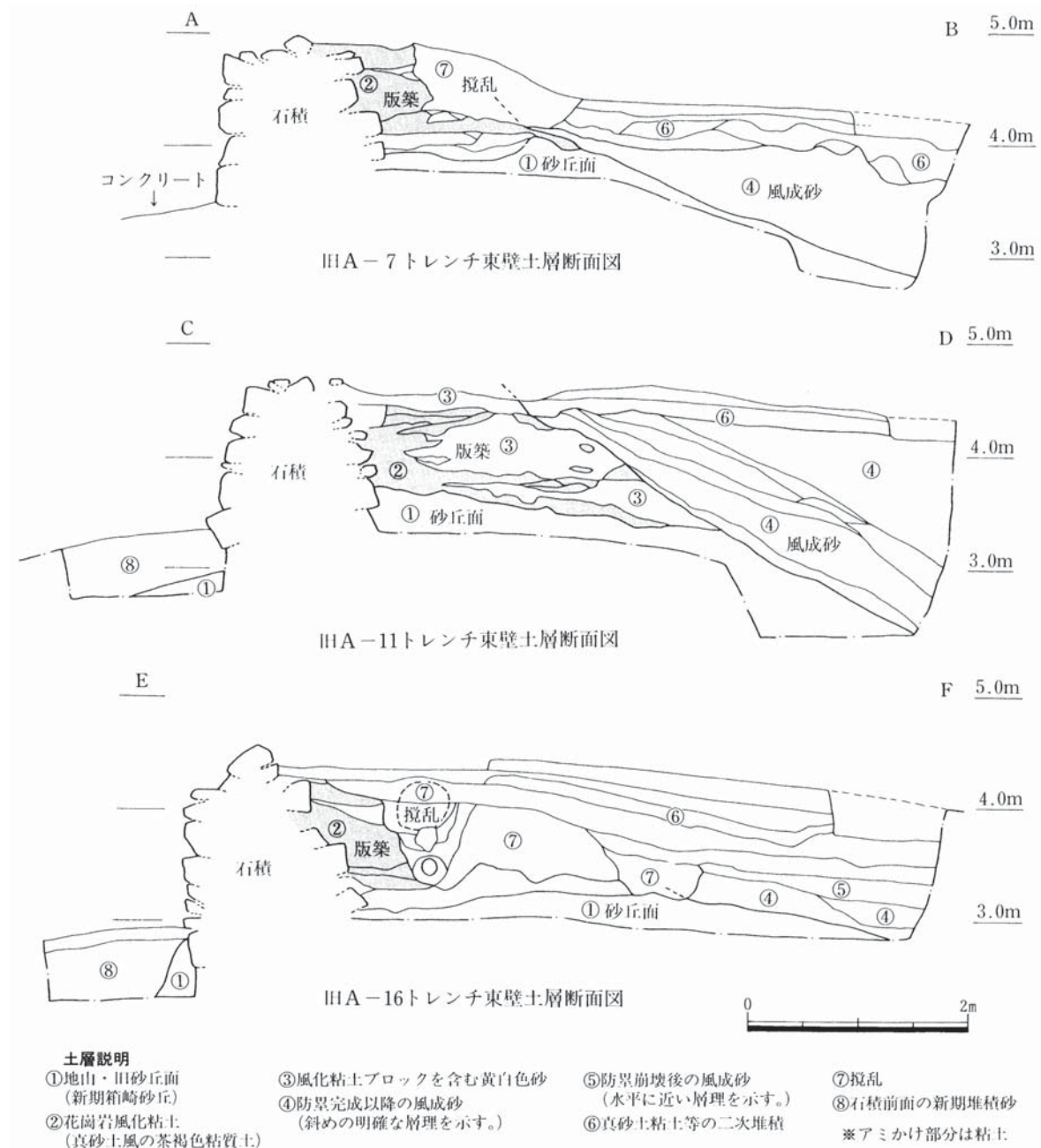
ii) 元寇防塁第7次調査（荒牧編 2001）

1968年調査時のトレンチ（A地点）を再掘削し、防塁の土層観察・土層断面図作成を実施して構造の再確認を行った。各トレンチの調査成果は以下の通り（第9図）。

A-7トレンチ 石積み上面の標高5m、前面基底面の標高3.5m、後面基底面の標高3.9mで、石積み上面幅は1.25m、基底面幅1.5m。前面と後面には大きな礫を用いており、その間は小礫と砂で充填している

砂丘頂部を削って平坦面を作り出し、やや海側に石積みを配して、その背後には花崗岩風化粘土と砂を交互に版築状に叩き締めた構造が見られる。そのさらに後方は、約20°の傾斜をもって深く落ち込む。版築状構造からこの砂丘傾斜面にかけては礫が散在しており、石積みの崩壊過程で転落したものと推察される。砂丘傾斜面では、傾斜に沿って風成砂が堆積しており、明瞭な層理が確認されている。

A-11トレンチ 石積み上面の標高4.7m、前面基底面の標高3.15m、後面基底面の標高3.5mで、



第9図 生の松原地区 元寇防塁第7次調査成果

石積み上面幅は0.9m、基底面幅は1.4mを測る。

A-7トレンチと同様、石積み背面には版築状構造が確認される。砂丘頂部を削って、幅3.1mで約10°の傾斜を持つ平坦面を作り出し、その面から花崗岩風化粘土と砂を交互に叩き締めて積み上げている。版築状構造の背面傾斜は約35°で、後方の砂丘傾斜と連続している。このことから、砂丘そのものも防塁構造の一部に取り込まれていると考えている。版築状構造の背面と砂丘傾斜面では、傾斜に沿って風成砂が堆積している。

A-16トレンチ 石積み上面の標高4.55m、前面基底面の標高3.6m、後面基底面の標高4.1mで、石積み上面幅は1.1m、基底面幅は1.6mを測る。石積み背面には版築状構造が確認されるようだが、攪乱によって破壊されており、詳細は不明である。

砂丘平坦面は他の二つのトレンチと比べて幅広で、後方の砂丘傾斜面も緩やかである。土層断面図を作成した範囲より、さらに南側では他のトレンチと同様の傾斜をもつもとと考えられている。

石材 使用されている石材としては、ペグマタイト・砂岩・玄武岩・花崗岩・閃緑岩・アプライト・ひん岩・花崗斑岩・塩基性片岩・角閃岩が報告されている。

長径30cm以上の大型石材の配置に明確な不連続があり、中央部から西側ではペグマタイトと花崗岩が60～75%を占め、中央部から東側では砂岩が65～75%を占めている。ペグマタイトは西方に位置する長垂山付近の海岸で、砂岩は東方に位置する小戸の海岸付近で採取可能であり、最も近場で採集できる石材を利用している。

iii) その他

十郎川河口や長垂山の麓で試掘調査が行われているが、元寇防塁に関する遺構・遺物などは確認されていないという。

(3) 姪浜地区

i) 元寇防塁第4次調査（柳田 1980・1984・1988）

3～5段の石積みが発出された。石積み基底部の幅は4mで、粘土は用いられておらず、石材は砂岩であるとのこと。詳細については不明。

ii) 元寇防塁第13次調査（藏富士編 前掲）

現地表下0.4～0.5m下の白色砂質土中に、防塁の一部と考えられる石材を検出。2か所開けたトレンチのうち、東側の第1トレンチでは、約4mの間隔をあけて2列に並ぶ石材が確認されている。

(4) 西新地区

i) 戦前の調査状況

1920年、教育勅語下賜三十周年記念として、元寇防塁西新地区史跡指定地内が西新尋常高等小学校の生徒により発掘されている。これは国威高揚の感が強く、発掘調査の結果を知ることができる資料は残されていない。その後、1924年に、西新尋常高等小学校新築予定地における新道路建設工事に伴って発掘調査が実施されている（島田 1925）。石積みは既に破壊されていたが、石積みの下層において、粘土を一尺四十五寸置いた上に、石材を置いた痕跡を確認している。また、石積みの前面に土壇が存在し、それは粘土と砂の互層で構成されているという。これらは大変興味深い記録であるが、



第10図 姪浜・西新地区調査地点位置図

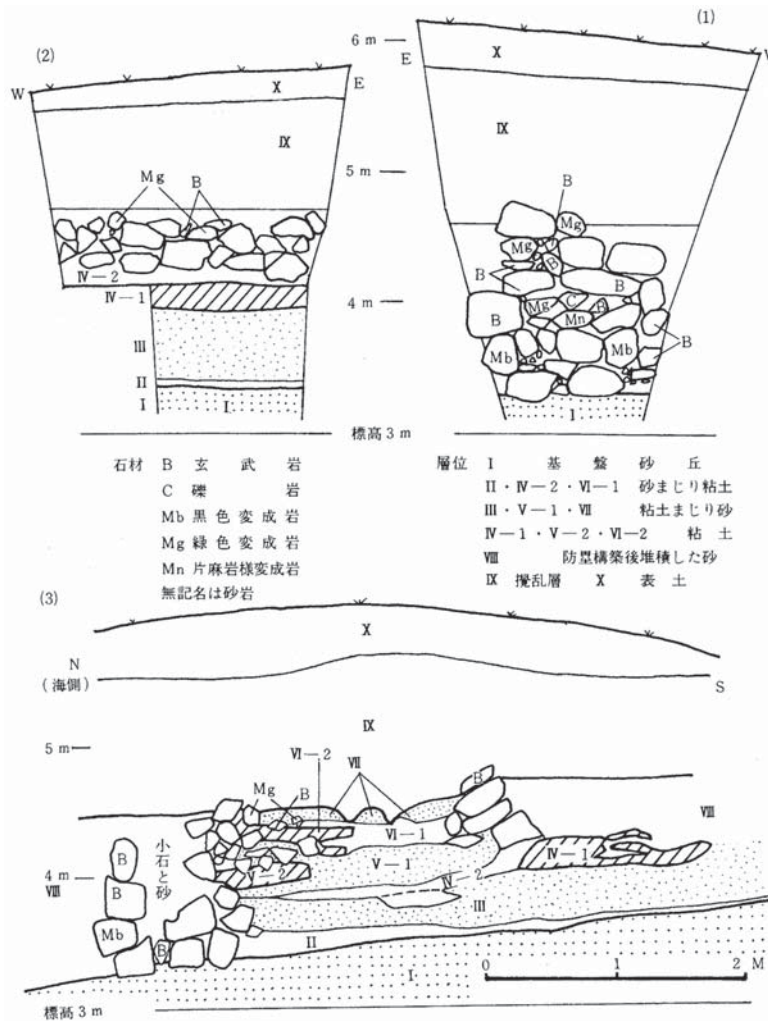
島田の論考では図面や写真などが掲載されておらず、その詳細は不明である。

ii) 元寇防塁第3次調査 (福岡市教育委員会編 1970)

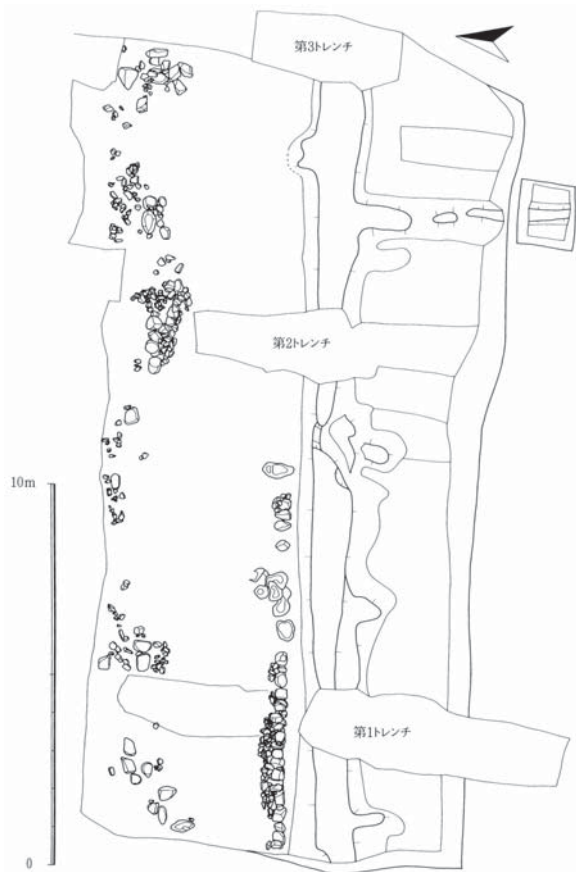
1920年に調査された西新地区元寇防塁の保存工事で史跡公園として整備するための工事に並行して、幅2mのトレンチ調査を実施した。

石積み前面の1段目は、前から4列分の幅1mの範囲に大きな石を置く(第11図)。4列目の石は、厚さ20cmの粘土層(Ⅱ層)で支えられており、このⅡ層は後方で10cm程度の厚さになって、6mに及ぶフラットな面を作り出している。基盤砂丘(Ⅰ層)上面の標高は3.3m。2段目は1段目の上に大きな石が置かれ、石と石の間に小石と砂を詰めて積み上げている。その背面には30~40cmの厚さに粘土を交えた砂(Ⅲ層)が存在し、2段目の石を支えている。そして、3段目以上は、前面に大きな石を、3・4列目に比較的大き目な石を積んでおり、その間は小石と砂で充填する。

石積み後面は、基盤砂丘(Ⅰ層)の上に厚さ10cmの砂を交えた粘土層(Ⅱ層)があり、ブロック状の粘土を交えた砂層(Ⅲ層)が40cm、さらに厚さ20cmの良好な粘土層(Ⅳ層)と続いており、この粘土層(Ⅳ層)の上面から石積みが始まる。石積み後面の基底面は標高3.5m。基盤砂丘(Ⅰ層)から、約70cmの高さまで、砂と粘土による基盤工事を行った上で石を積み上げるといふ、非常に手の込んだ造りをしている。



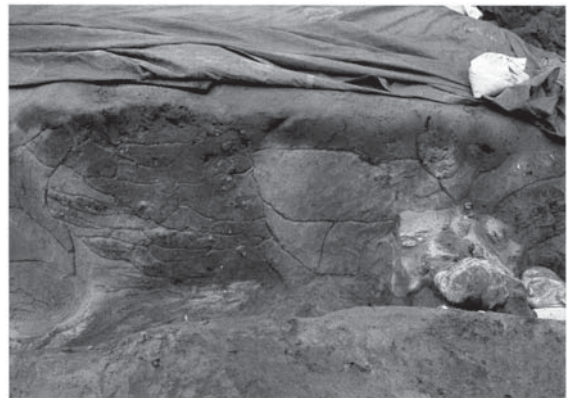
第11図 西新地区 元寇防塁第3次調査成果



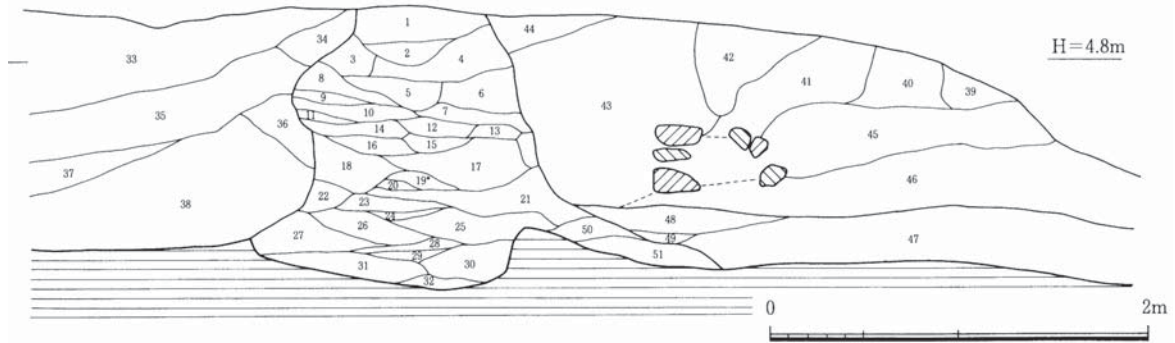
(a) 調査区全体平面図 (S=1/200)



(b) 石積み西側部分



(c) 第1トレンチ西壁 石積みと土塁



第1トレンチ西壁土層断面 説明

1 暗褐色砂	粘土を多く含む。	18 褐色砂	黒色砂を含み、もろい。	35 明褐色砂	暗褐色砂が混じる。
2 暗褐色粘土	砂を若干含む。	19 明褐色砂	明褐色粘土をブロック状に含む、堅い。	36 薄褐色砂	
3 褐色砂		20 暗褐色粘土	砂を若干含む。	37 薄褐色砂	
4 褐色砂	黒褐色砂をブロック状に含む。	21 褐色砂	暗褐色粘土をブロック状に多く含む、堅い。	38 白褐色砂	礫をわずかに含む。
5 褐色砂	褐色粘土をブロック状に含む。	22 明褐色砂	もろく、崩れやすい。	39 暗褐色砂	礫をわずかに含む。
6 褐色砂	褐色粘土をブロック状に含む。	23 暗褐色粘土	砂を若干含む、堅く締まる。	40 褐色砂	暗褐色砂をブロック状に含む。
7 暗褐色砂	暗褐色粘土をブロック状に含む。	24 暗褐色砂	黒色砂を含む。	41 暗褐色砂	礫を若干含む。
8 明褐色砂	黒色砂、褐色粘土を含む。	25 暗褐色土	粘土と砂の混合層。堅く締まる。	42 薄暗褐色砂	暗褐色砂を多く含む。
9 褐色砂	褐色粘土をブロックで多く含む、堅い。	26 薄褐色砂	暗褐色砂を含む。	43 薄褐色砂	粘土を全く含まず、もろく崩れやすい。
10 暗褐色砂	褐色粘土を少量含む。	27 薄褐色砂	黒色砂を含み、もろい。	44 薄褐色砂	
11 暗褐色砂	褐色粘土をブロック状に含む。	28 暗褐色粘土	堅く締まる。	45 暗灰褐色粘土	粘土と砂の混合層で、堅く締まる。
12 暗褐色粘土	明褐色砂を多く含む。	29 薄褐色砂	褐色砂を含む。	46 暗褐色粘土	粘土と砂の混合層で、明褐色砂を含む。
13 褐色砂	明褐色粘土をブロック状に含む、堅い。	30 暗褐色土	砂と粘土の混合層。堅く締まる。	47 薄褐色砂	水平方向の堆積線がみられる。
14 明褐色砂	暗褐色砂をブロック状に含む。	31 薄褐色砂	黒色砂を多く含む、もろい。	48 暗褐色砂	暗褐色粘土をブロック状に含む。
15 明褐色砂	明褐色粘土をブロック状に含む。	32 暗褐色粘土	堅く締まる。	49 明褐色砂	暗褐色粘土をブロック状に含む。
16 明褐色砂	暗褐色粘土をブロック状に含む、堅い。	33 明褐色砂	暗褐色砂が混じる。	50 明褐色砂	暗褐色粘土をブロック状に含む、堅く締まる。
17 暗褐色粘土	明褐色砂、明褐色粘土をブロック状に含む。	34 褐色砂	褐色粘土を若干含む。	51 明褐色砂	暗褐色粘土をブロック状に含む、堅く締まる。

(d) 第1トレンチ西壁土層断面 (S=1/40)

II 元寇防塁の発掘調査史

前面・後面の石積みの間は、粘土交じりの砂（Ⅲ層・Ⅴ-1層・Ⅶ層）と、砂を交えた粘土（Ⅱ層・Ⅳ-2層・Ⅵ-1層）が互層をなして堆積している。

石積み後面下の粘土層（Ⅳ層）は、石積みより1.3mほど後方へ続いている。この粘土層については、石積み後面の安定を図る基礎工事の役目に留まらず、他の用途をも兼用するものではないかと推察されており、注目に値する。

石材 使用されている石材としては、砂岩・礫岩・玄武岩・変成岩が報告されている。石積み前面には、径50cm前後の大きな石が配され、玄武岩・変成岩や硬質砂岩など硬質な石材が利用されている。一方、前面から3・4列目と石積み後面は、径30cm前後の大きさで、そのほとんどが砂岩であるという。

砂岩は西方に位置する愛宕山一帯、玄武岩は海を渡った能古島で採取可能とのこと。また、多量に用いられている粘土は、南方に位置する麓原山山塊に認められるものとされている。

iii) 元寇防塁第6次調査（松村・池田 1998）

30~40cm 大の角礫と、20~30cm 大の円礫を複数検出した。石材は元寇防塁のものと考えられるが、原位置を保っていない可能性が高い。

iv) 元寇防塁第8次調査（大塚編 2002）

調査区北側で防塁に伴う石材と、調査区南西部分で石積み後面に該当する部分を検出している（第12図 a）。砂丘基盤の上に粘土を貼って地盤を安定させ、1段目に扁平な石を利用して根固めを行い、2段目以上にやや小型の石を積み上げている。前面・後面の石積みの間は、粘土が充填されているという。

本調査地点で特徴的なのは、石積み後面の南側（陸側）で土塁を検出した点である（第12図 c・d）。土塁の幅は2~3mで、最大残存高は約1m。石積み後面とほぼ平行して築造されており、石積み後面と土塁の間隔は約50cmと狭い。土塁断面は台形をなし、砂丘基盤の上に花崗岩風化バイラン土と砂を細かく積み上げる互層構造で構成されている。土塁基段部分の上に風成砂層が堆積し、その上に粘土と砂の混合層で土台をつくり、石積みを築造していることから、土塁の築造は石積みの築造に先行するという。

土塁の南側3か所で、土塁に直交する突出部が存在する。この突出部は土塁と同様に粘土と砂の互層で構成されており、土塁の層と突出部の層が一部重なっていることから、土塁と突出部は同時に築造されたと判断できる。

報告者は、この土塁を本来石積みの内部構造を構成するものと解釈し、側壁の石が除去され、その前面に新たな石積みが築造されたと考えている。

なお、1969年の調査で、石積み後面より1.3mほど後方に続く粘土層（Ⅳ層）が検出されているが（第11図）、これが第8次調査の土塁に相当する可能性も指摘しておきたい。

(5) 博多地区

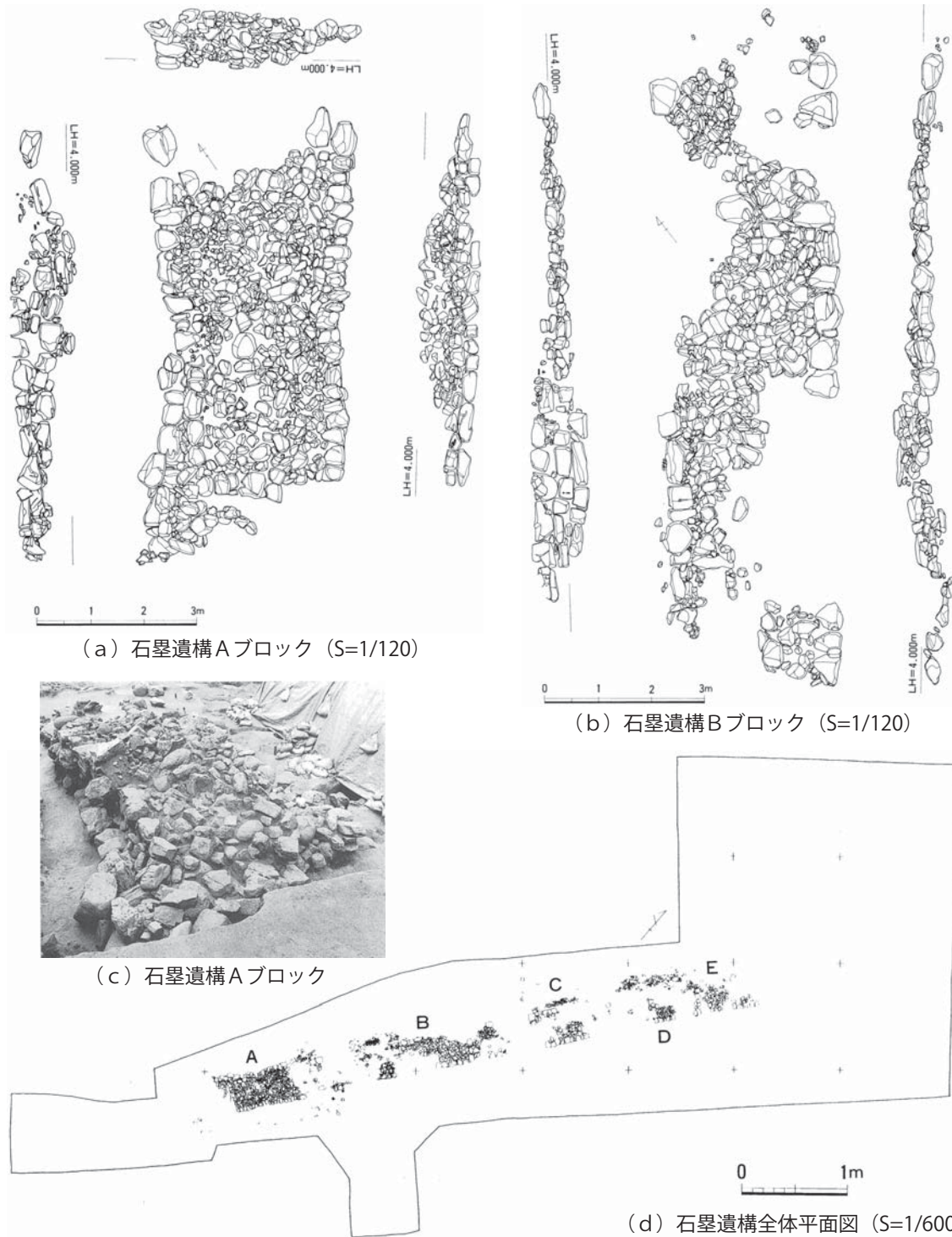
i) 博多遺跡群第111次調査（佐藤編 2002、井上 2008）

部分的に点在するような状況で石積みを検出しており、それぞれA~Eブロックとして弁別し調査を行っている（第14図 d）。なお、石積みが残存していない箇所でも、その抜き取り痕と思われる痕跡を確



1: 博多 111 次 2: 博多 68 次
3: 博多 103 次 4: 博多 89 次

第13図 博多地区調査地点位置図



(a) 石塁遺構Aブロック (S=1/120)

(b) 石塁遺構Bブロック (S=1/120)

(c) 石塁遺構Aブロック

(d) 石塁遺構全体平面図 (S=1/600)

第14図 博多地区 博多遺跡群第111次調査成果

認しており、本来は一連の石積みだったことは疑いない。

石積みの幅は3.3~3.5mで、最大残存高1.3m。石積み基底面の標高は2.9~3.8mである。前面・後面に一辺50cm以上の大きな石を積み上げて、その中をやや小さな石で充填している。

Aブロックでは、石積み前面の前方に1段の石列を配することで、階段状をなしている（第14図

a・c)。また、B・Eブロックでは、石積みの方向に直交するような形で、50cm程度の石が並べられているという。

石材 使用されている石材としては、砂岩・礫岩・塩基性岩類・玄武岩・閃緑岩・ひん岩・珪花木が報告されている。中でも砂岩・礫岩が圧倒的な量を占めており、その他の石材の使用頻度は極めて低いとのこと。

砂岩・礫岩は、北東方向に位置する名島沿岸部一帯で採集可能であり、名島海岸で見られる珪花木が出土していることから、石材採集地の可能性を高めている。塩基性岩類と玄武岩は能古島で採取されたと考えられている。

防塁周辺の状況 本調査地点では、元寇防塁と考えられる石積みのほかに、多くの遺構が検出されている。遺構・遺物の多くは、15世紀後半～17世紀前半に比定され、石積遺構・石基礎建物・掘立柱建物・井戸・溝・土坑墓・土坑などの遺構が確認される。

名島城跡で出土した16世紀末～17世紀前半の瓦と同汎の橘花文軒丸瓦をはじめ、多くの瓦が出土している。いわゆる太閤町割りの際、上級商人には瓦葺きを命じたという記事があることから、当該地に富裕な商人の居宅があった可能性が指摘されている。その他にも、メダイやメダイ・十字架の鋳型といったキリシタン遺物や、15世紀代の貿易陶磁器などが出土している。

ii) 博多遺跡群第68次調査 (井沢編 1992)

石積遺構 SX32 (第15図) は、残存長約20m、最大幅6.5mで、砂丘汀線部の傾斜面に形成されている。その傾斜角度は45°で、斜面における石の堆積の厚さは65cmを測る。石積みの最上端の標高は2.45m、最下部は標高0.77m。石の大きさは様々で、13～65cmまでの幅がある。

石積み最上部では、長さ60～70cm大の角礫が、1.5mの間隔で2列に配列されており、その2列の石列の間は小礫で充填される。石列の下には粘土等の整地事業の痕跡は確認できていないが、石列の上段には幅1.5m程度の堤防状の石積みがあった可能性が指摘されている。

堆積層や出土遺物、遺構の切り合い関係より、石積遺構 SX32の年代は13世紀後半～14世紀前半と考えられ、15世紀には上端部も埋没していたとされている。

石材 使用されている石材としては、砂岩・礫岩・玄武岩・花崗岩が報告されており、中でも礫岩が最も多く、波に洗われた様相を呈するものが多いという。

石積遺構 SX32の評価 この石積遺構



第15図 博多地区 博多遺跡群第68次調査成果

SX32については、それを元寇防塁と認定するかどうか議論がある。報告者は、当該遺構について考古学的・文献史的観点から考察しつつ、元寇防塁である可能性を積極的に論じている。

一方、大塚紀宜は、香椎地区や博多遺跡群第89次調査で検出された石積みの護岸との類似性を指摘し、①砂丘前面の緩斜面上に構築されている、②基壇部分の標高が1 m以下で、海面に近い位置に造られている、③上部構造がなく、石積みは平面的に検出されている、という点を根拠にしながら、石積遺構 SX32は護岸の機能を有する石積みと考えるのが適当とし、元寇防塁であることを否定した（大塚 前掲）。2019年に刊行された『元寇防塁調査総括報告書』（藏富士編 前掲）の中でも、石積遺構 SX32は「元寇防塁である可能性が指摘された遺構」として紹介されており、当該遺構を元寇防塁には含めて考えていないようだ。

iii) 博多遺跡群第103次調査（塩屋・井澤 1998）

トレンチ北端部では標高0.12mの深度から石積みの転石が、トレンチ南端部では標高2.08mの深度から石積み上面が検出されている。大小の礫石を無造作に乱積みした状態で、砂丘前面の自然傾斜に沿って積まれており、トレンチ南端付近では比較的大きな石を規則的に積んでいるという。石積みは、東西方向に直線的に延びることが予想され、当時の海岸線と一致するものと推測されている。

先述した博多遺跡群第68次調査で検出した石積遺構 SX32と一連のものと考えられている。

iv) 博多遺跡群第89次調査（小林編 1998）

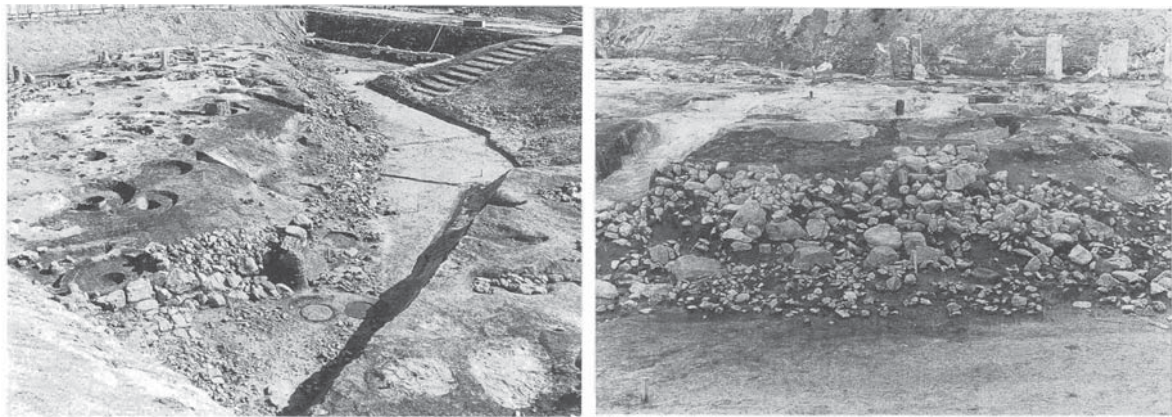
16世紀末～17世紀初頭まで機能していたと考えられる護岸跡が検出されている（第16図）。元寇防塁推定線から完全に外れており、当該遺構を元寇防塁とみなすことはできないが、護岸跡と評されている博多遺跡群第68次調査の石積遺構 SX32や、博多遺跡群第103次調査の石積み遺構と対比するために、その調査成果について概観しておきたい。

護岸跡の諸特徴 砂丘の緩斜面が浜底へと移行するその変換線上に、縦20～40cm、横30～60cmの大きな目の割石や転石を横に据えて基石とし、浜の形に沿って弧状に配列している。この基石列の上面には、20～30cm 大の転石や円礫を砂丘の傾斜面に沿って隙間なく並べており、その礫石群の上層には砂層を間層にして、同大かやや小振りの礫石を敷き重ねて強固に補強している。

石積遺構 SX32との比較 博多遺跡群第68次調査の石積遺構 SX32と比較したところ、確かに砂丘汀線部の傾斜面に石を積み重ねている点は共通している。石積遺構 SX32を護岸跡とする理解は妥当であろう。

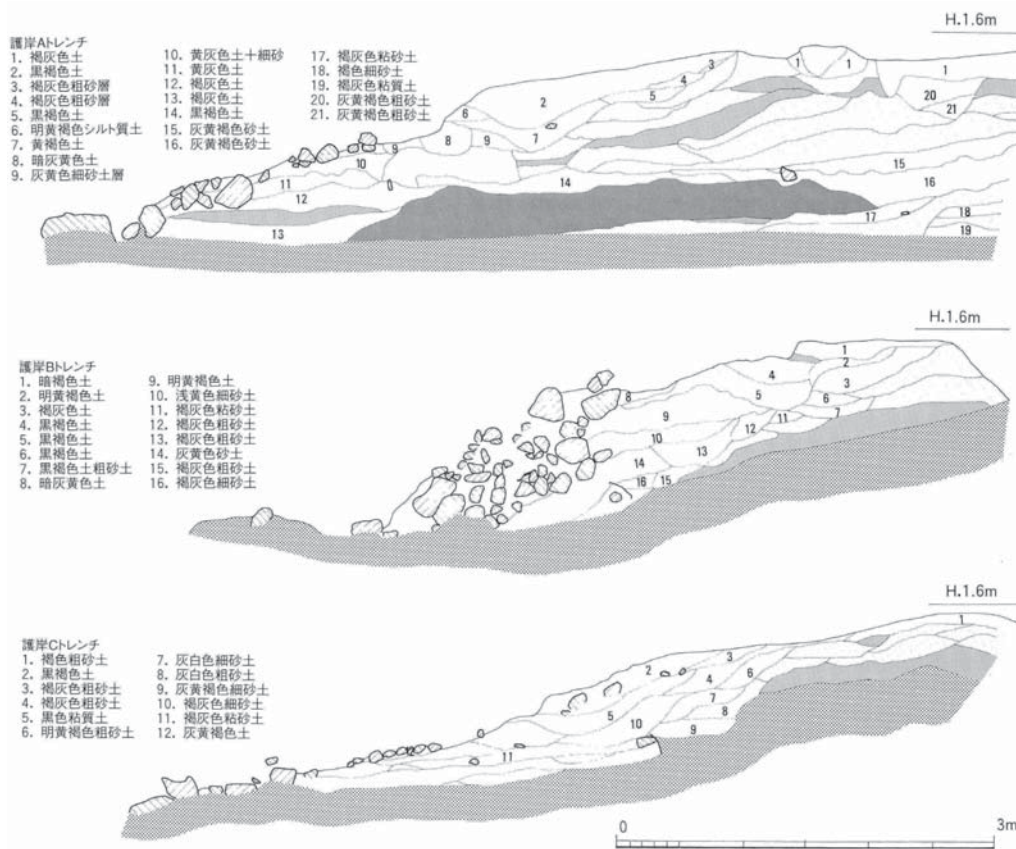
しかし、第89次調査の護岸跡には、石積遺構 SX32に見られるような石積み最上部における石列は確認されていない。この石列は1.5mの間隔で大きな石が2列に配列されており、その2列の石列の間は小礫で充填される（第15図）。このことから、石列の上段には幅1.5m程度の堤防状の石積みがあった可能性が指摘されている（井沢編 1992）。また、第103次調査においても、石積み上部が検出されているトレンチ南端付近では、比較的大きな石が規則的に積まれている状況が確認されており、石積遺構 SX32と同様の構造を持つことが推察される。第89次調査の護岸跡の上部に関して、石積遺構 SX32のような石列があったにも関わらず、後世の削平によって消失してしまったのか、あるいは元々そのような構造ではなかったのかについて、報告書に示された情報からは読み取ることができない。

石積遺構 SX32を元寇防塁と認定するかどうか判断する際に、第89次調査の護岸跡との類似性を根拠にするのであれば、この上部の石列から想定される幅1.5mの石積みの存在をどのように評価するかが重要になろう。仮に、傾斜面の石積みと上部石積みの間に時期差が存在していた場合、元々存在していた護岸石積みを利用する形で、その上部に防塁の石積みを構築した可能性、あるいはその逆の先後関係も想定できる。時間差が存在しない場合でも、石積みと護岸設備のセットが当該地点の元寇



(a) 護岸跡全景

(b) 護岸跡中央部



(c) 護岸跡A～Cトレンチ土層断面図 (S=1/60)

第16図 博多地区 博多遺跡群第89次調査成果

防塁の構造的特徴であった可能性もある。課題も多いことは理解しつつも、博多遺跡群第68次調査の石積遺構 SX32と、博多遺跡群第103次調査の石積み遺構については、今後より幅広い視点からの評価・位置づけが必要であると考えます。

(6) 箱崎地区

i) 戦前の調査状況

1920年、地蔵松原において元寇防塁の発掘調査が行われている。その発掘調査成果については1921

年・1922年に武谷水城によって紹介されている（武谷 1921・1922）。武谷によって報告された地蔵松原元寇防塁の特徴は以下の通り（武谷 前掲）。

- ・ 石塁の高さ：二尺（約60.6cm）乃至三尺四五寸（約103.02–106.05cm）
上部の石は取り去られたと考え、全高四尺（約121.2cm）乃至五尺（約151.5cm）ほど
- ・ 発掘の長さ：約四間半（約8.181m）
- ・ 石塁の幅（厚さ）：現存二尺（約60.6cm）乃至二尺三四寸（約69.69–72.72cm）
- ・ 石材：幅二尺八寸（約84.84cm）、高さ一尺（約30.3cm）、厚さ一尺五寸（約45.45cm）

なお、近年、堀本一繁によって、筥崎宮の旧座主家である筑紫家に所蔵されていた地蔵松原元寇防塁の実測図が紹介されており、その図から読み取れる諸特徴は武谷の報告と一致することが指摘されている（堀本 2018）。

武谷の報告で特に注目されるのが、石面の向きである。今津などで見つかっている石塁はどれも海面に対して正向しているが、地蔵松原の石塁は海面に対向せず、東方に面して築かれているという。武谷はこの理由を防塁終点付近の地形的特質で説明している。石塁前面には、二十四五歩乃至三十余歩のところの高さ二間（約3.636m）の崖があり、崖下には低地が広がって直ちに宇美川に連なることから、当時、当該地域は多々良瀉入湾の一部であったとする。そして、当初は海岸線に併行して築造されていた石塁は、この入湾に沿う形で次第に右折して方向を変えたと推察している。防塁終点付近の様相、そして箱崎砂州北端部の古地形について考える上で、非常に重要な指摘である。

ii) 元寇防塁第5次調査（井澤・長家 1995）

地表下1.8mで約50cm程度の石材を検出されている。残存状態は良いとは言えないが、防塁を構成する石材の可能性はある。石材は花崗岩もしくは礫岩と報告されている。

iii) 元寇防塁第9次調査（榎本 2002）

人頭よりやや大振りな自然礫10数個が、北東–南西方向に数十 cm の間隔をおいて直線的に並び、その南側後背部には拳大の小礫がやや浮いた状態で検出されている。

北側の石列は、防塁基底の一部と推定されており、上面の標高は1.3~1.4mを測る。背後の小礫は、裏込めなどに用いたもので、二次的に移動したものと考えられている。

石材は礫岩を主体とし、砂岩が少量含まれているとのこと。

iv) 九州大学箱崎キャンパス調査（福田・森編 2018；三阪・谷編 2019；齋藤編 2020；福永編2021）

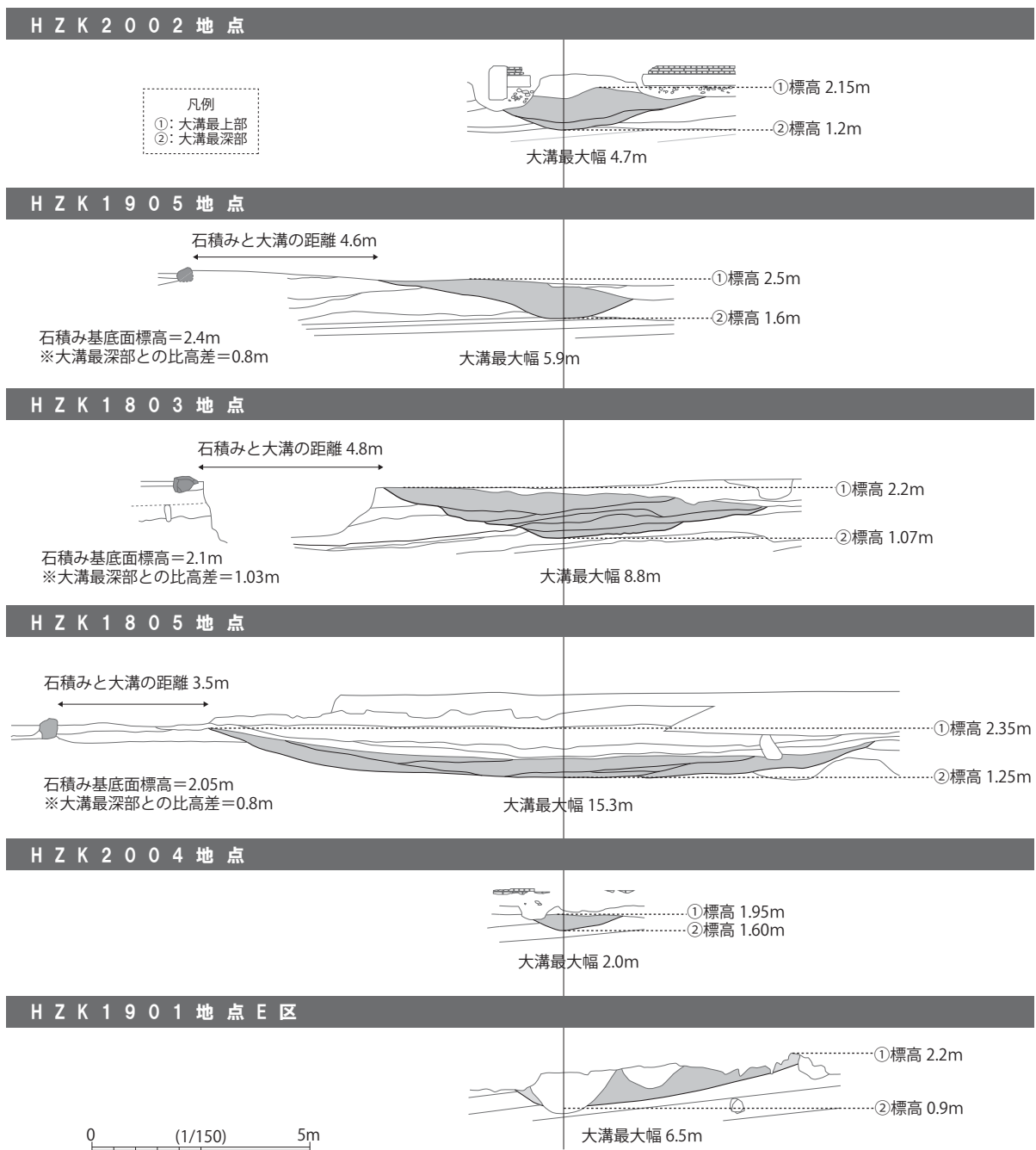
HZK1905・1706・1604・1902・1603・1803・1701・1802・1805地点で石積みを検出している。HZK1805地点で全長26m、HZK1905・1706地点で全長22.6m、HZK1603地点で全長13.7mを測る。各地点における石積みの基本的な構造は共通しており、長軸50~80cm、短軸40~70cm、高さ30~40cm程度の大きな砂岩・礫岩を並べ、石積みは一列のみで構成される。石積み基底面の標高は2.0m~2.4m前後を測る。最も残存状態が良好であったHZK1603地点で、石積みは最高3段確認されているが（第17図）、他の地点では後世の上部削平により石積み上段は破壊されており、基底石しか残存していない。石材の隙間に拳大の石片を噛ませて、間詰めした箇所も確認できる。

HZK1603地点とHZK1805地点では、石のサイズ選択や積み方の不連続から、一定の単位間で石積み築造における工法の違いが指摘されている（福田・森編 前掲；齋藤編 前掲）。今津地区や生の松原地区で見出されているような、防塁築造の分担者の違いを反映している可能性もある。

HZK1603・1604・1701・1706・1802地点では裏込石の存在が指摘されているが、それらを含む各調査地点において原位置を保つ裏込石は確認されていないとして、後に裏込石の存在は否定されている（齋藤編 前掲）。その後調査されたHZK1905地点でも裏込石は確認されていない。また、石積み



第17図 箱崎地区 HZK1603地点調査成果



第18図 箱崎キャンパス内大溝比較図

背面を粘土層や版築構造によって補強した痕跡も確認されておらず、砂のみで構成されている。石積みは1列のみであることと合わせて、九州大学箱崎キャンパス内の元寇防塁は総じて脆弱な造りであることが指摘できよう。

石材 石積みに使用されている石材は砂岩・礫岩である。また、HZK1603地点における石積みの構築石材を対象に岩石学的分析もなされており（足立・田尻 2018）、石積み構築石材の多くは、名島層で採集可能であることが判明している。

大溝 九州大学箱崎キャンパス内の元寇防塁の特徴の一つとして、大溝が石積みに伴って存在して

いることがあげられる。石積みの後方に一定の距離を保ちながら、石積みに平行する形で人為的に掘り込まれた空堀である。HZK1601地点においてその存在が認知され、当初は「溝状遺構」と呼称されていた。2018年度以降の発掘調査成果（三阪・谷編 前掲；齋藤編 前掲；福永編 前掲）や、HZK1802地点における地質学的調査の結果（市原・下山 2019；下山ほか 2019a・b）によって、溝状構造は自然作用で形成されたものと考え難く、自然堆積層を人為的に掘り込んだ遺構であることが確実にされた。こうした調査研究の進展を受けて、「溝状遺構」は「大溝」と名称を改めるに至っている（齋藤編 前掲）。

これまでの発掘調査で検出した大溝の土層断面を示したものが第18図である。石積みと大溝西端までの距離や、石積み基底面標高と大溝最深部標高との比高差には、概ね共通性があることがわかる。一方、大溝の最大幅については、地点間で変異が見られる。各調査地点ごとに、旧地表面の標高や後世の大溝上部の削平の度合いなどが異なっているため、単純な比較は避けねばならないが、HZK1905地点やHZK1803地点などの大溝幅は概ね6～9m程度であるのに対し、HZK1805地点は15.3mと他に対して倍以上広い。これに関しては、長期的な修理・修繕を行った結果、幅広くなった可能性が指摘されている（宮本 2020）。

大溝の機能に関しては、福島県所在の国史跡阿津賀志山防塁との類似性から、石積みと堀の組み合わせでモンゴル軍の騎馬軍や歩兵部隊を防御する施設であったという見解や（岩永 2020）、そうした防御機能に加え、石積み背面に用いる砂の供給先として大溝を位置づける見解も出されている（福永・齋藤 2021）。

（7）香椎地区

i) 戦前の調査状況

1921年、内務省考査員一行により石積みが発見・調査されている。その発掘調査成果については、箱崎の地藏松原地区と同様、武谷水城によって紹介されている（武谷 前掲）。

道路掘削の際に上方は破壊されたようで、残存高は五尺三十四寸、石積みの幅は五尺七十八寸。石積みの後面は赤土を充填しており、その幅は約八尺を測る。石材は大きなもので長さ二尺、幅一尺以上のものもあるという。

姪浜や箱崎地藏松原で発掘された元寇防塁との類似性が指摘され、本調査地点の石積みも元寇防塁と考えられていた。しかし、後述するように、2005年に隣接地の調査が行われており、その結果から本調査地点の石積みは元寇防塁ではないと判断された（大塚編 2007；大塚 前掲）。

ii) 香椎地区遺跡確認調査（大塚編 2007）

調査区を南北に横断する形で石積みが検出されている（第19図）。石積みの基礎部分の標高は海拔1m以下で、基盤層も非常に軟弱である。

西側の海に面した部分の遺存状態は悪く、ほとんど原型を留めていない。調査区中央部で比較的大型の石材が規則的に配列されている部分があり、これが本来の石積み西側の前面に相当するのではと考えられている。一方、東側部分については比較的原型を留めている。40～50cm程度の大きな石材を使用して、外側に石の線を合わせるように配列している。原型を留めていると考えられる部分から判断して、石積みの幅は約2.4m前後であったと推定されている。

積まれている石の周囲は砂ではなく、粘土が詰められて突き固められている。この工法は、近世の石垣の裏込め石の固め方に類似しているという。また、西側石積み前面の後方で、石積みの方向と平行に配された丸太材が検出されており、これも近世の石垣築造に見られるような、石の沈下を防ぐ基



第19図 香椎地区 調査成果

礎工事との類似性が指摘されている。こうした築造技術のあり方を裏付けるかのように、この丸太材の傍から寛永通宝が1枚出土した。

築造技術や寛永通宝の存在から近世の所産と考えられることに加えて、①元寇防塁は基盤の標高が3.5m前後でほぼ一致しているが、本事例は異なる、②元寇防塁は風成砂層上に構築されていて地盤が比較的安定しているが、本事例は異なる、という点から、本事例は元寇防塁ではないと結論づけられている。

3. 本報告書で取り組む元寇防塁研究の課題

(1) 元寇防塁における地域的差異の背景

これまでの発掘調査成果によって、各地区における元寇防塁の構造的特徴が明らかにされてきた。それとともに、各地区間でその構造的特徴に差異があることも明確になってきた。特に、箱崎地区の元寇防塁は、石積みの脆弱な構造や、石積み後方における大溝の築造など、現状の調査成果から判断

する限り、他の地区の元寇防塁に比べて異質さが際立っている。そうした元寇防塁の地域的差異に関しては、これまで防塁築造の分担者の違いとして説明がなされてきた。しかし、仮に分担者の違いが関係していたとしても、各地区の分担者がその土地に防塁を築造する際に、なぜそのような構造の防塁を築造したのか、あるいは、築造しなければならなかったのか、に関しては十分な説明がなされてきたとは言い難い。

この点を明らかにするためには、各地区における地形発達史が防塁築造に与えた影響や、モンゴル襲来前後における各地区の土地利用史などを踏まえながら、当該地区の元寇防塁の構造的特徴について考察する必要がある。大塚宜紀は、各地区周辺の発掘調査によって明らかにされている地理的・歴史的環境を踏まえながら、元寇防塁が担った防衛的機能とその対象となったものについて、地政学的観点から考察しており（大塚 前掲）、こうした研究視点は今後より発展的に継承されるべきだと考える。

箱崎砂州先端部における元寇防塁の構造的特徴とその背景については、既に、HZK1905地点（中央図書館前北地点第2次調査）の発掘調査成果などから、砂州先端部の地形発達史と、当該地区における元寇防塁の構造的特徴を関連づける仮説が提示されている（福永編 前掲）。すなわち、①当時の箱崎砂州先端部の地理的環境は不安定かつ流動的であった、②そのため、防塁築造に際しての整地・造成や、石積みに用いる石材の調達・運搬などの環境整備作業が難航した、③当該地区の防塁の脆弱性は、各作業にかかる労力を必要最小限に抑えたことに起因する、④箱崎砂州先端部付近が安定した居住・生活の場ではなかったため、戦略上そこまで強固な防塁を築造して防衛する必要性もなかった、というものである。しかし、これは当時の古環境・古地形の復元が十分になされた上での立論とは言い難く、また、箱崎砂州先端部付近における人々の居住・生活の実態に関する考古学的検討なども不十分であった。本報告書では、これら不足していた諸課題の解決に取り組むことで、上記仮説①～④の検証に努めたい。

（2）元寇防塁の技術的系譜

文永十一年（1274）の文永の役後に、モンゴル軍の再侵攻に備えて博多湾沿岸に元寇防塁を築造したことは、誰しもが自明のこととして認知している歴史事象である。しかし、なぜ海岸に石積みを築造して外敵の侵攻を防ごうとしたのか、そして、その防衛思想や技術的系譜はどこに由来するものなのか、については未だ不明瞭な点が多い。

齋藤慎一・向井一雄は、元寇防塁が線状に築造されている点に関しては、阿津賀志山防塁などを類例として挙げつつ、戦国時代とは異なる中世前期の軍事的構築物という観点で考えることができるとする。その一方で、元寇防塁の石垣構造は、同時期に類例がないとし、現状では西日本古代山城から戦国城館の中間に取り残されたように存在する軍事的構築物であると評されている（齋藤・向井 2016）。その他にも、三浦圭一は、元寇防塁の石積み技術について言及し、割り石して四角柱状にした石材を堤防上に補強する工法は、古代から継承され、中国の技術的影響・刺激を受けて徐々に発展したものではないかとする（三浦 1993）。また、宮武正登は、中世城郭における防衛ライン（土塁や横堀）によって空間を遮断する思想に言及する中で、朝鮮半島山城や元寇防塁、万里の長城、ロシア沿海地方の女真系山城などを例として挙げながら、アジア的防衛思想から理解する必要性を論じている（宮武 2017）。

本報告書では、特に、三浦や宮武のように東アジア的視点から元寇防塁を捉えようとする見解に着目し、モンゴル襲来前後における日本を取り巻く東アジアの周辺諸地域との対外交渉史を意識しながら

ら、元寇防塁の防衛思想や技術的系譜の由来について考察する。

(福永将大)

引用文献

- 足立達朗・田尻義了 2018「石積み遺構構築石材の岩石学的分析」福田正宏・森貴教（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、九州大学埋蔵文化財調査室、68～78頁
- 阿部泰之 2018「元寇防塁第14次（GKB14）」本田浩二郎（編）『福岡市埋蔵文化財年報 VOL.32—平成29（2017）年度版—』福岡市教育委員会、37頁
- 荒牧宏行（編）2001『国史跡元寇防塁（生の松原地区） 復元・修理報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告第694集、福岡市教育委員会
- 井沢洋一（編）1992『博多32』福岡市埋蔵文化財調査報告書第287集、福岡市教育委員会
- 井澤洋一・長家伸 1995「地蔵松原防塁（GKB-1）」浜石哲也・山口讓治・長家伸・菅波正人（編）『福岡市埋蔵文化財年報 Vol. 8 平成5（1993）年度』福岡市教育委員会埋蔵文化財課、95頁
- 市原彦彦・下山正一 2019「HZK1802地点におけるジオスライサー調査の成果」三阪一徳・谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点— 付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室、118～130頁
- 井上繭子 2008「博多の元寇防塁」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎（編）『中世都市・博多を掘る』海鳥社、48～51頁
- 岩永省三 2020「箱崎キャンパス内外の元寇防塁推定線再論」齋藤瑞穂（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集、九州大学埋蔵文化財調査室、164～174頁
- 榎本義嗣 2002「元寇防塁第9次調査（GKB-9）」田中壽夫（編）『福岡市埋蔵文化財年報 Vol.15 平成12（2000）年度版』福岡市教育委員会埋蔵文化財課、52～54頁
- 榎本義嗣 2008「箱崎」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎（編）『中世都市・博多を掘る』海鳥社、52～55頁
- 大塚紀宜 2013「元寇防塁と博多湾—防塁の構造とその戦略的機能について」『新修福岡市史—特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市、302～317頁
- 大塚紀宜（編）2002『西新地区元寇防塁発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第726集、福岡市教育委員会
- 大塚紀宜（編）2007『香椎地区遺跡確認調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第926集、福岡市教育委員会
- 川添昭二 1971『注解元寇防塁編年史料—異国警固番役史料の研究—』福岡市教育委員会
- 川添昭二 2008『中世・近世博多史論』海鳥社
- 藏富士寛 2016「元寇防塁第11次調査（GKB-11）」佐藤一郎（編）『福岡市埋蔵文化財年報 VOL.30—平成27（2015）年度版—』福岡市教育委員会、15頁
- 藏富士寛 2017「元寇防塁第12次（GKB12）」本田浩二郎（編）『福岡市埋蔵文化財年報 VOL.32—平成29（2017）年度版—』福岡市教育委員会、35頁
- 藏富士寛（編）2019『元寇防塁調査総括報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1328集、福岡市教育委員会
- 小林義彦（編）1998『博多61』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第556集、福岡市教育委員会
- 齋藤慎一・向井一雄 2016『日本城郭史』吉川弘文館
- 齋藤瑞穂（編）2020『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 佐藤一郎 2013「箱崎遺跡—古代末から中世にかけて」『新修福岡市史—特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市、242～247頁
- 佐藤一郎（編）2002『博多85』福岡市埋蔵文化財調査報告書第711集、福岡市教育委員会
- 塩屋勝利・井澤洋一 1998「博多遺跡群第103次調査（HKT-103）」松村道博（編）『福岡市埋蔵文化財年報 Vol.11 1996年度（平成8年度）』福岡市教育委員会、94～95頁

II 元寇防塁の発掘調査史

史蹟現地講演会（編）1913『元寇史蹟の新研究』丸善株式会社

島田寅次郎 1925「西新町（百道原）新発掘元寇防塁の横断面」『筑紫史談』34、筑紫史談会、44～45頁

下山正一・三阪一徳・市原季彦 2019a「HZK1802地点における土層の概要」三阪一徳・谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点—付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室、131～133頁

下山正一・三阪一徳・市原季彦 2019b「箱崎砂州の発達過程の考察」三阪一徳・谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点—付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室、134～143頁

武谷水城 1921「多々良以東に於ける元寇防塁の有無に就て」『筑紫史談』第24集、筑紫史談会、32～41頁

武谷水城 1922「多々良以東元寇防塁有無に就ての補足 香椎発掘の石土混塁と地藏松原発掘の石塁」『筑紫史談』第25集、筑紫史談会、33～36頁

中尾祐太 2018「考古学からみた箱崎」九州史学研究会（編）『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠社、10～23頁

福岡市教育委員会（編）1968『生の松原元寇防塁発掘調査概報—鎌倉時代（13世紀）における蒙古襲来に対する石築地の考古学的調査—』福岡市教育委員会

福岡市教育委員会（編）1969『今津元寇防塁発掘調査概報—鎌倉時代（13世紀）における蒙古襲来に対する石築地の第二次（昭和43年度）調査—』福岡市教育委員会

福岡市教育委員会（編）1970『西新元寇防塁発掘調査概報—鎌倉時代（13世紀）における蒙古襲来に対する石築地の第三次（昭和44年度）調査—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第11集、福岡市教育委員会

福田正宏・森貴教（編）2018『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、九州大学埋蔵文化財調査室

福永将大（編）2021『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集、九州大学埋蔵文化財調査室

福永将大・齋藤瑞穂 2021「箱崎砂州先端部における元寇防塁とその特質」福永将大（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集、九州大学埋蔵文化財調査室、180～197頁

堀本一繁 2018「史蹟元寇防塁地藏松原史跡指定地について」福田正宏・森貴教（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、九州大学埋蔵文化財調査室、99～107頁

松村道博・池田祐司 1998「元寇防塁第6次調査（GKB-6）」松村道博（編）『福岡市埋蔵文化財年報 Vol.11 1996年度（平成8年度）』福岡市教育委員会、70頁

三浦圭一 1993『日本中世の地域と社会』思文閣出版

三阪一徳・谷直子（編）2019『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点—付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室

宮武正登 2017「九州の中世城館の基本的特徴」『平成29年度鹿児島県考古学会総会 九州考古学会・鹿児島県考古学会合同学会 南九州における中世城郭研究の問題点 発表資料集』、21～33頁

宮本一夫 2020「調査のまとめ」齋藤瑞穂（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集、九州大学埋蔵文化財調査室、196～200頁

柳田純孝 1980「元寇防塁」『月刊考古学ジャーナル』182、ニュー・サイエンス社、42～46頁

柳田純孝 1984「元寇防塁と博多湾の地形」中山平次郎『古代の博多』九州大学出版会、365～394頁

柳田純孝 1988「元寇防塁と中世の海岸線」川添昭二（編）『よみがえる中世1—東アジアの国際都市 博多』平凡社、180～194頁

Ⅲ HZK2005地点（工学研究科共同研究棟東地点）

1. 調査の経緯

（1）調査の経緯と目的

HZK2005地点（工学研究科共同研究棟東地点）はL26区に設定された調査地点で、HZK1805地点（理学部二号館前南第3次調査）の東に位置する。

調査の契機は、工学研究科共同研究棟の解体・撤去工事にあたって実施した試掘調査であり、現地表面から1.2mの深さにおいて、中世遺物を包含すると見込まれる色味の層が検出されたことに因る¹⁾。西接するHZK1805地点東拡張区で溝や火葬土坑等が検出されていることから、それらに連なる遺構の発見が期待された。

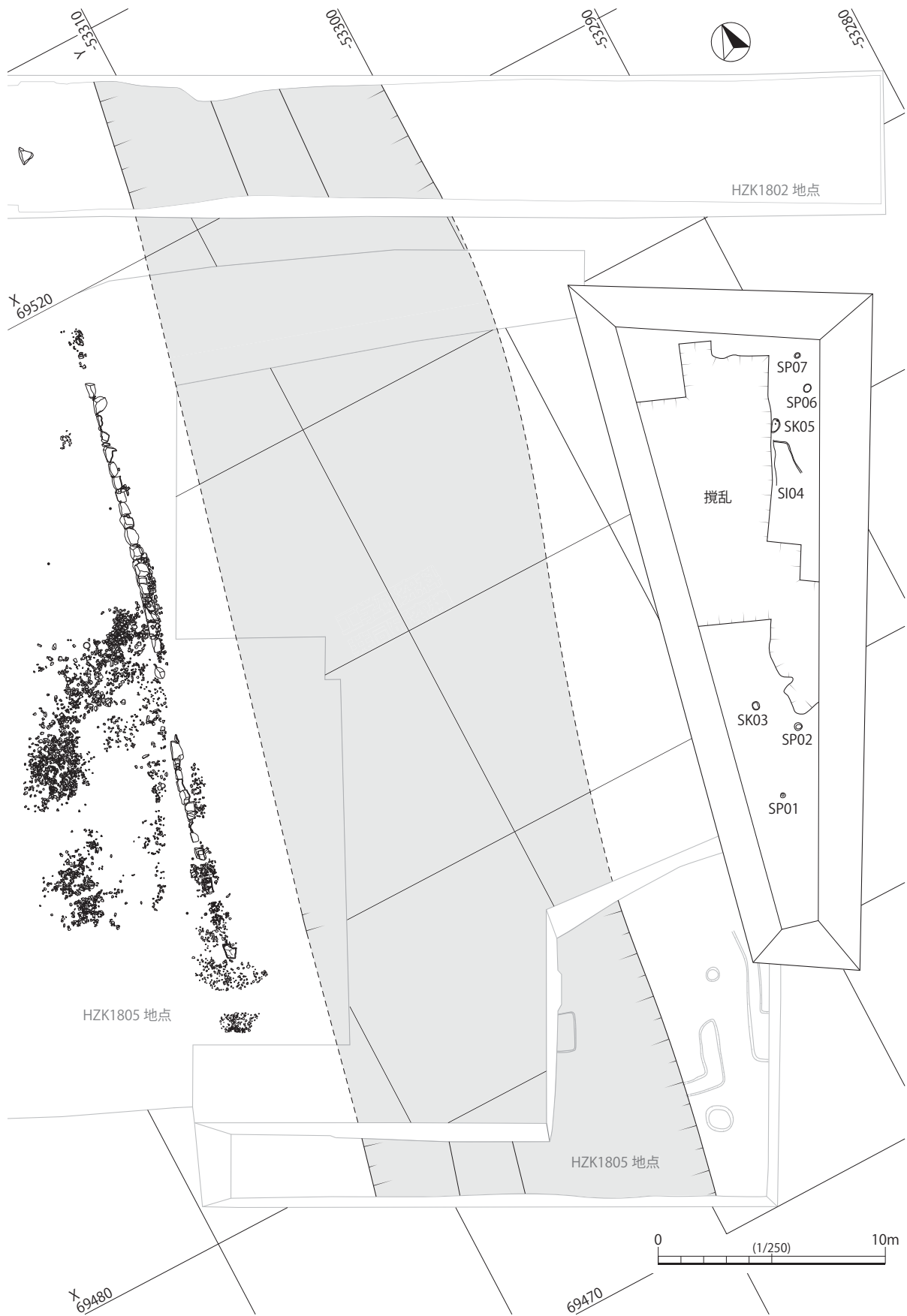
そこで九州大学埋蔵文化財調査室は、防塁内側の様相把握を目的とする調査の実施を決め、令和2年7月16日付の福岡県教育委員会あて「九大統統第27号」にて埋蔵文化財発掘届を提出した。これに対して福岡県教育委員会より8月7日付「2教文第561号-2」にて許可の通知があり、10月5日に現地調査を開始した。

（2）調査要項

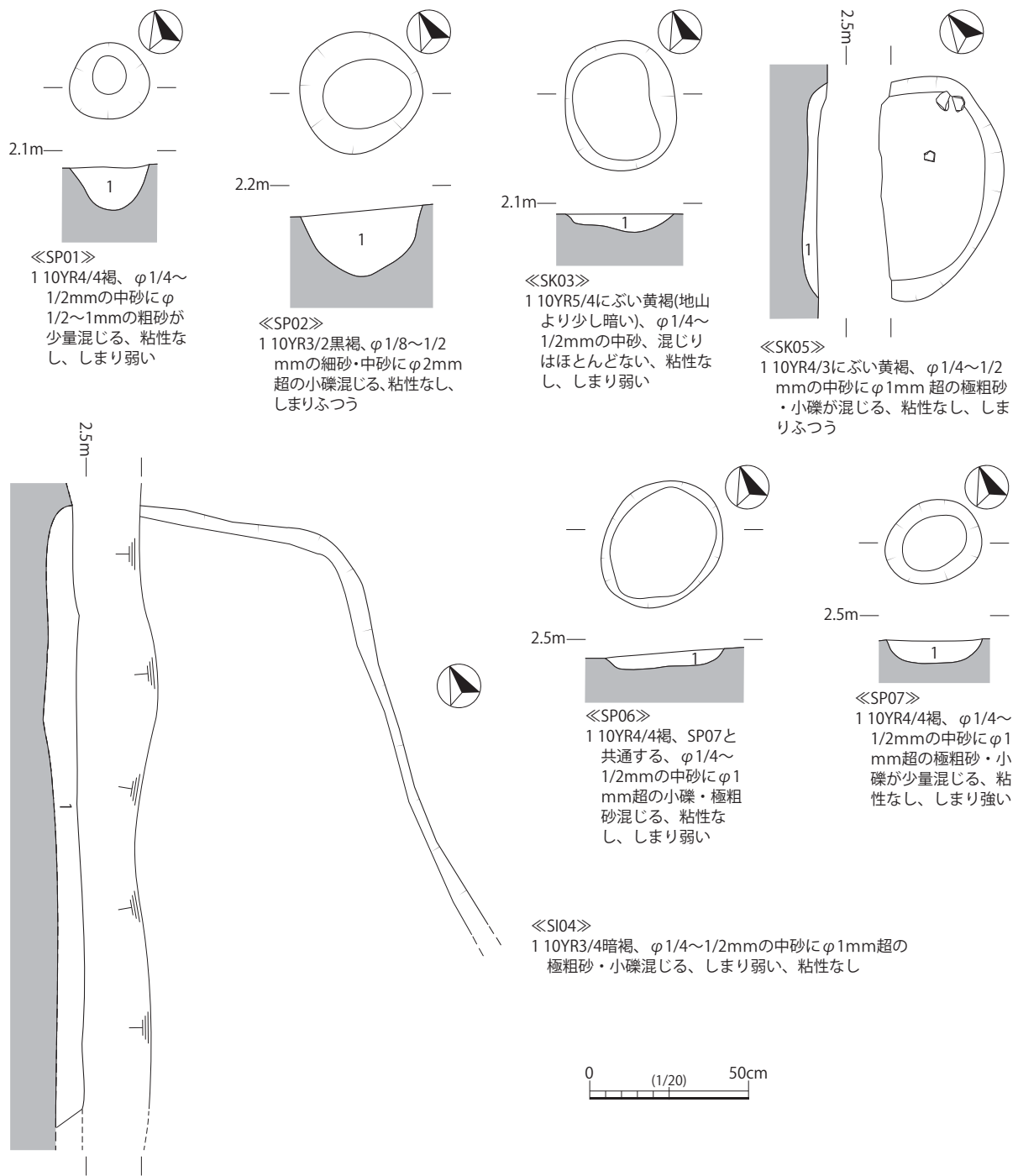
遺跡名	箱崎遺跡
地点名	九州大学箱崎キャンパス HZK2005地点（工学研究科共同研究棟東地点）
調査名	九州大学埋蔵文化財調査室調査番号：HZK2005 福岡市調査番号：2026、箱崎遺跡第112次調査
所在地	福岡市東区箱崎6-10-1
調査面積	300㎡
調査原因	学術研究
調査期間	令和2年10月5日～10月19日
遺物量	パンコンテナ1箱
調査主体	九州大学埋蔵文化財調査室
発掘担当	齋藤瑞穂・福永将大
調査作業員	浅田ふえ、有井みずえ、伊藤未紀、犬山颯真、井上光江、大藪英美、奥 敦子、春日ゆかり、門脇尚子、金子伸子、釘崎知子、定永靖史、真田 明、竹本葉子、田中悦子、堤 末子、永濱弘子、仲前富美子、中村尚美、中山大輔、西田和廣、東島真弓、深野人美、藤田房佳、松尾美恵、松下由希子、美濃洋子、宮元亜希世、武藤マリ子、守治美、安里由利子、山田幹裕、吉田辰義
遺物整理担当	谷 直子
整理作業員	石井若香葉

2. 遺構と遺物

当初予想に反して、大きい攪乱が中央に入っていたため、実際に調査し得た範囲は狭い。この攪乱



第20図 HZK2005地点全体図



第21図 HZK2005地点 SP01・SP02・SK03・SI04・SK05・SP06・SP07平面・断面図

は遺構形成面以下の洪水堆積層まで達している。ほかの部分も、九大設置以来の掘削・造成が深い位置まで達しており、遺構はわずかししか検出できなかった。

ピット SP01 径は24cmで、確認面からの深さは13cmである。土師器の坏もしくは皿の小破片が1点出土している。

ピット SP02 径は37cmで、確認面からの深さは22cmである。土師器坏皿類の小破片が6点出土している。

土坑 SK03 径は33cm、深さは5cmで、坑底付近のみ辛うじて遺る。遺物は出土していない。

竪穴 SI04 不整形の竪穴で南北1.92m以上、東西は1.08m以上になる。竪穴の床付近のみ辛うじて遺ったらしく、確認面からの深さは10cm余でしかない。坏皿類などの小破片13点が出土した。

土坑 SK05 円形の土坑と推測され、径は68cm、確認面からの深さは4cmを測る。杯皿類など8点が出土した。

ピット SP06 径は36cmで、確認面からの深さは4cmである。皿と播鉢が1点ずつ出土している。

ピット SP07 径は29cmで、確認面からの深さは6cmである。遺物は出土していない。

（齋藤瑞穂）

出土遺物 第22図は、SK05出土の土師器である。1は糸切り底の皿で、内外面とも回転ナデ。2は坏で、外面にげっ歯類の嚙跡が残る。

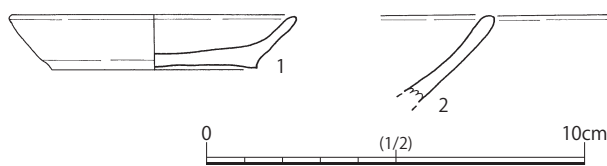
第23図には表土（九大整地層および攪乱層）出土品のうち、調査区北半のものを掲げた。1は白磁碗である。口唇部が短く外反する。大宰府編年の白磁碗ⅤあるいはⅧ類で、12世紀中頃～後半の所産である（宮崎編 2000）。

2～7は龍泉窯系青磁である。3は内面に片彫りの花文を施す。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、12世紀中頃～後半の所産である。4は外面に鎬蓮弁文を彫り、厚く施釉する。龍泉窯系青磁碗Ⅲ類で、時期は13世紀中頃から14世紀初頭である。5・6は碗。釉調は不透明で灰色がかり、厚く施釉する。龍泉窯系青磁碗Ⅳ類で、14世紀頃に相当する（宮崎編 前掲）。7は屈曲する胴部で、器種は不明。屈曲部上方に突線が2条めぐる。

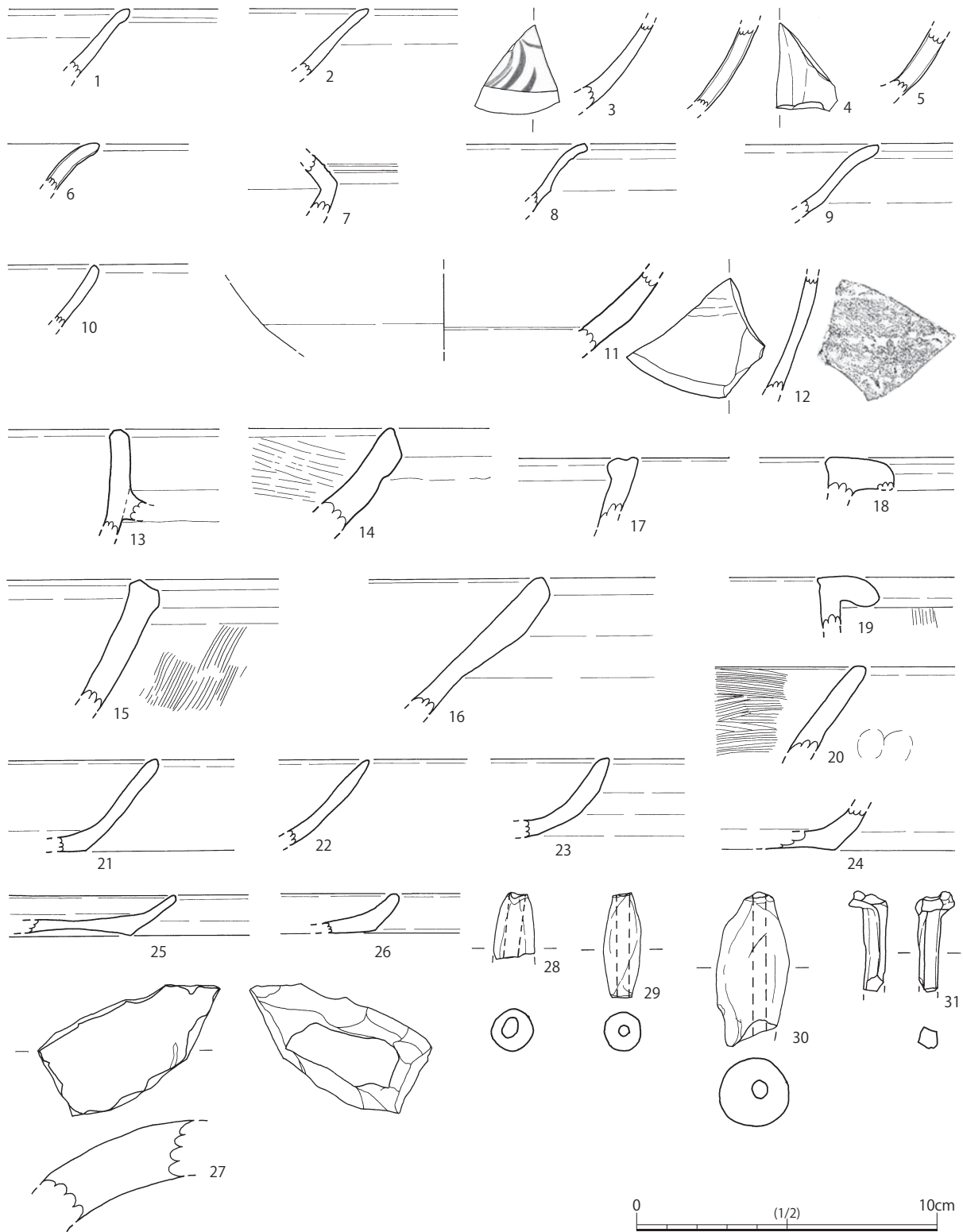
8は朝鮮王朝の粉青沙器の碗である。体部中央が屈曲し、稜線をなす（佐藤 2008）。9～12は陶器碗。9は化粧土様の白色釉がかかる。胎土に1mm大の砂粒を少し含む。10はやや粗い灰色の胎土に透明釉がかかる。朝鮮王朝の雑釉陶器である（佐藤 前掲）。11は均質な胎土に薄く釉がかかる。見込み部分の釉が拭き取られている。体部外面下半はケズリで整形する。12は無釉で、外面に格子タタキの痕跡が残る。中国陶器と考えられる。

13は瓦質土器の湯釜である。15世紀後半から16世紀末の所産である。14は瓦質土器の捏鉢である。内面にハケメを施し、口縁部外面は灰色を呈する。15・16は土師質の捏鉢である。瓦質土器や土師質の捏鉢は13世紀後半以降に在地生産が進む（山本ほか 1997）。17は土師器の鉢。口唇部をM字状に整える。18・19は土師器の甕。いずれも断面L字で口縁部平坦面にハケメを施す。20は土師質の鍋。口縁部外面にゆるい屈曲が残る。15世紀頃の所産であろう（山本ほか 前掲）。21～24は土師器の坏。21・23・24は糸切り底である。25・26は糸切り底の土師皿である。27は丸瓦。内面に工具痕が残る。28～30は土錘。円筒形あるいはやや中央部が膨らむ紡錘形を呈する。31は断面方形の鉄釘で、上端部がL字状に屈曲する。

第24図・第25図1～15は、調査区南半部分の表土出土品である。第24図1は白磁碗である。口唇部の釉を拭き取り、口禿とする。大宰府編年の白磁碗Ⅸ類で、13世紀後半～14世紀前半に増加する。2～5は龍泉窯系青磁である。2は外面に鎬蓮弁を施す碗で、釉は厚く濁っており、龍泉窯系青磁碗Ⅳ類である。14世紀頃に相当する。3は高台部が丸くくぼむ底部である。4は青磁碗の胴部で外面下半は露胎する。5は見込みに双魚文を施す坏の底部である。龍泉窯系青磁坏Ⅳ類で、14世紀頃に相当す



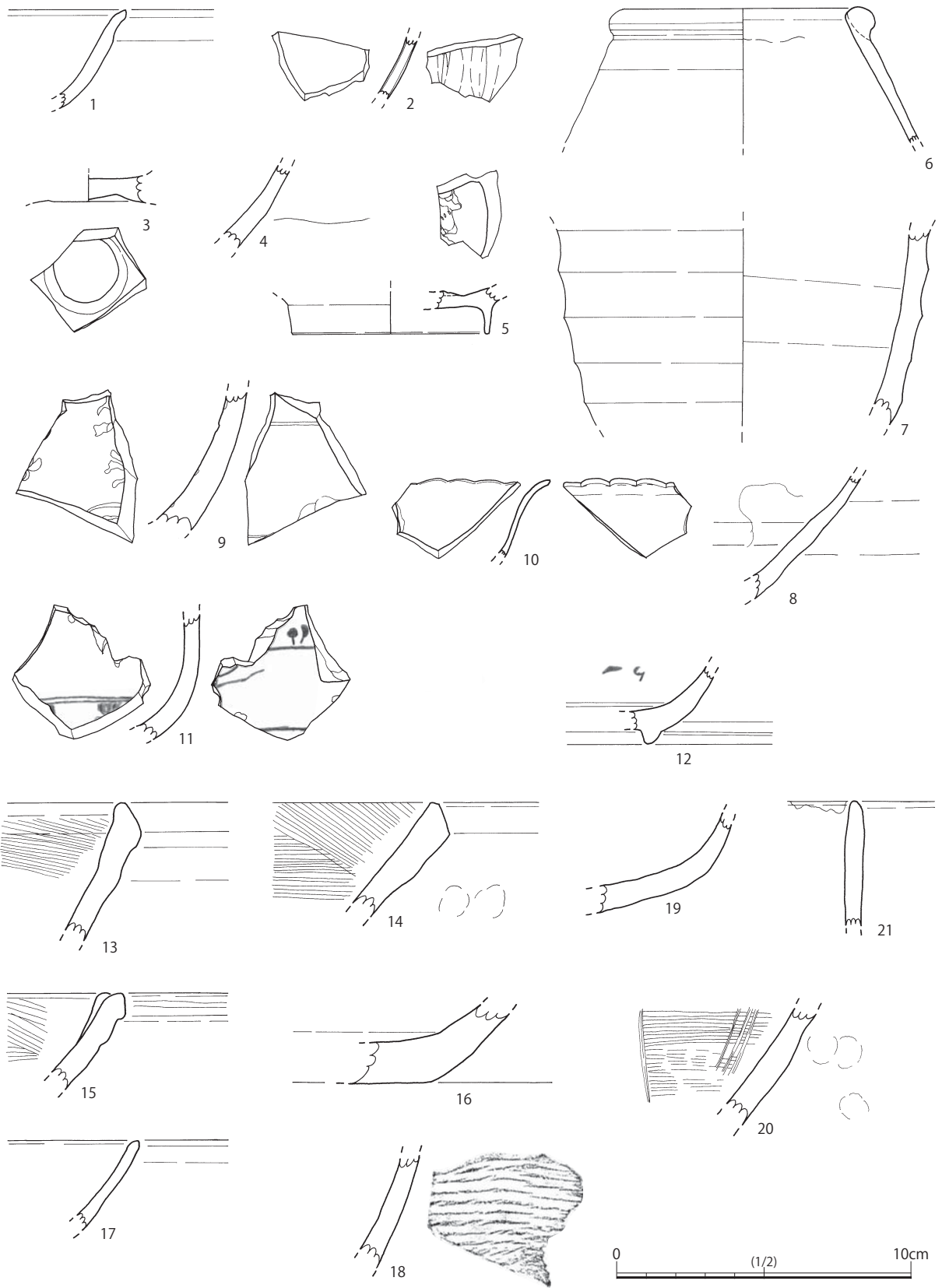
第22図 HZK2005地点 出土遺物①



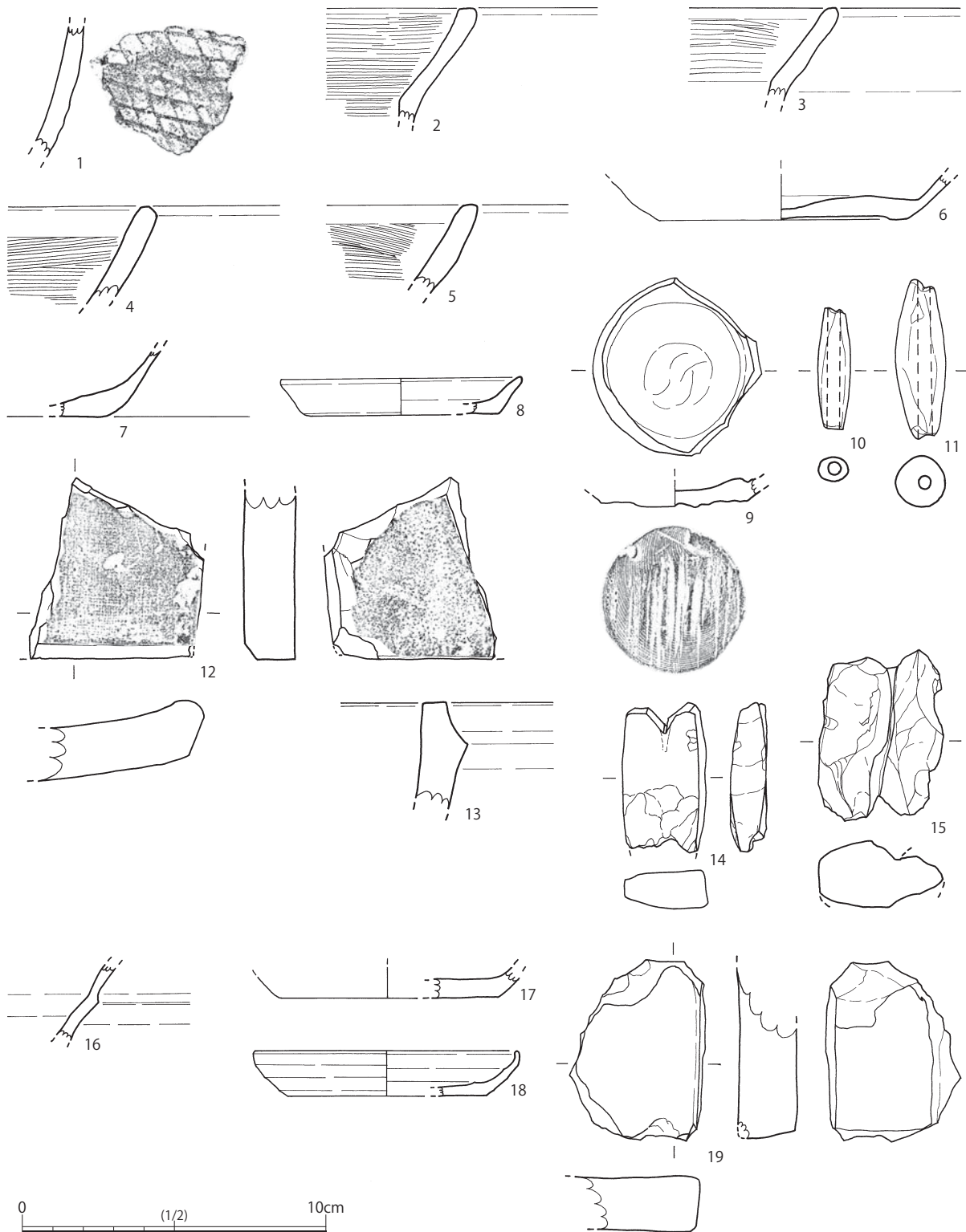
第23図 HZK2005地点 出土遺物②

る（宮崎編 前掲）。

6・7は中国陶器の褐釉陶器壺で、6は粘土紐を巻き付けて成形した短い口縁が付く。7は回転ナ



第24図 HZK2005地点 出土遺物③



第25図 HZK2005地点 出土遺物④

デ調整した胴部片。概ね13世紀の所産である（宮崎編 前掲）。8は陶器の鉢である。回転ナデを施す。9は粉青沙器の碗。象嵌で内面に花文を施す。時期は14世紀後半である（佐藤 前掲）。

10は近代の白磁碗で、口縁部を波状に作る。11・12は近代の染付碗。11は藍色の釉で内外面に草花文を施す。12は内面に施文する。

13・14は須恵質の捏鉢。いずれも口縁部外面に稜が付く。15・16は瓦質土器の捏鉢。15は口縁部で口唇部外面を玉縁状に仕上げる。16は底部で摩滅が激しい。17は瓦器碗。内外面ともナデ調整で口縁部は暗灰色を呈す。18は瓦質土器と思われる胴部片で、外面に平行タタキを施す。

19は土師質の捏鉢、20は土師質の播鉢である。内面はヨコハケで、スリ溝が付く。捏鉢は13世紀後半以降、須恵質のものから瓦質土器や土師質の捏鉢に変わり、13世紀後半以降に在地生産が進む。土師質の播鉢は14世紀後半以降出現する（山本ほか 前掲）。21は土師質の飯蛸壺と思われる。薄く均質な作りで、外面に化粧土を施す。

第25図1は胴部が丸みを帯び、外面に格子タタキを有することから、14世紀後半以降の防長系三足鍋と推測される（鋤柄 1997）。2～5は土師質の鍋。いずれも口縁部で内面にヨコハケを施し、外面にススが付着する。2・3は頸部が屈曲しており、14世紀の所産である（山本ほか 前掲）。6・7は糸切り底の土師器坏、8・9は糸切り底の土師皿である。9は瓦玉に転用している。10・11は土錘である。円筒形あるいはやや中央部が膨らむ紡錘形を呈する。12は表面に布目が残った平瓦。13は滑石製石鍋である。口縁部から鏝の部分で、鏝の部分は小さい。13世紀後半から14世紀に相当する（山本ほか 前掲）。14・15は滑石製石錘である。いずれも長軸に溝を彫り込んで糸掛けとする。

第25図16・18・19は遺構外出土品である。16は小破片であるが、内面は無釉で、強いナデ調整がみられる。陶器の壺胴部と考えられる。18は糸切り底の土師皿である。19は平瓦。端部を面取りし、全体にナデを施す。17は洪水堆積層内から出土した、糸切り底の土師器坏。（谷 直子）

3. 小 結

石積み遺構と大溝が良好に検出された地点の内側にあたることから、それらと関係する遺構群の検出が期待されたが、攪乱が深くまで入るなど状態は悪く、6遺構を検出するのみにとどまった。

（齋藤瑞穂）

註

1) 九州大学埋蔵文化財調査室調査番号：立試2004。

引用文献

佐藤一郎 2008「朝鮮半島陶磁器」『中世都市・博多を掘る』海鳥社、128～131頁

鋤柄俊夫 1997「山陽」『国立歴史民俗博物館研究報告』第79集、国立歴史民俗博物館、194～211頁

宮崎亮一（編）2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編一』太宰府市教育委員会

山本信夫・山村信榮 1997「九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第79集、国立歴史民俗博物館、237～310頁

第2表 HZK2005地点 出土遺物観察表

図	遺構・層位	種類	口径	底部径	器高	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考
22-1	SK05 No.1	土師器 皿	(7.6)	5.4	1.4	緻密, 直径1mm弱の砂粒をわずかに含む	良好	10YR7/3にぶい黄橙	外: 回転ナデ, 糸切り 内: 回転ナデ	糸切り底
22-2	SK05 No.2	土師器 杯			[2.3]	緻密, 直径1mm弱の砂粒を少し含む	良好	10YR7/6明黄褐	外: ナデ 内: ナデ	げっ歯類の噛み痕
23-1	調査区北側 表土	白磁 碗			[2.3]	緻密	良好	5GY7/1明オリーブ灰	外: 施釉, ナデ 内: 施釉, ナデ	大宰府編年 白磁碗VかVIII類
23-2	調査区北側 表土	青磁 碗			[2.2]	緻密	良好	2.5GY7/1明オリーブ灰	外: 施釉, ナデ 内: 施釉, ナデ	龍泉窯系
23-3	調査区北側 表土	青磁 碗			[2.9]	緻密	良好	5GY7/1明オリーブ灰	外: 施釉, ナデ 内: 施釉, 草花文	龍泉窯系青磁碗 I類
23-4	調査区北側 表土	青磁 碗			[2.9]	緻密	良好	5GY6/1オリーブ灰	外: 施釉, 施文 内: 施釉	龍泉窯系青磁碗 III類
23-5	調査区北側 表土	青磁 碗			[2.2]	緻密	良好	7.5GY7/1明緑灰	外: 施釉, ナデ 内: 施釉, ナデ	龍泉窯系青磁碗 IV類
23-6	調査区北側 表土	青磁 杯			[1.5]	緻密	良好	2.5GY6/1オリーブ灰	外: 施釉, ナデ 内: 施釉, ナデ	龍泉窯系青磁碗 IV類
23-7	調査区北側 表土	青磁			[1.9]	緻密	良好	外: 10Y6/1灰 内: 7.5YR6/4にぶい橙	外: 施釉, ナデ 内: 露胎, ナデ	龍泉窯系
23-8	調査区北側 表土	粉青沙器 碗			[2.2]	緻密	良好	5Y6/2灰オリーブ	外: 施釉, ナデ 内: 施釉, ナデ	
23-9	調査区北側 表土	陶器 碗			[2.4]	緻密, 茶褐色粒子を含む	良好	10YR7/3にぶい黄橙	外: 施釉, ナデ 内: 施釉, ナデ	雑釉陶器
23-10	調査区北側 表土	陶器 碗			[2.1]	やや粗い, 直径1mm大の砂粒を多く含む	良好	5Y6/1灰	外: 施釉, ナデ 内: 施釉, ナデ	雑釉陶器
23-11	調査区北側 表土	陶器 碗			[2.6]	緻密	良好	2.5Y7/3浅黄	外: 施釉, ナデ 内: 施釉, ナデ	
23-12	調査区北側 表土	陶器			[3.8]	緻密, 直径2mm大の茶褐色粒子を含む	良好	外: 7.5Y5/1灰 内: 5Y5/1灰	外: 格子タタキ 内: ヨコナデ	中国陶器?
23-13	調査区北側 表土	瓦質土器 湯釜			[3.5]	緻密	良好	7.5Y5/1灰	外: ナデ 内: ナデ	
23-14	調査区北側 表土	瓦質土器 捏鉢			[3.4]	緻密	良好	5Y8/1灰白	外: ナデ 内: ヨコハケ, 摩滅	
23-15	調査区北側 表土	土師質 捏鉢			[3.4]	やや緻密, 直径1~2mmの砂粒を含む	良好	7.5YR7/4にぶい橙	外: ナデ, タテハケ 内: ヨコナデ	
23-16	調査区北側 表土	土師質 捏鉢			[4.5]	やや緻密, 直径1mm大の砂粒を含む	良好	外: 10YR7/3にぶい黄橙 内: 10YR8/2灰白	外: ナデ 内: 摩滅	
23-17	調査区北側 表土	土師器 鉢			[2.3]	緻密, 直径1mm大の砂粒を含む	良好	外: 2.5Y5/1黄灰 内: 10YR6/2灰黄褐	外: ナデ 内: ナデ	
2-318	調査区北側 表土	土師器 壺			[1.3]	緻密, 直径1mm大の砂粒を含む	良好	5YR6/6橙	外: ナデ, ハケメ 内: ナデ	
23-19	調査区北側 表土	土師器 壺			[1.6]	緻密, 直径1mm弱の砂粒を少し含む	良好	外: 10YR4/2灰黄褐 内: 7.5YR6/4にぶい橙	外: ナデ, タテハケ 内: ナデ	

Ⅲ HZK2005地点（工学研究科共同研究棟東地点）

図	遺構・層位	種類	口径	底部径	器高	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考
23-20	調査区北側表土	土師質鍋			[2.8]	緻密, 直径1mm大の砂粒を含む	良好	外: 10YR3/1黒褐 内: 7.5YR7/4にぶい橙	外: ナデ, スス付着 内: ヨコハケ	
23-21	調査区北側表土	土師器杯			3.0	やや緻密, 直径1~2mmの砂粒を含む	良好	7.5YR7/4にぶい橙	外: ナデ, 摩滅, 糸切り 内: 摩滅	糸切り底 げっ歯類の噛み痕
23-22	調査区北側表土	土師器杯			[2.8]	緻密	良好	10YR7/3にぶい黄橙	外: ナデ, 摩滅 内: ヨコナデ	
23-23	調査区北側表土	土師器杯			[2.6]	緻密, 直径1mm弱の砂粒をわずかに含む	良好	7.5YR8/4浅黄橙	外: ナデ, 糸切り 内: ヨコナデ	糸切り底
23-24	調査区北側表土	土師器杯			[1.4]	緻密	良好	5YR6/6橙	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ	糸切り底
23-25	調査区北側表土	土師器皿			1.4	やや緻密, 直径1mm弱の砂粒を含む	良好	5YR7/6橙	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ, 摩滅	糸切り底
23-26	調査区北側表土	土師器皿			1.3	緻密, 直径1mm弱の砂粒を含む	良好	7.5YR7/4にぶい橙	外: ナデ, 摩滅, 糸切り 内: ナデ, 摩滅	糸切り底
23-27	調査区北側表土	丸瓦	長 [4.4]	幅 [6.0]	厚 2.0	緻密	良好	表: 5Y5/1灰 裏: 2.5Y6/1黄灰	表: ナデ 裏: 工具ナデ	
23-28	調査区北側表土	土錘	長 [2.1]	幅 1.4	厚 1.4	緻密	良好, 堅緻	10YR6/2灰黄褐	外: ナデ	2.96 g
23-29	調査区北側表土	土錘	長3.5	幅 1.2	厚 1.3	緻密	良好	7.5YR5/2灰褐	外: ナデ	4.46 g
23-30	調査区北側表土	土錘	長 [5.1]	幅 2.4	厚 2.3	緻密	良好	10YR6/4にぶい黄橙	外: ナデ	24.16 g
23-31	調査区北側表土	鉄釘	長 [3.3]	幅 0.65	厚 0.8		良好			
24-1	調査区南側表土	白磁碗			[3.3]	緻密	良好	2.5GY8/1灰白	外: 施釉, 口禿 内: 施釉	白磁碗Ⅸ類
24-2	調査区南側表土	青磁碗			[2.1]	緻密	良好	7.5GY6/1緑灰	外: 施釉, 鎬蓮弁文 内: 施釉	龍泉窯系青磁碗Ⅳ類
24-3	調査区南側表土	青磁			[0.9]	緻密	良好	7.5Y6/2灰オリーブ	外: 施釉, ケズリ 内: 施釉	龍泉窯系
24-4	調査区南側表土	青磁碗			[2.9]	緻密	良好	7.5Y6/2灰オリーブ	外: 施釉, ケズリ, 露胎 内: 施釉	龍泉窯系
24-5	調査区南側表土	青磁杯		(6.8)	[1.5]	緻密	良好	2.5GY7/1明オリーブ灰	外: 施釉, 量付露胎 内: 施釉, 双魚文	龍泉窯系青磁杯Ⅳ類
24-6	調査区南側表土	陶器壺	(9.0)		[4.5]	緻密	良好	外: 7.5YR3/2黒褐 内: 7.5YR4/1褐灰	外: 施釉, ナデ 内: 施釉, ナデ	中国褐釉陶器
24-7	調査区南側表土	陶器壺			[6.5]	緻密, 直径1mm大の白色粒子を含む	良好	外: 10YR4/3にぶい黄褐 内: 7.5YR4/2灰褐	外: 施釉, ナデ 内: 施釉, ナデ	中国褐釉陶器
24-8	調査区南側表土	陶器鉢			[4.2]	緻密	良好	外: 10YR4/2灰黄褐 内: 10YR6/2灰黄褐	外: 施釉, ナデ, 一部露胎 内: 施釉, ナデ	
24-9	調査区南側表土	粉青沙器碗			[4.8]	緻密	良好	7.5Y4/2灰オリーブ	外: 施釉, 施文 内: 施釉, 施文	朝鮮王朝 象嵌青磁

図	遺構・層位	種類	口径	底部径	器高	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考	
24-10	調査区南側表土	白磁碗			[2.6]	緻密	良好	10GY8/1明緑灰	外：施釉、波状口縁 内：施釉	近代	
24-11	調査区南側表土	染付碗			[4.3]	緻密	良好	10GY8/1明緑灰	外：施釉、施文 内：施釉、施文	近代	
24-12	調査区南側表土	染付皿			[2.7]	緻密	良好	7.5Y7/1灰白	外：施釉、施文 内：施釉、施文	近代	
24-13	調査区南側表土	須恵質捏鉢			[4.7]	緻密、直径1mm大の砂粒を含む	良好	10Y5/1灰	外：ナデ 内：ヨコハケ		
24-14	調査区南側表土	須恵質捏鉢			[3.8]	緻密、直径1mm大の砂粒をわずかに含む	良好	外：5Y7/2灰白 内：N4/灰	外：ナデ 内：ヨコハケ		
24-15	調査区南側表土	瓦質土器捏鉢			[3.3]	緻密、直径1mm弱の砂粒を含む	良好	2.5Y6/1黄灰	外：ナデ 内：ヨコハケ		
2416	調査区南側表土	瓦質土器捏鉢			[2.6]	緻密、直径1～2mmの砂粒を少し含む	良好	外：2.5Y8/2灰白 内：7.5Y6/1灰	外：ナデ、摩滅 内：ナデ		
24-17	調査区南側表土	瓦器碗			[3.0]	緻密	良好	2.5Y6/1黄灰～2.5Y7/2灰黄	外：ナデ 内：ナデ		
24-18	調査区南側表土	瓦質土器？胴部			[3.8]	緻密、直径1～2mmの砂粒を含む	良好	外：7.5Y3/1オリーブ黒 内：10YR5/1褐灰	外：平行タタキ 内：ナデ		
24-19	調査区南側表土	土師質捏鉢			[3.5]	緻密、直径1mm大の砂粒を含む	良好	10YR8/2灰白	外：ナデ、摩滅 内：ヨコナデ		
24-20	調査区南側表土	土師質搦鉢			[4.0]	緻密、直径1mm大の砂粒を多く含む	良好	10YR8/3浅黄橙	外：ナデ 内：ヨコハケ、スリ溝		
24-21	調査区南側表土	土師質？飯甗壺？			[4.2]	緻密、直径1mm大の砂粒・茶褐色粒子を含む	良好		外：ナデ 内：ナデ	化粧土	
25-1	調査区南側表土	土師質鍋			[4.4]	緻密	良好	外：7.5YR5/2灰褐 内：10YR6/3にぶい黄橙	外：格子タタキ 内：ナデ	防長系三足鍋	
25-2	調査区南側表土	土師質鍋			[3.7]	緻密、直径1mm弱の砂粒・雲母片を含む	良好	外：7.5YR4/2灰褐 内：5YR5/4にぶい赤褐	外：ナデ 内：ヨコハケ		
25-3	調査区南側表土	土師質鍋			[3.1]	緻密、直径1mm大の砂粒・雲母片を含む	良好	外：10YR3/2黒褐 内：10YR6/3にぶい黄橙	外：ナデ、スス付着 内：ヨコハケ		
25-4	調査区南側表土	土師質鍋			[3.2]	緻密、直径1～2mmの砂粒・赤色粒子を含む	良好	外：7.5YR5/3にぶい褐 内：7.5YR7/4にぶい橙	外：ナデ、スス付着 内：ヨコハケ		
25-5	調査区南側表土	土師質鍋			[3.0]	緻密、直径1mm弱の砂粒を含む	良好	外：7.5YR3/1黒褐 内：7.5YR6/4にぶい橙	外：ナデ、スス付着 内：ヨコハケ		
25-6	調査区南側表土	土師器環		(8.0)	[1.5]	緻密	良好	10YR7/4にぶい黄橙	外：ナデ、糸切り 内：回転ナデ	糸切り底	
25-7	調査区南側表土	土師器環			[2.2]	緻密、直径1mm弱の砂粒・雲母片を少し含む	良好	7.5YR7/4にぶい橙	外：ナデ 内：ナデ、摩滅	糸切り底 げっ歯類の噛み痕	
25-8	調査区南側表土	土師器皿	(8.0)	(6.5)	1.2	やや緻密、直径2mm大の砂粒・赤色粒子を含む	良好	7.5YR7/6橙	外：ナデ、糸切り 内：ナデ	糸切り底	
25-9	調査区南側表土	土師器皿(瓦玉)			4.8	[0.9]	緻密、直径1mm弱の砂粒をわずかに含む	良好	外：10YR7/4にぶい黄橙 内：7.5YR8/4浅黄橙	外：ナデ、糸切り、板状圧痕 内：ナデ	糸切り底

Ⅲ HZK2005地点（工学研究科共同研究棟東地点）

図	遺構・層位	種類	口径	底部 径	器高	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考
25-10	調査区南側 表土	土錘	長 4.0	幅 1.0	厚 0.8	緻密	良好	2.5YR5/6明赤褐～7.5YR6/4 にぶい橙	外：ナデ	3.09 g
25-11	調査区南側 表土	土錘	長 [5.3]	幅 1.65	厚 1.7	緻密	良好	2.5YR5/6明赤褐	外：ナデ	11.03 g
25-12	調査区南側 表土	平瓦	長 [6.0]	幅 [5.8]	厚 1.7	緻密，直径1mm弱の砂粒・ 黒色粒子を含む	良好	7.5Y4/1灰	表：布目 裏：ナデ	
25-13	調査区南側 表土	滑石製 石鍋			[3.5]					
25-14	調査区南側 表土	滑石製 石錘	長 [4.9]	幅 2.8	厚 1.2					28.61 g
25-15	調査区南側 表土	滑石製 石錘	長 4.6	幅 [4.1]	厚 [2.2]					58.11 g
25-16	遺構外	陶器 壺？			[2.6]	緻密，直径1mm大の砂粒 を少し含む	良好	外：7.5YR7/3にぶい橙 内：7.5YR7/4にぶい橙	外：ナデ 内：ナデ	焼き締め
25-17	深掘時 洪水層内	土師器 坏		(7.2)	[1.0]	やや緻密，直径1mm大の 砂粒・茶褐色粒子を含 む	良好	2.5Y7/3浅黄	外：ナデ，摩滅，糸切り 内：ナデ，摩滅	糸切り底
25-18	遺構外	土師器 皿	(8.8)	(6.6)	1.5	緻密，直径1～2mmの砂粒 を少し含む	良好	10YR7/4にぶい黄橙	外：回転ナデ，糸切り 内：回転ナデ	糸切り底
25-19	遺構外	平瓦	長 [6.0]	幅 [4.5]	厚 1.8	やや緻密，直径1mm大の 白色・黒色粒子を含む	良好	N3/0暗灰	表：ナデ 裏：ナデ	

IV 分析と考察

箱崎キャンパス地区の元寇防塁位置推定の変遷要因と 元寇防塁を巡る諸問題

岩永 省三

はじめに

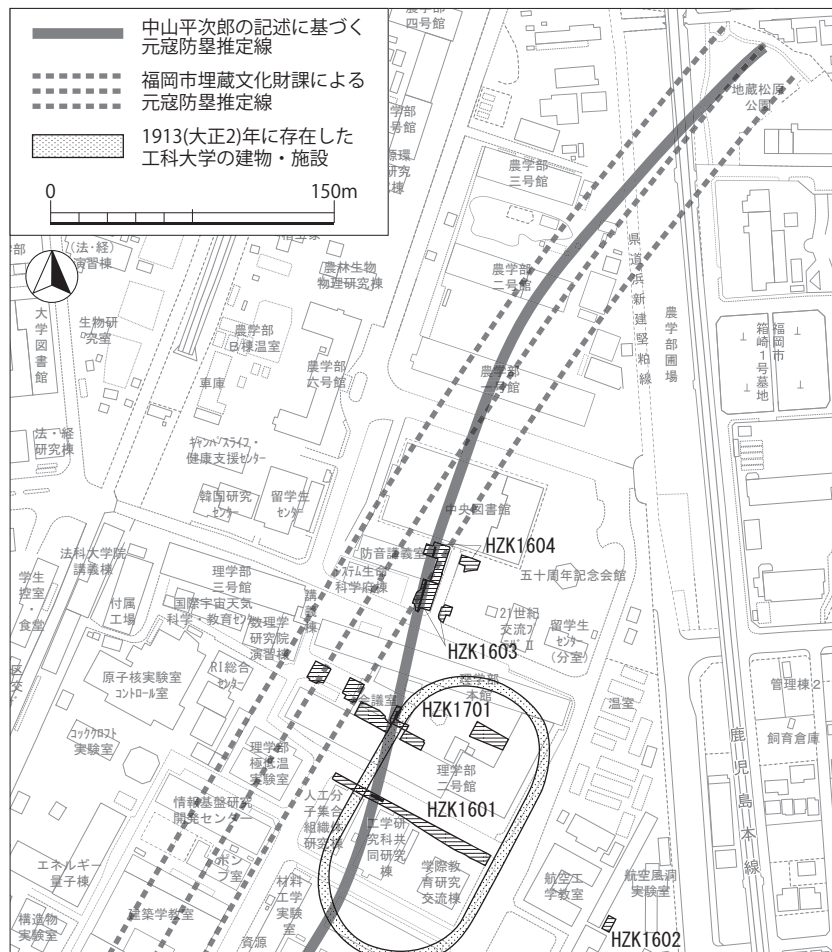
埋蔵文化財調査室による箱崎キャンパス内の元寇防塁調査が始まって以来、私は、防塁線の推定を行い、調査の進展による新事実の判明に合わせて、その修正を行ってきた。箱崎地域の防塁は地蔵松原の国史跡指定地が北端に当たっており、箱崎キャンパスの防塁線はそれにすぐ南接する部分であるが、石積みが残っていたのは工学部北端－理学部－農学部南端の範囲のみで、それより南および北については、防塁の位置の推定が容易ではなく、推定線も再三の修正を余儀なくされた。とはいえ、ある時点で知りえた事実群から仮説を作り、その後に蓄積された新事実によって仮説を検証し、棄却された部分について新たな仮説を作り、さらなる検証にそなえるという過程は、科学の営みとして当然の作業である。考古学者であれば、発掘調査の成果を受けてだれでも日常的に実施している作業であろうし、防塁推定線の微修正は「小さな」問題かもしれないが、筆者なりに九大在職中に真剣に取り組んできた課題であり、ここでその試行錯誤の過程について纏めておくのも無駄ではあるまい。そのうえで、箱崎地区の元寇防塁を巡る問題点について『報告3』・『報告4』¹⁾を念頭に考えてみたい。

I. 元寇防塁の位置推定における「仮説と検証」

A. 『報告1』(2018年1月刊行)における推定線(第26図)

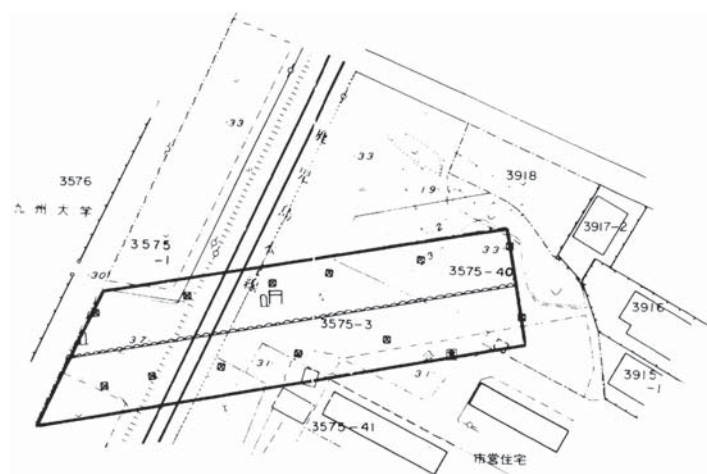
2017年度の時点では、南から北へ、HZK1601(理学部二号館前南地点)・HZK1701(理学部中庭地点)・HZK1603(中央図書館前南地点)・HZK1604(中央図書館前南地点)の4地点が調査されていた。そのうちHZK1701・HZK1603・HZK1604の3地点で石積みが発見され、地蔵松原指定地から南南西へ約400m、約330m、約310mの位置に当たる。その3か所を結ぶ線は、福岡市埋蔵文化財課から公表されていた元寇防塁推定線より東に位置し、北で西へ約17°も振れる方向であり、防塁推定線の全面的再検討が必要となった。

そこで、1912(大正元)年の中山平次郎による防塁遺跡現地踏査成果にまで立ち返り、九大キャンパス内での防塁の位置を推定した(岩永 2018)。ここでは理学部から農学部にかけての部分抽出する。中山は、「運動場の東側にある土手の断面の上に登ってみれば、土手が東に向かって如何に走って居るかが甚だ容易に知られる」、「即ち土手は工科大学内の残部から箱崎避病院の少しく内方を過て地蔵松原の新墓地の附近に終わって居る」と記す(中山 1913)。中山は工科大学の主軸方位を東西と記しているので、ここでの「東」は、実際は「北」を意味する。大正元年は農学部の建設前で、工科大学の北側には松林が続いていたので、「運動場の東側にある土手」(HZK1603地点の高まりに相当、第31図)の北延長部が、松林の中を地蔵松原まで伸びていく状況が良く観察できたようである。地蔵松原の史跡指定地内での防塁位置は、現状では地表に痕跡はないが、福岡市教育委員会が『史跡元寇

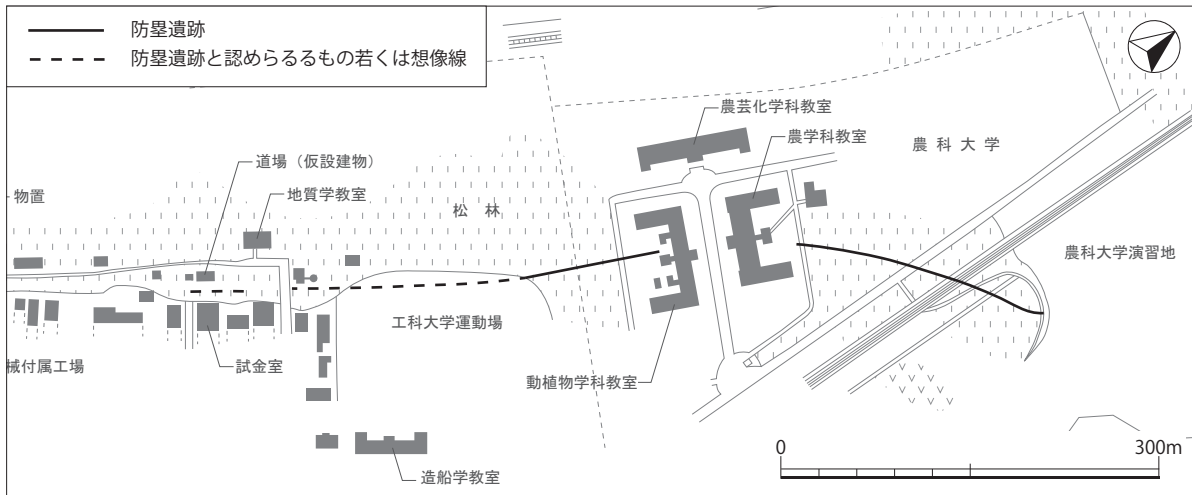


第26図 『報告1』における元寇防塁推定線（一部抽出）

防塁保存管理計画策定報告書』で公表した地図（第27図）（福岡市教委 1978）に依拠した。後述するように、この地図が示す防塁の方向にそもそも問題があったのであるが、2017年の時点ではこの地図以外に位置を知る手掛かりはなく、それに依拠したのは当然であった。また、福岡市埋蔵文化財調査課が所蔵する「箱崎方面元寇防塁平面図」（1925～26年の制作と推定可能）においても（第28図）、防塁の推定線として、地蔵松原の発掘地から農学部
の農学科教室・動植物学科教室の中央を通り、工科大学運動場西北隅の北、農学部と工科大学の境界線まで円弧状の実線が引かれている。以上を参考に、HZK1604地点と、地蔵松原指定地との間は、2017年度の時点では未調査であったので、防塁が乗る浜堤が緩やかな弧を描いていたと推定して、HZK1604地点→中央図書館中央部→



第27図 元寇防塁地蔵松原史跡指定範囲
（福岡市教育委員会社会教育部文化課（編）1978より転載）



第28図 『箱崎方面元寇防塁平面図』における防塁推定線

農学部一号館中央部→農学部二号館東半部→地蔵松原指定地を弧線をつないだ（第26図）。すなわち、防音講義室の北側、中央図書館と重なる部分ではわずかに東に振らせ、中央図書館の東西中軸線と直行する方向とし、そのまま農学部一号館まで伸ばし、そこから緩いカーブを描いて、地蔵松原の史蹟指定地に至る推定線とした。

B. HZK1705地点・HZK1706地点での新事実による修正（第29図）

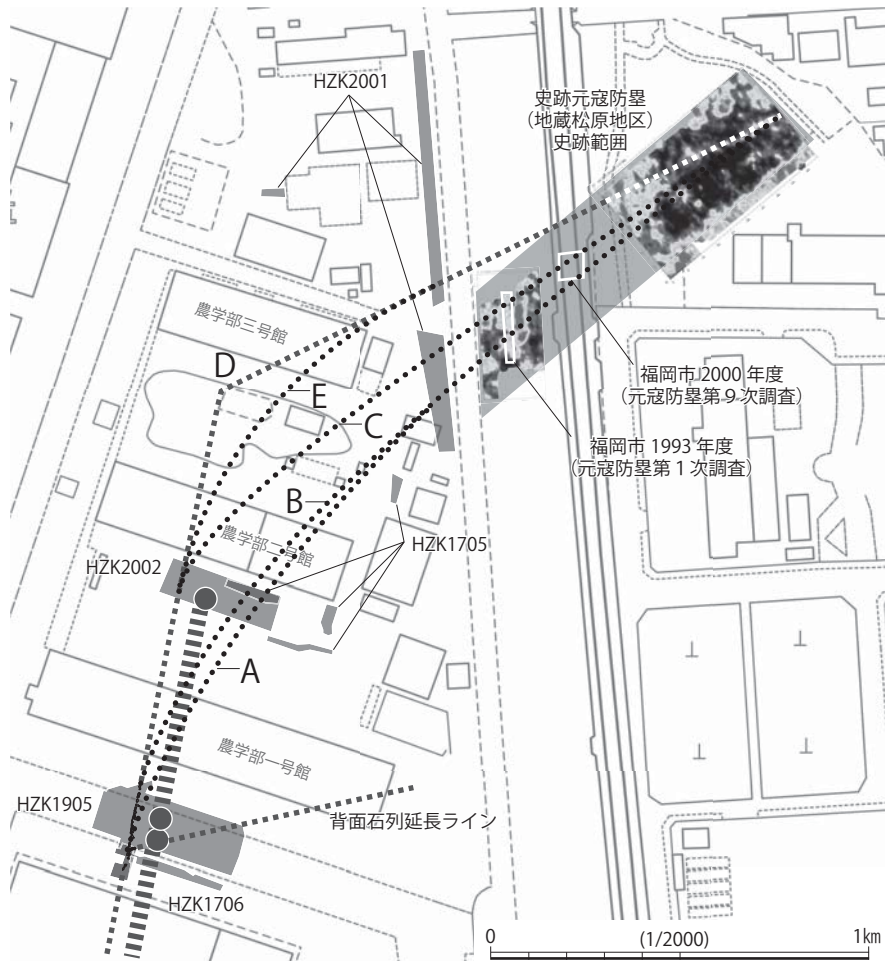
『報告1』に掲載した調査の後に、中央図書館より北ではHZK1705・HZK1706地点の調査がなされた。両地点の成果は『報告2』（2019年6月刊行）に公表された。

HZK1706地点（中央図書館前北地点）では、HZK1701地点とHZK1603・HZK1604地点の石積みを結んだ線の延長線上で石積みが見つかった。これによって、『報告1』では防音講義室の北側でやや東に曲げ始めた推定線を中央図書館の北側までまっすぐ伸ばすように修正する必要性が生じた。つまり、中央図書館と重なる部分で図書館の中軸線と直行せず、北でやや西に振れる方向となる。

発掘調査はようやく農学部構内に入り防塁の検出に期待が高まった。HZK1705地点（農学部二号館地点）西区東半では、石積みは残っておらず石片散布SX04が検出されたに留まった。しかし、福岡市埋蔵文化財調査課が地蔵松原指定地の西南側で調査したGKB1地点・GBK9地点における石片散布状況と類似していたし、両地点は石積みそのものではないにしても防塁に関わる遺構と推定されていたことから、HZK1705地点西区東半の石片散布も、残存状況は良くないものの防塁の位置を示すものと考えた。そうすると、HZK1706地点を北に過ぎたあたりから東にカーブさせてHZK1705地点西区東半を経由させ地蔵松原指定地に至るルートになる（第29図-Aライン）。

C. 『報告3』（2020年3月刊行）時点での推定線（第29図）

『報告2』に掲載した調査の後に、HZK1706地点に北接する地点での立会調査で新事実が判明し、その評価を『報告3』で述べた（岩永2020）。HZK1604地点とHZK1706地点を結ぶ直線がさらに25mほど北にまっすぐ伸びて農学部一号館に至ることが判明した。すなわち、農学部一号館地点で、第26図での推定位置より西に約10m寄ることになる。そこからHZK1705地点西区東半を通して地蔵松原指定地に至るには、農学部一号館から強めのカーブを描いて推定線を曲げる必要性が生じる（第29図-Bライン）。カーブでなく折れ線となるかどうか考えたが、この時点では「カーブを描いていたと考



第29図 箱崎砂州先端部における元寇防塁北端推定線の変遷

えるべきであろう」と考えた。それに対して福永・斎藤は『報告4』において、折れ線となる場合があると主張している（福永・斎藤 2021）。これについては後述する。

D. HZK1905・HZK2002地点での新事実による修正と『報告4』の刊行（第29図）

『報告3』に掲載した調査の後に、HZK1706地点に北接し、Cで立会調査が行われたと記した地点を含むHZK1905地点が調査され、約18mに渡ってほぼ直線的な石積みが発見され、さらに北に直線的に延びると推定できた。他方、HZK1905地点の北北東に当たるHZK1705地点西区東半の石片散布は防塁の遺構として保存される事が決まっていたが、農学部二号館建物の基礎の撤去に際して破壊されてしまうという事態が発生した。それに対して福岡市埋蔵文化財課によってHZK1705地点西区を含む南側の再調査が指導されたが、埋蔵文化財調査室は、HZK1905地点から防塁がまっすぐ北上する可能性の検証のために、HZK1705地点西区の西側を約15m掘り広げて調査した（HZK2002地点）。

その結果、残念ながら防塁石積みは検出できなかったが、かねて箱崎キャンパス内の防塁の東側（陸側）に存在することが判明していた大溝が発見され、その位置が、HZK1905地点以南で発見されていた大溝を北に延長した位置に当たると判明した。そうすると、防塁の石積みもHZK1905地点以南の石積みからまっすぐ北に延びるといことになるが、そこから福岡市埋蔵文化財調査課が調査し

た GKB 1 地点・GBK 9 地点を經由して地蔵松原指定地の防塁に至るには、HZK2002地点北側で東に 41° 曲げないと無理である（第29図 - C ライン）。しかし、HZK2002地点では石積みは残っておらず、大溝が HZK2002地点内で東北方向に曲がる確証もない。

他方、農学部三号館東側に設定した HZK2001地点でも削平がひどく石積み・大溝は残っていなかったし、農学構内でさらに発掘調査区を設けることは土壤汚染の関係で残念ながら無理であった。そうすると、地蔵松原指定地に至る途中ルートを遺構という物証で確定することは諦めざるを得なくなるかと思われた。

ちょうどその頃、福永・斎藤が、福岡市が『史跡元寇防塁保存管理計画策定報告書』で示した防塁線（第27図）の信頼度について問題があることを突き止めた（福永・斎藤 前掲）。それは、福岡市文化財活用部が所蔵し、地蔵松原の史跡指定に先立って制作されたと思われる「箱崎町地蔵松原元寇防塁付近図」に示された「防塁ノ方向」と史跡指定範囲を示した枠線の中軸線とがなぜか5度ずれていることであり、「防塁ノ方向」がもともと記入されており、史跡指定範囲は後から書き加えられたと推察されている（福永・斎藤 前掲）。5度のずれの原因は定かではないが、「防塁の方向」は1920年に調査された石積みの方向を示しているから、この5度のずれは看過できない。そこで、岩永を通して、奈良文化財研究所の金田明大氏に地蔵松原指定地および九大圃場内指定地の地中レーダー探査を依頼した。その結果、地蔵松原公園内で石積みと思われる線状の反応が確認され（金田 2021）、これが1920年の発掘調査地を通っていると推定できることから、石積みを示す可能性が高いと判明した（福永・斎藤 前掲）。

福永・斎藤はこの地中レーダー探査成果を踏まえて防塁推定線の再検討を行い『報告 4』に発表した。そこでは HZK1905地点から HZK2002地点を経て北に延びる石積み推定線と、地中レーダー探査成果に基づく石積み推定線をカーブで繋ぐのではなく、折れ線としている（第29図 - D ライン）。HZK1706地点で南北方向石積みの背後で検出され、南北方向ラインと52°の角度をなす「背面石列」をさらに東に伸ばして、建治三（1277）年段階の石積みラインと推定し、南北方向と東西方向の石積みが折れ線となることから、HZK1905地点から北に延びる石積みラインを弘安七（1284）年段階に延長されたものとし、建治三年段階の在り方を適用して、農学部二号館と三号館の間で折れ線となると推定した（福永・斎藤 前掲）。この福永・斎藤の折れ線案については、II Bで検討する。

E. 箱崎キャンパス南半部での位置推定（第30図）

箱崎キャンパスの南半部における防塁の位置推定については、工学部二号館中央部の HZK1702地点と、二号館の南側の工学部南端の HZK1704地点で検出した「溝状遺構」を防塁に伴う大溝と認定したうえで推定してきた（岩永 2020）。しかし、工学部二号館内を広めに調査した HZK1901地点の調査によって HZK1702地点で検出した「溝状遺構」が防塁に伴うものではないと判明するとともに、HZK1901地点 A 区・E 区および工学部二号館北側の HZK2004地点で、あらたに防塁に伴う大溝が検出されたことによって、防塁の推定線が検討し直された（福永・斎藤 前掲）。新推定線は、「これまでの推定線よりも、やや東にずれる」とされ、「元寇防塁新推定線をキャンパス南側に延長すると、岩永が指摘する職員会館脇道路（岩永 前掲）よりやや東を通過する」という。また福永・斎藤は、中山平次郎が踏査で見出した一光寺墓地内の「土手」が、現状ではその痕跡が確認できず正確な位置が不明であることから、「職員会館脇道路を防塁の名残と見る考え」も「一光寺における防塁位置問題」と合わせて再考する必要があると述べた。

福永・斎藤が提示した「新推定線」は、HZK2004地点、HZK1901地点 A 区・E 区で検出した大溝

を南に延長し、大溝の西肩の5m西を防塁の推定線としたものであるが、福永・斎藤が提示した第111図で定規を当ててみれば直ちに判明するように、「大溝推定線」はHZK1901地点A区・E区で検出した大溝を結ぶ線をそのまま直線的に延長した物ではなく、若干東に振れた線となっている。HZK1901地点A区・E区で検出した大溝を結ぶ線をそのまま直線的に延長し、その5m西を防塁推定位置とすれば、岩永の推定線とほとんど同じになってしまうのだ（第30図）。なお福永・斎藤は、中山がみいだした一光寺墓地の「土手」の位置が不明だというのが、『報告3』第79図Cの様に（岩永前掲）、戦前の一光寺墓地の範囲はほぼ推定可能で、問題の「土手」の名残と思しき道路も残っている。その道路の南には現在「箱崎新道」（箱崎阿恵線、2005年開通）が通っているが、この道路の工事中に箱崎3丁目18・19番地付近で「へんな揃った石がたくさん出てきた」という地元住民の方からの情報もある（2016年10月取得）。当該地は一光寺墓地にあたり、「揃った石」が墓石である可能性もあるが、墓石とは認識されていなかったようであるから、防塁の石材の可能性も捨てきれず、今後、周辺の発掘調査をして頂きたいものである。

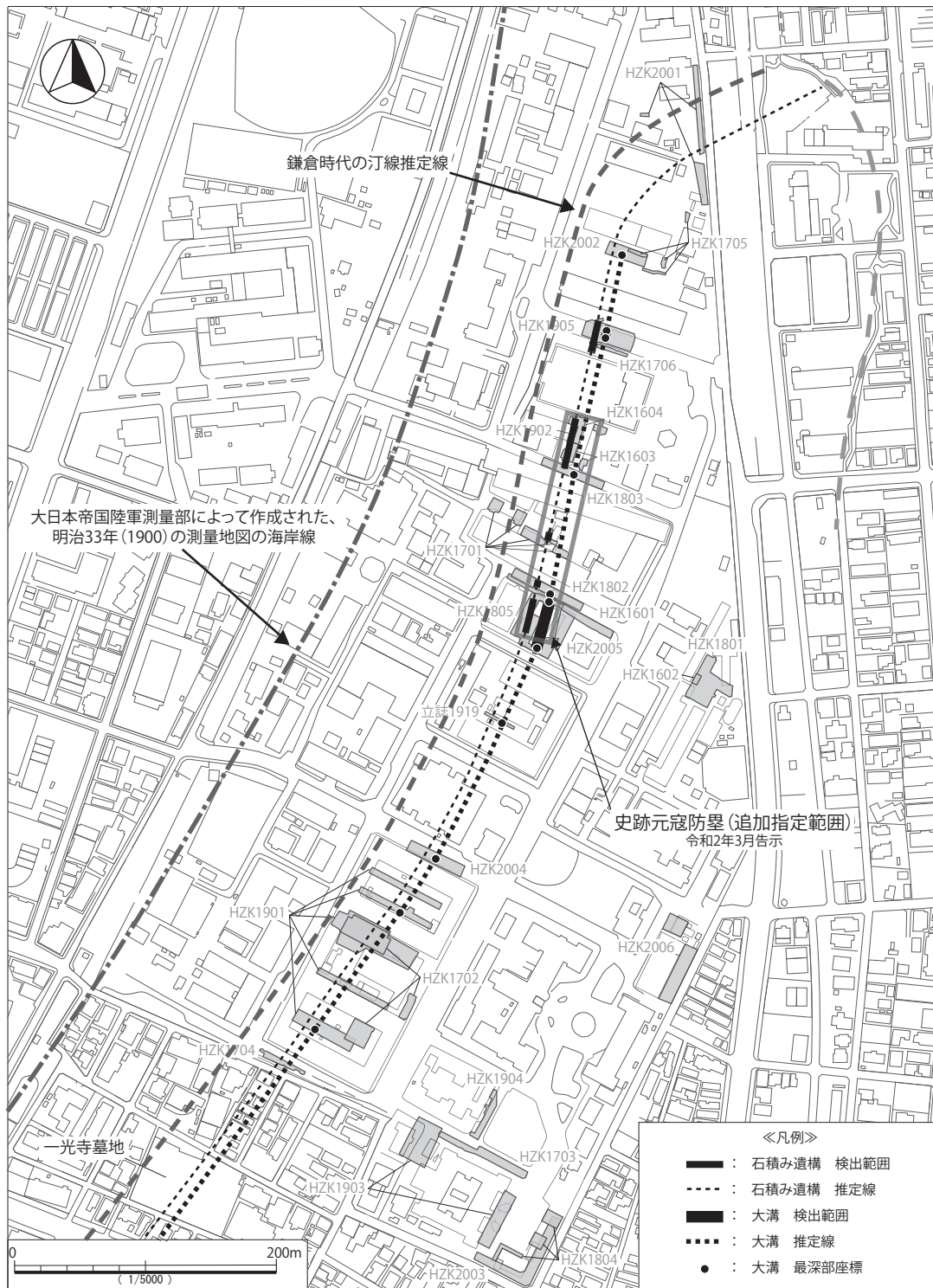
II. 箱崎の元寇防塁を巡る諸問題

A. なぜ防塁を作ったのか－防衛の基本方針

箱崎地区の元寇防塁の構造や立地の特異性について検討する前に、文永の役・弘安の役における元軍の攻撃と幕府軍の反撃の様相について、研究史をたどっておこう。

文永の役の際の元軍の真の目的が何であったか。網野善彦は、当面の大敵南宋と通じる日本を討ち宋を孤立させる意図、金を豊かに産すると伝えられた日本に対する野望を認めつつ、世祖の胸中の膨張と征服への意欲の激しい燃え上がりを重視する（網野 1974）。川添昭二は高麗支配の強化をあわせながら、日本と南宋の関係を断ち切り、南宋を攻略する一環として行われたとする（川添 2001）。杉山正明は、対南宋大侵攻作戦の一環で日本が南宋と連動しなければそれで十分であったとみる（杉山 2005）。服部英雄は、日本を従えることによる南宋孤立化策、南宋の打倒と連動し南宋の友好国日本を制圧下に置き日本に産する軍事物資を掌握することであり、九州島の広域行政機関である大宰府を陥落させて支配下に置き、兵器や兵員を入手することを目指したので大宰府を攻撃目標としたとし、実際大宰府まで攻め込んだと論証した（服部 2017）。

文永の役では、博多湾岸に上陸して、かつては1日で退却したと考えられていたが、服部英雄は7日ほどは上陸していたとみる（服部 前掲）。接戦ではあっても負け戦ではなかったから一日で戻るはずがなく、海岸堡が構築できず、大宰府まで攻め込んで失敗し、滞陣中に嵐に遭遇し退路を断たれる危険性が出てきたので撤退したとみる（服部 2003・2017）。警固所・大宰府の掌握と食糧・軍事物資の確保が作戦目標だが、作戦が難航した場合、春になるまで占領の維持・継続が可能か勘案し、もし否ならば帰国で、早期帰国は戦況不利になった場合の選択肢だったが、当初から決定された作戦ではなかったとする（服部 2014）。この場合は、大宰府を掌握し食糧・物資を獲得できれば長期占領も考えていたという含みであろう。実際には、赤坂山の占領と強固な海岸堡の構築に失敗し、春に東風が吹くまで兵站の補給を欠くままに占領地獲得・確保・拡大を目指し戦い続けることが無理となり、本格的な冬の到来前に玄界灘を乗り切って本国に戻りつくしかなかったとみる（服部 2003）。日本の武士の抵抗と風雨—自然の条件が、征服者と被征服者とのあいだの民族的矛盾を表面化させ意識的に撤退した（網野 前掲）、混成軍内に生じた混乱と武器の消耗の結果、自主的に撤退したとする説（樋口 2000）などがある。暴風雨との関係は服部説・網野説では暴風の後で帰国を決定し、樋口説では



第30図 箱崎砂州先端部における元寇防塁推定線(岩永案)

帰国途中で遭遇したとする。

他方、示威的効果程度を狙ったもので完全征服を目指していなかった(川添 前掲)、日本の支配層を交渉のテーブルに引きずり出すための軍事的衝撃・恐怖を加えればそれで十分に長期占領は初めか

ら考えていなかった（新井 2007）、あるいは、南宋接収作戦の一環で日本を威嚇・牽制することや日本軍の実力の瀬踏みが目的で、一回の侵攻で日本を征服することはそもそも意図されていなかった（近藤 2003）、などの説がある。短期の作戦計画では大宰府の攻略はそもそも予定されていなかったとみるのであろう。しかし、この場合でも、日本を招諭すべく、公的窓口たる大宰府の玄関口で国際貿易港である博多や近隣の港に相当の打撃を与える事は狙っていたはずである。

いずれにせよ、今津港に近い今津、博多を西から狙う早良浦に上陸し、海岸堡の確保・構築を目指すとともに、港があった箱崎に上陸し、その際は箱崎宮などが焼かれている。元軍の攻撃目標はまずは博多と近隣の港湾であったが、警固山（赤坂山）を陥落させられず龜原山に上がった。服部は、龜原山を拠点とし陣地にするつもりだったからで、翌朝帰ろうとしていなかった決定的証左とみる（服部 2014）。

では、第二次侵攻—弘安の役の際の元軍の目的がどうであったのか。これについても対立する2説がある。

一つは屯田兵説である。網野善彦は、江南軍諸将への世祖の勅に基づき、世祖が日本の土地と百姓を支配下に置こうとしており、この時の元軍が鋤・鍬・日常生活用具を携え、屯田軍となって日本を支配する予定だったとみた（網野 前掲）。川添昭二は南宋の完全征服のもと、膨大な旧南宋軍勢力を遠征に転用して統治の安定化をはかり、高麗支配のさらなる強化を背景に日本の土地と人の略取をめざしたとする（川添 前掲）。杉山正明は、東路軍は戦闘部隊であったが、江南軍10万は40万人を超える旧南宋職業軍人対策の最初のテスト・ケースで、これといった武装もせず移民船団に近かったとみる（杉山 前掲）。新井孝重は、すでに1276年に南宋を滅亡させ、日本遠征は対南宋戦略の一環ではなくなっているが、日本招諭を失敗したまま放置はできず、南宋滅亡後の膨大な失業兵士・帰順軍隊をどこかに持って行って減らし社会問題の発生を未然に防ぐ必要があったとみる。新井は、江南軍10万は旧南宋軍を主体とし、ほとんどの兵員の実態は軍人でなく農民で、フビライが考えた江南軍組織の真の目的は移住・植民であったとする（新井 前掲）。

これに対して服部は、屯田兵説を批判し、屯田・開拓は版図に含め得た地域にはじめて行うものであり、未征服地・臨戦地での屯田はあり得ないとする（服部 2014）。今回も大宰府攻略が主目標で、東路軍が先に志賀島を確保し、後から進発した江南軍と博多湾で集結して戦略基地とし、大宰府攻撃を目標としたとみる。通説である鷹島終結は戦略的意義がなく、鷹島は江南軍の進路の一過程にすぎないとする（服部 2017）。東路軍は対馬・志賀島を占拠後、長門にも来襲し、しばらく占領していた（服部 2014）。服部は、両軍が揃って大宰府を制圧し、次には京都・鎌倉を侵攻するはずだったとするが（服部 前掲）、長門への来襲はそれと連動する前哨戦であったということだろうか。

他方、元の第二次侵攻を控えた幕府側の対策はどうであったのか。斎藤らは、文永の役後に大宰府そのものの防衛を強化した形跡が見当たらない点に注目し、大宰府まで段階的に防衛線を設けるのではなく、防塁ですべての上陸部隊を撃破する水際作戦を選択したと断じる（斎藤ほか 2020）。

幕府は、文永の役に際しては、元軍がどこに上陸するかが事前にはわからず、博多・息浜を中心に赤坂山から箱崎に至る地域に軍の主力を配したが、元軍の博多湾岸各所への上陸を許してしまい、元軍が赤坂山や博多・息浜に進軍してくるのを迎え撃つ「上陸させてから叩く」という形に結果的になった²⁾。幕府軍は、部分的戦闘では敵に打撃を与えた事もあったが、元軍の騎馬隊と集団戦法に対して相当の苦戦を強いられ全体的には押されたから、敵が上陸して陣を組んでしまったら勝ち目は薄い、元軍の多方面並行上陸には対応しきれないと認識したであろう。

元軍の第二次侵攻を控えた幕府の考えは、その苦い経験から、今津から香椎に至るどこに元軍が現

れても、直ちには上陸できないようにし、水際で敵に痛撃を与えて上陸を阻むことを目指した。そのために、汀線に最も近い浜堤（海岸砂丘）の頂部に防塁を築き、歩兵であれ騎馬兵であれ、敵が上陸用舟艇などで上陸しようとして隙が多く、攻撃態勢を整える前に叩いてしまい、何としても陸戦を避けることを目指したであろう。防塁の築造と並行して、幕府は「異国征伐計画」の発令、異国警固番役の制定とそれへの動員の強化（本所一円地の非御家人の動員）、守護の入れ替えや六波羅探題の人事強化による幕府の支配統制の強化（網野 前掲）、九州と畿内を結ぶ交通路の掌握と交通の円滑化（佐伯 2003）など一連の異国防御態勢強化を実施したが、軍事動員の確保や水軍の整備が主であって、防塁より内陸側の特定の場所での第二防衛線の構築ではなかった。

弘安の役の場合、元軍の上陸予想地は文永の役で元軍の動きからほぼ明らかであった。だからこそ防塁を今津から香椎まで造営したのだが、元軍は多方面並行上陸が可能だから、防衛線は今津から香椎まで長大に伸ばさざるをえず³⁾、西海道の御家人、西海道に所領を持つ東国御家人等動員できるほぼすべてを防衛第一線に集結させていたであろうから、強力な防衛第二線など構築のしようがなかった。幕府側が水際ですべて守り切れると楽観していたかは不明だが、敵に第一防衛線を突破され海岸堡を築かれてしまえば、それを陥落させるのは極めて困難となる。文永の役でも元軍の一部の大宰府攻撃はなされ、それは撃退したようであるから（服部 2017）、弘安の役に際しても大宰府の防衛態勢は整えていたであろうが、防衛第二線と言えるほどの強力なものではなかったと思われ、元軍の一部部隊の攻撃には対処できても、全軍が押し寄せれば壊滅させられたであろう。その場合、元軍が瀬戸内海から京都を目指すのは必至であるから、何はともあれ博多湾で上陸を阻止するしか選択肢はなかったと考えられる。

B. 平面構造①—北端は折れ線かカーブか？

ID に記したように福永・斎藤は、農学部二号館と三号館の間で、防塁が52°ほど東へ曲がり「折れ線」を成して地蔵松原の防塁に至ると推定し、それが弘安七（1284）年に築造されたもので、建治三（1277）年築造の防塁は、HZK1706地点で66°ほど東へ曲がり「折れ線」を成して東へ向かっていたと推定した（福永・斎藤 前掲）。

箱崎地区防塁の北端が農学部構内で向きを東に大きく振って地蔵松原指定地に至ることは、地蔵松原の発掘調査時点ですでに指摘されていた（武谷 1922）。福永は、地蔵松原の発掘後に発表された川上市太郎の記述（川上 1941）で、「大学工学部の構内松林の内縁に沿うて北進し運動場を経過して農学部との境界に於て著しき隆起線あり、農学部に入りて尚隆起線を連続し夫より消えて農学部の動植物学教室を経過し右折して東北に向ひ柵外に出て箱崎町共同墓地に於て約四間発掘せられて築石の露出せるを見たり、地蔵松原の防塁は之にて終る。」とあるのに注目し、「動植物学教室を経過し右折して」を文字通り、「動植物学教室」を過ぎた位置で、曲線でなく折れ曲がっていたことの表現だと解しているようである（福永・斎藤 前掲）。

ただ、川上が報告した島田寅次郎が現地調査をした時点（1923・24年）では、中山平次郎の踏査時点（1912年）とは異なり、農学部構内に様々な建物ができており、中山が観察した以上に「土手」が観察できたとは思えない。中山は「運動場の東側にある土手の断面の上に登って見れば、土手が東に向かって如何に走って居るかが甚だ容易に知られる」、「即ち土手は工科大学内の残部から箱崎避病院の少しく内を過て地蔵松原の新墓地の附近に終わって居る」（中山 前掲）とだけ書いている。この論文中で中山は工科大学主軸を東西方向と表現しているから「土手が東に向かって」は、北に向かっていることを意味している。この中山の記述の中には、曲線であったか折れ線であったかは示されていない

い。今津や生の松原など他地区の防塁は曲線を描くことはあっても折れ線はないから、もし工科大学の北側（後の農学部構内）で折れ線になっていたのであれば、観察が鋭い中山であれば必ず記述したであろうと思われる。ただし、肝心の曲折部の「土手」が残っていた保証は無いから、この中山の簡単な記述だけから曲線か「折れ線」かの判断ができないことは言うまでもない。

他方、川上の「動植物学教室を通過し右折して」という表現は、工科大学北端までは海岸線にほぼ平行に走っていた防塁が、地蔵松原に至るためには農学部の構内のどこかで方向を変えないといけなないので、工学部から農学部に入ってすぐに建っている「動植物学教室」を過ぎたあたりから方向を右に曲げないと地蔵松原には達しないという判断を示すのであろう。気になるのは「動植物学教室を通過し」とは書いてあるが、「動植物学教室と農学教室を通過し」ではない点である。「動植物学教室」の北端は昭和期の中央図書館の北端とほぼ一致し、「農学教室」の南端は昭和期の農学部一号館の南端とほぼ一致する（『報告4』p188-第108図参照）。したがって、「動植物学教室を通過し右折して」と言うのは、中央図書館の北端を過ぎたくらいから、じわじわと右に方向を変えれば地蔵松原の防塁にスムーズにつながるといふ含みがあると考えられる。「動植物学教室と農学教室を通過し右折して」の場合には、かなり急に右に方向を変えないと地蔵松原の防塁に繋がらない。もちろん、いずれの場合でも、曲折部の形状が曲線か「折れ線」かまでは表現していないと読み取るべきではあるが、川上の念頭にあった復元線は、緩いカーブなのではなかったかと考える。

福永・斎藤は、岩永が『報告3』において「元寇防塁は基本的に浜堤の頂部付近に築いているし、自然の浜堤はカーブを描くであろうから、あえて折れ線にしようとするれば、角部分が浜堤の頂部から外れて海側に降りてくることになり、防御上不合理であるから、やはり浜堤と同じくカーブを描いていたと考えるべきであろう」と考えたのに対し、『報告4』において、折れ線となる場合があると批判している（福永・斎藤 前掲）。

『報告3』の時点では、HZK1905地点からHZK1705地点西区東半を通して地蔵松原指定地に至るカーブをなした推定線を引くことがまだ可能であった（第29図-Bライン）。また、HZK1701（理学部中庭）地点でのジオスライサー調査の所見から、防塁石積みは浜堤頂部に築かれ防塁の20～30m海側に当時の汀線があったことが確認されている（福田ほか 2018）。それを踏まえれば、自然の浜堤が折れ線をなすとは考えにくいし、カーブする浜堤からわざわざ石積みを海側に降ろして折れ線とするのは不自然だと考えた⁴⁾。仮説を立てる条件が、HZK1705地点西区東半の礫散布が防塁石積みではないと判明し、HZK2002地点での所見を得た後とは異なっていたのである。もっとも現在では、自然の浜堤の端部が丸くならず角張る場合もあるとその後知ったので、浜堤頂部が円弧を描かず角張っても良いと今では考えている。

ただし、HZK1706地点の「背面石列」とHZK1905地点の南北石積みとの関係で解せない点がある。福永・斎藤は、「背面石列以南」と以北を別時期の築造と考える根拠として、「背面石列の北側と南側で、石積み基底石設置面の標高に10cm以上の比高差が見られる」、「背面石列とその北側の石積みの間に40cm前後の空隙が存在する」、「背面石列の北側と南側で作業工程の断絶が読み取れる」の3点に注目した。

福永・斎藤の言う「建治三（1277）年段階石積みライン」が当時の浜堤頂部にあり、その後の7年間に、北に延びていった浜堤ないし砂州に弘安七（1284）年段階で石積みが延長されたのであれば、「建治三年段階」の東西方向石積みから北方にむけて浜堤の斜面の下がりがあるはずで、それはHZK1905地点トレンチⅠの東半部、およびトレンチⅡの西半部の範囲に入っており、トレンチの壁面では、西側へ向かっての砂層の下がりとして現れるはずである。しかしトレンチⅠ南壁・トレンチ

Ⅱ北壁の土層断面図にそのような下がりは見られない。また、「建治三年段階」の東西方向石積みの内（南）側に東西方向大溝があれば、トレンチⅡの東半に現れるはずで、それはトレンチⅡ北壁の土層断面図の東半に東側に向かったの砂層の下がりとして溝の北壁が現れるはずである。しかし、そのような下がりは見られない⁵⁾。以上のトレンチⅠ・Ⅱの土層断面の所見からは、「背面石列」以南の南北方向浜堤が、「背面石列」設置の時点においても北側へ真っ直ぐ伸びていたと読み取れるから、「背面石列」の位置で当初浜堤が東に曲がっており、その頂部に防塁が築かれ、その内側に大溝が設けられたとは言えなさそうであり、浜堤・砂州の北への成長に合わせて防塁を北に伸ばしたという説明はしにくくなってしまふ。浜堤が真っ直ぐ北へ伸びていても、何らかの事情で「背面石列」の所で石積みを東に曲げた可能性を全否定はできないが、かなり無理があろう。

また、「建治三年段階」の防塁が「背面石列」までであり、その後、弘安七年までに北へ伸びた浜堤の頂部に防塁を延長したのであれば、「背面石列」から北に向かって石積み基底部のレベルがいったん下がっても良さそうだが、実際は、「背面石列の北側と南側で、石積み基底石設置面の標高に10cm以上の比高差が見られ」、北側の石積みの方が10cmほど高くなっている。これについては石積み延伸時の整地・土盛りで基底石接地面を整えた際に土量が多かったからと説明は可能だが、もともとの浜堤が、北に向かって高まっていたという事もできる。

以上の検討で、「背面石列」から「建治三年段階」の防塁が東に延びていたとする仮説に対しては裏付けが不足することは言えるが、HZK2002地点の北側（農学部二号館・三号館の間）で52°ほど東へ曲がり地蔵松原地点に向かうという案自体は妥当と考える。ただし曲がり方が曲線（第29図-Eライン、第30図）か「折れ線」かは問題として残り、両論併記にせざるを得ない。福永・斎藤が「折れ線」としたのは、「背面石列」の評価と連動しているからである。

問題は「背面石列」の評価である。たしかに石番号28・36・37（『報告4』第75図）の3点は北面を揃えて並べているように見えるが、36・37および北にせり出している38は石積みの基底石としては小ぶりである。この時期の石積みの屈折部分の処理の仕方の事例は調査できていないが、石番号28は29・30に比して薄めの石を立てており、角に据える石と認定できるか不安がある。以上から、石列は石積み工事分担者の交替の目印として置かれたものと評価しておきたい。

C. 平面構造②—陸側の大溝

1. 箱崎にしかないのか

大溝について福永は、「今津や生の松原などの発掘調査では、石積みの調査のみで、その陸側を広く調査した事例はない」から「現状では箱崎キャンパス地区以外で大溝の痕跡は確認できていない」、「そもそも西新以外の地区では石積み陸側に施設を設ける事例を確認することはできず」と述べる。その通りではあるが、しかしそこから「箱崎キャンパス地区だけに大溝が存在する」「箱崎地区の大溝は極めて特異な事例であると言える」と断じる（福永 2020・2021）のは論の飛躍である。それは他の地区の防塁にそのような施設がないということは意味しない。陸側が防塁本体部分から25mほどの地点まで調査された事例に乏しく、施設の有無を即断するのは早計であろう。今後、箱崎以外の防塁について、防塁内側の調査を意識的に進めてもらう必要があるだろう。

2. 石積み背面の溝は不合理か

福永・斎藤は城や居館に防御施設を設ける場合、背面への突破・侵入を防ぐために、堀は石塁や土塁の前面に敷設することが多く、石積みの背面に防御施設としての大溝を敷設することは合理的ではないという（福永・斎藤 前掲）。たしかに水城では土塁の海側に幅約60mの外濠を築いている。しか

し吉野ヶ里遺跡の環濠を例示するまでもなく、土塁の内側に堀を設ける例はあるのである。

そもそも箱崎地区の防塁の場合、HZK1701地点のジオスライサー調査の結果、石積みからたった20～30mの地点が干潮時の汀線であったことが分かっている（福田ほか 前掲）。満潮時にはその距離はさらに小さくなる。したがって汀線と石積みの間にそもそも大溝など作りようがないのである。また福永・斎藤は護り手側に溝があるのは不自然で、阿津賀志山の防塁でも最も内側（護り手側）は堀でなく土塁だという（福永・斎藤 前掲）。確かにその点はそうであるが、阿津賀志山では最も外側（攻め手側）は堀でなく土塁である。土塁上の高所から射撃・攻撃を行い、敵の騎馬兵・歩兵の突進を食い止めるのが主目的であったとみられる。実際には、夜の間敵工兵隊が土塁を崩し侵入路を作ってしまったが、元寇防塁でも敵の上陸に際し波打ち際で足を取られたり、馬を船から降ろしたりで、攻撃の体勢を整える前に、高みから矢や石礫を雨あられと射かけ、上陸を阻むことを目論んだとみられる。しかし防塁を突破されてしまった際には一気に攻め込まれるのを防ぐために堀に落とし込み防塁の上と堀外の南側から射撃し防ぎ止める。福永・斎藤は石積みの突破を半ば前提としているかのように大溝を敷設するのは合理的行為ではないと言うが、最前の石積みを突破された際の反撃対策を考えておくのはむしろ当然である⁶⁾。

3. 背面の溝は第二義的意義か

福永・斎藤は大溝の防御機能はあったとしても第二義的に過ぎず、第一義的理由は、石積み背面に盛り上げる砂の供給元として砂を採取した窪地をわざわざ埋め戻すような無駄な労力をかけずに放置した物に過ぎず、防御機能はあったとしても第二義的なものに過ぎないとする（福永・斎藤 前掲）。しかし、生きるか死ぬかの戦争である。防御に役立たないあるいは防御の足を引っ張るような邪魔な代物なら少しの手間をかけても埋めるはずで、開けたままにしておいたには「第二義的」以上の意味があるはずである。

防塁上で守備位置に付ける人数は当然限りがある。第二列の兵は大溝の内側に控えて大溝に落と仕込んだ敵を狙う事で、防塁上にいる味方を同士討ちすることが避けられる。防塁上の第一列の兵が減った場合には第二列から補充しなければならないから、大溝には所々に土橋が設けられていたはずである。また石積みと大溝の間の距離が一定であったとは限らず、幅を広げた兵の溜まりが設けられていた箇所もあるだろう。

D. 立面構造①—石積み

箱崎地区の防塁石積みは、①石積みが海側前面の1列しか存在しない点、②砂層のみで構成され、粘土層や版築構造は確認されていない点、③石積みの陸側に大溝が付随している点、の特徴があるとされている（福永 2020・2021）。③については前項で述べた。①②の特徴から、箱崎地区の防塁は非常に簡素で脆弱で張りぼて状の構造に見える」と評価されている。

確かに箱崎の防塁は、福岡市西部以西に現存する防塁遺構と異なる点が多いのは確かである。しかし、①②のように即断して良いのだろうか。

①石積みが海側前面の1列しか存在しない点については、福岡市埋蔵文化財課による2016年11月～2017年2月にかけての今津の防塁の調査によって、今津でも部分的に石積みが海側にしかない部分があると判明しており（福岡市教委 2019）、箱崎のみの特徴ではない。

②砂層のみで構成され、粘土層や版築構造は確認されていない点については、石積みが3段目まで確認されたのがHZK1603地点のみであり、他の調査区では、2段目が残るHZK1805地点の約1.5mの区間を除けば、最下段の1段のみしか確認できていないから、2段目以上の構造について判断すべき

情報が乏しい、と言うに留めておくべきであろう。

たしかに、陸側の大溝中に石積み上部の構造をうかがわせる部材が流入している例は乏しいようである。しかし、HZK1603地点では、2・3段目に1段目より控えの長い石材が積み上げられている。また、2段目以上の石材の背面には礫岩・砂岩の碎片が密に充填されており、裏込め栗石の機能を有すると認定されているとともに、1段目・2段目の背面で、盛土作業の初期段階に一定量の砂が同じ動作で石積みに向かって繰り返し投げ込まれた状況がうかがえ、石積みの作業に伴う背面固定工法の存在が示唆されている（福田 2018）。

これに対して斎藤は、HZK1603地点の断面図を検討し、2段目・3段目の裏側にある礫塊が築造時のまま残ったものか疑い、基底石の背後に同じような礫塊がなく、「石積みを確認したレベル付近のみ後背に散らばっている点も気に懸かる。」とする。そして、「過去の成果を逐一点検すると、実は現位置を保つ裏込石は確認されていないことに気付く」、「箱崎キャンパスの石積み遺構に裏込石に伴う、というこれまでの報告・言説は、一旦放棄するのが正しいように思う」、「むしろ、石を積み、砂を盛り上げただけの簡素な造りではなかったか。礫岩片の存否も、礫を詰めた云々でなく、盛り上げる砂の周囲で、石を打つ（ママ）ける・割るなどの加工をしたかどうか左右されているように思う」と述べた（斎藤 2020）。

しかし、HZK1603地点の石材 No26・27の背面で「2段目以上の石材が脱落してその背面が残った箇所、礫岩・砂岩の破片が密に充填されていた。これは裏込め栗石の機能を有する。」という福田の所見は無視できないと考える。岩永は現場を何度も実見し、当該地点に密集する石材が、2段目以上の石材が破壊された後に二次的に集積した物、あるいは積み上げる石材の加工の痕跡ではなく、当初の裏込めと考えている。この箇所こそが、九大内で検出された石積みの大部分の箇所、2段目以上の石積みの破壊時に根こそぎ削平され失われてしまった裏込めの状況を残す稀有な部分と考えている。また、HZK1805地点でも、築石番号13～18の裏側には礫片がまとまっており、HZK1603地点の状況と類似する。1段目（基底石）の背後には裏込めをしないが、2段目以上については、裏込めをしつつ積み上げていくという工法を取った可能性は否定できない。それを不自然と見るのではなく、遺構の状況から推定する余地はあろう。すなわち、2段目以上については石積みを持たせるための工夫がなされていた可能性があり、1段目しか残っていない部分の状況から、2段目以上の構造体について敷衍するのは早計であろうと考えている。

なお、石積みの際の作業単位については、森貴教がHZK1603地点の所見から4m（1丈3尺2寸）と認定し（森 2018）、それに対し斎藤は「キリの悪い距離が、なぜ単位たり得るのが釈然としない」と疑問を呈した（斎藤 前掲）。単位の認定について森は、1段目の石材が接続せず石片で隙間を充填する部分としているが、作業単位の境界は、目地が下から上まで通る部分とすべきであろう。HZK1603地点の石積み遺構 SF01でも、そのような個所が数か所あるが、2段目ないし3段目まででしかなく、さらに上まで目地が通るかどうかは不明であるから、作業単位は不明としておくべきであろう。

E. 立面構造②－防塁の対象は騎馬隊か歩兵か？

斎藤らは、元に対する防衛戦略は、文永の役における元軍の行動を色濃く反映するもので、防塁はその分析から導かれた帰結として築造されたはずとする（斎藤ほか 前掲）。その通りであろう。

防塁の高さや幅は、文永の役での元軍の実態を分析して決められたはずであり、防御すべき敵に左右されたはずである。まさにこの点について説が割れている。

元軍の主体はおもだった指揮者のほかは騎兵でなく軽装の歩兵の集団であり、日本の騎馬武者は長槍と弓矢の徒歩の集団に取り込められて苦戦したから（黒田 1965、斎藤ほか 前掲）、防塁も歩兵を主対象として築造されたとみる説がある（斎藤ほか 前掲）。

他方、服部は、文永の役では、蒙古軍がたやすく浜から上陸し、騎馬の蒙古兵に日本の騎馬武者の多くが立ち向かえず、かなりの被害を出したことから、何よりも馬を上陸させないことに主目的があったと説く。石築地の第一義は「馬防石塁」であり、馬が越えられない必要最低限の高さで築かれ、実際に騎馬軍団に対し大きな効果を発揮し、蒙古軍が容易に九州本土に上陸できなかったとする（服部 2014）。騎馬でも高さ5尺（1.5m）、幅1丈（3m）もあれば馬防として十分機能するとされている（服部 2003・2014）。

防塁が主として歩兵用か騎馬兵用かは判断が難しいが、元軍は船にかなりの頭数の馬を積んできており、『蒙古襲来絵詞』に騎馬部隊が描かれており、作戦の指揮などに当たったようであるから、馬の上陸を阻止することが重要と認識されていたことは間違いあるまい。

他方、文永の役の平地での対歩兵戦では負け戦ばかりではなかったが、集団戦法には苦戦し、まとまった敵兵が小山を占拠し海岸堡を確保・構築してしまうと攻撃が困難になることは経験済みであるから、歩兵の上陸を阻止しようとするのも当然である。

何れにせよ、服部は、石積みが高すぎてもだめで、敵船の着岸・上陸に対する攻撃で、浜が射撃の射程より遠ければ防塁を下りて攻撃し、終わって防塁に退却する際には無事に撤収できるための「低さ」が要求されたので、異様に高ければ、いくつかの作戦展開が不可能となるし、高くても幅が狭ければ崩れやすく、維持管理も難しくなり、不必要な高さは、不要な材料調達、時間を要求し、不経済で非効率と断じた。その観点から、生の松原防塁の「復元」石積みは高すぎるとし、防塁の平均的高さを1.8～2.0mとみている（服部 2014）。防塁が主として対歩兵用としても、敵の上陸時の射撃攻撃用であれば1.8～2.0mでは低いということはなからう。

福永・斎藤は、箱崎の防塁の石積みは1.5m程度の高さしかなく（斎藤ほか 2020）、低く漸弱な構造だという（福永・斎藤 前掲）。たしかに姪浜や今津の防塁ほど高く石積みは積み上げられないかもしれない。しかし、前面に逆茂木を置いて敵の接近を遠ざけ、低い分は石積み上に置き盾を並べて弓矢の攻撃をしのぎ、盾の後ろ、あるいは低いながらも石積みの後ろに身を隠しつつ矢を射かけることで補ったと考えられる。

F. 立面構造③—中山が見た「土塁」は防塁とは別物か

福永は、中山平次郎が観察した「土手」は防塁に伴うものというより浜堤の高まりであり、箱崎地区の防塁には中山が指摘するような「土手」の築造は確認されていないとする（福永 前掲）。中山は「土手」の上に石垣を築くものと考えており（中山 前掲）、「土手」を人工物と認識していた可能性がある。この「土手」が実際には自然の浜堤の高まりであることは福永の指摘の通りであるが、中山が医科大学から工科大学に至る各所で見た「土手」と表現するものは、防塁が乗る浜堤と防塁が崩壊した高まりの両方を含んでいる可能性がある。確かに医学部から箱崎にいたる地域に福岡市西半部以西に残る防塁遺跡のような「土手」が現存はしていない。しかし、それらの地域に「土手」がそもそもなかったわけではない。防塁を浜堤の高まりの上に築いていることは箱崎地区でも HZK1701地点の長大な断割で確認されており、当時の汀線から1.7～1.8mの高さの浜堤が断面で確認されたが、HZK1701地点の地表ではまったく浜堤の高まりはわからない。そのような「土手」状高まりが確認できなかったのは、九大構内および隣接する市街地の地形が、高所の削平や低所の埋め立てによって

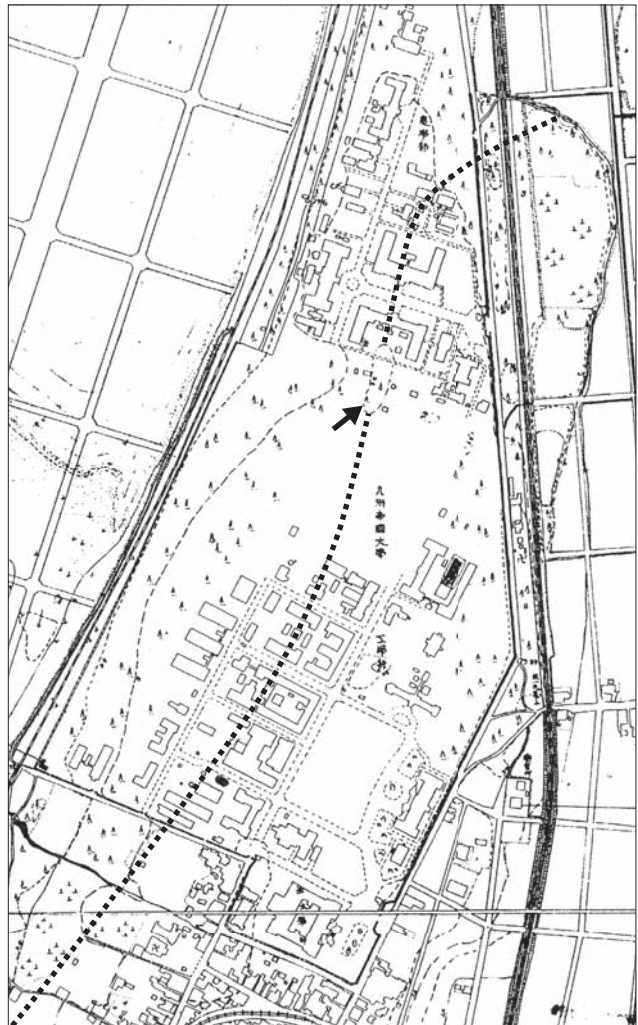
激しく改変された結果に過ぎない。中山が工科大学内で「運動場の東側」（実際は北側）と特記した地点は、1925～26年の状況を示す地図（第31図）には、等高線で表示されるほど高まりが残っており、その地点をHZK1603地点として発掘調査した結果、石積みが3段検出され、箱崎キャンパス内で最もよく残っている石積みだったわけである。調査前の当該地が周囲より一段高い「土手」状をなしていたのを私はよく覚えている。ただし、箱崎地区内でそのような「土手」状高まりが残っていたのはHZK1603地点のみであり、他の箇所ではことごとく削平され消滅していた。しかし、現実に「土手」状をなした部分で石積みが発見されたわけで、中山が箱崎各所で見た「土手」状の高まりが防塁とは別物に過ぎないとは即断できないのである。

G. 立面構造④－裏加佐は榊か

斎藤・三阪・福永は裏加佐を「石塁の後方に土砂を盛って陸地から緩やかに登れるように作った所」という半ば定説化した理解に疑問を呈し、「裏加佐」の語が見られる史料は薩摩が分担した箱崎の石築地に関わる物であるので、箱崎のデータと照合すべきと主張した（斎藤ほか 前掲）。種々の検討の結果、石積み遺構の後背砂地にサカキを植えて生垣状を成し、より嵩（高さ）を増し石積みを補ったもので、石積みを支える砂の流出防止にも力を発揮したと考えた。

確かに榊を植栽して根が張れば、砂の崩落を防ぐのに役立ちはあるだろう。しかし、そもそも砂ばかりで土壌がない場所で榊が育つか疑問だし、仮に育っても、榊は放っておけば樹高が高くなるし、枝が横に張り出す樹木である⁷⁾。部厚く濃緑色の葉が密に茂る。斎藤らは、興福寺大乘院庭園の石築地に嵩増しで垣根のように植栽した例を参照したが、寺院の周囲を巡る築地や生け垣は遮蔽機能を果たせばよく、誰かが築地によじ登って用いることを念頭にはおいていない。しかし、防塁の場合、基本的には上に兵を配置して敵に攻撃を仕掛けるためのものであり、防塁の上ないし背面から敵の動きをよく観察できなければならないし、塁上の兵の移動が妨げられてもいけない。生け垣は平時の管理用にはなっても、元軍がいつ来寇するかはわからず、戦時に防塁の背面に榊が植わっており葉が茂れば邪魔にしかならない。薩摩担当防塁に特徴的に「裏加佐」が伴うものであるのなら、斎藤らが指摘する背面の脆弱性を補強する何らかの工夫の事を指すとみるべきだが、それは生け垣ではなかろう。

『蒙古襲来絵詞』では、姪浜の防塁上に肥後の菊地一族がずらっと座し、その前を竹崎季長主従が



第31図 工学部北端に残る防塁の高まり（↑）と防塁推定線

通過する場面があるが、これは、勢ぞろいする菊池一族を一通り描写するための表現であるから、実際に元軍を迎え撃つ場合の態勢ではなかろう。戦時には上面には盾を並べ石築地上面の武者走りを兵が行き来しすれ違う（服部 2014）。

H. 立地論①ー箱崎という場所

そもそも箱崎は博多と並ぶ貿易港であり、箱崎・箱崎津は水軍などの軍事的拠点としての性格を備えていた（佐伯 2001）。文永の役に際しては、竹崎季長が軍勢催促を受けて参陣するのに、博多でなくまず箱崎津に参集していることから、博多よりも箱崎津に軍勢の主力が集結しており、博多息浜が箱崎の前線基地という位置づけであったとみる説がある（堀本 2012）。他方、息の浜から箱崎にかけて幕府軍の主力が置かれたので、元軍が博多周辺に上陸するのは防備がもっとも堅い正面への突入となるので、手薄な後方を襲う作戦をとったとする（服部 2003）。いずれにせよ、箱崎には豊後守護大伴頼泰が指揮する筑前・豊前・豊後国御家人らの部隊が入り海岸防衛に当たった。津および筥崎宮がある箱崎の重要性のゆえである。文永の役では、11月20日の午前中に鳥飼・赤坂での戦闘が始まり、午後から筥崎宮一带に元軍が上陸したとされ筥崎宮が焼けている（服部 2014）。箱崎津・筥崎宮が元軍の攻撃目標の一つであったことは明らかだ。

I. 立地論②ー箱崎砂州と防塁の関係

福永は砂州の不安定さに注目した。箱崎砂州の先端が不安定であり、しだいに北に延び、時々刻々形を変えたりしていたであろうことは納得できる。福永は、それに基づき、建治三年から弘安七年の間に砂州が伸びたと考えたのである（福永 前掲）。

ただし、福永が注目した最上川・由良川河口の砂州を航空写真で確認すると、内側に安定した浜堤があり低木が茂っており、浜堤の端の形は最上川の場合は隅丸の90度、由良川の場合先が尖った60度ほどをなしている。砂州は浜堤から突き出すように伸びており、その形状が川や海の流れの作用で刻々形状を変えているであろうことが航空写真からでもうかがえる。箱崎の砂州・砂丘の成長過程については、市原・下山が詳説している（市原・下山 2019）。河口砂州が沿岸流によって南方から北方に徐々に伸長し、河川から大規模な洪水によって多量の土砂が運搬されると、供給された土砂の再堆積により、浜堤が発達し、沿岸砂州がより大きく成長していったという（市原・下山 前掲）。1030calAD 前後に大規模な出水があったということであるから、その堆積土をベースに浜堤が発達し、そこから北へ砂州が伸びていったことになる。防塁建設時の浜堤先端の位置を防塁北端の近くとし、明治期に作成された陸軍陸地測量部作成の地形図と比較すれば、13世紀から19世紀まで砂州が北に延び続けていたことがうかがえる。福永が『報告4』第113図に示した昭和3～4年撮影の航空写真でも、その右上部に、松林に覆われた安定した浜堤があり、そこから西北に向かって砂州が伸びていく状況が写っている。

ただし、最上川にしても由良川にしても不安定な砂州部分は、嘴状に突出し、浜堤から波打ち際までだらだらと下る砂浜をなしている。箱崎砂州においても、防塁を築いたのは、汀線からの高さがあり安定した浜堤部分で、不安定な砂州はそこから嘴状に北に延びていたと推定できる。博多湾でも低い砂州部分や干潟には防塁は築けない。それは、文永の役で元軍に侵入された鳥飼干潟・那珂川干潟・多々良川干潟に面しては、砂丘がなく比高差を得にくいから防塁が築かれなかった（服部 2014）のと同じ事情である。福永・斎藤は「防塁造営直前まで形成過程にあった箱崎砂州先端部には不安定かつ流動的な地理的環境が広がって」いたとし、そのような地に防塁が築造されたので、石材運搬や

石積み築造作業が難航し必要最小限に抑えられたので、そうした作業の省力化によって、石積みが1列のみの脆弱な構造となったとみる（福永・斎藤 前掲）。しかし、防塁建設時点においては、防塁を載せる予定の浜堤は、高まりとして安定しており、不安定な砂州部分は、そこから北に延びていた部分に当たるとみるべきであろう。石材運搬や石積みの「難航」も「足立ちが悪い」ような浜辺や干潟での作業を想定するからであり、浜堤上の作業であれば、箱崎も今津や生の松原の防塁に比して難航するとは言えない⁸⁾。また、箱崎の防塁の石材が今津や生の松原の防塁に比して大きいことから、運搬や積み上げ作業が「省力化」されたとは言えないだろう。

J. 立地論③ー箱崎砂州先端部は薄い守りで良かったのか

斎藤・三阪・福永は、元に対する防衛戦略は、文永の役における元軍の行動を色濃く反映するもので、防塁はその分析から導かれた帰結として築造されたはずとする（斎藤ほか 前掲）。その通りであろう。

箱崎の津や筥崎宮の周辺部は重要拠点であったから、箱崎の防塁は、博多と同様に隣接する市街地の防衛ラインとして築かれていた（大塚 2013）。ただし、斎藤・三阪・福永は、筥崎宮・筥崎宮寺が存在し、軍事的な拠点であった中核部と、それを北に外れ箱崎キャンパスが位置する砂州先端部とを同じように労力をかけたとは考えにくく（斎藤ほか 前掲）、箱崎の防塁の「脆弱な構造」は、砂州先端部における「作業の効率化」とともに、当時の防衛戦略が関係するとし、「戦略上そこまで強固な防塁を築造して防御する必要もなかった」とする（福永・斎藤 2021）。これは砂州先端部の防塁はより簡略な構造で良かったはずという判断である。しかし、箱崎中核部の防塁の構造が不明であるし、九大構内以上に市街地化が進んだ地域であるから、将来的に明らかになる可能性は低く、遺構を比較検討した実証は期待薄であろう。

そもそも箱崎（薩摩担当）を北に越えた香椎（豊後担当）まで防塁を構築したのは、そのあたりまで元軍の侵攻を予測していたからであろう。服部は、元軍は複数地点・多地点からの同時上陸を狙うので、のちに「石築地」が築かれた場所が 文永の役に元軍が上陸した場所、そして上陸する可能性がある場所だとする（服部 2003・2014）。元軍は、一気に大軍が上陸しなければならず、適所はそれが可能な広い浜だけだったから、博多湾南岸の長浜、防塁が築かれた範囲のどこに元軍が第二次侵攻してもおかしくない想定されていたはずである⁹⁾。ほかならぬ HZK1702（工学部二号館）地点で大型礎石が出土し、砂州先端部近辺にも中国船が来航していた証拠となる。

したがって、幕府側が文永の役の際の元軍侵攻地を分析し、箱崎砂州先端部には来寇の危険性が薄いので、当該地区の防塁の防衛力を低めに設定したと考えるのは妥当ではない。この点を詳述しよう。

K. 立地論④ー水深の浅さは効いていたのか

福永・斎藤は、砂州先端部の防塁が脆弱であった理由として、博多湾の東側は水深が浅く、大型船が入湾し投錨するのは困難で、当該地域に大軍の動員は不可能であったからとする。文永の役の際の経験を踏まえて、箱崎砂州先端部周辺が防衛戦略上、他地区と比してそこまで重要な地とみなされていなかったため、そうした防衛戦略が箱崎地域の防塁の構造に影響を与えて脆弱となったというのである（福永・斎藤 前掲）。

しかしこの判断は文永の役・弘安の役の際の元軍の実際の動向と反している。たしかに元の軍船は文永の役の場合は高麗船、弘安の役では高麗船に加えて旧南宋の船や新造の泉州船で（新井 前掲）、老朽商船の軍船転用もあった（服部 2014）。大型船は尖底と竜骨をもち吃水が深く舵も長いものが多いか

ら、水深の浅い海岸に近づき過ぎれば座礁し、直接接岸はできない。しかし元軍も当然ながら潮流・水深に関わる情報は得ていた（服部 前掲）。平時の朝鮮使節でも大型船は沖合にしか碇泊しない（服部 2017）。文永の役では、日本船団に挟み撃ちされることを警戒し、悪天候も想定し、母船は2キロほど沖の島陰に碇泊したと推定され、小型の上陸用小艇（抜都魯軽疾舟）で着岸・上陸した（服部 前掲）。小艇は軽くて速く危険な敵前上陸に耐え得た（服部 2017）。沖合の母船からバトル船が一斉に出撃するわけである。しかも満ち潮に乗って出撃し、引き潮に乗って撤退している（服部 2014）。元軍の主体は高麗軍の水軍であり海戦の素人ではない。文永の役の際には、元軍は鳥飼干潟・那珂川干潟・多々良川干潟に侵入しているから、博多湾東半であろうが西半であろうが、水深の浅さは、そもそも元軍の侵攻の妨げにはなっていない。

L. 立地論⑤－多々良川干潟の守り

では、そもそも箱崎の砂州先端部が防衛を手薄にしてよい場所だったのだろうか。一般論として長大な防衛線の弱点はそれが途切れる箇所である。敵はそこを狙ってくる。文永の役における元軍の上陸は磯でなく広い砂浜からを基本とした。いっきょに大軍を上陸させるためと、馬を上陸させるためである（服部 2003）。浜に加えて、河口から干潟に侵入している。鳥飼干潟・那珂川干潟が絶好の侵入ルートとして狙われ、干潟には砂丘がなく比高差を得にくいから有効な防御ができなかった（服部 2014）。したがって第二次侵攻に備えては、浜に防塁を築くのに加えて、防塁を築けない河口の防備も必要となった。

箱崎近辺では、文永の役の際に元軍は箱崎攻撃のために多々良川干潟から侵入・上陸したと考えられるという（柳田 1984、服部 2017）。そうとすれば、第二次侵攻でも多々良川干潟への侵入があり得ると考えていたはずである。実際、弘安の役でも元軍は、防塁がない河川から干潟に入る作戦を展開し、いくつかの河川、河口干潟からたびたび侵入を試みた（服部 2014）。弘安の役の後、少弐経資が第三次侵攻にそなえて多々良川干潟に乱杭を打たせており、その乱杭は軍船で博多湾から多々良川干潟へ遡上され、軍事的拠点としての機能がある箱崎津（筥崎宮の東側と推定されている）を襲撃されないようにするための防禦策、あるいは多々良川へ侵入した元軍を壊滅させるための仕掛けとされている（伊藤 2018）。また箱崎の防塁の築造後も、幕府から薩摩国に対して「石築地」の破損部分の修理・修繕を何度か督促しているから（佐伯 2018）、破損による防衛力の減衰は看過できないものと認識されていた。

また、多々良川を挟んで箱崎砂州の対岸の名島山には、文永の役・弘安の役の際には元軍に海岸堡とされないように厳重に兵が配置されたはずである（服部 2014）。そうであれば、多々良川干潟への入り口で名島山の対岸でもある箱崎砂州先端部の守りを薄くなどできるだろうか。干潟に突入されれば箱崎津が占領されるのは文永の役で経験済みである。干潟への突入を乱杭で防げれば、干潟への入り口両側の守りは手薄で良いなどとは言えない。乱杭の側に守りの手薄な個所があれば、抜け目なくそこからの上陸が狙われる。したがって砂州先端だからと言って、多々良川河口の隣接部の防衛を薄くして、易々と通過させる理由はない。

M. 防塁の土木技術の系譜

防塁の築造は、石築地役や異国警固番役と連動し、今津は日向・大隅、今宿は豊前、生の松原は肥後、姪の浜は肥前、博多は筑前・筑後、箱崎は薩摩、香椎は豊後が築造・修理を受け持った。担当国ごとに防塁の構造に差異があることが明らかになってきているが、そのような差異の由来を各国が動

員した土木技術者の系譜に還元できるかどうかは、各国の古代末～中世の土木技術の解明とともに今後の課題だろう。福永は「石積み＋大溝」という防御施設の技術系譜を薩摩国に見出せるか検討し、「薩摩国内に求めることができるデータや根拠は、現状ではない」とした（福永 2020）。

他方、福永は、中国商人や入宋僧、来日宋僧などをインフォーマントとして、大陸の土木技術の情報・知識を得て、元寇防塁の築造・修理に臨んだ可能性があるとした（福永 前掲）。たしかに、平安時代末から鎌倉時代にかけて、大仏様や唐様の建築技術の伝来に伴う土木技術、港湾や河川・湖沼における築堤・護岸技術などが大陸から伝来した可能性はあるが、個別の土木技術が在来か外来か、外来とすればどこの系譜か、など具体的に遺構どうしを比較して論じるための資料に乏しい。

斎藤・三阪・福永は、防塁造営の分担国をまたぐ共通点にも注目し、博多と箱崎については、土木工事を仕切った石工に結び付いた西大寺流律宗の僧が防塁築造を指揮したとし、筥崎宮や諸禅寺が利権を掌握する国際貿易都市博多への、律宗の参入の橋頭堡と評価した（斎藤ほか 前掲）。律宗は、西大寺の叡尊、極楽寺の忍性、泉涌寺の俊苧を中心とし、叡尊・忍性の鎌倉布教によって得宗政権と結びつき、瀬戸内海・九州へ展開した（川添 2002）。九州における西大寺末寺として豊前・大興善寺、博多・大乘寺、肥前・東妙寺があり、異国降伏祈禱とともに大陸文物受容の拠点となり、瀬戸内海における西大寺流は、北条氏得宗・一門の海陸交通拠点掌握と複合し、尾道・浄土寺、草戸千軒・常福寺などが対外交渉の重要な導管として内外の財貨の流通を円滑にしていたという（川添 前掲）。

鎌倉末以降「石城府」と言われるようになった博多や今津・姪浜・筥崎・香椎には、防塁の内側に防塁に先立って建立された禅寺があり、外来文物受容の受け皿となっていた（川添 2006）。律宗の進出前に禅宗も土木技術流入の受け皿となっていたのは、栄西が博多・聖福寺、建仁寺などを建立し、東大寺勧進職として鐘楼を再建し、法勝寺九重塔の再建に携わった例を挙げるまでもない¹⁰⁾。したがって防塁築造の土木技術指導に僧の関与を考えるのであれば、律宗のみならず禅宗も含める必要があるだろう。上記諸寺院の鎌倉期の遺構の比較検討が可能であれば、導入された土木技術の解明に有効だろうが、地上に古い遺構を留めておらず将来に期すほかない。

防御施設として元寇防塁の発想元をどう考えるか。博多湾に押し寄せた元軍はもはや草原を疾走していたモンゴル騎馬軍団ではない¹¹⁾。元と高麗の連合軍は三別抄の征討軍が中核をなし、耽羅（済州島）に拠った三別抄を鎮圧していたから、渡海・上陸戦は経験済みであった。幕府軍が対峙したのはこのような敵であったから、文永の役で大軍の上陸を経験した幕府としては、まずは上陸を防ぐという発想を持つのは当然であっただろう。海岸に面した高まりに壁を築き、その壁を耐久性がある石積み構造とし、そこから、上陸を目指す敵軍を攻撃できるようにする。三別抄は耽羅に土塁・石塁を築いて高麗・モンゴル軍に備えたが、その情報が幕府に伝わって模倣したとみるよりは、対上陸防御施設を検討した自前の発想の産物と考えるべきであろう。

おわりに

私は、2016年5月19日、理学部正面玄関の東北側の路面におけるガス管切替工事に伴う立会調査で、幅50cmほどアスファルト舗装を剥いだ下で、海側に平らな面を向けて立てたような石1個（第32図）を見つけ、もしかして元寇防塁の石ではないかと考えた（同地点はHZK1803地点として2018年に再調査された）。結果的には、これが、箱崎キャンパス内での元寇防塁の発見第一号となった。それ以来私は、九大埋蔵文化財調査委員会の埋蔵文化財検討WG長として、埋蔵文化財調査室とともに、箱崎キャンパス内の元寇防塁遺構についての検討してきた。発掘調査が始まって以来、何とか防塁の

石積みが残っている箇所を探し当ててルートを確認したいという思いが強く、新事実が明らかになるたびに推定線に微修正を加えていった¹²⁾。それは次の調査地の決定に関わるからであった。箱崎キャンパス内は土壤汚染によって発掘調査ができない場所が非常に多く、外部の方からみれば、「何でもここを掘ってないんだ?」と思われるような場所（代表例が農学部二号館・三号館の間）が未調査となってしまったのは極めて残念であった。かりに調査が可能な場所においても、広い面積は掘れないという制約が強かかっていた。広めに掘ってどこかで当てるという掘り方はできない。狙い撃ちするためには、少しでも妥当性が高い推定を行う必要があった。

結果的には農学部構内・工学部構内での攪乱が予想以上に酷く、工学部北端～理学部～農学部南端の範囲でしか石積みを検出できなかったのは残念だったが、石積み内側の大溝の発見によって、石積みの位置がある程度推定可能となったことは幸いだった。

私は埋蔵文化財調査室による発掘調査の攪乱要因となったと自覚しているが、歴代調査員の先生方の粘り強い努力によって、可能な限りの探求がなされたことは確かである。あらためて感謝申し上げる。箱崎キャンパス内での発掘調査は終了したが、未解決の点のいくつかは、キャンパス敷地外の調査によって解明できるはずであり、問題意識を持った学術的検討がなされることを期待したい。

謝 辞

小稿の執筆に当たり、九州大学埋蔵文化財調査室の齋藤瑞穂氏・福永将大氏・谷直子氏にお世話になりご教示を頂いた。挿図制作は石井若香菜氏を煩わせた。記して謝意を表する。

2021年12月20日

註

- 1) 『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3』を『報告3』、『同4』を『報告4』のように略す。以下同様。
- 2) 第二次大戦時の西部戦線で連合軍の上陸が間近に迫った際、ドイツ軍では、上陸地をノルマンディと予測し敵を水際で迎え撃ち殲滅するという西方防衛準備総監E・ロンメルと、上陸地をカレーと予測し、いったん敵を上陸させてから機動力で撃滅するという西部方面軍総司令官K・ルントシュテットの作戦、という全く異なった2作戦が、併存してしまった。ロンメルは北アフリカ戦の経験から敵の航空優勢下での大規模部隊展開は不可能と知っており、未完成のままになっていた大西洋岸の要塞（大西洋の壁）建設に注力し、装甲師団を前線に置き敵を水際で殲滅することを考えた。しかし、ヒトラーがカレー上陸説の方に傾き、ロンメルに装甲師団を半分しか与えなかった。たまたまロンメルが妻の誕生日を祝うためウルムに行き、不在で軍を指揮できない日（1944年6月6日、Dデイ）に連合軍のノルマンディ上陸作戦が敢行されたため、連合軍の上陸を許してしまった（新川 1992）。



第32図 理学部正面玄関東北側における石の出土状況（左：西から、右：南から）

水際で叩くか、上陸させてから叩くかが、敵の上陸に対する対し方の基本類型であるかどうかはともかく、後者が成功するのは、水際の防衛第一線よりも強力な防衛第二線が配備できる場合だけであろう。ドイツ軍の場合の敗因の一つは、上陸予想地がカレーかノルマンディか絞れず、ヒトラーが強力な装甲部隊3個師団（特にSS第12装甲師団）を前線に置かず予備軍として後方に置いてしまい有効な反撃ができなかったことにあった。もっともロンメルが当日前線にいて第12装甲師団の支援があっても、連合軍の進撃を遅らせることはできても、戦局の帰趨は変えられなかっただろうとされている（新川 前掲）。

- 3) 弘安の役で東路軍の一部は長門に侵攻した。弘安の役後に防塁は長門にも構築され（服部 2014）、山陽道・南海道の武士が警備に当たったようだが、遺構は確認されていない。
- 4) 中山平次郎は、福岡市西区の十郎川河口の防塁の形状について、「此の川口に於ける土手の構造は予を喜ばしめた。即ち此の川口においては土手が他地に於ける如く海岸と平行せずして、八字形をなして内地へ曲り込んで居るのである。此の所見より推すと、防塁は総て川口に於ては特別の形を為して居た様に思はるゝ」と述べた（中山 1913）。もちろん中山が見た「八字形」の土手が防塁そのものであったかは問題があるが、防塁が乗る浜堤が河口では「八字形」をなして内地へ曲がり込むことはあり得るだろう。これを多々良川の川口南岸に当てはめて、農学部から地藏松原に向かう防塁がカーブを描くと考えたのである。
- 5) HZK1706地点B区北壁で検出された「溝状遺構SD02」は、『報告2』では防塁に伴う大溝と認定されたが、福永は、HZK1905地点のトレンチI南壁・トレンチII北壁で確認した大溝と様相がかなり異なることから、防塁に伴う溝ではなく後世の土壌の攪乱で生じたものと認定した（福永・斎藤 2021）。ただし、「背面石列」が東西方向の「建治三（1277）年段階石積みライン」だとして、それに伴う大溝が石列から5m南に離れてあったとすると、HZK1706地点B区北壁のうちB-2区～B-4区に現れるはずである。またそれを切って、B-1区～B-2区に南北方向大溝が現れるはずである。『報告2』図39土層断面図・B区北壁のB-1区～B-2区の土層2・3・4が南北大溝の堆積土、B-3区～B-4区の土層2～12が東西大溝の堆積土と考える（肝心の両大溝の切合い部分は、ヒューム管の掘り残しベルトの中）ことは、この壁のみでは可能だが、すぐ北のHZK1905地点トレンチII北壁では東西大溝が検出できないので、裏付けられない。
- 6) 弥生時代集落の環壕でも、例えば吉野ケ里遺跡では土塁・柵列が外、堀が内側であるから、堀が外とは限らない。この場合も柵を越えて侵入してしまった敵が一気に集落内に突入するのを防ぎ、堀に落とし込み攻撃するためであろう。外側に堀があると内側からは死角になり、夜襲などの際に敵に潜まれる危険性が増す。
- 7) もし樹木を植えるなら幹が真っ直ぐで枝が横に張らないものでなければまずい。ちなみに平城宮跡では、掘立柱を表現するためにツゲを柱位置に植え丸柱のように刈り込んでいる。内裏であれば、直径40cmほどだが、近年は剪定があまりおこなわれていないのか、柱が太ってしまい大極殿を凌駕する直径120cmほどになってしまっている。これでは見学者に誤解を与えるだろう。なんとか内裏並みの径に戻してもらいたいものである。
- 8) 竹崎季長が息浜から赤坂に向かおうとした際、大将小式景資が季長の一門に、赤坂は「馬の足立ちが悪い」から息浜で待ち構えていれば、元軍がやってくるだろう、と述べたのは、赤坂が那珂川干潟の西端に当たりズブズブで馬の歩行が困難になるので、それを嫌って元軍が赤坂から息浜に向かって攻めてくるはずだ、という事である。干潟では馬のみならず人間の歩行もしにくい。干潟のみならず不安定な砂州先端部も「足立ちが悪い」から、防塁を築くのは汀線から高まった浜堤の上となるはずである。
- 9) 博多湾外、玄界灘の外洋に面して唯一、今津長浜に防塁が築かれたことに関して、服部は、対馬壱岐方面から博多を攻撃する場合、まず北西の浜に来着すると指摘する（服部 2003）。他方で海の中道も博多に近接する長浜だったが、博多から北東にあたり上陸する可能性が低く、砂嘴でもあったから仮に上陸があっても別位置での防御が考えられるとした（服部 前掲）。
- 10) 日本史上で仏僧が土木・建築・造仏などを含めた総合プロデューサーとなった例としては、行基・道慈・実忠・空海・重源・叡尊・忍性・隠元などが挙げられる。
- 11) モンゴル軍は、南宋侵攻作戦の一環として1268年に開始された襄陽・樊城包囲戦で、戦艦5000艘を作り、7万に及ぶ水軍を養成して水陸両軍連携を行った（杉山 2005）。この頃から水戦が弱点ではなくなっていた。
- 12) 推定線の検討に際しては、その時々までの情報を総合して仮説を立てるわけだが、箱崎の防塁の終点（北端）にあったのは、福岡市が公表している、地藏松原指定地-2000年度調査地-1993年度調査地を通る推定線であった。箱崎キャンパス内の防塁検出地と福岡市ラインとの間をどうスムーズに繋ぐかを念頭に考えてきたわけが、それは福岡市ラインが正しいのを前提としていた。その時点ではそれを疑ういわれはなかった。しかしながら農学部構内

の調査の進行に連れて、福岡市ラインの振れに再検討の余地があると判明し、地藏松原指定地内の地中レーダー探査成果を受けて、『報告4』で新ラインが提示されるに至った。それもまた仮説であるから、検証が必要となる。例えば、JR 高架西側の旧農学部圃場内の福岡市教委1993年度調査地の北側で、新推定ラインを発掘し石積みがでてるか検証する必要がある。圃場内史跡指定地の範囲変更になりかねないから難しいかもしれないが。

引用文献

- 網野善彦 1974『日本の歴史第10巻 蒙古襲来』小学館
- 新井孝重 2007『戦争の日本史7 蒙古襲来』吉川弘文館
- 市原季彦・下山正一 2019「HZK1802地点におけるジオスライサー調査の成果」『九州大学は尾崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡』、118～130頁
- 伊藤孝司 2018「中世の箱崎と東アジア」『アジアの中の博多湾と箱崎』九州史学研究会、勉誠出版、36～53頁
- 岩永省三 2018「中山平次郎の元寇防塁位置研究と九州大大学キャンパス」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』、125～145頁
- 岩永省三 2020「箱崎キャンパス内外の元寇防塁推定線再論」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』、164～174頁
- 大塚紀宜 2013「元寇防塁と博多湾一防塁の構造とその戦略的機能について」『新修福岡市史—特別編』福岡市、302～317頁
- 金田明大 2021「元寇防塁の地中レーダー探査について」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』、164～179頁
- 川添昭二 2001『北条時宗』吉川弘文館
- 川添昭二 2002「蒙古襲来と鎌倉仏教の展開」『日蓮と鎌倉文化』平楽寺書店、281～298頁
- 川添昭二 2006「元寇防塁が語るもの—福岡市史編纂に備えて—」『市史研究ふくおか』創刊号、5～39頁
- 川上市太郎「元寇防塁」『元寇史跡（地之巻）』福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第十四輯、57～95頁
- 黒田俊雄 1965『日本の歴史8 蒙古襲来』中央公論社
- 近藤成一「モンゴルの襲来」『日本の時代史9 モンゴルの襲来』吉川弘文館、7～105頁
- 斎藤瑞穂 2020「石積み遺構 SF00」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』、91～104頁
- 斎藤瑞穂・三阪一徳・福永将大 2020「箱崎砂丘東端の元寇防塁をめぐる二・三の問題」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』、175～195頁
- 佐伯弘次 2001「軍事的拠点としての中世箱崎津」『博多研究会誌』9、博多研究会、33～36頁
- 佐伯弘次 2003『日本の中世⑨ モンゴル襲来の衝撃』中央公論新社
- 佐伯弘次 2018「箱崎の元寇防塁と薩摩」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』、92～98頁
- 新川健三郎「ノルマンディ上陸作戦—ザ・ロンゲスト・デイ」『別冊歴史読本』第19巻19号、221～229頁
- 杉山正明 2005『中国の歴史08 疾駆する草原の征服者』講談社
- 武谷水城 1921「多々良以東に於ける元寇防塁の有無に就て」『筑紫史談』第24集、筑紫史談会、32～41頁
- 武谷水城 1922「多々良以東元寇防塁有無に就ての補足 香椎発掘の石土混塁と地藏松原発掘の石塁」『筑紫史談』第25集、筑紫史談会、33～36頁
- 中山平次郎 1913『福岡付近の史蹟—殊に元寇の史蹟—』九州帝国大学医科大学雑誌部
- 服部英雄 2003『歴史を読み解く—さまざまな史料と視角—』青史出版
- 服部英雄 2014『蒙古襲来』山川出版社
- 服部英雄 2017『蒙古襲来と神風』中公新書
- 樋口州男 2000「モンゴル襲来」『北条時宗のすべて』新人物往来社、79～112頁
- 福岡市教育委員会 1978『史跡元寇防塁保存管理計画策定報告書』
- 福岡市教育委員会 2019『元寇防塁 調査総括報告書』福岡市埋蔵文化愛調査報告書第1382集
- 福田正宏 2018「SF01・SF02 検出状況と遺構年代」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—

- HZK1601・1603・1604地点一』、46～55頁
- 福田正宏・下山正一・市原季彦・森貴教・谷尚子 2018 「九州大学箱崎キャンパスにおける石積み遺構の立地環境」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点一』、109～124頁
- 福永将大 2020 「元寇時における箱崎の諸相」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3—HZK1802・1803・1805・1902地点一』、11～15頁
- 福永将大 2021 「箱崎地区における元寇防塁研究」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点一』、7～17頁
- 福永将大・斎藤瑞穂 2021 「箱崎砂州先端部における元寇防塁とその特質」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点一』、180～197頁
- 堀本一繁 2012 「『蒙古襲来絵詞』の復原にみる竹崎季長の移動経路」『交通史研究』第78号、3～18頁
- 森 貴教 2018 「SF01・SF02 石材の加工技術と特徴」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点一』、55～57頁
- 柳田純子 1984 「元寇防塁と博多湾の地形」『古代の博多』九州大学出版会、365～394頁

地学調査から明らかとなった元寇における巨大台風災害

鹿島 薫・福本 侑・原口 強

1. はじめに

2014年11月 National Geographic 誌（英語版）に『伝説の神風台風は実在した（Japan's Kamikaze Winds, the Stuff of Legend, may be Real）』、という記事が掲載された（Powell 2014）。ここでは、元寇の2回（1274年・1281年）のモンゴル軍襲来を、地図を添えて説明し、さらに巨大台風によってモンゴル軍が退却したことを、矢田一嘯画伯の絵画を交えながら詳細に述べている。この記事は、マサセッチュー大学地質学教室の Jonathan Woodruff 博士の天草大蛇池（池田池）における研究成果（Woodruff ほか 2015）に基づき、元寇における巨大台風（神風台風と記事中では呼んでいる）の存在が科学的に実証されたとしている。この記事は、アメリカ人の科学ジャーナリスト（Devin Powell 氏）がまとめたものであるが、これまで「伝説」とされていた自然災害が「実在」していたことが証明されたことを、外国人の視点からではあるが、大きな驚きをもって綴っている。

この発見をした Jonathan Woodruff 博士は大学院生時代に、鹿島研究室に交換留学生として滞在され、しかもこれを契機として、九大工学部教員の令嬢と後日結婚されたという、九州大学とはとても縁の深い研究者である。また、フルブライト研究プログラム研究者として、2017年にも九州大学理学研究院地球惑星科学部門に一年間在籍されたこともある。

Woodruff ほか（2015）が提起した、堆積物を用いた元寇時の巨大台風災害の検証は、国内外の研究者に多くの衝撃を与えた。そして翌年の2016年には、大阪市立大学原口強博士を中心とする研究グループが天草大蛇池（池田池）に再調査を行った。ここでは、（1）元寇に伴う台風堆積物の再確認、（2）元寇以前における巨大台風災害の確認を研究目的としていた。

本稿では、堆積物を用いて過去の台風災害史をどのように復元するのかについて、その方法から最近の研究成果について紹介していきたい。さらに、Jonathan Woodruff 博士および原口強博士の採取した研究試料において、著者が行った珪藻分析という手法を中心にして、どのようにして過去の台風および気象災害が復元されるのかという点を述べていきたい。

2. 大蛇池（池田池）における元寇時の巨大台風災害の復元

天草大蛇池（池田池）は、天草半島南部の海岸に面した南北350m東西180mの小規模な淡水湖沼であり、湖には流入する河川はみられない（第33図）。彼らは、この湖沼が予想される台風経路に位置しているとし、過去の巨大台風の履歴が、湖の堆積物に保存されている可能性が高いと考え、不攪乱湖底堆積物を採取した。台風などによる過去の自然災害を復元するに際して、都市近郊ではその後の都市開発に伴い大きく地形改変をうける。これに対して、天草大蛇池（池田池）は人口密集域から離れており、元地形が改変されることなく現在まで保持されていた。

原口強による大蛇池（池田池）における湖底掘削調査は、2016年9月23日から27日かけて実施された。湖底下22mまでの不攪乱掘削試料が採取された。これは、Woodruff（2015）による調査が湖底堆積物上部に限られていたこととは対照的である。湖底下20.1mで湖底堆積物の基底に到達した。基底直上から採取された約8000年前に湖が形成されたことがわかった。計測された7層準における炭素14

年代測定結果、および湖底下14m前後に見られる約7300年前に噴火したアカホヤ火山灰の堆積層が分布することから、湖は形成後中断されることなく、現在まで連続的に堆積が継続していたことがわかった（第35図）。貝化石や珪藻化石の分布形態から、湖形成当初は海に面した入り江であったことがわかった。その後、湖の海側を区切るように砂州が発達を始め、今から6700年前に湖は完全に海から切り離されて淡水湖沼となった（第34図）。

Woodruff ほか（2015）は湖底下1.89m、1.91mに挟在している、2枚の砂層が元寇の2回（1274年・1281年）の台風襲来の痕跡とした。砂層の上下の層準は未固結の泥層から構成されており、これらの砂層は明らかに異質であった。これはCT画像に現れており、砂層は白層として明瞭に区分されている。さらに、粒度変化と相関のあるCT値もここで急増している（第35図）。

そこで、走査電子顕微鏡を用いて元寇台風によると推定された堆積物について、平常状態における湖沼堆積物と比較した。

第36図-aは、湖底25cmの堆積物から撮影されたものである。堆積物中には砂粒はほとんど見られなかった。そして、小動物の糞粒である長径100-50 μm の球体が多産している。写真（第36図-a）では糞粒は半壊しており、糞粒の構成物が周囲に散在している。筒状、針状、羽状の形態の、しかも表面に細かな修飾が施されているものは、単細胞藻類の珪藻類の殻である。湖内に生息する小動物は主に珪藻類を捕食しており、糞粒も主に珪藻殻から構成されている。*Aulacoseira* 属と *Synedra* 属という淡水湖沼に多く生息する珪藻類の殻が多産している。

これに対して、Woodruff（2015）による元寇台風に伴う堆積物（湖底下1.91m、第36図-b）では走査電子顕微鏡画像が大きく異なっている。平常時の堆積物ではほとんど見られなかった砂礫粒子が多く含まれている。砂礫粒子は円磨されておらず角張っており、短時間の急激な水流によって堆積したことを示唆している。この堆積物からも多くの珪藻類の殻が観察されているが、*Pinnularia* 属、*Navicula* 属、*Gyrosigma* 属など湖岸から湖周辺の低地に生息している珪藻類の殻が産出している。これらに加えて、黄金色藻の休眠胞子も産出していることがわかった。これらの生物遺骸は、洪水などによって湖岸ないしは湖周辺低地から湖内に流入したものである。

このように、平常時における湖の堆積物と、台風に伴う堆積物では、そこに含まれる珪藻類の構成に大きな差異が生じることが予想された。そこで、珪藻遺骸と黄金色藻休眠胞子を指標とした台風堆積層の判別とその堆積環境の復元を目的として研究を進めた。

3. 珪藻遺骸と黄金色藻休眠胞子を指標とした台風堆積層の判別とその堆積環境の復元

湖底基底までの22mのオールコアボーリング試料が採取された。このうち珪藻が多産した0~15m（約8000年間）について、珪藻遺骸と黄金色藻休眠胞子を用いた古環境の復元、過去の台風災害の復元を行った。分析は2~4cm間隔に計500試料で行った（第37図A-D、第38図A-B）。

分析の方法は以下のようにまとめられる。

- (1) 試料を0.2g程度採取し、計量後、1ccプラスチックキューブに移す。さらに、蒸留水を加え、珪藻殻を破壊しないように、木製の「つまようじ」によって攪拌する。今回の試料は固結していないので、過酸化水素水などの薬品添加は不要である。
- (2) 試料を、遠沈管（10cc）に移し、顕微鏡観察に適した濃度に蒸留水を加えて希釈する。この時は、希釈した水量などを記載しておく。

- (3) 遠沈管からスポイトで1ccを取り、ヒーター上に置いた22mm角のカバーガラスに滴下する。その後、ヒーターを50℃前後に加熱し、乾燥させる。
- (4) カバーガラスに封入剤「マウントメディア」(和光純薬)を1滴滴下したのち、約100℃で加熱してスライドガラスと固化させる。
- (5) 生物顕微鏡によって珪藻を観察する。この際、油浸レンズを用いて1000倍で観察を行う。
- (6) 試料ごとに200-300個の殻を観察し、種レベルでの同定を行う。

顕微鏡分析結果は、分類群ごとに、出現頻度ダイアグラムを作成した(第37図A-D)。

深度12.6-15.0mにおいては、*Cyclotella caspia*, *Thalassionema nitaschioides*, *Thalassiosira* spp., *Amphora coffeaeformis*, *Cocconeis scutellum*, *Diploneis smithii*などの海水生の珪藻が優占して産出した。また、淡水生珪藻の産出はほとんど見られなかった。このことから、大蛇池(池田池)は海水流入を伴うラグーンであったことが示されている。これに対して、12.6mより上位の層準では、約6700年前(12.6m)以降は淡水湖沼となった。

淡水湖沼形成後6700年間に、3回の洪水土砂堆積期(F1:約5800年前(cal. y. BP)、F2:約2500年前(cal. y. BP)、F3:約670年前(cal. y. BP))および6回の海水流入期(M1:約6400年前(cal. y. BP)、M2:約4200年前(cal. y. BP)、M3:約3800年前(cal. y. BP)、M4:約1900年前(cal. y. BP)、M5:約1400年前(cal. y. BP)、M6:約1100年前(cal. y. BP))が確認された。さらに、海水種は産出しないが、汽水生種が多産することから、塩水流入が推定された時期(B1:約4700年前(cal. y. BP)、B2:約4400年前(cal. y. BP))を含めると、合計で11回の自然災害堆積層が確認された。元寇台風に対比されるのは、最も新しいF3(約670cal. y. BP)であり、そのほかの10回は元寇以前に発生した台風を含む自然災害を示している可能性が大きい。

本稿では、最初に元寇台風の再検討を行い、続いて元寇以前の10回の災害履歴について述べていく。

4. 元寇に伴う台風堆積物の再検討

Woodruffほか(2015)は湖底下1.89m・1.91mに挟在している、2枚の砂層が元寇の2回(1274年・1281年)の台風襲来の痕跡とした。しかし、珪藻遺骸と黄金色藻休眠胞子の解析から、深度1.28-1.91mにおいて、*Navicula* spp., *Pinnularia* spp., *Eunotia* spp.などの淡水種で湖岸や湖周辺の低地に生息している珪藻種、さらに黄金色藻休眠胞子が多産することがわかった。これは、その上下の層準において*Aulacoseira* spp., *Staurosira* spp., *Synedra* spp.など淡水湖沼に生息する種が優占していることと対照的である。

これらの点から、台風堆積層は約65cmの層厚を有していること、深度1.89m・1.91mに分布する2枚の砂層はこの台風堆積層の基底に位置することがわかった。堆積層の層厚と台風の規模を単純に関連付けることはできないが、激しい風雨を伴う自然災害であり、洪水に伴う大量の土砂が湖内に流入したことが推定された。また、災害初期において、大規模な波浪などによって、湖内に砂層が堆積したが、大規模な海水の流入は見られず、湖が塩性化することはなかった。

Woodruffほか(2015)は2回の台風襲来を推定していたが、本研究の結果は、この台風堆積層は波浪による砂層を基底とし、その上部に洪水土砂堆積層が被る一連の堆積構造が認められた。1274年の文永の役において台風が襲来したのかという点については、グレゴリオ暦にすると11月後半という点、歴史資料において台風の記述がないという点から疑問視されてきた。さらに当時の気象配置が復元され、冬型の気圧配置となっていた点から台風襲来の可能性は極めて小さいとされている(水越

2009)。

これに対して、1281年の弘安の役に伴う台風襲来は、グレゴリオ暦で8月15日前後であり、この時の台風被害についての多くの史料が残されている。8月に発生する台風は複雑な経路を取ることが多いが、2020年台風10号は九州西岸をかすめて、北上し韓半島東岸に大きな被害を与えた。また、1985年台風12号は九州西岸を北進し、九州西部－北部に大きな被害を与えている（第39図A・B）。このことから、天草半島大蛇池（池田池）において確認された元寇台風堆積物は、1274年の文永の役ではなく、1281年の弘安の役に伴う可能性が高いと考えられる。これは、Woodruff および原口によって計測された炭素14年代測定結果とも整合的である。

5. 元寇台風以前の台風災害の復元

大蛇池（池田池）における掘削調査の結果、1281年（弘安4年）の台風災害の前に、10回の自然災害堆積層が確認された。これらは、そこに含まれる珪藻遺骸および黄金色藻休眠胞子の特徴から、以下の3種に区分された。

(1) 明瞭な海域侵入を伴う災害：(M1：約6400cal. y. BP、M2：約4200cal. y. BP、M3：約3800cal. y. BP、M4：約1900cal. y. BP、M5：約1400cal. y. BP、M6：約1100cal. y. BP)

海水生珪藻である *Cyclotella caspia* と *Chaetoceros* sp. (休眠胞子) が多産する。これらの種は淡水域では生息できないことから、この災害に伴い、砂州の一部が崩壊し、一時的に海水が湖内に流入したことを示している。これは、激しい波浪や高潮を伴う自然災害が推定される。

(2) 部分的に海水流入を伴う災害：(B1：約4700cal. y. BP、B2：約4400cal. y. BP)

汽水生の *Cyclotella meneghiniana* が多産する。この種は淡水域にも生息するが、汽水環境を好む傾向がある。海水生珪藻はほとんど産出しないものの、激しい波浪や高潮などに伴って海水が流入したことを示している可能性が高い。

(3) 海水流入の痕跡は認められなかったが、湖内への土砂流入が顕著な災害：(F1：約5800cal. y. BP、F2：約2500cal. y. BP)

Navicula spp.、*Pinnularia* spp.、*Eunotia* spp. などの淡水種で湖岸や湖周辺の低地に生息している珪藻種、さらに黄金色藻休眠胞子が多産する。海水生種や汽水生種が産出しないことから海水の湖内流入は不明であるが、激しい風雨によって湖内に洪水堆積物が流入堆積したことを示している。

以上のように、上記の10回の災害層準のうち、8回は激しい波浪と高潮を伴っていたことが推定された。九州西岸から北部において高潮災害をもたらした台風としては、平成11年台風18号がある。この台風は熊本県八代海沿岸などに大きな高潮災害をもたらした。高潮の発生は、気圧、風速に加えて、台風経路が関係しており、九州西岸を直進し、中心気圧が低く、風速の大きい台風は高潮を生じることが多い（第39図C・D）。

他の2回の災害層準でも、明瞭な土砂流入を伴う災害が記録されており、本研究で示された10回の災害は、いずれも砂州破壊など大きな地形改変や大量の土砂移動を伴う巨大台風災害であった可能性が高いと判断された。

6. 九州西部を直撃する巨大台風の発生と地球規模の気候変動との関係

九州西岸を北上する台風は、韓国西岸に達することが多いことから、韓半島における災害変動史の研究との比較を行った。Park ほか (2019) は韓半島の海岸低地堆積物の花粉分析を行い、樹木花粉量の変動から斜面の不安定化・土砂堆積量の変動の復元を行った。そしてそこで復元された土砂災害履歴は西熱帯太平洋表層海水温変動強い相関があること、東アジアにおける広域な気候変動メカニズムと関連した現象であることを考察している。

今回、大蛇池 (池田池) において復元された台風災害発生年代を、Park ほか (2019) による韓半島における土砂災害記録と西熱帯太平洋表層海水温との関係を示した図に追記すると、大蛇池 (池田池) における台風災害層準は韓半島の災害層準と対比され、しかも台風災害発生年代は西熱帯太平洋表層海水温低下期と重なっていることがわかった (第40図)。

さらに、より西熱帯太平洋地域との相関を論じるため、災害史復元を目的とした地質掘削調査を台湾中部の頭社泥炭地で行った。それによって明らかとなった5回の洪水層準はいずれも、大蛇池 (池田池) において復元された台風災害発生年代と対比が可能である (第40図、第41図)。

地球温暖化に伴い超巨大台風 (スーパー台風) が増加するという指摘がある。しかしこれについてはまだ定説はなく、確実な将来予測のため多くの研究が進められている。そこで、元寇時における台風のように歴史上の巨大台風災害に関して、災害の詳細と、台風をもたらした気象要因を考察することによって、将来起こりうる台風災害の予測に役立てることができると考えられている。本研究では、1281年の元寇 (弘安の役) 台風災害と、6700年前までに発生した10回の台風災害について、地質学的手法を用いて考察を加えたが、これらは東アジア地域における、これからの気象災害の予測に関して、多くの知見を与えることが予想されている。

7. 付記：元寇の背景となったモンゴルにおける気候変動

九州大学理学研究院地球惑星科学部門鹿島研究室では2008年からモンゴルにおける学術調査を進めてきた。目的は考古時代における気候変動・環境変動の復元である。2017年8月にモンゴル西部国境付近の西アルタイ山地において実施した調査によって、元寇を挟む時代において、顕著な気候変動が明らかとなったので、本稿に付記したい (第42図A-D)。

2017年の調査地点である、Jijig Nuur (湖) および Tolbo Nuur (湖) における掘削調査結果から、*Staurosira* 属、*Synedra* 属など淡水湖沼に生息する珪藻遺骸が多産する、湖沼堆積物層が確認された。炭素14年代測定から Jijig Nuur (湖) においては、約400AD から湖沼形成が始まっており、1000AD 以降も湖沼環境が継続していたことがわかった (第42図B)。Tolbo Nuur (湖) においても *Staurosira* 属、*Synedra* 属など淡水湖沼に生息する珪藻遺骸が多産する、湖沼堆積物層が確認された。その基底部から約400AD からという年代測定値が得られている。この湖沼は約1000AD 以降に水位低下によりいったん消失した (第42図C)。

2017年は、さらに永久凍土分布地域において、凍上により形成されたマウンドにおける掘削調査を行った。堆積物の炭素14年代測定結果は約1000AD から約1400AD となり、Jijig Nuur (湖) および Tolbo Nuur (湖) における湖沼形成後に、この凍上マウンドが形成されたことがわかった。珪藻遺骸および黄金色藻休眠胞子の群集解析から、*Epithemia* 属、*Pinnularia* 属の珪藻遺骸、黄金色藻休眠胞子が多産しており、乾燥化した環境が復元された。

モンゴルにおいては、歴史時代に大規模な気候変動が生じ、これが民族移動の要因となっていた可能性が指摘されている。「中世の温暖期」と呼ばれる北半球における温暖期以降、モンゴルにおいては急激な気温低下をもたらし、これが13世紀におけるモンゴル帝国の拡大の起因となったと言われている。今回の調査結果から、「中世の温暖期」においては湖沼の水位上昇をもたらし、相対的に湿潤化していたことがわかった。その後、気候の寒冷化に伴い、湖沼水位は低下し、乾燥化が始まっている。この時期の乾燥化層準は、凍上マウンドにおける調査結果からも確認された。

モンゴルのような乾燥地域では、家畜の遊牧にとっては、気温低下よりも、気候の乾燥化がより大きな気候制約条件となる。このことより13世紀のモンゴル帝国拡大をもたらした民族移動の要因として、寒冷化に加えて、気候の乾燥化があげられることがわかった。

8. まとめ

元寇に伴う台風災害について、天草大蛇池（池田池）における湖底ボーリングコア試料を用いて考察した。Woodruff ほか（2015）は湖底下1.91mおよび1.89mの砂層を、それぞれ文永の役（1274年）と弘安の役（1281年）における台風層準としていた。しかし、本研究で行った珪藻遺骸および黄金色藻休眠胞子の解析結果、湖底下1.91-1.28mまでが一連の台風堆積物であることがわかった。台風堆積物の層厚は63cmにおよび、Woodruff ほか（2015）が示した1-3cmに比べて、20倍近く厚い堆積物となっており、元寇時の台風が大量の土砂崩壊を伴う災害であったことが推定された。この台風は、文永の役（1274年）ではなく弘安の役（1281年）における台風と推定された。弘安の役（1281年）の台風はグレゴリオ暦で8月後半に発生したものであり、この時期の台風は九州西岸を北上することが多い（例えば令和2年台風10号（2020年8月31日～9月10日）；昭和60年台風13号（1985年8月25日～9月1日））。これに対して、文永の役（1274年）はグレゴリオ暦で11月となり、この時期の大規模な台風襲来の可能性は小さい。

さらに、天草大蛇池（池田池）において得られた湖底堆積物基底（深度22m）までの試料を用いて、元寇以降6700年前までに10回の台風層準を見出した。これらの台風層準について珪藻遺骸および黄金色藻休眠胞子の解析を行った結果、10回のうち8回の災害層準において高潮災害の発生が推定された。残り2回の災害では、大規模な土砂崩壊が生じていたことがわかった。

これらの11回の台風災害履歴について、韓半島（Park ほか 2019）および台湾（鹿島 未公表）における調査結果と対比を行った（第40図）。これらの災害履歴には明らかに時代的整合性があり、東アジアにおける広域な気候変動との関連が示唆された。これらの災害層準を、エルニーニョ・ラニーニャで代表される ENSO 活動の指標となる、西太平洋表面海水温の変化曲線と対比すると、海水温低下期に災害層準が一致することがわかった。

引用文献

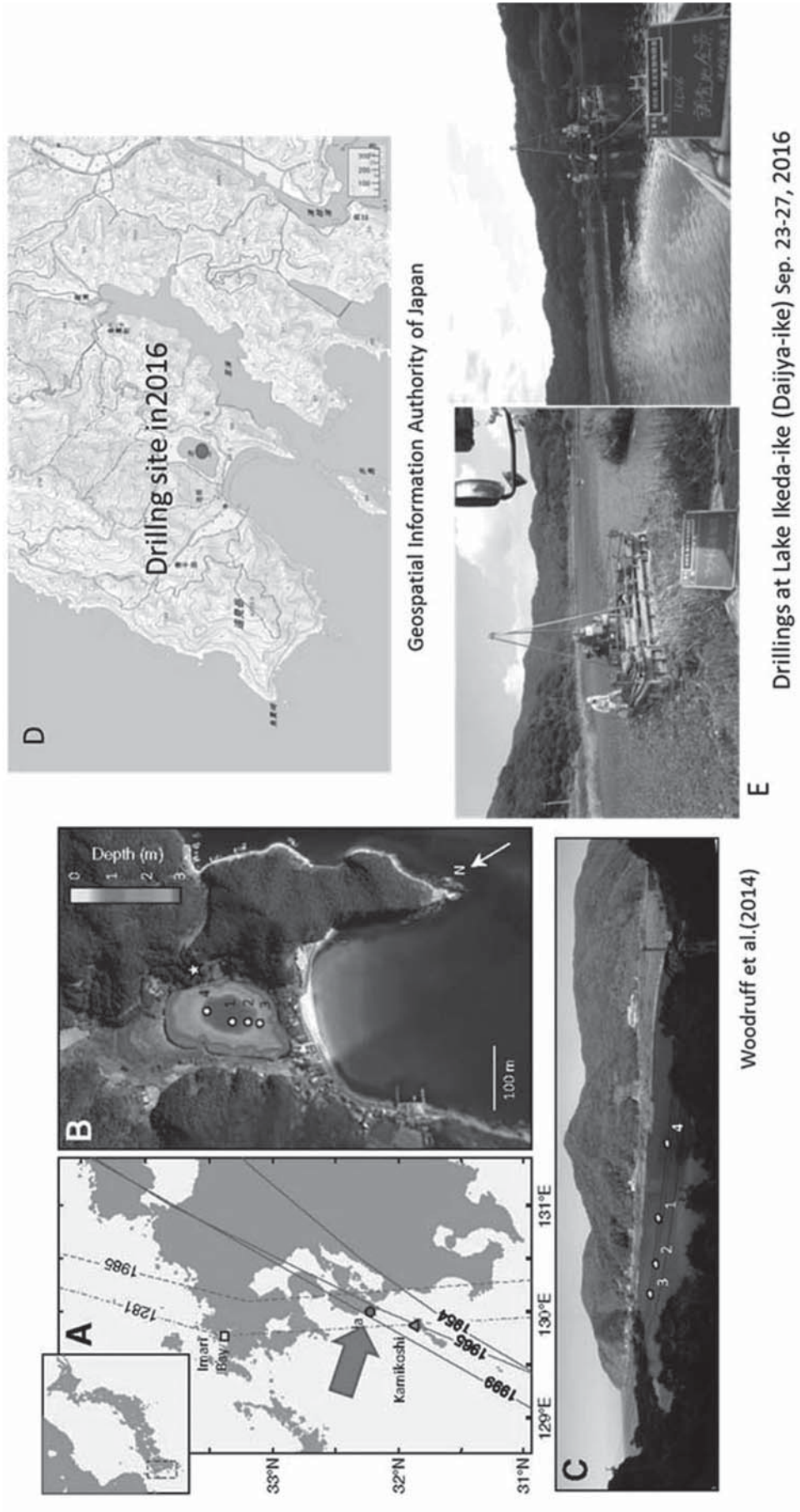
水越允治 2009「文永の役に嵐は吹いたのか」『天気』56（11）、961～963頁

Park, J., Park, J., Yi, S. Kim, J.C., Lee, E. and Choi, J. (2019) Abrupt Holocene climate shifts in coastal East Asia, including the 8.2 ka, 4.2 ka, and 2.8 ka BP events, and societal responses on the Korean peninsula, Article, Scientific Reports, 9, Article Number: 10806.

Powell, Devin (2014) Japan's Kamikaze Winds, the Stuff of Legend, May Have Been Real. National Geographic, WEB

Edition, <https://www.nationalgeographic.com/science/article/141104-kamikaze-kublai-khan-winds-typhoon-japan-invasion>

Woodruff, J.D., K. Kanamaru K., S. Kundu S., Cook, T.L. (2015) Depositional evidence for the Kamikaze typhoons and links to changes in typhoon climatology *Geology* (2015) 43 (1) : 91-94. <https://doi.org/10.1130/G36209.1>



第33図 元寇時の台風災害復元を目的とした天草大蛇池 (池田池) における湖底掘削調査

A : 大蛇池 (池田池) 位置図および主要台風経路 (1985年および1999年の台風については第39図を参照)

B : 大蛇池 (池田池) における Woodruff ほか (2014) 掘削調査地点

C : 大蛇池 (池田池) 風景と Woodruff ほか (2014) 掘削調査地点

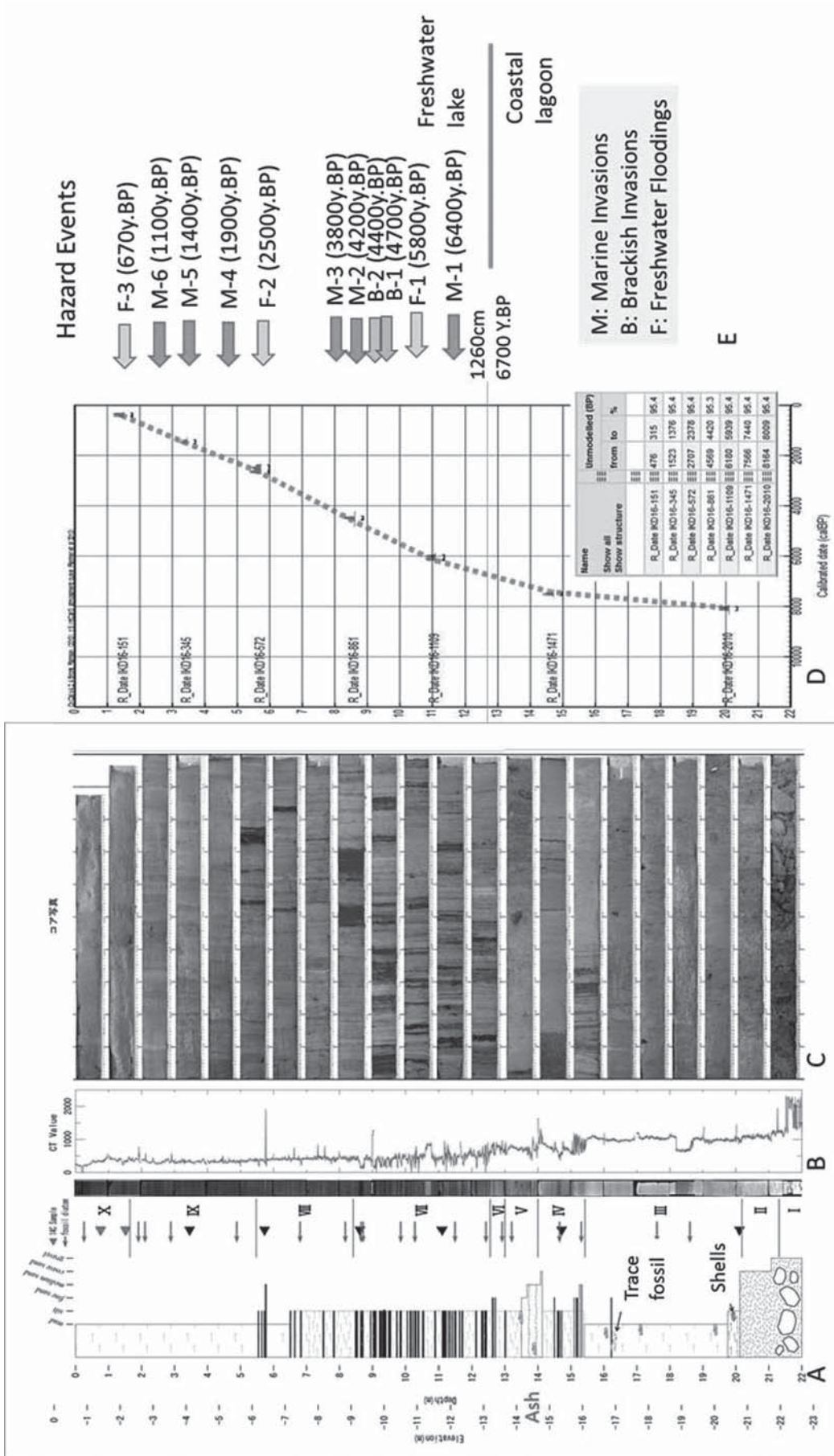
A-C は Woodruff ほか (2015) による

D : 原口ほかによる大蛇池 (池田池) 掘削調査地点 (電子国土.WEB) を利用)

<https://maps.gsi.go.jp/#16/32.245229/129.987681/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>

E : 原口ほかによる大蛇池 (池田池) 掘削調査風景 (2016年9月23-27日実施)

Woodruff ほかによる調査では、湖底下5.5mまでの試料が採取された。原口ほかの調査では、湖底堆積物の基底までの、湖底下22mまでの試料が採取された。



第34図 大蛇池（池田池）における掘削調査結果

2016年に湖底堆積物基底まで、22mの不攪乱コア試料が採取された

A：地質柱状図

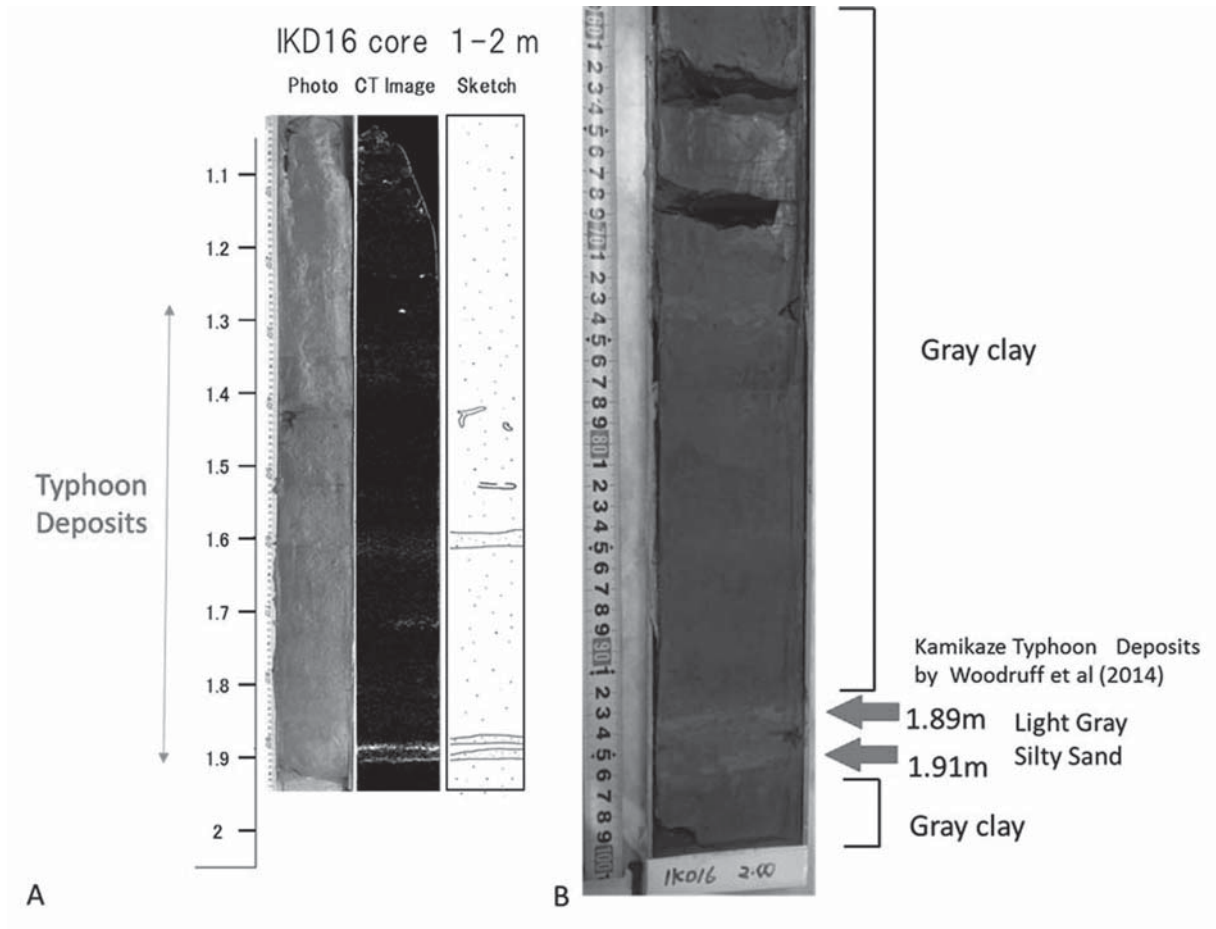
B：CT画像とCT値変動曲線

C：コア写真

D：炭素14年代測定結果と深度-堆積年代曲線

E：珪藻遺骸および貴金色藻休眠胞子から推定された台風災害層準

大蛇池（池田池）はラグーンであったが、約6700年前に淡水湖沼となっている。台風災害層準は、高潮を伴う台風（M1-M6）、塩水流入が見られ、高潮の発生の可能性が高い台風（B1-B2）、高潮の発生は確認されなかったが、大規模土砂崩壊を伴う台風（F1-F3）に区分している。



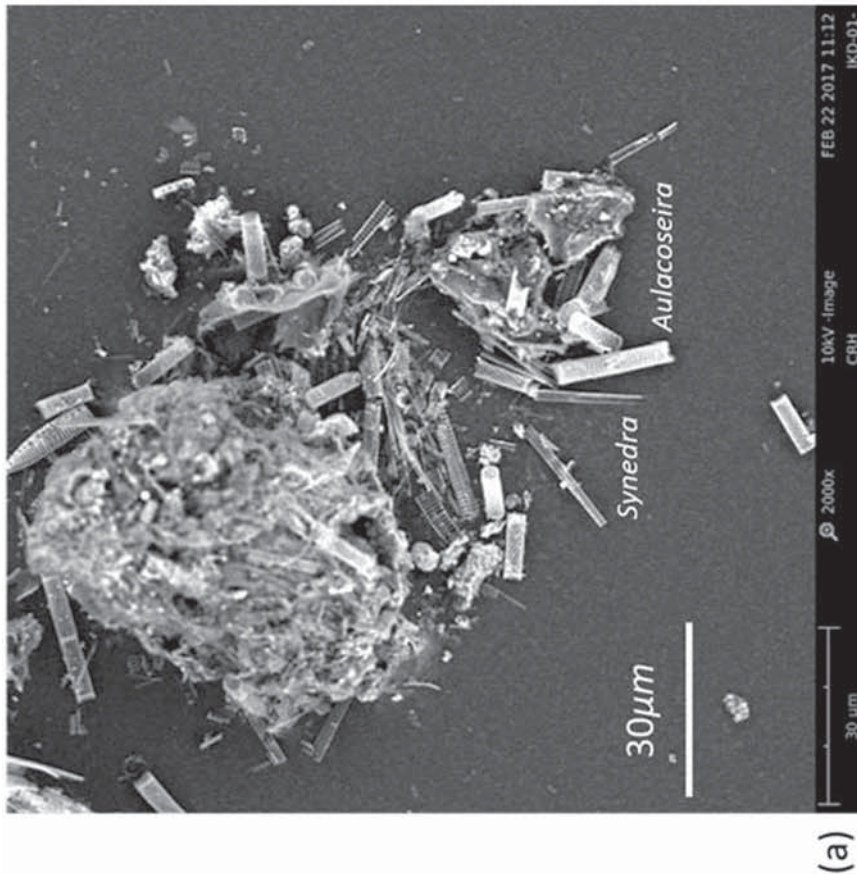
第35図 大蛇池（池田池）における元寇時の台風堆積物

A：コア写真とCT画像
B：拡大コア写真

Woodruff ほか（2015）は深度1.91mおよび1.89mの砂層を、それぞれ文永の役（1274年）と弘安の役（1281年）における台風層準としていた。しかし、本研究の結果、深度1.91-1.28mまでが一連の台風堆積物であり、弘安の役（1281年）における台風と推定された。



Depth 1.91m



Depth 0.25m

第36図 大蛇池（池田池）における走査型電子顕微鏡を用いた湖底堆積物の観察

(a) 定常時における湖底堆積物の走査型電子顕微鏡映像（深度0.25m）

球状の物体は糞粒。

写真の糞粒は半壊しており、中に含まれる珪藻遺骸が観察される。

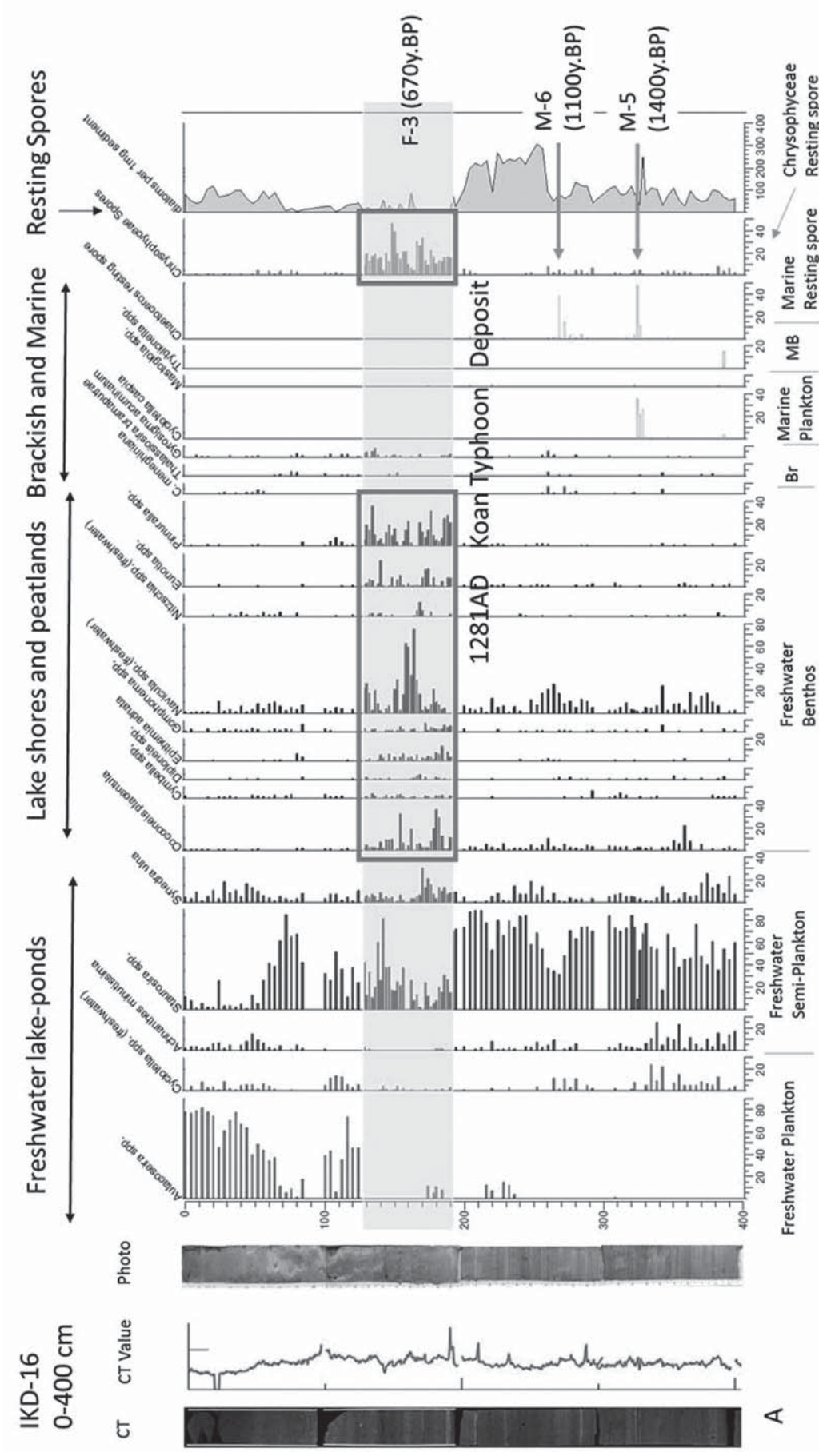
Aulacoseira, *Synedra* : 珪藻属名

(b) 元寇台風堆積物の走査型電子顕微鏡映像（深度1.91m）

砂粒が多く観察され、定常時における堆積物と大きく異なる。

Pinnularia, *Navicula*, *Gyrosigma* : 珪藻属名

Resting spore : 黄金色藻体眠孢子



第37図 (A) 珪藻遺骸および黄色藻休眠胞子の変動

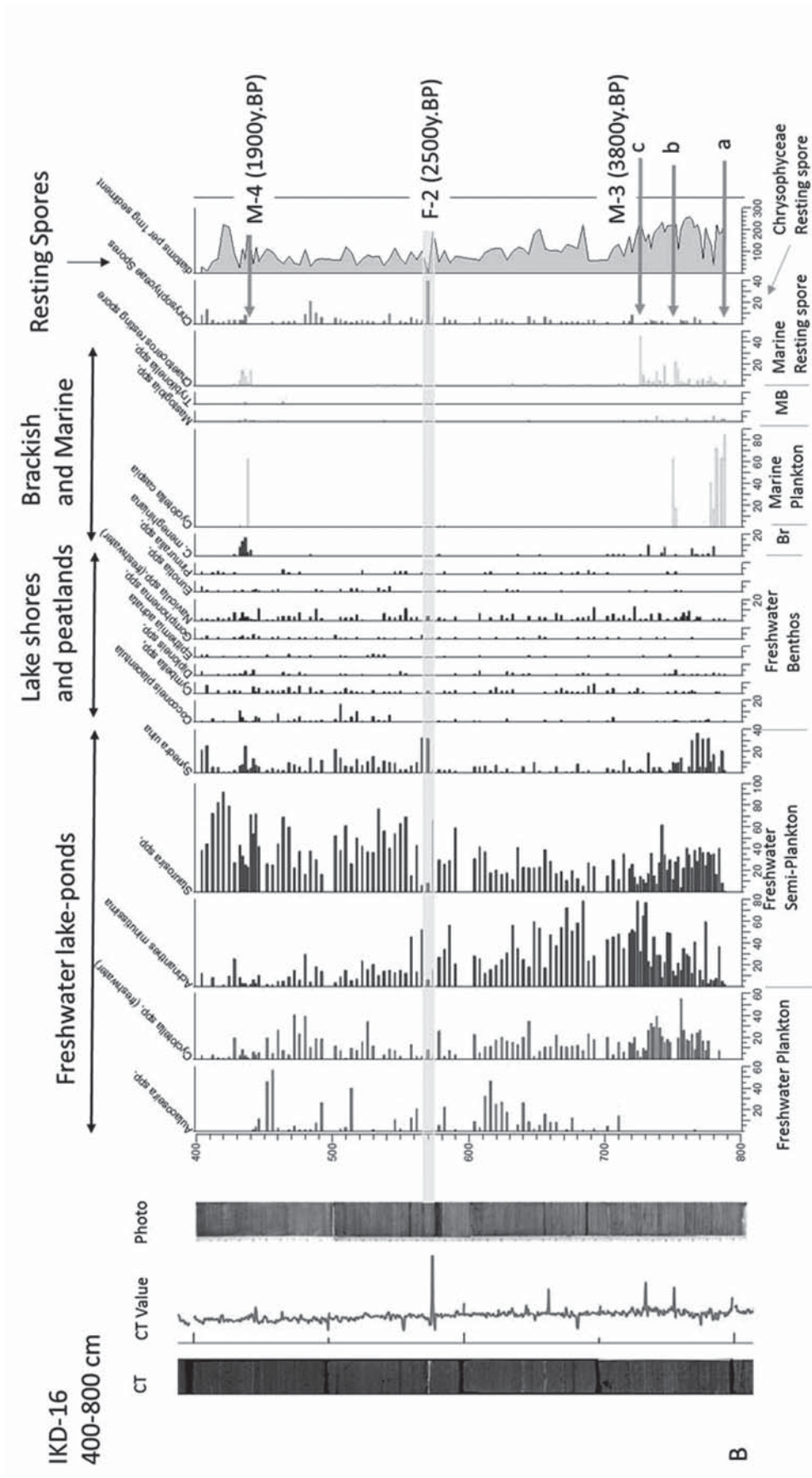
A : 深度0-400cm

Freshwater lake-pond : 淡水の池沼に多産する珪藻種

Lake shore and peatlands : 湖岸や泥炭地に多産する珪藻種

Brackish and Marine : 汽水および海水域に多産する珪藻種

Resting Spores : 黄色藻休眠胞子



第37図 (B) 珪藻遺骸および黄金色藻休眠胞子の変動

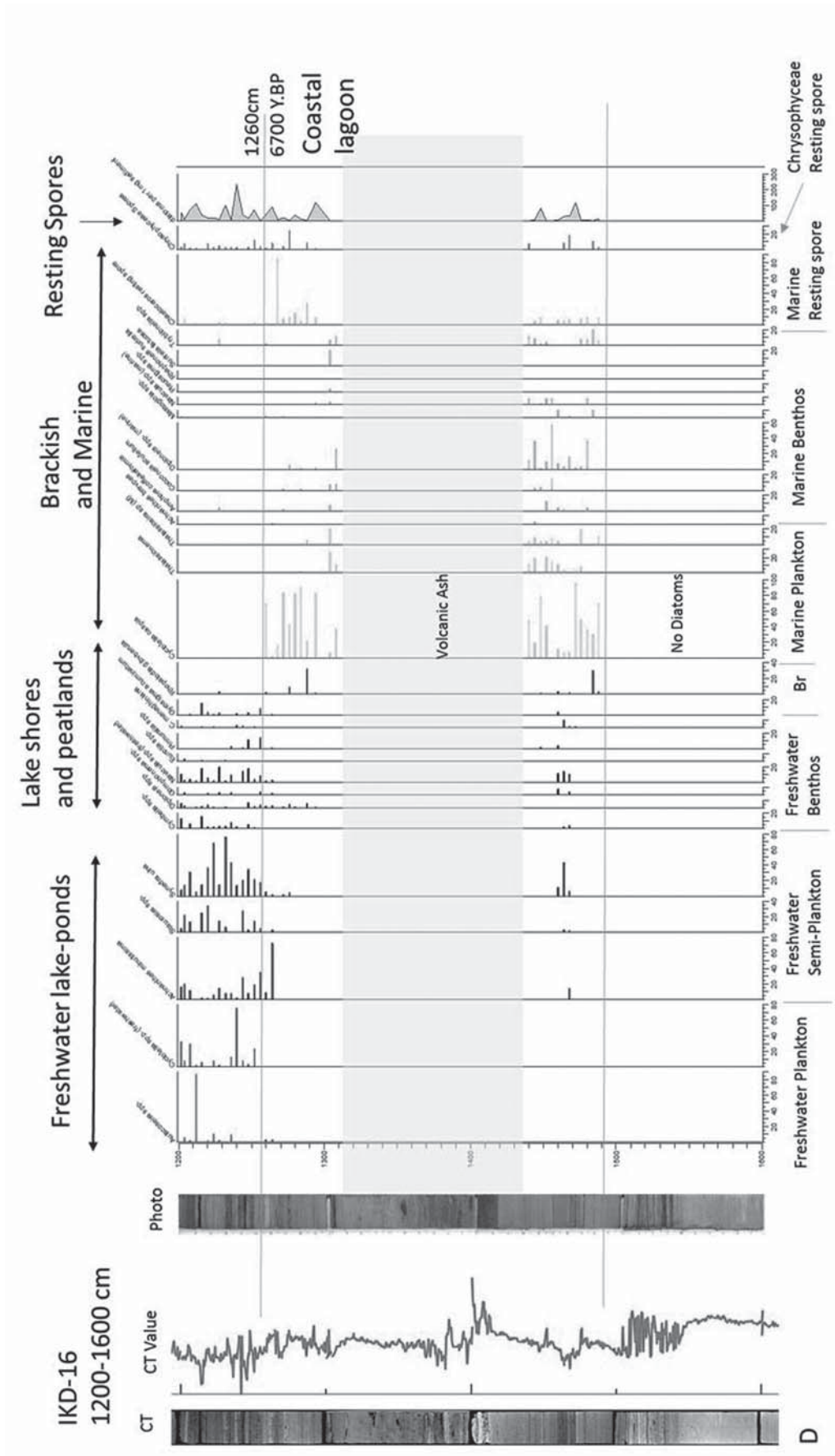
B : 深度400-800cm

Freshwater lake-pond : 淡水の池沼に多産する珪藻種

Lake shore and peatlands : 湖岸や泥炭地に多産する珪藻種

Brackish and Marine : 汽水および海水域に多産する珪藻種

Resting Spores : 黄金色藻休眠胞子



第37図 (D) 珪藻遺骸および黄金色藻休眠胞子の変動

D : 深度1200-1600cm

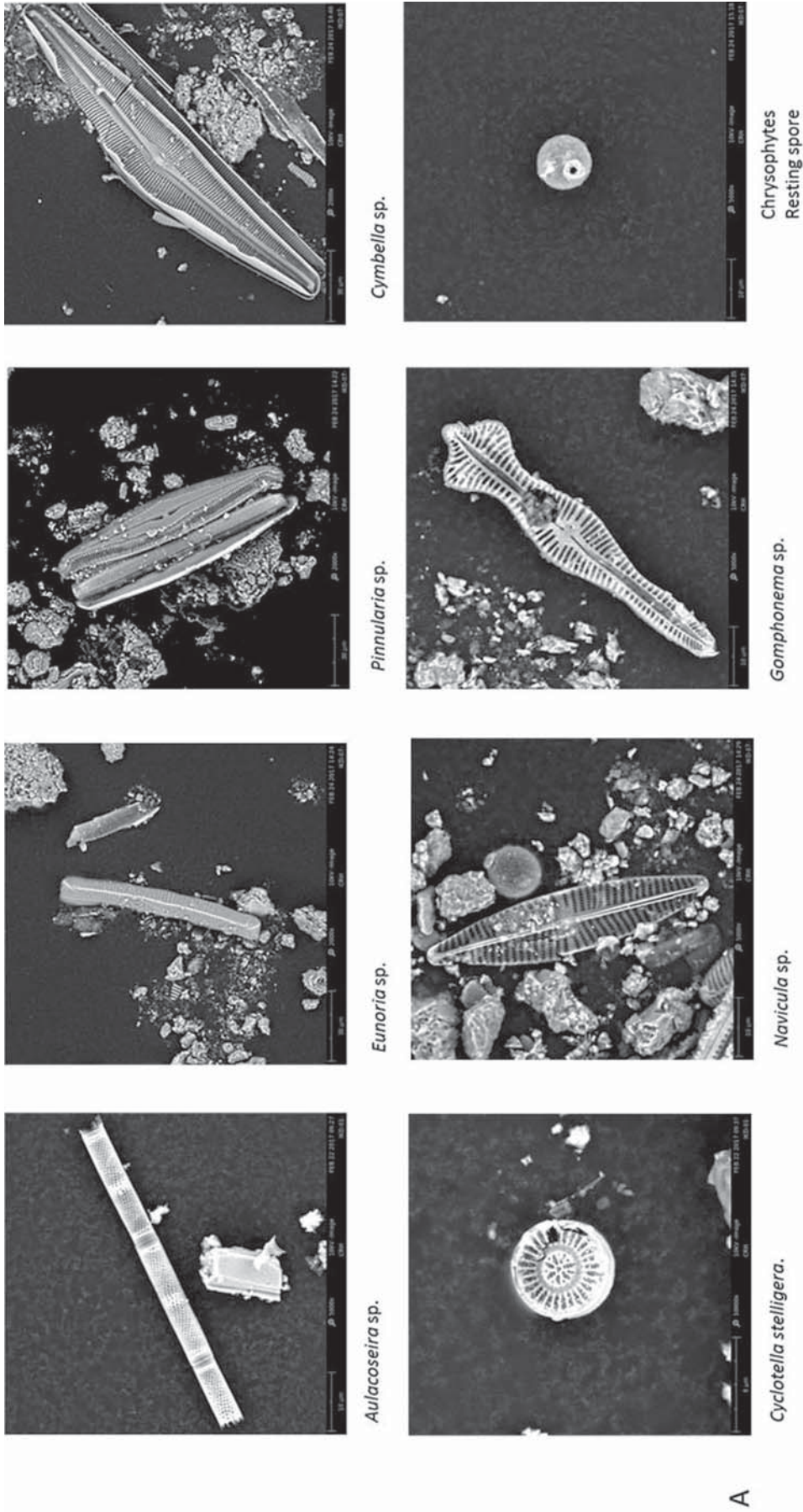
Freshwater lake-pond : 淡水の池沼に多産する珪藻種

Lake shore and peatlands : 湖岸や泥炭地に多産する珪藻種

Brackish and Marine : 汽水および海水域に多産する珪藻種

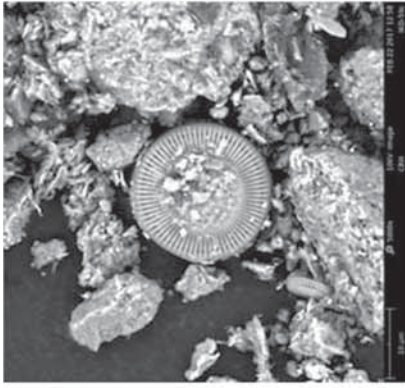
Resting Spores : 黄金色藻休眠胞子

深度12.6mを境界として、それまでの塩水性の海岸ラグーンから淡水湖沼へ変化した。

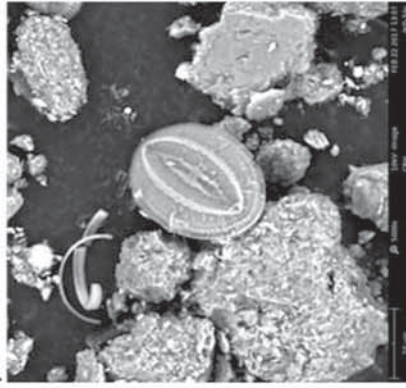


第38図 (A) 珪藻遺骸および黄金色藻休眠孢子走査型電子顕微鏡写真

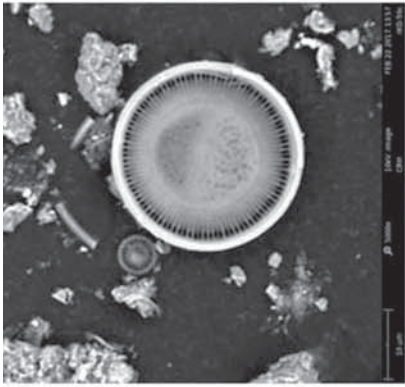
A : 淡水生



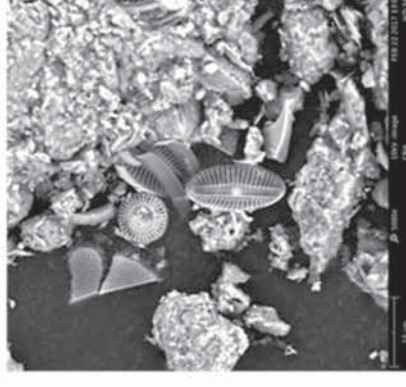
Cyclotella caspia (*C. atmus v. gracilis*)
Marine water species



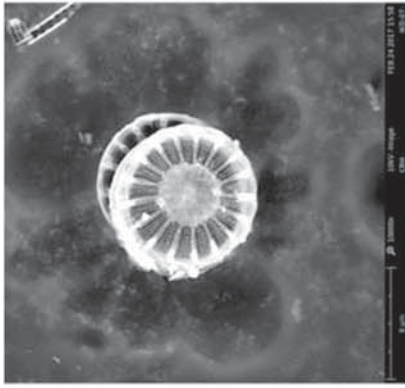
Cocconeis pellucida



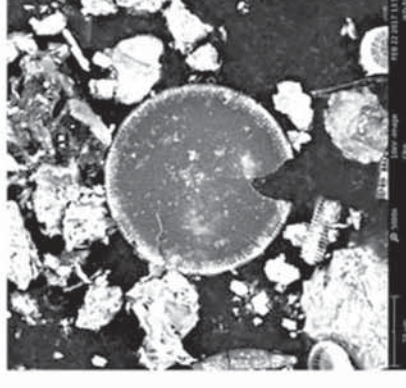
Cyclotella caspia (*C. atmus v. gracilis*)
Marine water species



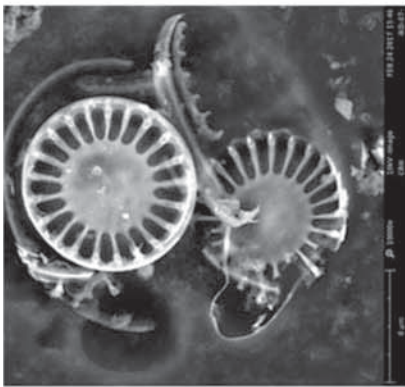
Cyclotella sp. (upper)
Diploneis smithii (lower)



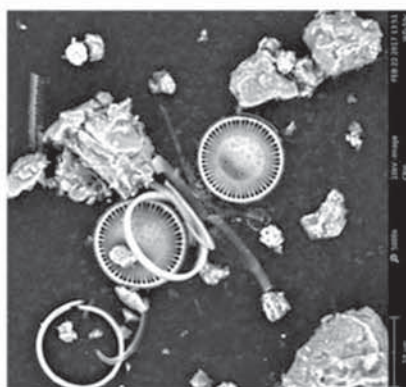
Cyclotella meneghiniana (Brackish water species)



Thalassiosira sp.



Cyclotella meneghiniana (Brackish water species)



Cyclotella caspia (*C. atmus v. gracilis*)

B

Marine water species

第38図 (B) 珪藻遺骸および黄金色藻体眠胞子走査型電子顕微鏡写真

B : 汽水生および海水生



31/8/2020-10/09/2020

Typhoon Haishen (2020) 令和2年台風10号

気象庁データベースより

https://www.data.jma.go.jp/fcd/yocho/typhoon/route_map/bstv2020.html

A



25/8/1985-1/9/1985

Typhoon Pat (1985) 昭和60年台風13号

気象庁データベースより

https://www.data.jma.go.jp/fcd/yocho/typhoon/route_map/bstv1985.html

B

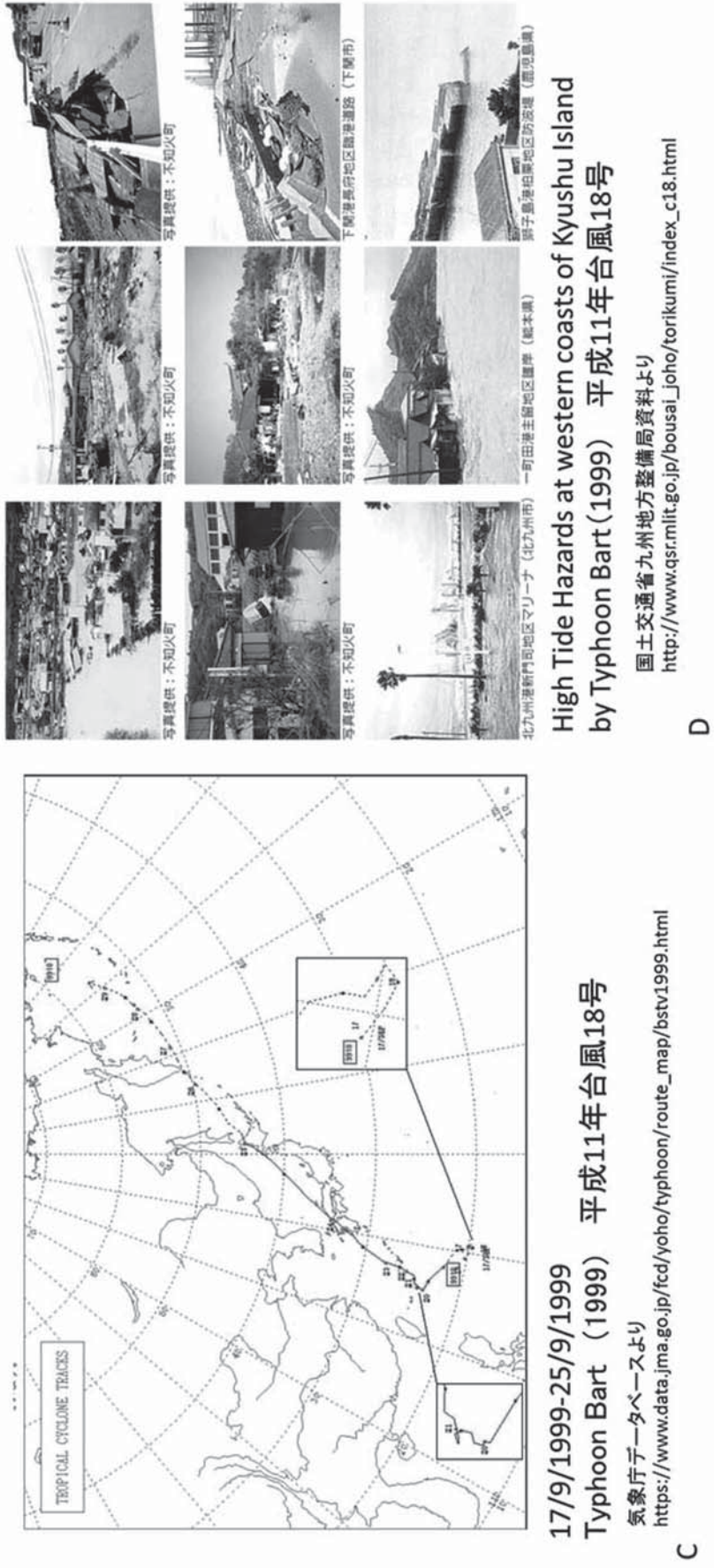
第39図 (A、B) 九州西岸を通り、大きな被害を与えた台風

A：令和2年台風10号（2020年8月31日～9月10日）

B：昭和60年台風13号（1985年8月25日～9月1日）

台風経路は気象庁データベースによる。

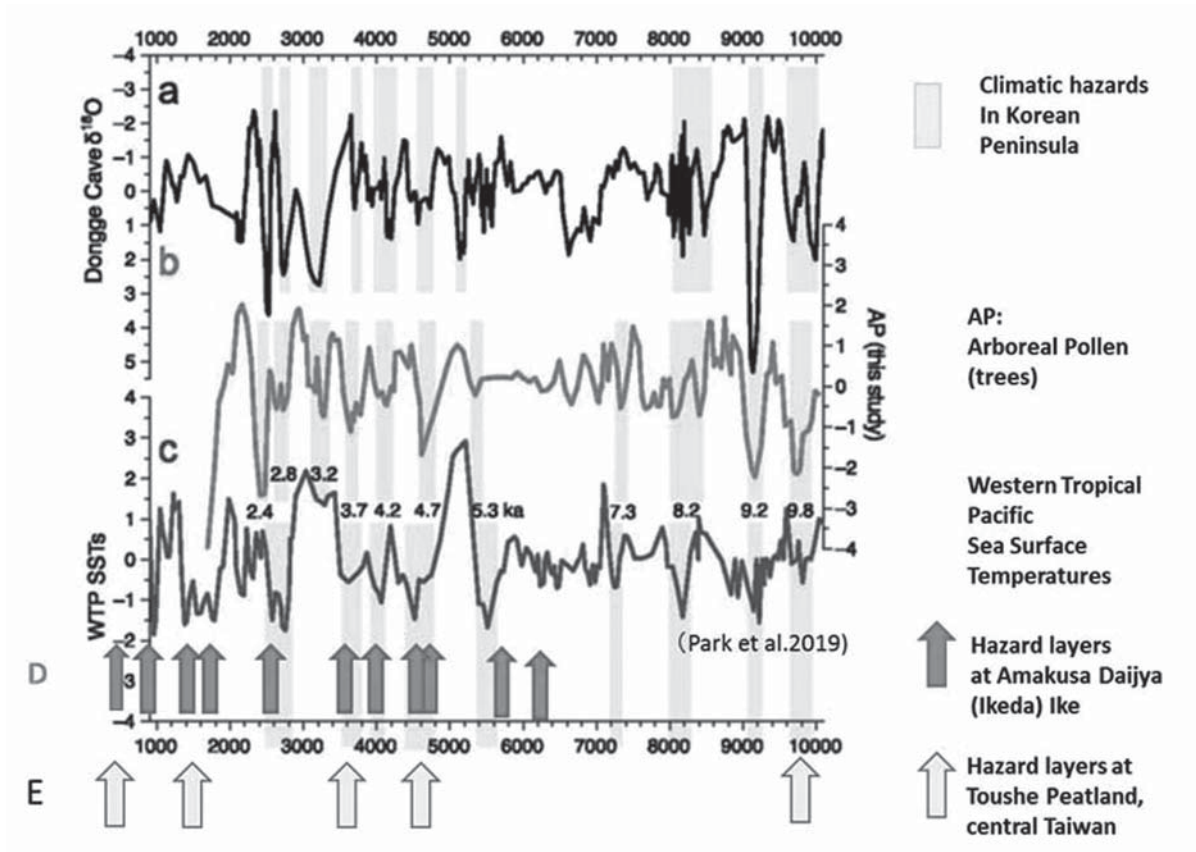
A、Bは弘安の役の台風と同じ8月に発生して、九州西部をかすめ北上し、韓半島にも被害を与えている。



第39図 (C、D) 九州西岸を通り、大きな被害を与えた台風

C、D：平成11年台風18号（1999年9月17日～9月25日）
 台風経路は気象庁データベースによる。
 平成11年台風18号に伴う高潮災害写真は、国土交通省九州地方整備局資料による。

C、Dは9月に発生しているが、深刻な高潮災害を九州西部にもたらした。



第40図 東アジアにおける災害発生層準と気候変動、海水温変動との相関

a: 中国 Dongge 鍾乳洞における酸素同位体-18変動

b: 韓国における樹木花粉の変動

c: 西太平洋表面海水温の変動

黄色ゾーン 韓国における災害層準年代

上記4項目は Park ほか (2019) による。

D: 天草大蛇池 (池田池) において発見された台風層準 (本研究)

E: 台湾中部頭社泥炭地において発見された土砂災害層準 (鹿島ほか、未発表)

韓国、天草大蛇池 (池田池) 台湾中部頭社泥炭地における災害層準には共通性が見られ、いずれも西太平洋表面海水温の低下期に対比される

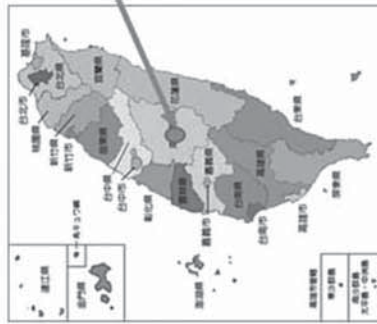
Diatom Assemblages and Flooding layers in Toushe Peatland

	Lithofacies	Depth	Diatom valves (1mg)	Dominated Diatom Species	C14 ages Non calibrated (Calibrated 2σ)
Recent (After 1400 AD)	Surface Soil	2-20	345-19500	<i>Eunotia serrata</i> , <i>E. lunaris</i>	
Flooding IV (600-750 cal AD)	Peat Bog	20-56	0-90	None	590 ± 20(25cm) (AD1306-1403)
	Silt-Fine Sand	56-68	735-27720	<i>Cymbella</i> spp., <i>Eunotia</i> spp., <i>Frustulia</i> spp., <i>Pinnularia</i> spp.	1365 ± 20(56cm) (AD643-755) 1540 ± 20(68cm) (AD437-595)
Flooding III (1800 cal BC)	Peat Bog	68-155	0	none	3495 ± 20(160cm) (BC1885-1747)
	Silt-Fine Sand	155-160	200-4290	<i>Eunotia</i> spp., <i>Frustulia</i> spp., <i>Pinnularia</i> spp., <i>Navicula</i> spp.	
Flooding II (2500 cal BC)	Peat Bog	160-202	0-40	None	3925 ± 20(200cm) (BC2471-2304)
	Silt-Fine Sand	202-240	120-44600	<i>Aulacoseira</i> spp., <i>Cymbella</i> spp., <i>Pinnularia</i> spp., <i>Stauroneis</i> spp.	4000 ± 20(220cm) (BC2573-2469)
Flooding I (7500 cal BC)	Peat Bog	240-470	0-10	None	6590 ± 25(300cm) (BC5614-5480) 7945 ± 25(395cm) (BC7035-6944)
	Silt-Fine Sand	470-476	192-1245	<i>Navicula</i> spp., <i>Pinnularia</i> spp.	8375 ± 30(465cm) (BC7528-7549)
	Peat Bog	478-500	0-36	None	
				Only fragments	



A 頭社泥炭土活盆地

<https://www.sunmoonlake.gov.tw/ja/attractions/detail/307>



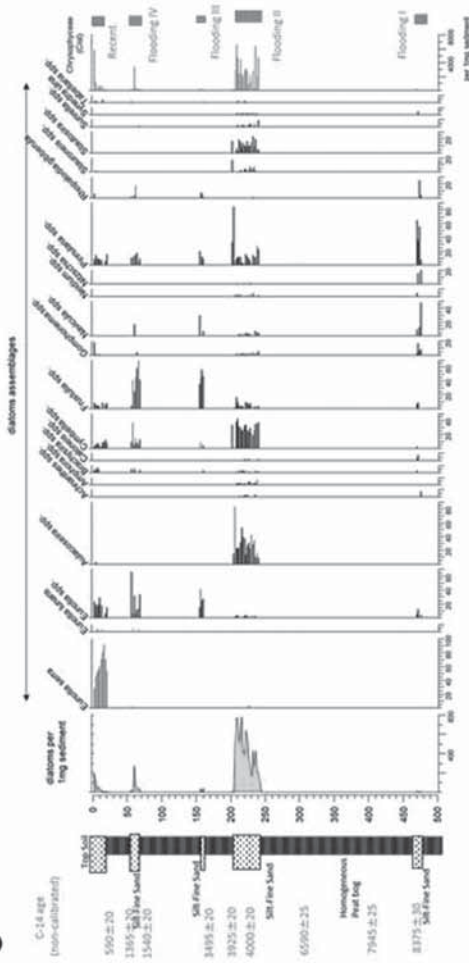
頭社泥炭地
Toushe Peatland

B

- A: 頭社泥炭地風景
- B: 頭社泥炭地位置図
- C: 頭社泥炭地において発見された土砂災害層準
- D: 珪藻遺骸および黄金色藻休眠胞子の変動と土砂災害層準

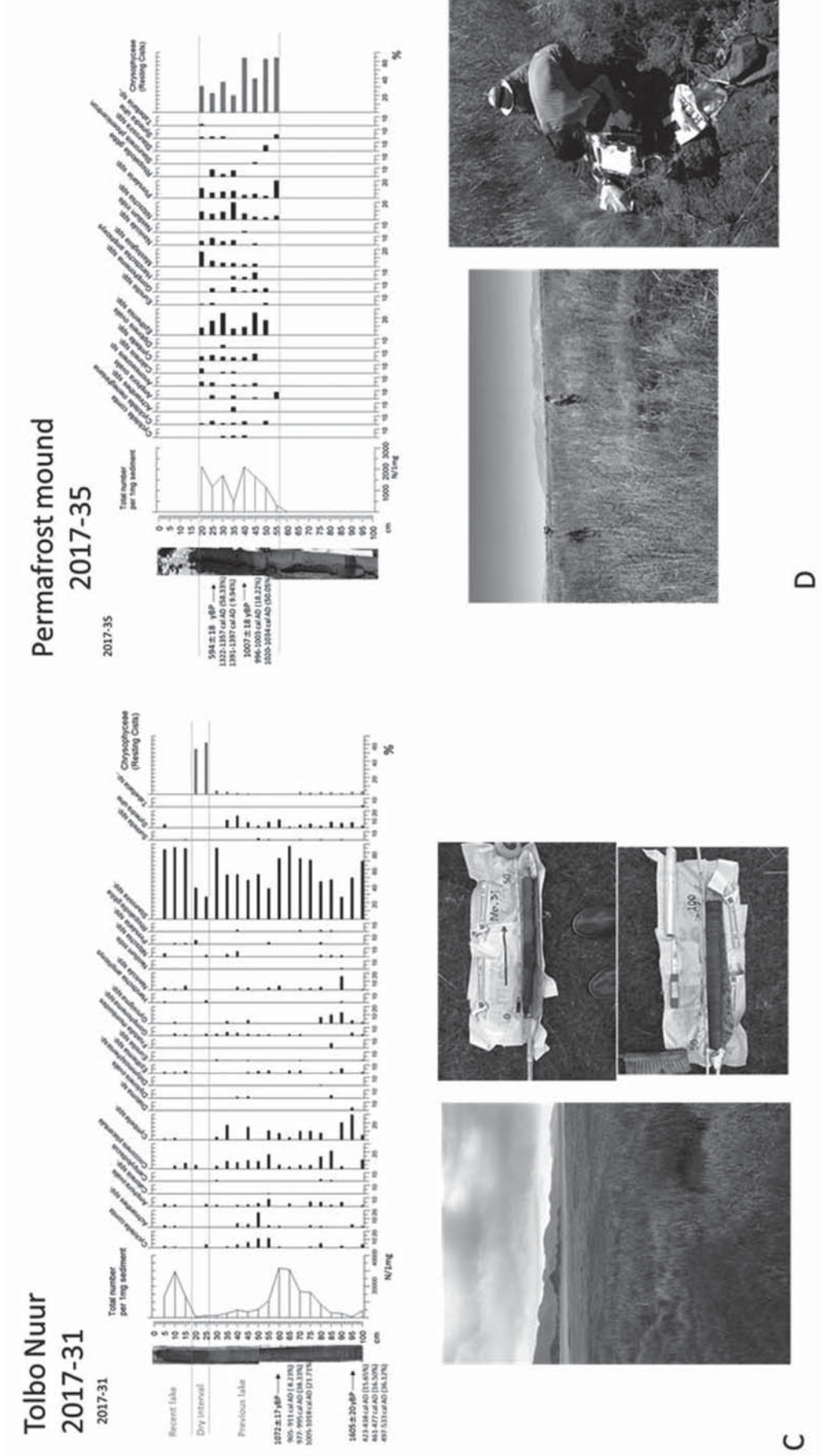
珪藻遺骸および黄金色藻休眠胞子の変動から5回の土砂災害層準が復元され、それぞれは7500 cal. BC, 2500 cal. BC, 1800 cal. BC, 600-750 cal. AD, 1400 cal. AD以降に年代測定された。これらの災害は、天草大氾池（池田池）および韓半島における災害層準と対比される。

C



D

第41図 台湾中部頭社泥炭地において発見された土砂災害層準



第42図 (C、D) モンゴル西部アルタイ山西部における地質調査 (2017年実施)

C : Tolbo Nuur (湖) における掘削調査結果と調査風景

D : 永久凍土地域の凍上マウンドにおける掘削調査結果と調査風景

中世の温暖化期における、湿潤化・湖沼水位の上昇が, jijig Nuur (湖) Tolbo Nuur (湖) で確認された。その後モンゴルにおける民族移動をもたらした13世紀前後において、水位低下と乾燥化が確認された。

HZK1905および1805調査地点出土の 石積み遺構構築石材の岩石学的分析

足立 達朗

1. はじめに

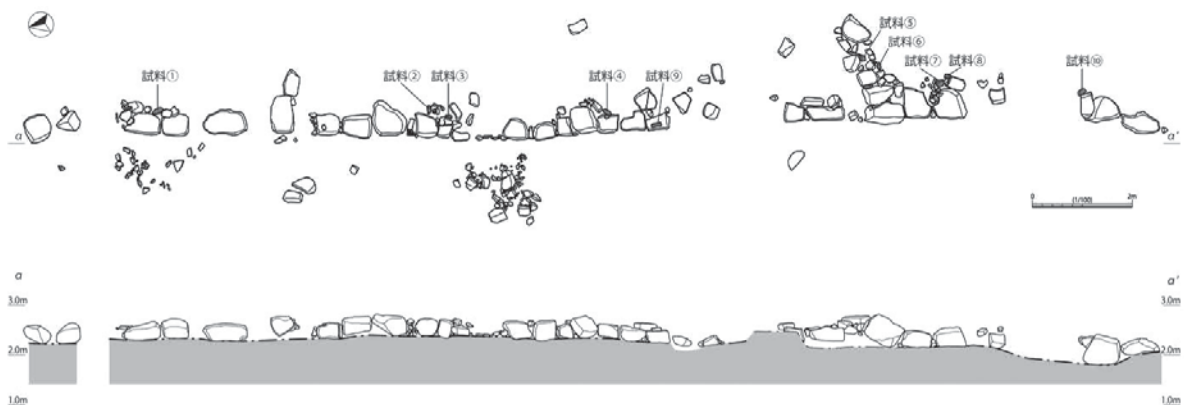
遺構を構築する石材についての岩石学的な解析は、その岩石が持つ地質学的な背景を明らかにでき、採取地点に関する手がかりを与える。このことは、遺構構築の材料の調達戦略に関する情報を与える。本稿では、HZK1905および1805調査地点で出土した石積み遺構の構築石材を岩石学的に解析した上で、足立・田尻（2018）にて報告済みの HZK1603調査地点の石積み遺構構築石材との対比を行った。

2. 遺構構築石材試料の岩石記載

本報告で分析を実施した石積み遺構の構築石材は、HZK1905調査地点の石積み遺構 SF05の間詰石と思われる小礫と、HZK1805調査地点の石積み遺構 SF00の前方（博多湾側）に広がった礫散布 SX08および09の一部である。石積み遺構本体の構築石材の岩石種にはバリエーションが認められるが、今回分析を実施した試料は、石積み遺構本体の岩石種と同等のバリエーションを分析できるように選択し採取したものである。

肉眼観察に基づくと、両調査地点における構築石材は、礫岩（構成鉱物・岩片の最大粒径が10mm程度の中礫～細礫礫岩）、円磨度が中～低程度の粒子を含む砂岩および変成岩類から構成される。今回分析を行ったのは、HZK1905調査地点の10試料および HZK1805調査地点の6試料である。なお、HZK1905調査地点で採取した試料の位置は第43図に示した。

以下に試料ごとの記載を記す。各試料の顕微鏡写真は第44図に示した。円磨度は Krunbein（1941）の円磨度印象図に基づいた。また、礫岩、砂岩についてはポイントカウント法によるモード分析によって、岩片、長石片、石英片、基質の割合から粒子組成を求め、それに基づいて Okada（1971）の区分法により岩石名を決定し、結果を第3表に示した。



第43図 分析対象とした HZK1905調査地点の石積み遺構構築石材試料の産状

第3表 分析対象試料の岩石名と粒子組成

試料番号	岩石名	岩片	長石	石英	基質
試料1	砂岩 (長石質ワッケ)	19%	19%	2%	61%
試料2	砂岩 (石質ワッケ)	41%	17%	2%	42%
試料3	砂岩 (石質ワッケ)	37%	16%	3%	46%
試料4	砂岩 (石質ワッケ)	20%	7%	1%	73%
試料5	砂岩 (石質ワッケ)	36%	19%	1%	45%
試料6	礫岩	43%	6%	1%	51%
試料7	礫岩	46%	22%	0%	33%
試料8	礫岩	28%	27%	2%	43%
試料9	砂岩 (石質ワッケ)	36%	16%	2%	47%
試料10	礫岩	68%	6%	0%	27%
試料11	緑色片岩 (角閃石 - 斜長石片岩)				
試料12	砂岩 (石質ワッケ)	41%	19%	2%	39%
試料13	超塩基性片岩 (緑泥石 - トレモラ閃石片岩)				
試料14	礫岩	81%	2%	0%	18%
試料15	普通角閃石 - 斜長石片岩				
試料16	砂岩 (石質ワッケ)	50%	18%	0%	33%

2-1. 岩石記載

試料1 (HZK1905-1)

直径0.5mm以下の岩片・鉱物片を含む砂岩 (長石質ワッケ) である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。針状あるいは長柱状の斜長石を含む火山岩と考えられる円磨された岩片と、円磨度が低く自形面を保持した斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。

試料2 (HZK1905-2)

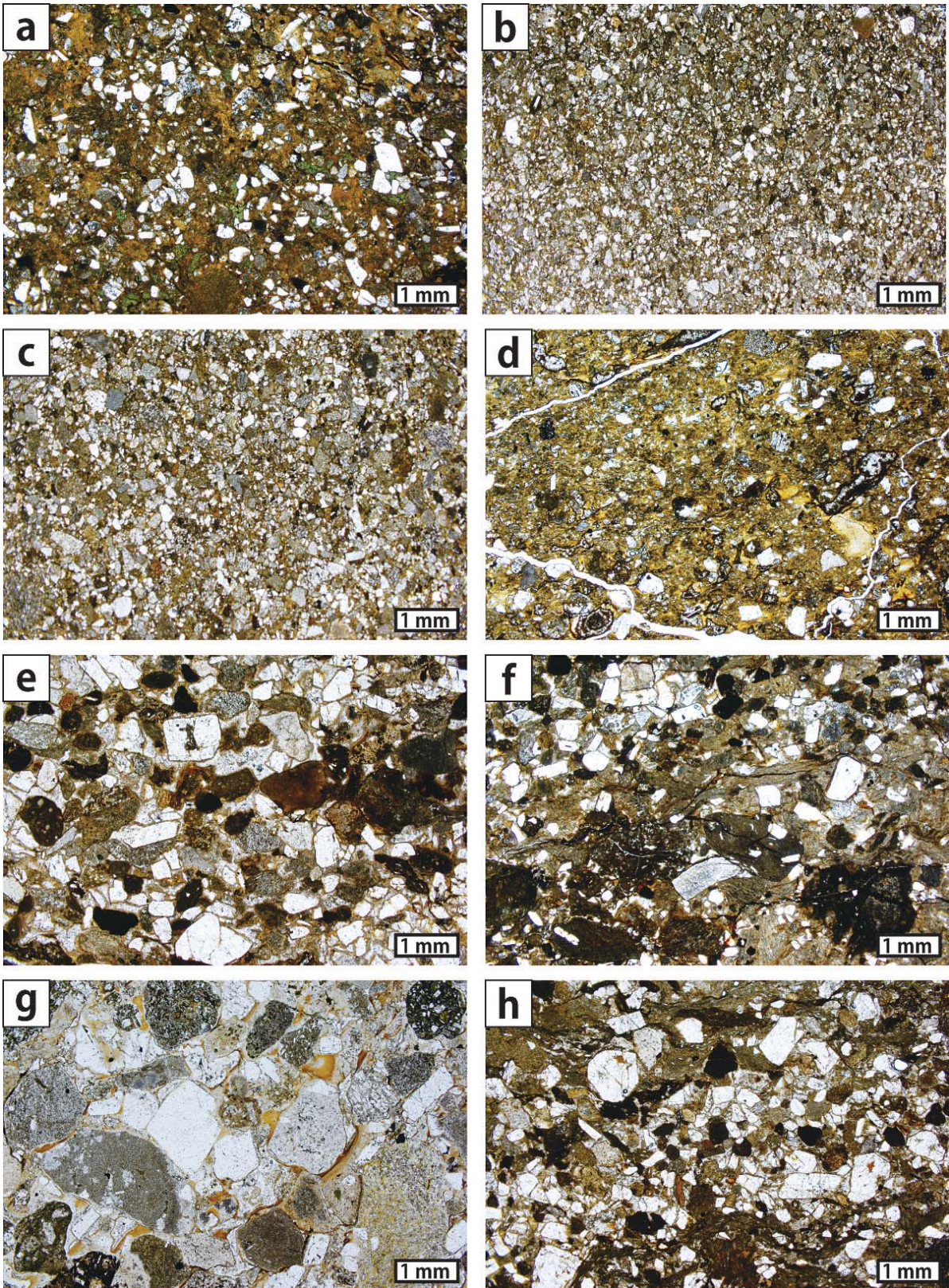
直径0.3mm程度の岩片・鉱物片を含む砂岩 (石質ワッケ) である。全体として円磨度は中程度で、淘汰はやや良い。針状あるいは長柱状の斜長石を含む火山岩や細粒鉱物が層状構造を呈する堆積岩と考えられる円磨された岩片と、破片状の形状を示す斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。

試料3 (HZK1905-3)

直径0.2mm程度の岩片・鉱物片を含む砂岩 (石質ワッケ) である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は中程度である。針状あるいは長柱状の斜長石を含む火山岩や細粒鉱物が層状構造を呈する堆積岩と考えられる円磨された岩片と、破片状の形状を示す斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。

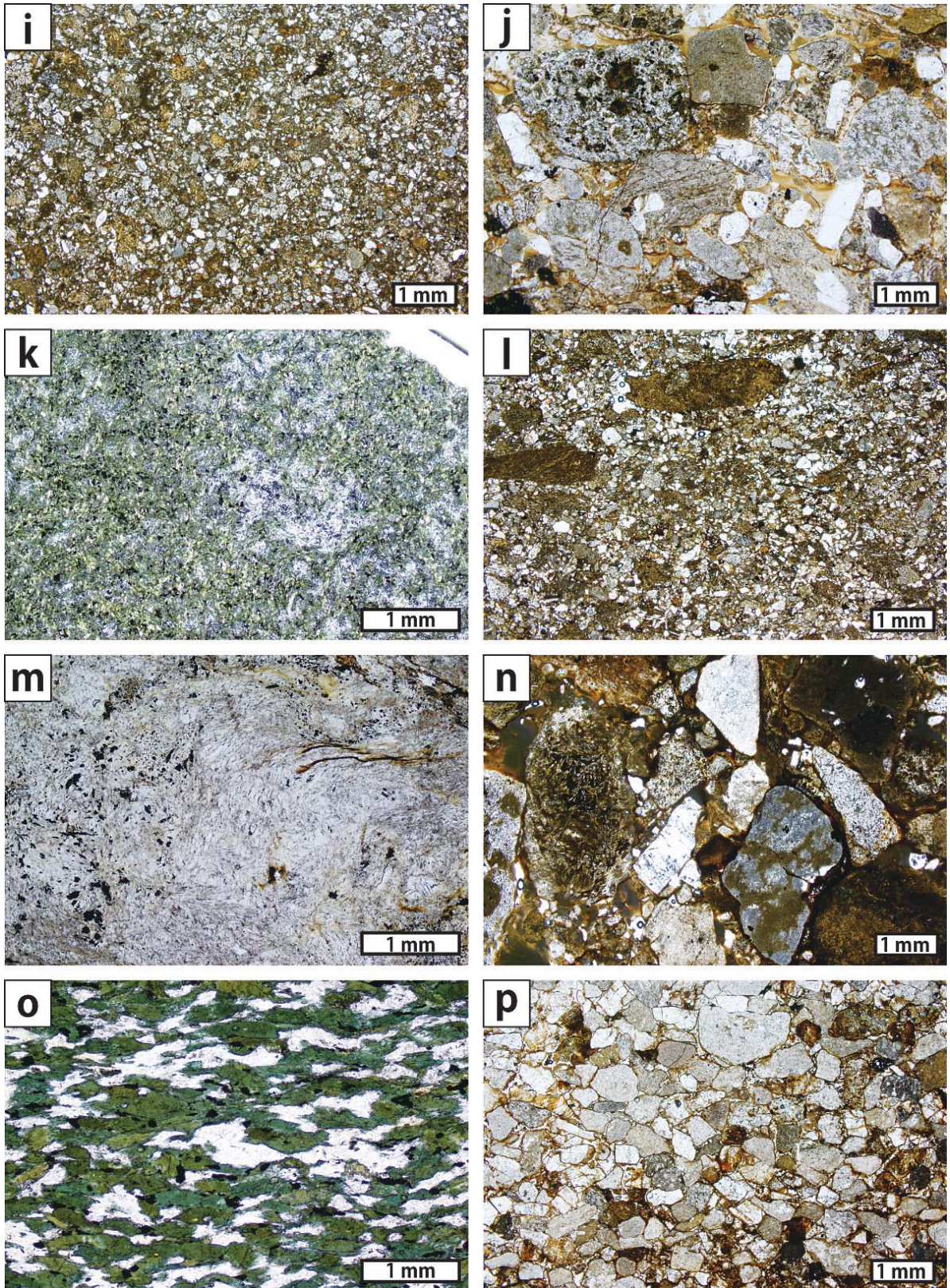
試料4 (HZK1905-4)

直径0.8～0.1mm程度の岩片・鉱物片を含む砂岩 (石質ワッケ) である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。針状あるいは長柱状の斜長石を含む火山岩や細粒鉱物が層状構造を呈する堆積岩と考えられる円磨された岩片と、破片状の形状を示す斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は



明白色を呈し、角ばった形状を示すものが、斜長石や石英などの鉱物片であり、丸みを帯び暗色～灰色を呈するものが岩片である。それらの粒間を充填するのが基質である。

第44図 石積み遺構構築石材の岩石薄片を用いた顕微鏡写真（1）



石積み遺構構築石材の岩石薄片を用いた顕微鏡写真
第44図 石積み遺構構築石材の岩石薄片を用いた顕微鏡写真（2）

明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなり、わずかに沸石からなるセメントが粒間を充填しているのが認められる。

試料5 (HZK1905-5)

最大径1mm程度の岩片・鉱物片を含む砂岩(石質ワッケ)である。全体として円磨度は低く、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。鉱物片は斜長石と石英であり、これらは角ばった破片状の形状を示す。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。粒間を充填するセメントとして沸石が認められる。

試料6 (HZK1905-6)

最大径2mm程度の岩片・鉱物片を含む礫岩(細礫礫岩)である。全体として円磨度は低く、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。鉱物片は斜長石と石英であり、これらは角ばった破片状の形状を示す。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。粒間を充填する沸石が認められる。

試料7 (HZK1905-7)

最大径5mm程度、全体として2mm前後の岩片・鉱物片を含む礫岩(細礫礫岩)である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。円磨度が低く自形面を保持した斜長石を含む。石英はほとんど含まれていない。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。

試料8 (HZK1905-8)

最大径1.5mm程度の岩片・鉱物片を含む礫岩(細礫礫岩)である。全体として円磨度は低く、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。鉱物片は斜長石と石英であり、これらは角ばった破片状の形状を示す。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。

試料9 (HZK1905-9)

直径0.2mm程度の岩片・鉱物片を含む砂岩(石質ワッケ)である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は中程度である。針状あるいは長柱状の斜長石を含む火山岩や細粒鉱物が層状構造を呈する堆積岩と考えられる円磨された岩片と、破片状の形状を示す斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。

試料10 (HZK1905-10)

最大径7mm程度の岩片・鉱物片を含む礫岩(細礫礫岩)である。全体として円磨度は低く、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。鉱物片は斜長石と石英であり、これらは角ばった破片状の形状を示す。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。粒間を充填する沸石が認められる。

試料11 (HZK1805-11)

100 μ m程度の粒径を持つアクチノ閃石、普通角閃石、斜長石および不透明鉱物を含む緑色片岩(角閃石-斜長石片岩)である。鉱物の配列、伸長性、片理は弱く塊状である。

試料12 (HZK1805-12)

直径0.4mm程度の岩片・鉱物片を含む砂岩(石質ワッケ)である。2mm程度の粒径を持つ細礫をわずかに含む。全体として円磨度は中程度で、淘汰はやや良い。針状あるいは長柱状の斜長石を含む火山岩や細粒鉱物が層状構造を呈する堆積岩と考えられる円磨された岩片と、破片状の形状を示す斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。

試料13 (HZK1805-13)

100 μ m 程度の粒径を持つトレモラ閃石、緑泥石、不透明鉱物からなる超塩基性片岩（緑泥石－トレモラ閃石片岩）である。緑泥石およびトレモラ閃石の伸長およびその配列による弱い片理が認められる。

試料14 (HZK1805-14)

最大径10mm 程度の岩片・鉱物片を含む礫岩（中礫礫岩）である。全体として円磨度は低く、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。鉱物片は斜長石と石英であるが、その量は多くない。これらの鉱物片は角ばった破片状の形状を示す。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。

試料15 (HZK1805-15)

500 μ m 程度の粒径を持つ普通角閃石、斜長石、チタン石、不透明鉱物からなる普通角閃石－斜長石片岩である。普通角閃石の伸長およびその配列による片理が顕著に認められる。

試料16 (HZK1805-16)

最大径2mm 程度、全体として1mm 前後の岩片・鉱物片を含む砂岩（石質ワッケ）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。円磨度が低く自形面を保持した斜長石を含む。石英はほとんど含まれていない。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。

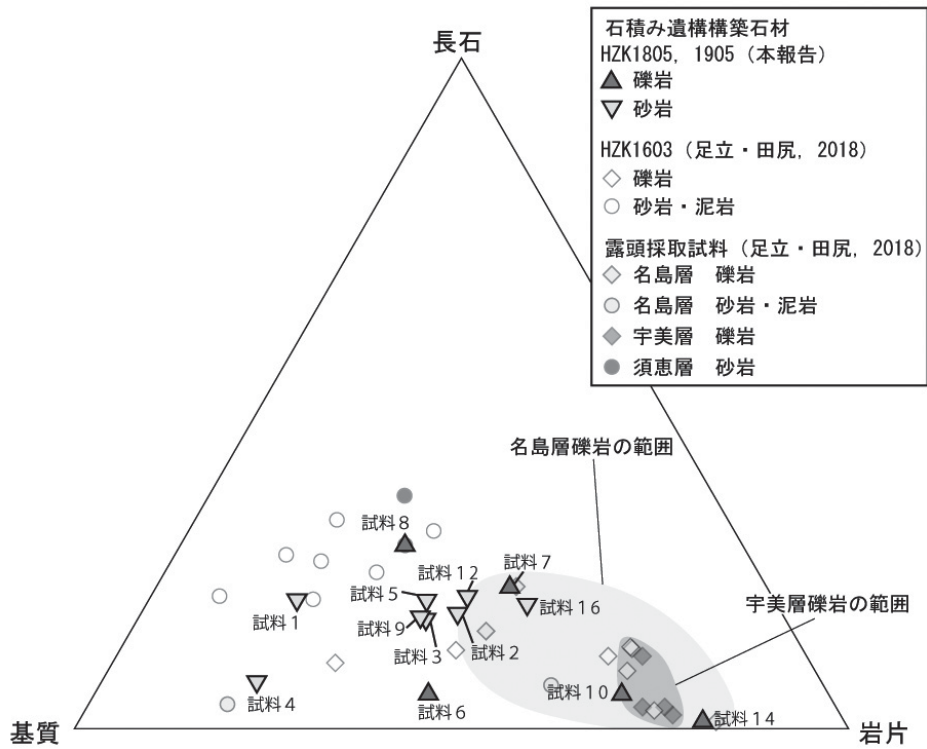
3. 考察

石積み遺構構築石材は主に礫岩、砂岩が占め、わずかに変成岩類が含まれることが分かった。これらの試料のうち、礫岩と砂岩については、主要な構成物質である岩片、長石、基質のモード組成を第3表および第45図に示した。第45図には、箱崎遺跡のHZK1603調査地点に分布する石積み遺構構築石材の粒子組成と、遺跡近傍に分布する礫岩・砂岩からなる名島層、宇美層、須恵層から採取した天然資料の粒子組成（足立・田尻 2018）も示してある。

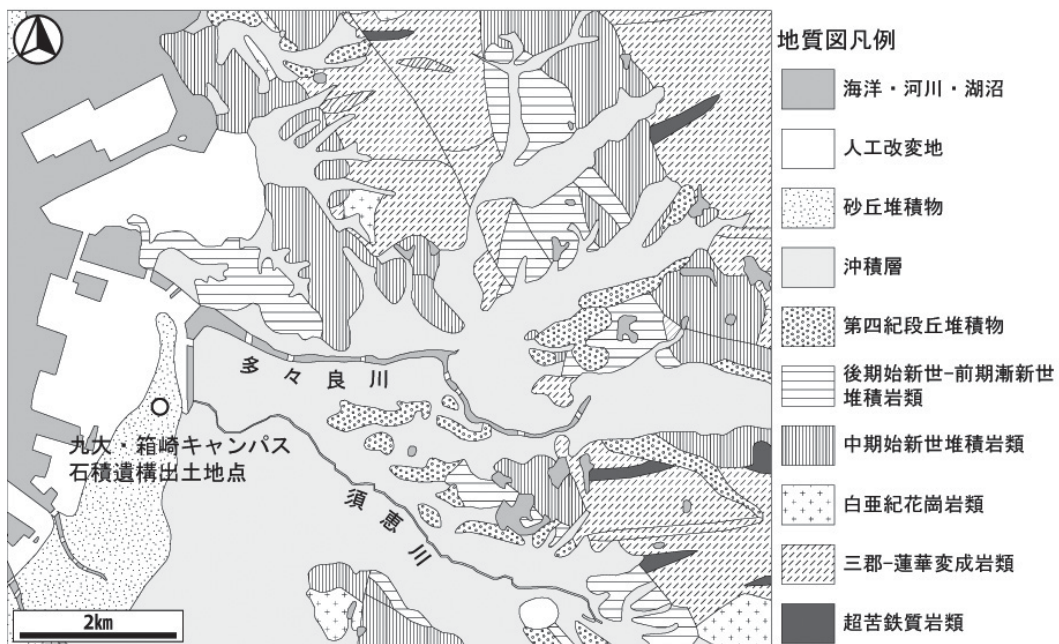
今回分析した試料のうち砂岩に分類されるものについては、大半が石質ワッケに分類され、比較的狭いモード組成範囲に収まる。試料1および試料4はそのほかの砂岩と比較して基質の量比が多い。礫岩については、すべてが長石よりも岩片を多く含む礫岩である。重要なのは、今回分析した礫岩および砂岩が、HZK1603調査地点に出土した石材と同様のモード組成範囲を示し、また遺跡周辺に分布する名島層および宇美層を構成する礫岩・砂岩が示すモード組成の範囲内に収まることである。これらのことは、HZK1805および1905調査地点出土の石積み遺構構築石材は、HZK1603調査地点で出土した石材と同様の石材を利用しており、またそれらは遺跡周辺に分布する名島層あるいは宇美層に由来すると考えられる。

変成岩類については、いずれも塩基性～超塩基性片岩である。変成岩類は、箱崎遺跡の近傍には産出していないが、箱崎遺跡の東に位置する三郡山地には、泥質・砂質あるいは塩基性、超塩基性の片岩を主要な構成岩石とする三郡-蓮華変成岩が広く分布している（第46図、唐木田ほか 1994）。箱崎遺跡の近傍を流れる多々良川や須恵川の上流域には三郡-蓮華変成岩の分布域があるため、これらの河川の流域で転石として散在するものを採取して利用したことは十分に考えられる。

今回分析を行った HZK1905、1805調査地点と足立・田尻（2018）で報告した HZK1603調査地点において、使用されている構築石材は圧倒的に礫岩・砂岩などの堆積岩類が多いうえにサイズも大きい



第45図 石積み遺構構築石材試料の堆積岩類の粒子モード組成



箱崎キャンパスの位置を白丸で記している
 第46図 箱崎キャンパス周辺の地質概要

一方で、変成岩類など他の岩石はまれで、比較的小さな岩石片に限られる。このことは、近傍に礫岩・砂岩などの堆積岩類の露頭が存在し、かつ変成岩類の露頭からは距離がある地点が石材の採取地点であった可能性が高いことを示す。箱崎遺跡の近傍で、その流域に堆積岩類および変成岩類が分布

する河川は多々良川と須恵川がある（第46図）。両者を比較すると、多々良川の流域にはごく近傍かつ広域に堆積岩類の分布がある一方で、須恵川流域には上流部にわずかに存在する程度である。また、箱崎遺跡からの距離も多々良川流域の岩石分布地域のほうが須恵川流域のそれらよりも近く、採取した石材の運搬も容易であると推測される。これらに基づくと、石材の採取場所は多々良川の河川流域であった可能性が高いと推定される。

引用文献

- 足立達朗・田尻義了 2018 「石積み遺構構築石材の岩石学的分析」『箱崎遺跡 - HZK1601・1603・1604地点 - 九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集』、九州大学埋蔵文化財調査室、68～78頁
- 唐木田芳文・富田宰臣・下山正一・千々和一豊 1994 「福岡地域の地質. 地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）地質調査所
- Krumbein, W.C. 1941 "Measurement and geologic significance of shape and roundness of sedimentary particles", *Journal of sedimentary petrology*, 11, 64～72頁
- 長尾巧 1926 「九州古第三紀層の層序（1）」『地質学雑誌』、38巻、115～130頁
- Okada, H. 1971 "Classification of sandstones: analysis and proposal", *Journal of Geology*, 79巻, 509～525頁

箱崎遺跡の古地形復元

本田浩二郎

1. 箱崎遺跡の概要

箱崎遺跡は、福岡市東区馬出から箱崎にかけて所在し、古墳時代から中世にかけて営まれた遺跡である。中世では遺跡範囲中央部南側に創建された宮崎宮を中心として遺構が展開し、博多遺跡群とともに対外交渉の拠点として重要な役割を担っていたことが知られている。遺跡は博多湾東岸に形成された千代松原から箱崎まで南北に伸びる砂丘地形の北端部に位置し、現地表面標高3.5~4.5mを測る砂丘上に展開する。西側の海岸線には建治2（1276）年に石築地「元寇防塁」が構築され、以降昭和前半に海岸部が埋め立てられるまで永くその景観を保ち続けていた。砂丘南側には吉塚遺跡、堅粕遺跡、吉塚本町遺跡、吉塚祝町遺跡等が分布しており、各遺跡の境界は砂丘の後背湿地や鞍部によって画されると想定される（第47図）。既往の調査成果から、現在の箱崎遺跡の最大範囲は標高2.0~3.5mを測る砂丘上に東西約400m、南北約2,000mの範囲内に、各時代の遺構群が分布することが知られている。

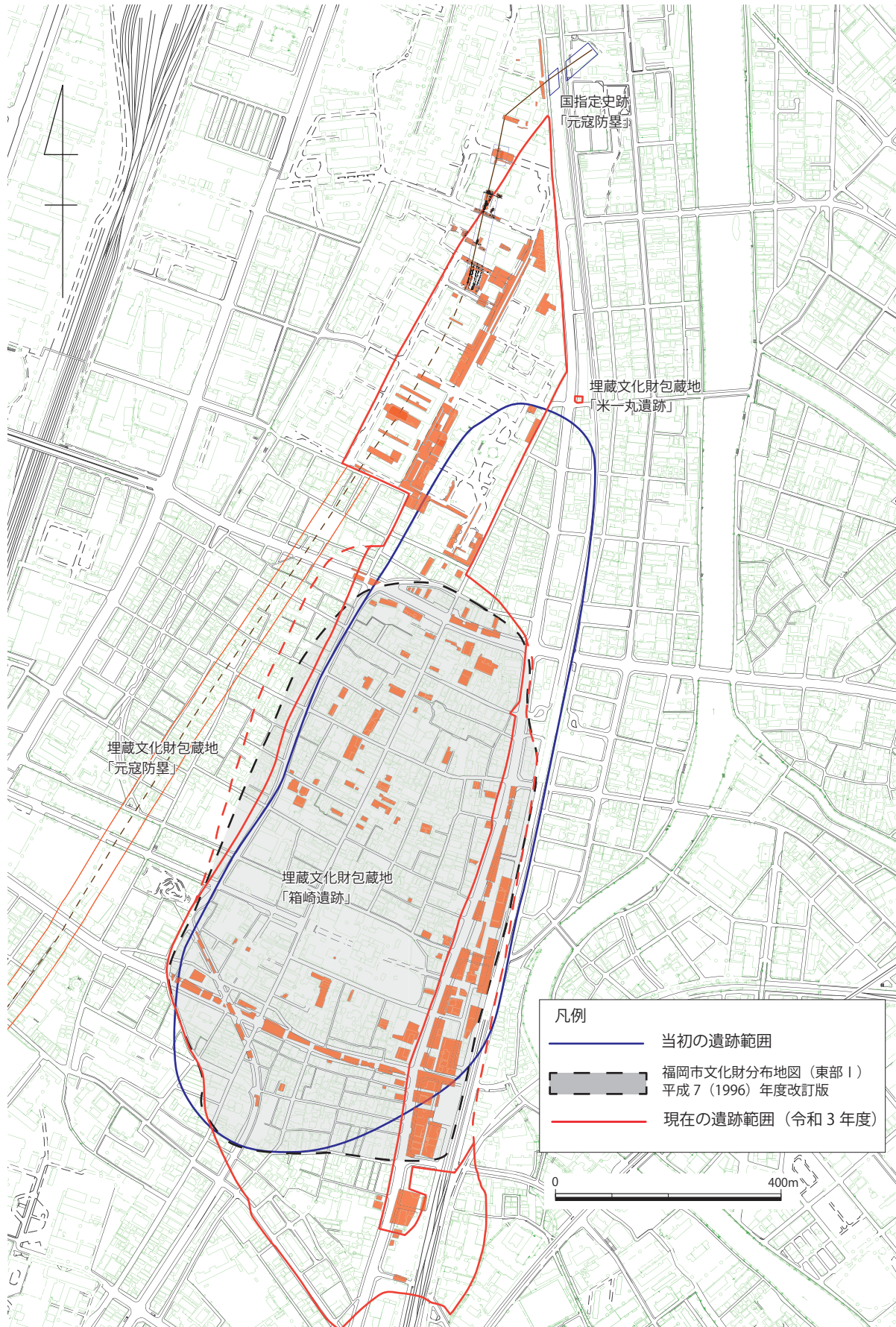
2. 箱崎遺跡範囲の変遷

現在、埋蔵文化財包蔵地「箱崎遺跡」として登録されている範囲は、海岸線に面した西側が元寇防塁、東側は宇美川によって画されている。箱崎遺跡範囲内で最初に行われた発掘調査は昭和58（1983）年に地下鉄建設工事に先立ち実施された第1次調査であり、調査では平安時代末期である11世紀から中世を通して存続する集落遺跡を確認している。当時、遺跡名称は「箱崎・馬出遺跡群」と呼称され、遺跡範囲は確定していなかったが、数少ない調査事例からは宮崎宮を中心とした古代から中世にかけての遺跡の範囲と内容が予想されていた。その後、発掘調査の進展に合わせて遺構の分布範囲が示され、東西400m、南北1,400mの遺跡範囲が想定された。

昭和から平成になり、市内での開発に伴う確認・試掘調査の実施例が増加したことを受け、平成7（1996）年に



第47図 博多湾岸遺跡分布図 (S = 1/16,000)



第48図 箱崎遺跡 遺跡範囲変遷図 (S = 1/10,000)

改訂された福岡市文化財分布地図（東部Ⅰ）において、東西400m、南北950mの箱崎遺跡の範囲が改めて提示された。その際、遺跡の北限は九州大学箱崎キャンパスまでは含めず、キャンパス敷地南端に設定されていた。これは箱崎キャンパス内の分布状況が把握されておらず、箱崎遺跡の遺構検出面である砂丘地形が大学敷地内までは延びないと予想されていたためである（第48図）。

箱崎地区での発掘調査件数の増加や箱崎キャンパス移転に先立つ試掘調査の結果に伴い、平成22（2010）年および平成25（2013）年に包蔵地範囲の改訂が実施された。遺跡範囲の北限は九州大学箱崎キャンパス農学部付近まで、南限は南側の吉塚本町遺跡に接する範囲まで拡大された。なお、発掘調査が完了した大規模開発区域（筥崎土地区画整理事業範囲および九州大学箱崎キャンパス跡地の一部など）については、文化財保護法の届出が必要である埋蔵文化財包蔵地としての取扱指定を解除している。

3. 箱崎遺跡の調査・研究

遺跡が有する永い歴史のなか、土地利用の変遷や古地形の復元を検討していくうえで、発掘調査で明らかとなった遺構分布状況や遺物出土状況は重要な手がかりとなる。これまで箱崎遺跡内では120か所以上に及ぶ発掘調査が実施されている（第49図）。発掘調査は個人住宅や共同住宅等の建設工事に先立つものと、区画整理や道路敷設等の公共事業に先行して実施されたものなどとなる（第4表）。遺跡範囲東側では筥崎地区土地区画整理事業、遺跡南側では都市計画道路馬出・東浜線に先立つ発掘調査が実施され、遺跡内の遺構分布状況の解明が進んだことから古地形復元図（第50図）が榎本義嗣（2003）によって提示された。

この段階では箱崎キャンパスは遺跡範囲には含まれておらず、既往の調査地点も道路や区画整理事業範囲以外は疎らであったため、詳細な復元想定ができていない範囲があるのも事実である。とはいえ、その後の発掘調査の指標となる砂丘上の遺構面想定が行われたことは、のちに続く調査の指針となっており評価される。また、この地形復元図ではじめて南北に延びる砂丘列の存在が提示されたことは注目される。各地点の調査成果では、遺構面が砂丘の東西斜面上に位置することが個別に報告されており、南北方向に延びる複数の砂丘列が存在していることは各調査担当者には体感で認識されていたのである。

その後、中尾祐太（2018a・2018b）によって各調査地点の遺構面である砂丘面についての詳細な検討が行われた。中尾は各調査地点で確認された遺物・遺構の分布状況を、具体的に明示することで時期的な遺構分布の差異を明らかにした。

4. 旧地形図からみる箱崎遺跡の地形

箱崎遺跡周辺における土地利用の現況は、遺跡北部が九州大学箱崎キャンパス、中央部から南側は中世以来の筥崎宮を中心に広がる門前町となる。遺跡範囲東側の区画整理事業地内では鉄道高架事業やマンション等の中高層建物建築等の開発事業が盛んに行われるなど、近年の開発速度には目を見張るものがある。主要幹線沿いはマンションなどの新しい高層建物が立ち並ぶ状況を呈しているが、一つ通りを入ると昔ながらの住宅がひしめく情緒ある町並みが広がっている。箱崎のまちを俯瞰すると一見平坦な土地に見えるが、幹線道路や路地を歩くと古い地形の起伏に合わせた高低差を読み取ることができる。現在の地形にも埋没している地形は一部反映されているが、昭和初期の地形図（以下、



第49図 箱崎遺跡 調査区位置図 (S = 1/10,000)

第4表 箱崎遺跡発掘調査一覧

次数	調査番号	報告書	調査原因	出所	地点(改訂)	次数	調査番号	報告書	調査原因	出所	地点(改訂)
1	8342	193	地下鉄	馬出3丁目ほか	宮崎馬出遺跡	61	0811	1092	共同住宅	箱崎3丁目	
2	8663	県79集 4-1038	粕屋総合庁舎	箱崎1丁目		62	0825	1093	道路建設	馬出5丁目	
3	8967	262	共同住宅	箱崎1丁目		63	0826	1094	公民館	箱崎1丁目	
4	8975	年報4	庭園	箱崎1丁目	経瓦	64	0916	1128	共同住宅	箱崎1丁目	
5	9125	273	共同住宅	箱崎1丁目		65	0923	未報告	共同住宅	箱崎3丁目	
6	9445	459	共同住宅	箱崎3丁目		66	1011	1164	共同住宅	箱崎1丁目	
7	9448	459	共同住宅	箱崎1丁目		67	1026	1165	共同住宅	箱崎1丁目	
8	9643	591	自宅兼共同住宅	箱崎1丁目		68	1034	1166	共同住宅	箱崎1丁目	
9	9644	550	共同住宅	箱崎1丁目		69	1316	1271	共同住宅	馬出5丁目	
10	9646	551	道路整備	箱崎3丁目		70	1405	1342	共同住宅	箱崎1丁目	
11	9712	592	病院	箱崎3丁目		71	1415	1343	共同住宅	箱崎1丁目	
12	9735	950	個人住宅	箱崎1丁目		72	1442	1344	共同住宅	箱崎1丁目	
13	9750	592	共同住宅	馬出5丁目		73	1501	1316	共同住宅	箱崎1丁目	
14	9802	625	自宅兼共同住宅	箱崎1丁目		74	1502	1317	個人住宅	馬出5丁目	
15	9816	810	個人住宅	箱崎1丁目		75	1506	1317	個人住宅	箱崎1丁目	
16	9853	703	自宅兼共同住宅	箱崎1丁目		76	1507	1318	共同住宅	箱崎1丁目	
17	9864	704	社庫・倉庫	箱崎1丁目		77	1519	1345	共同住宅	箱崎1丁目	
18	9921	664	共同住宅	馬出5丁目		78	1538	1346	共同住宅	箱崎1丁目	
19	9930	664	共同住宅	箱崎1丁目		79	1606	年報32	共同住宅	箱崎1丁目	
20	9959	767	宮崎区画整理	箱崎地区	1,2,3区	80	1612	九大1	学術研究	箱崎6丁目	HKZ1601
21	9978	705	共同住宅	箱崎1丁目		81	1625	九大1	学術研究	箱崎6丁目	HKZ1603-04
22	0022	811-852	宮崎区画整理	箱崎1丁目	4, 5区	82	1645	1372	店舗兼専用住宅	箱崎1丁目	
23	0041	704	自宅兼商業ビル	箱崎3丁目		83	1703	九大2	学術研究	箱崎6丁目	HZK1701
24	0047	768	共同住宅	箱崎1丁目		84	1712	1373	共同住宅	馬出1丁目	
25	0104	896	街路新設改良	箱崎3丁目		85	1730	九大2	学術研究	箱崎6丁目	HZK1702
26	0108	815-853	宮崎区画整理	箱崎1丁目、馬出5丁目	6~10区	86	1731	—	学術研究	箱崎6丁目	HZK1703
27	0113	812	街路新設改良	馬出		87	1732	九大2	学術研究	箱崎6丁目	HKZ1704-06
28	0118	1127	個人住宅	馬出5丁目		88	1817	—	土地売却	箱崎6丁目	HZK1801
29	0202	813	共同住宅 (RC10F)	箱崎3丁目		89	1824	九大4	学術研究	箱崎6丁目	HZK1802
30	0210	914-948	宮崎区画整理	箱崎1丁目、馬出5丁目	11~17区	90	1825	1424	共同住宅	馬出5	
31	0214	813	自宅兼共同住宅	箱崎3丁目		91	1829	九大4	学術研究	箱崎6丁目	HZK1803
32	0224	896	都市計画道路箱崎阿恵線	箱崎3丁目		92	1830	整理中	都市計画道路	箱崎6丁目	
33	0236	1127	庫裏、納骨堂改築	馬出5丁目		93	1839	—	学術研究(記録保存)	箱崎6丁目	HZK1804
34	0245	未報告	共同住宅	箱崎3丁目		94	1840	九大4	学術研究	箱崎6丁目	HZK1805
35	0247	未報告	共同住宅	箱崎3丁目		95	1842	1425	自宅兼共同住宅	箱崎1丁目	
36	0252	未報告	自宅兼共同住宅	箱崎3丁目		96	1914	整理中	共同住宅	箱崎1丁目	
37	0253	951	道路(馬出東浜線)	馬出5丁目		97	1917	1426	店舗	箱崎1丁目	
38	0260	814	自宅兼共同住宅	箱崎3丁目		98	1922	九大5	学術研究(記録保存)	箱崎6丁目	HZK1901
39	0302	854	共同住宅	箱崎1丁目		99	1923	—	学術研究(記録保存)	箱崎6丁目	HZK1903
40	0318	948-949	宮崎区画整理	箱崎1丁目	18,19区	100	1925	1427	共同住宅	馬出5丁目	
41	0343	854	共同住宅	箱崎3丁目		101	1939	1428	専用住宅兼共同住宅	箱崎3丁目	
42	0351	896	寺	箱崎3丁目	A区	102	1940	整理中	都市計画道路	箱崎6丁目	
42	0351	896	道路箱崎阿恵線	箱崎3丁目	B区	103	1943	九大4	学術研究(現状保存)	箱崎6丁目	HZK1902
43	0356	1345	自宅兼共同住宅	箱崎1丁目		104	1945	—	学術研究(記録保存)	箱崎6丁目	HZK1904
44	0368	854	共同住宅	箱崎1丁目		105	1951	整理中	共同住宅	箱崎3丁目	
45	0369	951	道路・馬出東浜線	箱崎1丁目、馬出5丁目		106	1967	九大5	学術研究(現状保存)	箱崎6丁目	HZK1905
46	0434	948-949	宮崎区画整理	箱崎1丁目	20,21区	107	2001	九大5	学術研究	箱崎6丁目	HZK2001-02
47	0437	1046	道路・馬出東浜線	馬出5丁目		108	2011	整理中	都市計画道路	箱崎6丁目	
48	0464	年報19	共同住宅	馬出5丁目		109	2015	—	学術研究	箱崎6丁目	HZK2003
49	0504	949	宮崎区画整理	箱崎1丁目	22~25区	110	2024	整理中	共同住宅	馬出1丁目	
50	0517	1163	共同住宅	馬出5丁目		111	2025	九大5	学術研究	箱崎6丁目	HZK2004
51	0559	952	個人住宅兼共同住宅	箱崎1丁目		112	2026	—	学術研究	箱崎6丁目	HZK2005
52	0626	997	共同住宅	箱崎1丁目		113	2023	整理中	都市計画道路	箱崎6丁目	
53	0648	996	共同住宅	箱崎3丁目		114	2034	—	学術研究	箱崎6丁目	HZK2006
54	0650	998	道路建設	馬出5丁目		115	2044	—	学術研究	箱崎6丁目	HZK2007
55	0664	1046	道路建設	馬出5丁目		116	2045	整理中	共同住宅	箱崎3丁目	
56	0665	1047	共同住宅	箱崎1丁目		117	2101	—	学術研究	箱崎6丁目	HZK2008
57	0671	999	共同住宅	箱崎1丁目		118	2110	整理中	都市計画道路	箱崎6丁目	
58	0736	年報22	個人住宅	馬出5丁目		119	2123	整理中	共同住宅	箱崎1丁目	
59	0749	1048	共同住宅	箱崎2丁目		120	2128	整理中	共同住宅	箱崎3丁目	
60	0762	1163	墓地改葬	馬出5丁目							

旧地形図)を改めて見ると、埋没地形の起伏が明確に示されていることが確認できる(第51図)。

旧地形図からは現在の箱崎遺跡範囲が旧地形図の標高3.0mの等高線範囲内に収まっていることのほか、宅地化により遺跡周辺地形で変化した箇所等についての情報を得ることができる。旧地形図と現在の地形を見比べると、遺跡範囲内では大きく変化していないものの、遺跡周辺が宅地化等の造成工事や開発により50cm以上盛土造成を受けていることや、現在の国道3号線付近に存在していた海岸線が埋め立て事業により500m以上西に移動したことなどがわかる。旧地形図の遺跡範囲内で最も標高が高い地点は、箱崎1丁目地内を南北に延びる通称「大学通り」の中ほど、7・14・24・68次調

査地点で囲まれた範囲で標高4.5m 程度となっている。また、遺跡範囲南側の84次北側にも同様に標高4.5m の等高線が巡る。この遺跡範囲南側の高所は、南側に隣接する吉塚本町遺跡へと延びる砂丘列から派生した砂丘の一部と考えられる。

このように旧地形図においても、筥崎宮西側の筥崎土地区画整理事業範囲と前述の箱崎1丁目付近に別々の砂丘列頂部が存在していることが看取できる。

遺跡北側の九州大学箱崎キャンパス跡地内は、九州大学埋蔵文化財調査室による学術調査と福岡市による都市計画道路建設に伴う発掘調査が進められており、遺構の分布状況の確認と古地形の把握が進められている。旧地形図では明治44（1911）年に九州帝国大学工科大学創設に伴い学校用地として整備された様子が伺える。本来は南北方向に延びる複数の砂丘列が存在し起伏を伴う地形であったと考えられるが、学校用地整備に伴い造成が行われ標高3.2～3.5m 前後の平坦面に整地されている。大正2（1913）年には、九州帝国大学医学部教授であった中山平次郎が大学敷地内の元寇防塁について言及しており、大学敷地内に土手状の隆起した地形を含む起伏が存在していたことがわかる。



第50図 箱崎遺跡砂丘地形復元図 (S=1/10,000)



第51図 箱崎遺跡周辺昭和初期地形図 (S = 1/10,000)

また、旧地形図からは、遺跡範囲東側を蛇行して北流する宇美川、宇美川に合流する綿打川や須恵川らの河川作用により遺跡範囲東側の地形が大きく変化したことも読み取れる。現在の JR 箱崎駅前付近およびその北側では、砂丘東側側面が河川氾濫により大きく削りと取られ高低差1.5~2.0mの急傾斜をもつ断崖地形ができています。この断崖の延長部には方形に抉れた人工的な地形改変の痕跡が残っている。遺跡東側低地を造成するために土取り等を行った痕跡である可能性が考えられる。

5. 箱崎遺跡の古地形復元

本稿は箱崎遺跡の埋没している古地形復元を第一の目的としている。現在の地形と旧地形から得られる情報から、南北に伸びた複数の砂丘地形が集合した地形であることは確認できた。これに加え、これまで箱崎遺跡内で実施された各調査成果から判明した砂丘面の情報と、遺跡内および周辺で実施した確認・試掘調査の結果から復元される古地形を第52図に示した(第52図)。復元図からは標高2.0~3.5mの範囲内に各時代の遺構群が展開することや、複数の砂丘列が海岸線とほぼ並行して存在することなどの基本的な情報がわかる。

復元図を詳細にみると、遺跡範囲東側には標高3.5mの頂部を持つ砂丘列が確認できる。この砂丘列を砂丘①と仮称する。前述のとおり、この砂丘①は宇美川等の河川氾濫により大きく東側を削平されている。また、砂丘頂部は連続しておらず、いくつかの鞍部を伴うが、これは砂丘東側を削り流した河川氾濫時にその奔流が突破した痕跡と考えられる。この付近での調査においても砂丘①を切り込む形で水性堆積層が確認されており、氾濫時には小河川が短期間出現したと考えられる。この砂丘①における遺構の初現は古墳時代前期であり、これまでの調査ではそれ以前に遡る時期の遺構は確認されていないが、遺構面以下の砂丘砂からは縄文時代晩期に属する石斧や弥生土器中期の出土も報告されている。箱崎遺跡を構成する砂丘のなかで最も古い段階で形成された砂丘と捉えることができる。

砂丘①北側は河川氾濫のため大きく消失しているが、その延長線上には米一丸遺跡が存在する。遺跡の範囲や規模を含めた実態は不明確であるが、掘削工事に際して古墳時代前期の土器が砂丘砂層から複数個体出土したことが報告されている。出土状況等も明らかでないため断定はできないが、墳墓等の埋葬遺構に供献された可能性が想定されている。土器の取り上げの際に確認された土層観察状況より、砂丘①と同様の堆積状況であったことから、米一丸遺跡が位置する箇所は砂丘①北側先端部に近い位置であると判断できる。このことより砂丘①は長さ2.0km以上、最大幅300m程度で形成された砂丘地形であったと復元できる。

次に砂丘①西側に頂部が3.5m以上を測る砂丘②が確認できる。南側は等高線から筥崎宮の境内内まで延びていたことは確認できるが、これ以南では窪地状の地形を呈する。砂丘①を乗り越えた濁流により削平された可能性も考えられる。北側は氾濫時に削平されているため、形成時の正確な範囲は明確ではないが、砂丘①に沿うように箱崎キャンパス内まで続いていたと考えられる。この砂丘②は旧地形では表現されておらず、地図が作成された昭和初期には宅地化に伴う造成により埋没していたと判断される。砂丘②の範囲内では古代以降の遺構・遺物が確認されることから、それ以前に形成され安定化したことがわかる。

砂丘②に近接して頂部の標高が3.3m程度の砂丘③が確認できる。この砂丘頂部は旧地形図にも表現されており、古地形を色濃く反映している。砂丘③は筥崎宮北側100m付近で確認できなくなるが、本来は筥崎宮南側の第18次地点付近まで延びていたと考えられる。筥崎宮北西側に確認できる西側に開いた谷地形は、高低差1.5m程度の落差を持つ。谷地形南側の1・62次調査地点付近でみられる西



第52図 箱崎遺跡砂丘地形復元図 (S = 1/10,000)

側への突出した地形は、砂丘③と同時期に形成されたと考えられるため、何らかの要因により砂丘列が途絶された痕跡とも考えられる。砂丘③の北側は第29次地点付近で一旦途絶するような等高線となるが、第31・61次地点から箱崎キャンパス内南側付近で確認できる標高3.0mの高まりに連続するものと考えられ、さらにキャンパス北側方向へも延びていたと考えられる。第10・43次地点は鞍部地形に位置するものと考えられる。砂丘③は複数の列が集合した形状を呈しており、砂丘形成方向と同方向に数条の頂部が見られる。102・118次調査地点は砂丘頂部に挟まれた鞍部内に位置しており、西側頂部上には元寇防塁が構築された。この砂丘③の北側先端は国史跡元寇防塁地蔵松原地点付近まで続いていることが確認できるが、その延長部は氾濫により失われているため不明確である。これらの砂丘を構成する堆積砂層からは中世前半期の土師器・貿易陶磁器が出土することが報告されている。砂丘が形成される際に、砂丘①・②上に営まれていた遺構群が河川氾濫により砂丘上の遺構面とともに押し流されて再堆積したことがわかる。元寇防塁の構築年代からも砂丘形成は12世紀中頃にはほぼ完了していたと考えられるため、砂丘③の北側範囲は12世紀の第二四半世紀中の比較的短期間で形成されたことが想定できる。

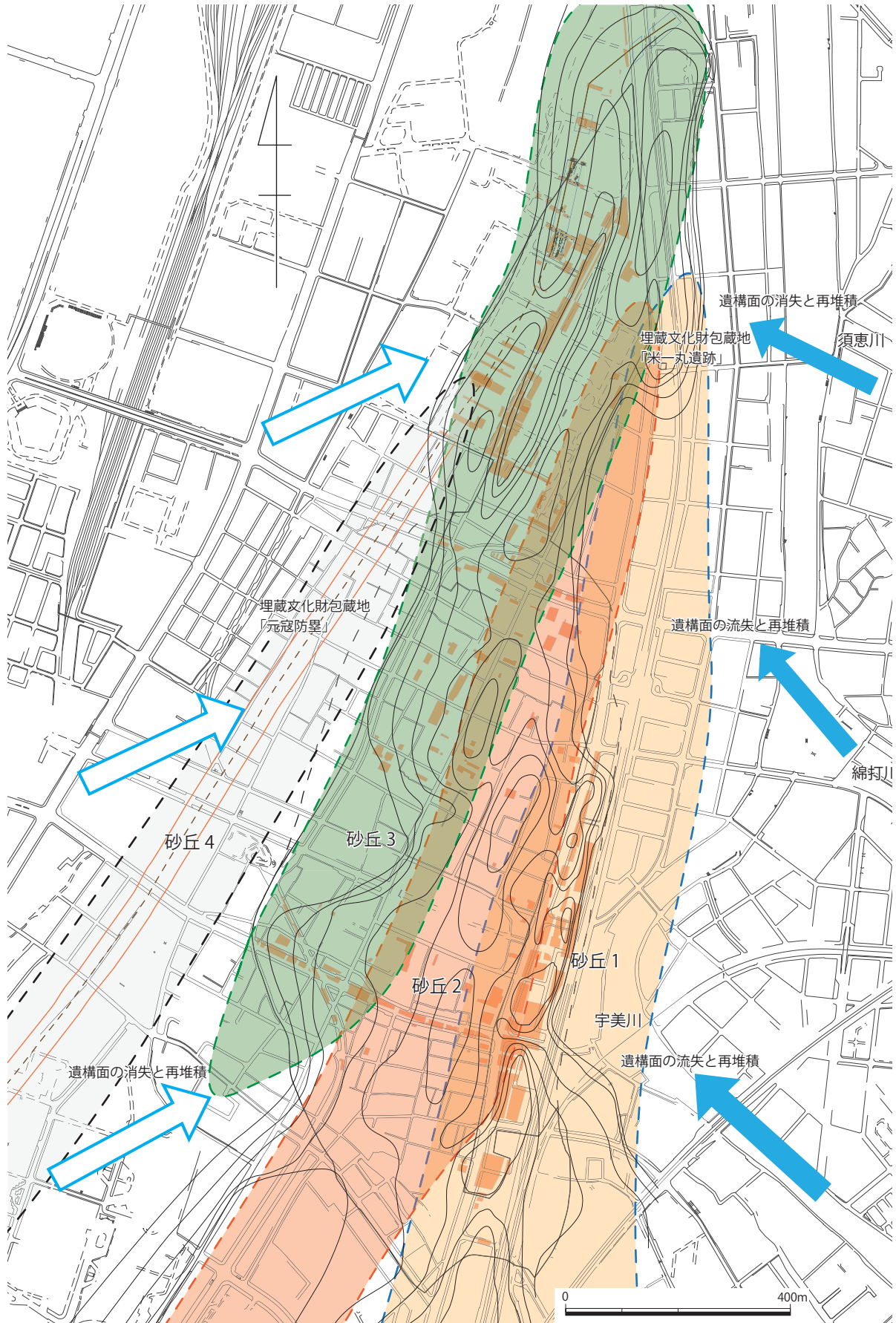
砂丘④は砂丘③から谷地形を挟んで形成される砂丘列で、埋蔵文化財包蔵地「元寇防塁」の下に形成される。昭和初期の旧地形図では標高2.5～3.0m付近に位置する砂丘で、現在の九大病院付近に土手状の高まりが確認できる。この砂丘を構成する砂層は、砂丘①～③の遺構面となる黄褐色砂層とは異なり、しまりのない粗砂層が主体であることが確認調査成果からも確認できる。元寇防塁の存在が推定されているため、これまで20か所以上で確認・試掘調査を実施しているが遺構は確認されていない。最も海岸に近い位置にあるため、波濤により上層の遺構面部分が流失した可能性もあるが、堆積状況等からその可能性は低い。形成時期は明確ではないが、砂丘④上の元寇防塁の存在が確実であれば砂丘③からやや遅れるが12世紀代には形成が始まっていたと考えられる。

砂丘の形成は重複して行われるため、既に形成された砂丘面上に土壌層が堆積していない限り分離は難しい。形成時期が近接する場合は植生変化による土壌層は形成されないため、堆積状況と主な堆積方向で形成層の差異を識別するしか方法がないが、通常の発掘調査では、遺構面で確認された遺構完掘で調査が完了することがほとんどである。これは埋蔵文化財の記録保存措置のためには十分な作業であるが、遺跡全体が持つ地形情報の取得まではなし得ていない。調査時に遺構面である砂丘面以下への掘り下げと土層断面の観察を行い、砂丘の形成・堆積方向が確認できた事例がいくつかある。箱崎キャンパス内での調査では遺構面以下の堆積状況の観察が複数地点で実施され、砂丘②と③北側については複数方向から流入した土砂で比較的短期間のうちに形成されたことが確認されている。西側の海岸方向から堆積する層位と東側の宇美川方向から堆積した層位が近接して確認され、砂丘の形成が一方向からだけでなく双方向から行われていたことが判明した（第53図）。

6. 博多湾岸の砂丘遺跡の形成時期

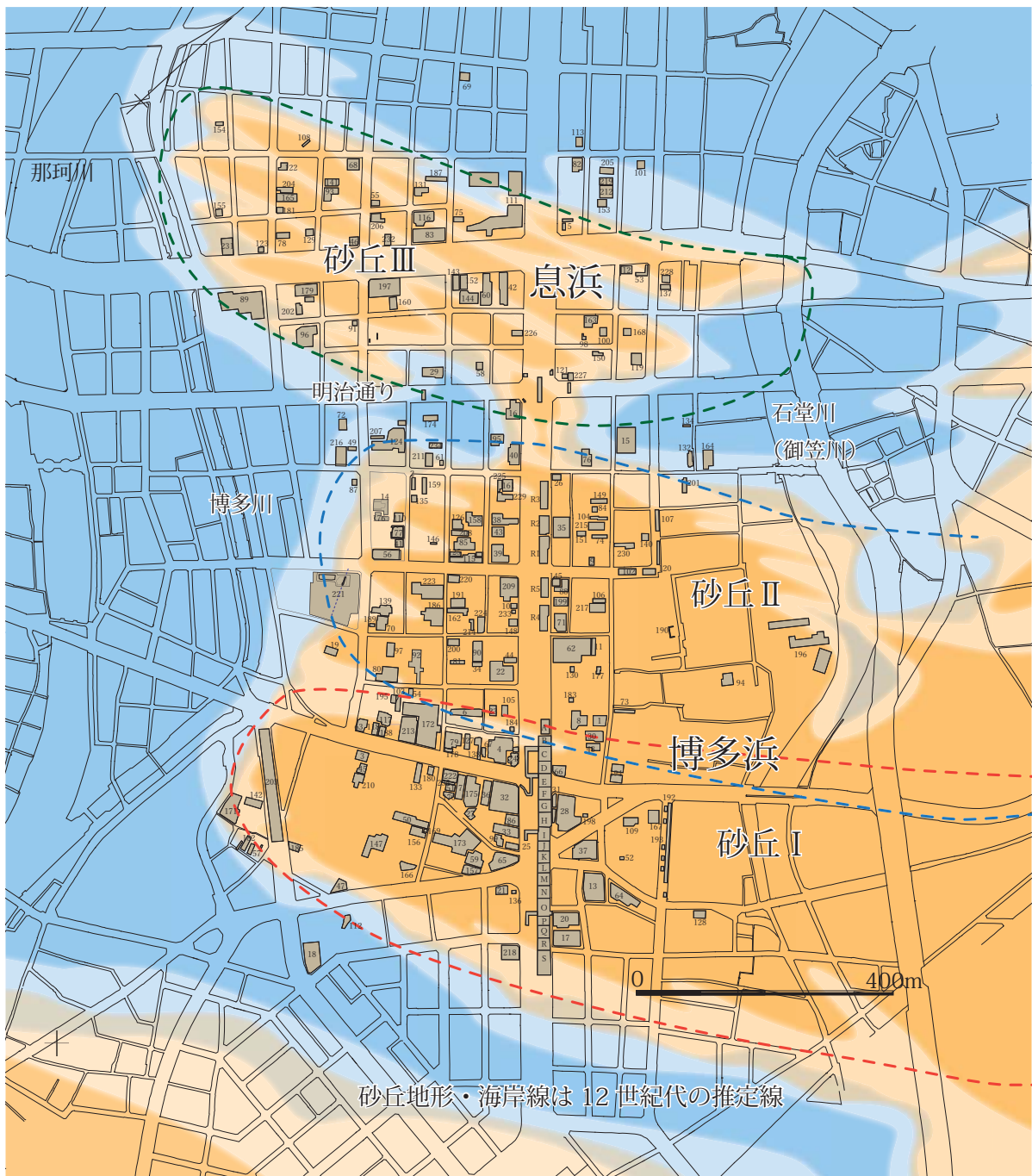
箱崎遺跡の基盤となる砂丘地形時期について簡単にまとめてみると、砂丘①が古墳時代前期以前、砂丘②が古代以前、砂丘③・④は12世紀の前半から中頃となることが確認できた。では、箱崎遺跡と同様に博多湾岸に形成された砂丘上の遺跡である博多遺跡群の砂丘形成時期との関連性を確認したい。以下に博多遺跡群の砂丘地形について簡単にまとめた（第54図）。

博多遺跡群は博多湾に流れ込む那珂川と御笠川の河口付近に形成された遺跡であり、調査成果より複数の砂丘列上に弥生時代から近世までの遺構群が広がっていることが判明している。博多遺跡群を



第53図 箱崎遺跡砂丘地形復元図 (S = 1/10,000)

構成する砂丘は南側の「博多浜」、北側の「息浜」に大別されるが、これらの砂丘も形成年代より細分される。博多浜は南から砂丘Ⅰと砂丘Ⅱとに分けられるが、東西方向に延びる砂丘Ⅰは縄文時代晩期初頭前後から形成が始まり、発掘調査では黒川式土器や縄文時代早期の石器なども出土する。砂丘Ⅰにおける遺構の初現は弥生時代前期中頃であり、砂丘南側斜面を中心に集落や墓域が形成され、前期後半には砂丘頂部を超えて北側へも遺構が進出する。砂丘Ⅰ北側に覆い被さるように形成された砂丘Ⅱは、弥生時代前期後半から形成が始まったと想定される。砂丘Ⅱの遺構初現は弥生時代中期後半から後期の時期で、砂丘Ⅱ全域に遺構が展開するのは8世紀中頃となる。砂丘Ⅱ自体も複数の小規模



第54図 博多遺跡群砂丘地形復元図 (S = 1/10,000)

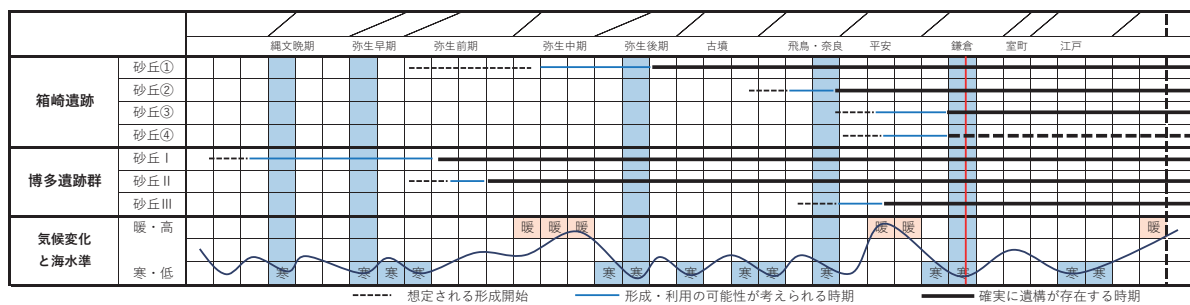
な砂丘列集合体であり、範囲内には鞍部・谷地形が埋没している。北側には砂の供給源でもある博多湾が存在するため波濤・風濤の影響を直接受けることから、これらを防ぐ障壁として新しい砂丘地形が海側に形成されたのちに遺構の展開が順次始まっていったものと考えられる。砂丘Ⅰ・Ⅱは明確な地形的境界を持たないが、いくつかの鞍部や埋没した谷地形が確認されていることから、長期間にわたって断続的に砂丘形成が続いていたと考えられる。

最も北側に位置する息浜は砂丘Ⅲとされる砂丘列で、形成が始まったのは9世紀頃と考えられる。形成当初は干潮時に陸続きとなる程度の小規模な砂丘・砂堤であったと考えられ、砂丘・砂堤南側となる背面斜面は博多湾からの風濤や潮汐作用による影響を受けにくいためか、集落から隔離された墓域として利用が始まったことが調査成果から判明している。砂丘の成長に伴い、砂丘Ⅱと砂丘Ⅲ間は細い陸橋状で連結するが、それ以外の範囲は低湿地状の谷地形として残されていた。この低湿地は中世後半期以降、徐々に埋立てられるが、近世でも「蓮池」と呼称されたように水捌けが悪い場所として認識されていたようである。

これらの砂丘は河川から吐出される土砂や風性砂により形成されるが、その主たる要因は気候変動となる。寒冷化現象と砂丘形成について調査を行った甲元眞之（2007）によると、寒冷期の海退現象が砂丘地形の形成を促し、西日本各地の沿岸部に砂丘とラグーンを形成したとする。砂丘の形成は海水準の変動が鍵となり、砂丘・砂堤の形成による植生変化が沿岸部への活動領域の拡大を可能としたことを各地の砂丘遺跡の検討から明らかにした。

各々の砂丘形成が始まった年代はいずれも「小寒冷期」に相当する時期とされ、甲元が示した寒冷化現象と砂丘形成のパターンに合致しており、この現象は博多湾岸に点在する他の砂丘遺跡形成時期にも符合している。ただし、ここで注意しておかなければならないのは、気候の寒冷化がただちに海水準低下を誘発するわけではないことである。海水準低下は北半球全域での寒冷化により引き起こされるもので、局地的な寒冷化はその副次的な現象に過ぎない。以上、博多遺跡群と箱崎遺跡の砂丘列と砂丘形成時期について簡単に説明を行ったが、両遺跡における砂丘地形の対応関係を以下に示した。

第5表 各遺跡の砂丘形成時期と気温・海水準の変化

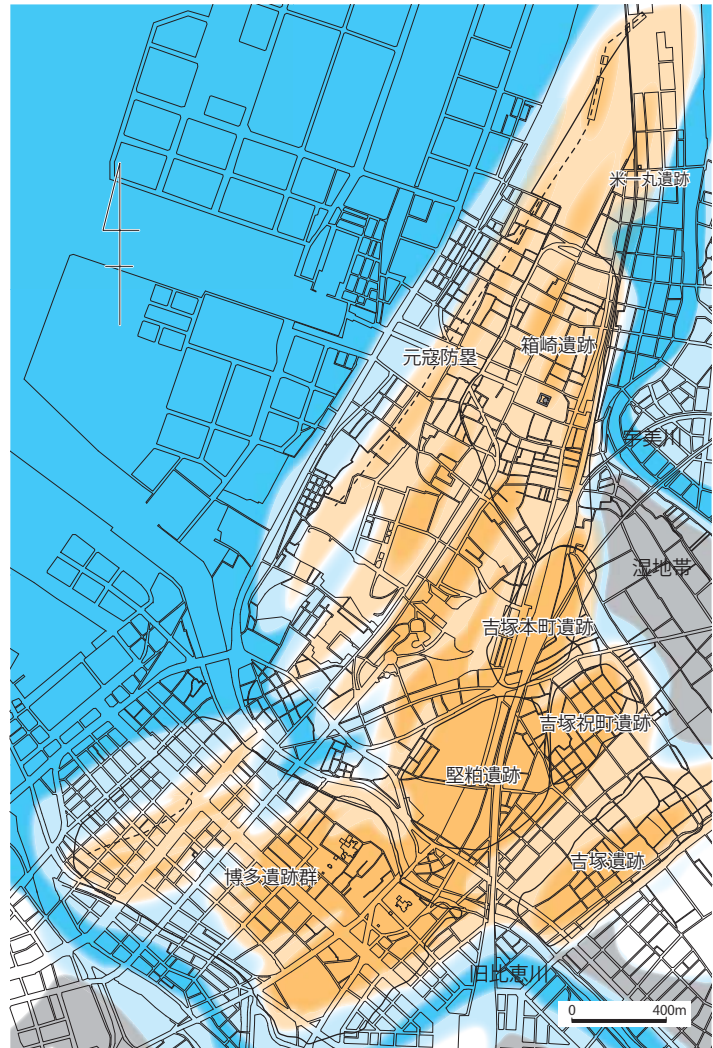


第5表に示したように、博多遺跡群の砂丘Ⅰ～Ⅲと箱崎遺跡の砂丘①～③は直接対応するものではなく、両遺跡での砂丘形成時期についてはズレが生じている。これは両遺跡の立地環境が異なることに起因したものと考えられる。また、箱崎遺跡では砂丘①の大部分が河川氾濫により失われているため、形成時期については上限を抑えることができない。

単純に表からは博多遺跡群の砂丘Ⅱと箱崎遺跡の砂丘①が弥生時代前期頃のほぼ同時期に形成が開始されたこと、砂丘Ⅲと砂丘②が8～9世紀代の近接した時期に形成が始まったことなどが読み取れる。博多遺跡群の砂丘Ⅰの形成時期は縄文時代晩期初頭と考えられるが、実際に遺構が出現するのは弥生時代前期であり形成から利用開始までには長い空白期間が存在する。これは形成開始後の弥生時代早

期に再び小規模な寒冷期が訪れたため、砂丘Ⅰが安定化できなかったことも要因の一つとして考えられる。寒冷期には降雨量が増加していたことが報告されており、河川の流量増加に伴い、砂丘を形成する土砂の流入量も増加したことから安定化できず土壌化が進まなかったと考えられる。また、各遺跡での砂丘形成の契機となる「寒冷期」（もしくは小寒冷期）では、海水準が温暖期に比べ相対的に低下することも想定されている。このような寒冷期はおよそ1200年周期となっていることが、気候変動データから読み取られており、このようなデータを援用して博多湾岸に点在する他の砂丘遺跡の形成時期も詳細が明らかにされると期待される。

福岡市埋蔵文化財課が平成30年度より発掘調査を継続した都市計画道路部分は、箱崎キャンパス跡地を南北に縦断するように長い調査区となっている。各地点の調査では集落の展開時期をはじめ、各砂丘地形の利用状況の変遷も確認され、現在は鋭意整理・報告作業が進められている。今後の報告書刊行を予定しており、九州大学埋蔵文化財調査室報告と合わせ、これまで不明確であった箱崎遺跡範囲北側について新たな知見を得ることができると期待される。また、箱崎遺跡内では九州大学箱崎キャンパス跡地の再開発に前後して周辺の再開発事業は活発化している。再開発事業に先駆けて行われる発掘調査件数も増加することが想定されており、今後の調査研究でさらに箱崎遺跡の全容解明が深化することに期待したい。



第55図 博多湾遺跡分布・砂丘地形復元図 (S = 1/16,000)

引用文献

- 榎本義嗣 2003「福岡市所在の箱崎遺跡について」『中世都市研究会2003年九州大会 資料集』中世都市研究会2003年九州実行委員会、65～74頁
- 甲元眞之 2007「環境変化の考古学的検証」『砂丘形成と寒冷化現象』平成17年度～18年度科学研究費補助金研究成果報告書、7～31頁
- 中尾祐太 2018a「考古学からみた箱崎と博多湾」『九州史学』第180号、九州史学研究会、3～32頁
- 中尾祐太 2018b「考古学からみた箱崎」九州史学研究会（編）『アジア遊学224 アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版、10～23頁
- 中塚 武 2020「中世における気候変動の概観」中塚武（監修）、伊藤啓介・田村憲美・水野章二（編）『気候変動から読みなおす日本史4 気候変動と中世社会』臨川書店、15～35頁

箱崎砂州先端部におけるモンゴル襲来前後の土地利用史

福永 将大

1. はじめに

日本の前近代唯一の本格的な外寇と言われているのがモンゴル襲来である。ユーラシア大陸において強大な勢力を誇っていたモンゴル帝国によって、日本は、文永十一年（1274）と弘安四年（1281）の二回にわたる侵寇を受けた。いわゆる文永の役と弘安の役である。

これまでモンゴル襲来の研究は文献史学を中心に行われてきており、モンゴル軍侵攻プロセスや、鎌倉幕府・武士層の諸対応の解明など、多大な研究成果があげられてきた。しかし、これらは主に武士層が残した文字・絵画史料の分析から導き出された成果であるため、一般民衆の歴史復元といった研究視点が希薄であるという問題がある。モンゴル襲来の脅威が、当時の人々の生活にどのような影響・制約を与えたのか、そしてそれがどのように記憶・忘却されていったのか、については十分な研究がなされてきたとは言い難く、正しい歴史認識を構築するためにもその解決が望まれる。

文永の役後、モンゴル帝国による再度の侵略を防ぐため、博多湾沿岸一帯に石を積み上げて防壁を築造した。これがいわゆる元寇防塁である。元寇防塁は、戦いの最前線に築造された国防の要であり、その意味でモンゴル襲来の脅威を象徴するモニュメントであるという評価もできよう。戦いの最中、あるいは戦いの脅威が人々の心に刻まれている間は、元寇防塁周辺で人々が生活を営むとは考えられない。これは逆に、元寇防塁周辺で生活の痕跡が見られるようになるということは、人々のモンゴル襲来に対する脅威が希薄化したと捉えることができるのである。

このような思考を議論の立脚点とするとき、九州大学箱崎キャンパスが位置する箱崎遺跡北部（以下、九大箱崎キャンパス内遺跡と呼称）は、本研究を遂行する上で最適な分析対象と言える。九大箱崎キャンパス内遺跡では、2016年以降の九州大学埋蔵文化財調査室による継続的な発掘調査により、元寇防塁の位置が判明しており、かつ、元寇防塁周辺域から複数の生活痕跡が見つまっているためである。これらの調査成果を最大限に活かし、箱崎砂州先端部における土地利用史を復元することによって、モンゴル襲来が人々の生活に与えた影響・制約について考えてみたい。

2. 箱崎遺跡の時空間的変遷

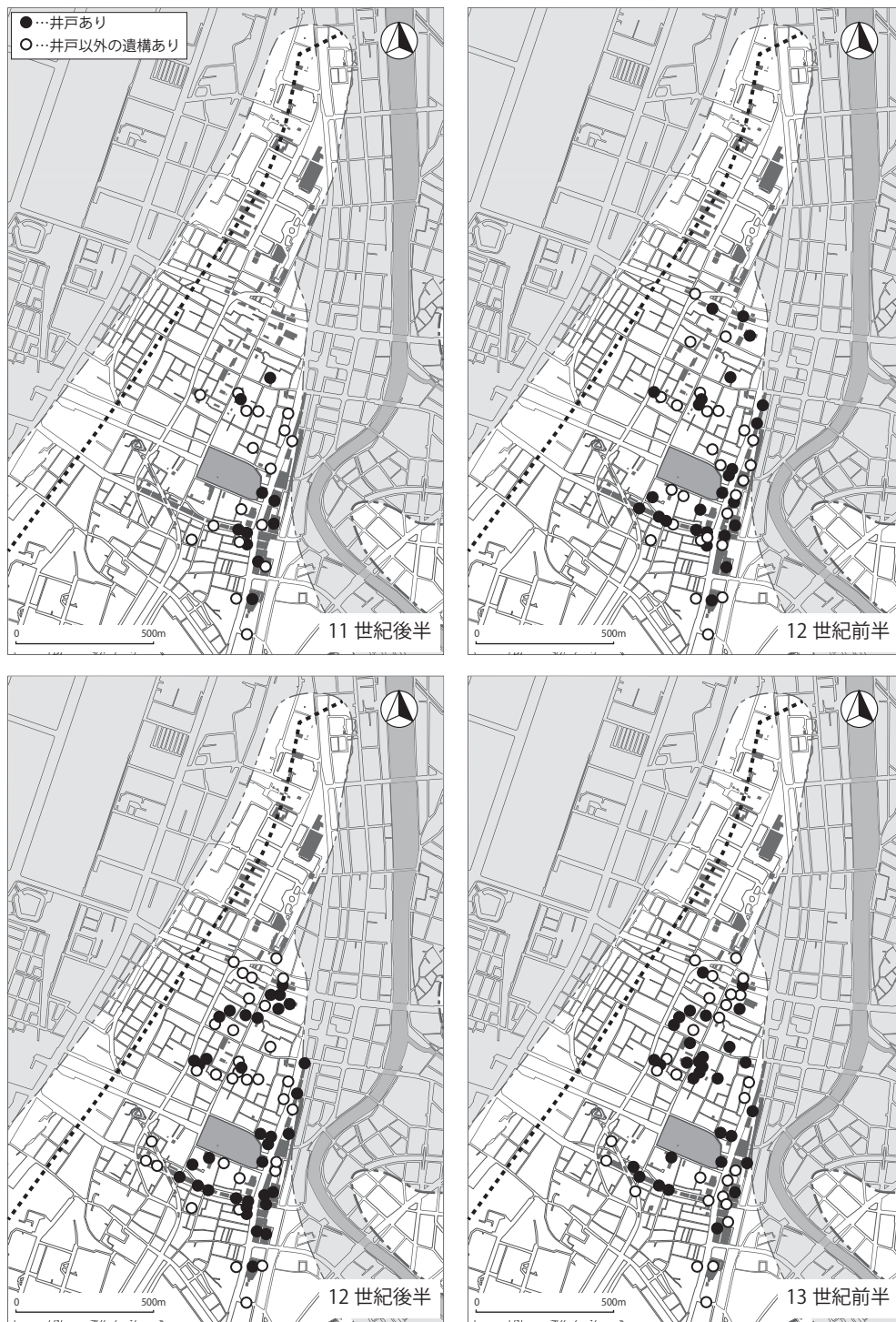
九大箱崎キャンパス内遺跡の検討に入る前に、その南側に位置する箱崎遺跡の時空間的変遷について概観しておきたい。昭和58年（1983）に、福岡市営地下鉄建設工事に伴う最初の発掘調査が行われてから、40年が経過しようとしている。これまでに福岡市教育委員会が主体として行ってきた発掘調査回数は100回を越えており、膨大な考古学的データの蓄積がある。

第57図・第58図は、11世紀後半から16世紀までの各時期ごとに、何らかの遺構が検出されている調査地点をプロットしたものである。定着的な土地利用を示すと考えられる井戸が検出されている場合、ドットの形式を変えて表現した。なお、2021年3月時点で報告書が刊行されている箱崎遺跡第101回調査までを分析の対象としている。

11世紀後半～12世紀前半 箱崎宮周辺で多くの遺構が検出されており、特に箱崎宮の南東側に分布の中心がある。12世紀前半になると、遺構検出範囲は北側に拡大する傾向が読み取れるが、箱崎宮



第56図 箱崎遺跡 調査地点配置図

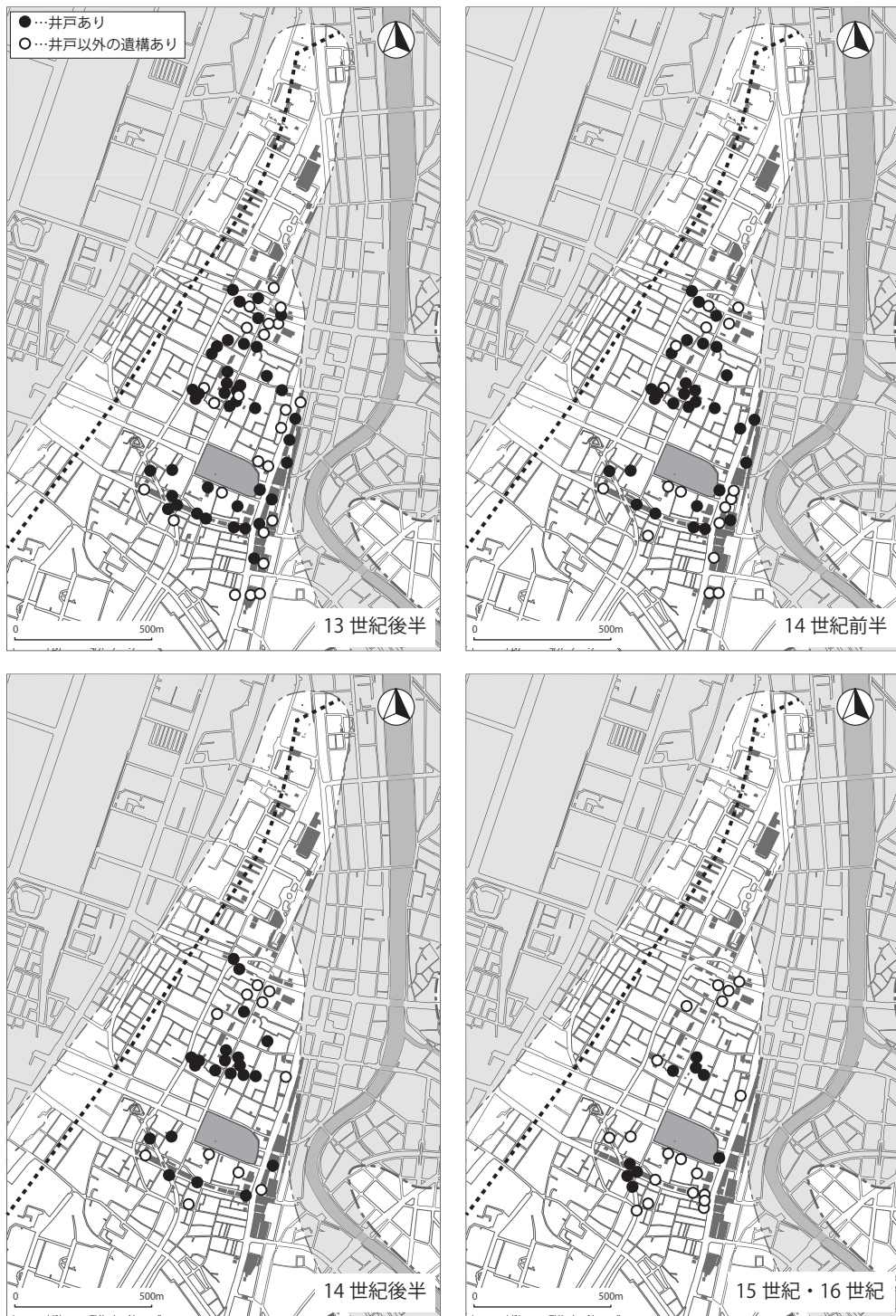


第57図 箱崎遺跡：11世紀後半～13世紀前半

南東側に分布中心が見られる点は、前段階から変わらない。

12世紀後半～14世紀前半 12世紀後半になると、遺跡北側でも遺構が検出されるようになり、多くの井戸がつくられるようになる。筥崎宮南東側でも依然として多くの遺構が検出されているが、14世紀前半になると、井戸の検出数を含め、遺構数がやや減少するようだ。

1274年・1281年にモンゴル襲来が起きているが、13世紀後半と14世紀前半で、遺構検出状況に大き



第58図 箱崎遺跡：13世紀後半～16世紀

な変化は生じていないことが読み取れる。参考として各時期のドットマップに、元寇防塁の推定線を示した。元寇防塁はまさに戦いの最前線に位置すると考えられるが、そのすぐ東側では、13世紀後半から14世紀後半にかけて継続的に井戸が検出されている。第58図のような50年刻みの解像度では十分に状況を反映しきれていない可能性もあるが、少なくとも本図からはモンゴル襲来が人々の生活に与えた影響を読み取ることは難しい。

14世紀後半～16世紀 14世紀後半以降、遺構の検出数が減少する。特に前段階まで多くの遺構が見られていた箱崎宮南東側では、遺構数が激減していることが読み取れる。遺跡北側でも遺構数は減少しているが、14世紀後半までは、箱崎宮の北側で多数の井戸が確認できる。

15世紀・16世紀になると、遺構の分布状況は前段階と大きく変わらないが、井戸の分布傾向は変化しており、現在の県道21号線沿いに集中して井戸が掘られているように見える。15世紀前後において、箱崎の町割りが変化している可能性が指摘できよう。

先学との対比 箱崎遺跡の時空間的変遷については、これまで先学によっても議論されてきており（池崎 1988；榎本 2003・2008；佐藤 2013；中尾 2018）、第57図・第58図は、そうした先学の諸成果を追認するものとなった。第57図で遺構数増加を確認した12世紀後半は、先学でも画期として捉えられており、この時期に箱崎遺跡は都市化したとされる。生活遺構に加えて、埋葬遺構も急増しており、また、遺跡北側では、青銅製品の鋳型や取瓶などの出土から、青銅や鉄、ガラスの生産を行う商工業者の存在が指摘されている。

14世紀後半以降、現在の県道21号線に面して建物遺構や井戸を配する遺構分布が確認できることも指摘されており、箱崎宮や周辺寺院の区画溝の可能性が指摘されている15世紀後半～16世紀前半の溝も検出されている（榎本 前掲）。

3. 九大箱崎キャンパス内遺跡における発掘調査成果

(1) 元寇防塁周辺の遺構とその時期

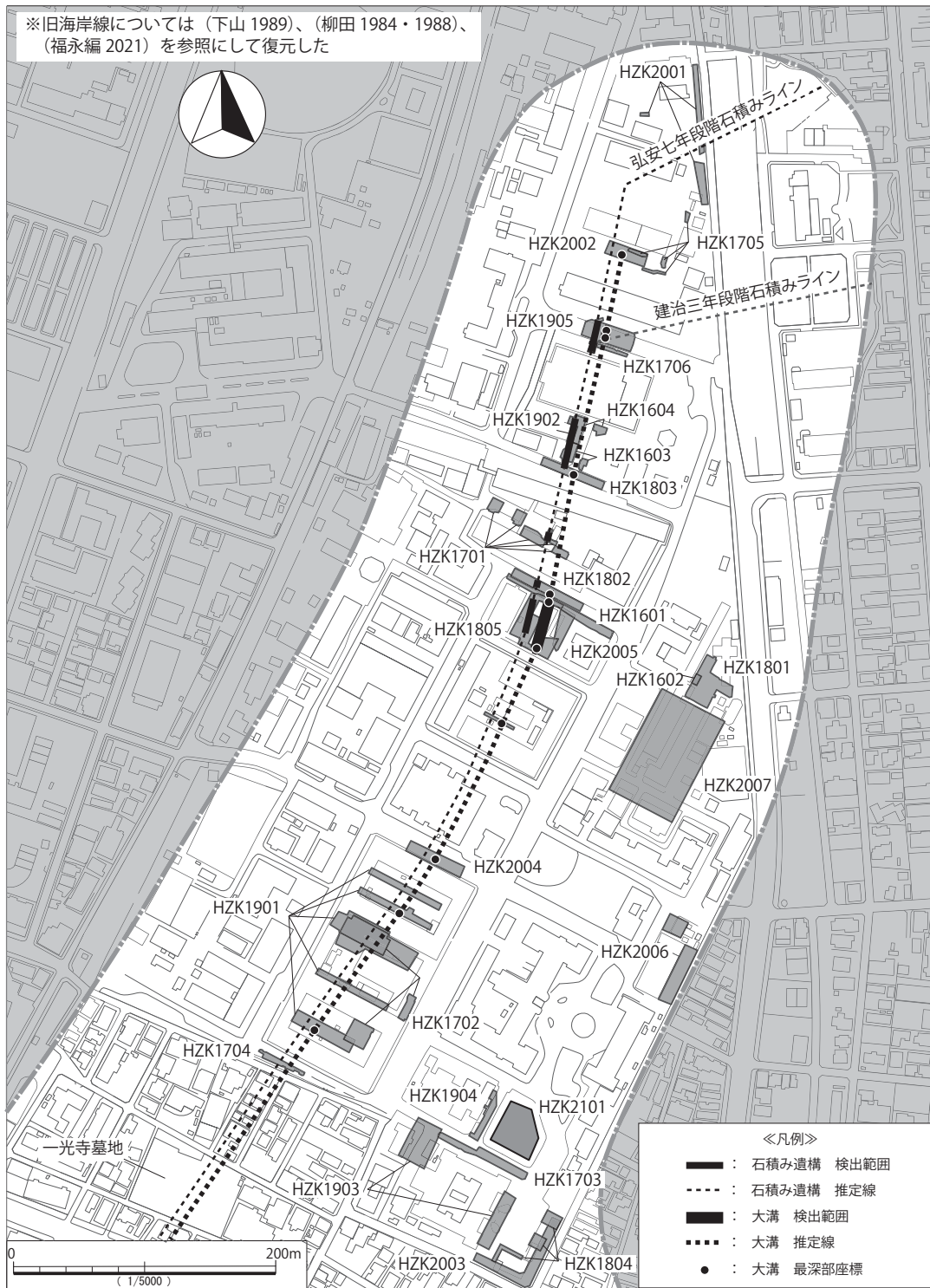
箱崎砂州先端部におけるモンゴル襲来前後の土地利用について検討する。箱崎砂州先端部に位置する九大箱崎キャンパス内遺跡では、これまでの発掘調査によって元寇防塁が見つかり、かつ、遺跡内における元寇防塁推定線が確定している。ここでは、元寇防塁推定線上に位置する調査区を対象として、検出されている遺構と出土遺物を検討することで、戦いの最前線の場所における人々の諸活動について考えてみたい。なお、対象とする調査区は、北から HZK2001・1705・2002・1905・1706・1604・1902・1603・1803・1701・1802・1601・1805・2004・1901・1702・1704地点で（第59図）、これらの調査区の発掘調査成果については既に報告書で公表されている（福田・森編 2018；三阪・谷編 2019；齋藤編 2020；福永編 2021）。

元寇防塁周辺の遺構 元寇防塁推定線上に位置する調査区で検出されている遺構の一覧が第6表である。第6表に示した遺構の時期は、発掘調査報告書の記述に依る。

検出されている遺構は、土坑・溝・井戸・石組遺構・火葬土坑（荼毘の場）であり、これらのほとんどはモンゴル襲来以後、すなわち14世紀以降に構築されていることが読み取れる。

HZK1805地点の火葬土坑 SK07からは、14世紀後半～15世紀前半に属すると考えられる土師鍋が出土しており（第60図）、遺構もこの時期の所産であると考えられる。この火葬土坑 SK07からは小礫が多数検出されており、中には被熱した小礫も確認できることから、火葬を行った際には既に小礫が存在していたことは疑いない。この小礫は、元寇防塁の石を後世の人々が資材として用いるため、石を採り、手頃なサイズに割るなどした行為の結果生じたものと考えられる（齋藤編 前掲）。つまり、火葬土坑 SK07が構築される14世紀後半～15世紀前半より前の段階で、防塁は既に管理されることなく、廃絶していたと推察されるのである。

一方、防塁周辺で検出されている最も古い遺構は、HZK1802地点の SD122で、報文中では出土遺物の年代と、1152-1247 calAD の値を示す炭化物の年代測定結果とを踏まえて、12世紀後半～13世紀



第59図 九大箱崎キャンパス内遺跡 調査地点配置図

前半の所産と位置づけられている(齋藤編 前掲)。第61図2~15がSD122から出土した遺物である。確かに12世紀後半(2・3・6・7など)や13世紀前半(5)の陶磁器が出土しているが、15の資料は近世まで下る可能性も指摘されている(齋藤編 前掲)。未報告資料の中に、近世の人形片や陶磁器片が少量混ざっていることも見逃せない。また、このSD122が南側に延長したものと考えられる痕跡が、隣接するHZK1805地点で見ついている(トレンチ4の13層)(齋藤編 前掲)。この層から

出土した炭化物を年代測定したところ、41822-40930 calAD という値が出ており、亜炭の可能性が指摘されている。亜炭は石炭の中でも最も石炭化度が低いもので、自然堆積層中に存在することもあることから、一概に13層を現代の攪乱と切り捨てることはできない。しかし、これまで九大箱崎キャンパス内遺跡で行った年代測定において、遺構から亜炭が検出された事例は確認できず、攪乱と考えられる層中からのみ出土していることも、また事実である。これらの諸点を踏まえると、SD122の所属時期を12世紀後半～13世紀前半と断ずることは困難である。当該遺構の時間的位置づけに関しては、現状では留保せざるを得ないであろう。

その他に13世紀代に遡る可能性がある遺構が複数存在している。HZK1802地点のSD103、HZK1901地点 A 区のSK06、HZK1901地点 B 区のSK10・SK16・SK18である。HZK1802地点SD103は13世紀後半～14世紀前半とされているが、出土している土師鍋の口縁部片（第61図1）を見ると、小片のため判断は難しいが、それよりも時期的に新しくなる可能性もある。HZK1901地点 A 区のSK06、HZK1901地点 B 区のSK10・SK16は、報文中では「13世紀以降」や「13世紀後半以降」と表現されており、出土遺物が少量かつ小片であるためか（同図16～24）、遺構の時期の下限については明記されていない。HZK1901地点 B 区SK18は13世紀中頃～14世紀前半とされており、出土遺物（同図25・26）を見る限り、妥当な判断と言えよう。

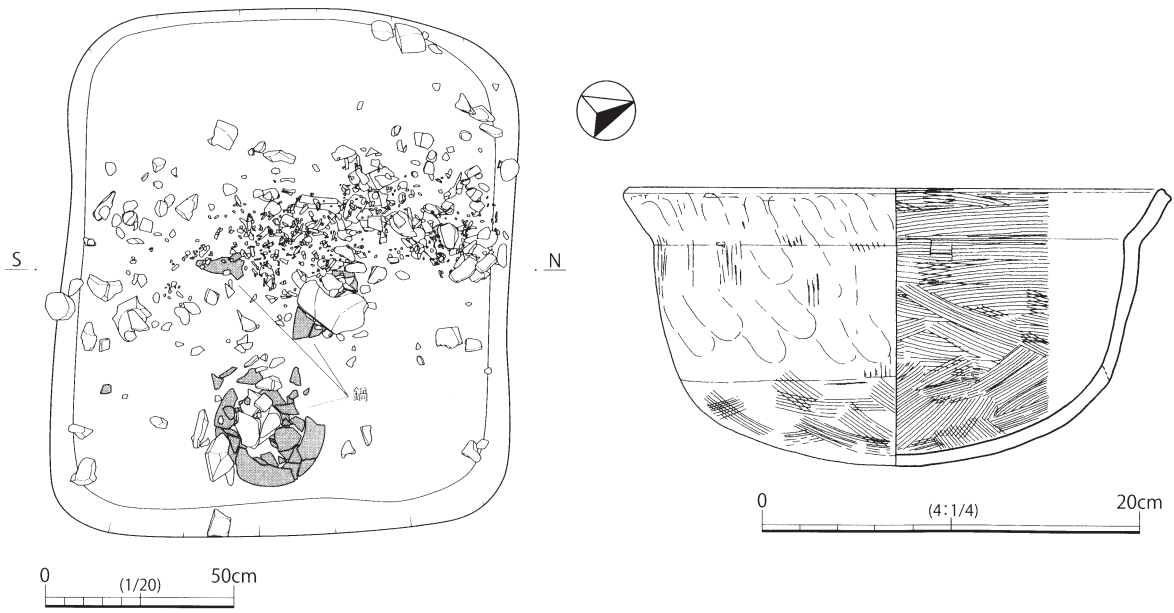
以上より、元寇防塁推定ライン上に位置する調査区では、13世紀後半～14世紀前半の遺構が散見されるものの、その多くはモンゴル襲来のあとに残された痕跡であると判断できる。HZK1802地点のSD122の時間的位置づけが課題ではあるものの、確実にモンゴル襲来以前に存在していたと判断できる遺構は、現状では確認できない。

大溝の埋土出土遺物 九大箱崎キャンパス内遺跡における元寇防塁の特徴の一つとして、大溝の存在が挙げられる。石積みに平行して人工的に掘削された空堀で、箱崎砂州先端部の元寇防塁は、石積みと大溝がセットをなして機能していたと考えられる。石積みと同様、大溝も後世に修理などが行われたことが推測されるが、大溝の埋土は、築造された1276年頃以降に堆積したものであることは間違いない。この大溝埋土から出土した遺物を検討することで、元寇防塁が機能し、そして廃絶されるまでのプロセスを復元できる可能性がある。

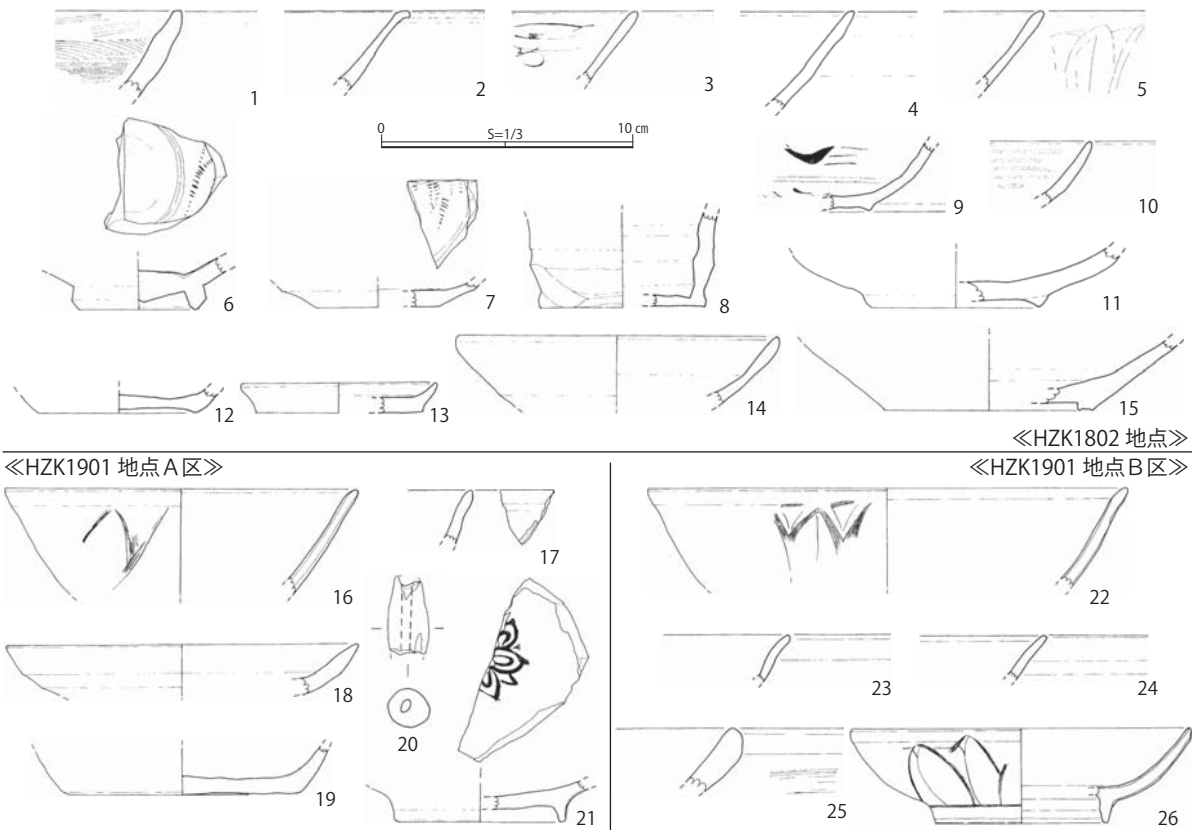
第62図はHZK1803地点とHZK1905地点の大溝から出土した遺物である。遺物の出土量は少ないものの、12世紀後半に位置づけられるものが目立つ（第62図1・3～5）。HZK1905地点の大溝埋土

第6表 九大箱崎キャンパス内遺跡 遺構年代

調査地点	遺構名	遺構種別	時期
HZK1704地点	SK01	土坑	14世紀～15世紀中葉
	SK02	土坑	14世紀～16世紀
	SK03	土坑	14世紀～16世紀
	SK04	土坑	不明
	SK05	土坑	14世紀～16世紀
	SK06	土坑	14世紀～16世紀
HZK1803地点	SD02	溝	中世後期
HZK1802地点	SD122	溝	12世紀後半～13世紀前半
	SD103	溝	13世紀後半～14世紀前半
HZK1805地点	SP05	ピット	中世後半代
	SK04	土坑	14世紀末以降
	SK06	土坑	14世紀以降
	SK07	火葬土坑	14世紀後半～15世紀前半
	SD13	溝	15世紀
	SD15	溝	14世紀
HZK1901地点 A 区	SK01	土坑	15世紀
	SK04	土坑	近世・近代
	SK05	土坑	近世・近代
	SK06	土坑	13世紀以降
	SK09	土坑	14世紀～15世紀
	SK10	土坑	13世紀以降
HZK1901地点 B 区	SK13	土坑	14世紀～15世紀
	SK14	土坑	14世紀
	SK15	土坑	14世紀～15世紀
	SK16	土坑	13世紀後半以降
	SK17	土坑	14世紀以降
	SK18	土坑	13世紀中頃～14世紀前半
	SD033	溝	15世紀～16世紀
	SD046	溝	15世紀～16世紀
HZK1901地点 C 区	SD069	溝	15世紀～16世紀
	SK019	土坑	15世紀～16世紀
	SK081	土坑	15世紀～16世紀
	SX031	石組遺構	15世紀～16世紀？
HZK1901地点 E 区	SD01	溝	15世紀後半～16世紀
	SE19	井戸	15世紀～16世紀
	SK02	土坑	15世紀後半～16世紀
	SK11	土坑	14世紀後半～15世紀中頃
	SK14	土坑	15世紀～16世紀

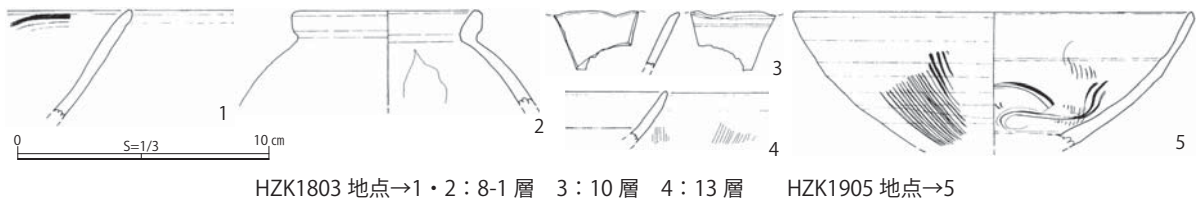


第60図 HZK1805地点 SK07



HZK1802 地点→SD103 : 1 SD122 : 2 ~ 15 HZK1901 地点A区→SK06 : 16 ~ 21
 HZK1901 地点B区→SK10 : 22 SK16 : 23・24 SK18 : 25・26

第61図 HZK1802地点および HZK1901地点A区・B区の遺構出土遺物



HZK1803 地点→1・2：8-1層 3：10層 4：13層 HZK1905 地点→5
第62図 HZK1803地点および HZK1905地点の大溝出土遺物

(4層) から採集した炭化物2点を年代測定したところ、 2σ の暦年代範囲で、945-1025 calAD (73.19%)と1043-1087 calAD (43.70%)の測定値が出ている。出土遺物の年代・出土炭化物の年代はともに、大溝が造られた13世紀後半よりも古い年代値を示すことになる。

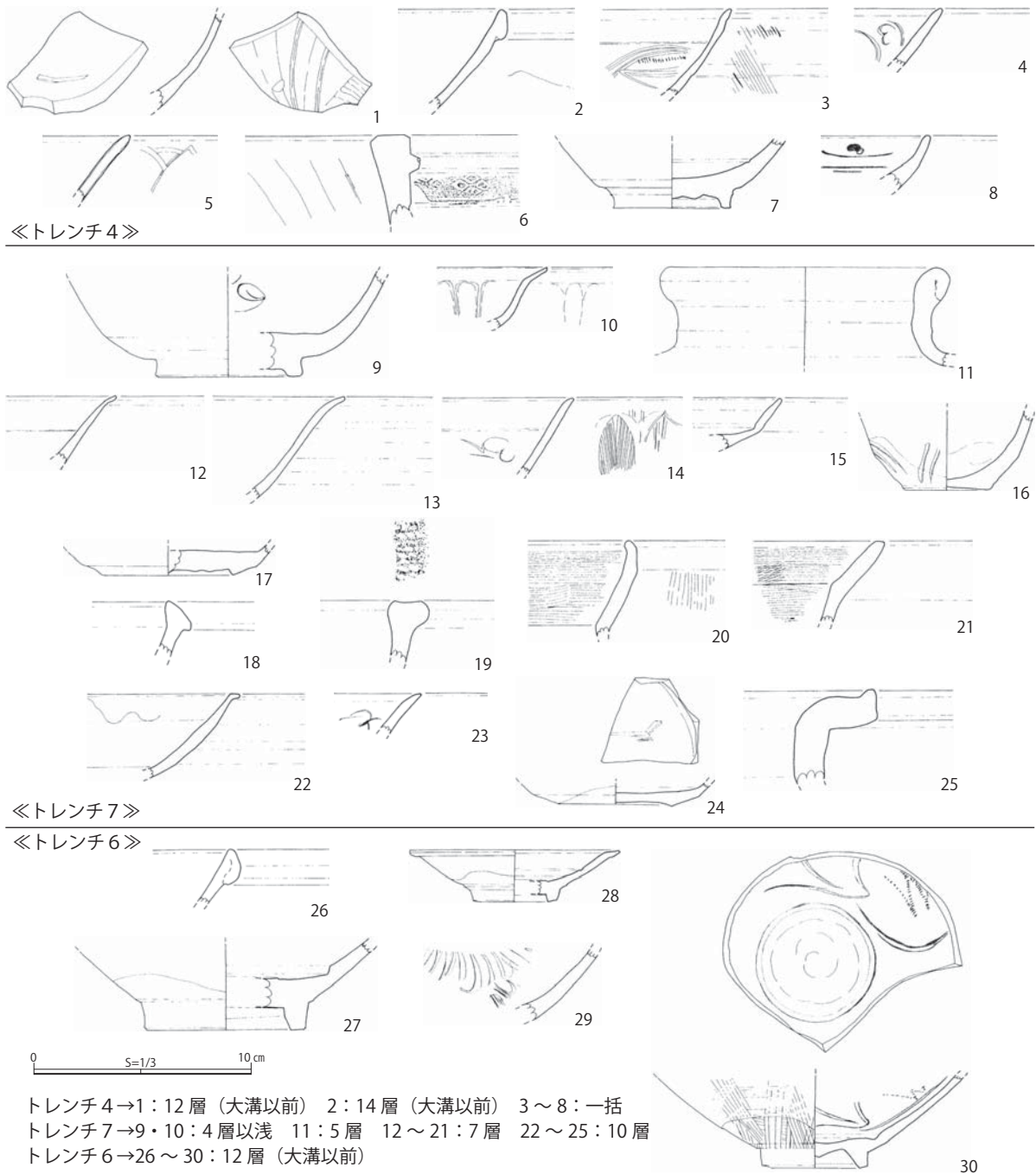
第63図は HZK1805地点の大溝と大溝が築造される以前の堆積層から出土した遺物である。他地点で検出されている大溝の最大幅がおおよそ6～9m程度であるのに対し、HZK1805地点は15.3mと幅広く、かつ、遺物の出土量も他に比べて多いという特徴がある。大溝の出土遺物を見ると、先の HZK1803地点・HZK1905地点と同様、12世紀後半に位置づけられるものが多い(第63図3・4・12・14など)。一方、14世紀～15世紀代の資料も一定数見られ(同図6・7・20・21)、HZK1803地点・HZK1905地点とは様相を異にしている。

HZK1805地点の大溝で、トレンチ4から採取した炭化物の年代測定を行っている。その結果、 2σ の暦年代範囲で、3層は1726-1781 calAD (42.4%)、4層は1441-1498 calAD (88.8%)、7層は1277-1307 calAD (62.8%)、9層は1158-1247 calAD (95.4%)、10a層は1154-1224 calAD (94.1%)、12層は1170-1258 calAD (95.4%)、15層は1147-1212 calAD (49.1%)の測定値が出ている。このうち大溝の埋土は7層・9層・10a層であり、7層は13世紀後半～14世紀前半、9層・10a層は12世紀後半～13世紀前半の値を示す。点数は少ないものの、下層から上層に向かうにつれて新しい年代の炭化物が出土しており、大溝埋土が時間とともに徐々に堆積していった様相が窺える。

なぜ各地点の大溝から、大溝が造られた13世紀後半よりも古い遺物や炭化物が出土するのであろうか。ここで注目されるのが、出土遺物の状態である。中には図上復元できる個体もあるが、大溝から出土した遺物は総じて小片が多い。さらに興味深いのは遺物の磨耗度である。大溝築造以前の堆積層から出土した11世紀後半～12世紀前半の白磁碗(第63図2・26)は、器面が磨耗しているものの、大溝から出土したその他の陶磁器類はそこまで磨耗していない。それに比べて、土師器類の多くはローリングを受けており、器面が著しく磨耗している(第64図上)。しかし、HZK1805地点での出土が目立つ、14世紀～15世紀代の比較的新しい時期の土師器(第63図20・21など)は、器面が磨耗しておらず、断面もシャープさが残っている(第64図下)。

また、HZK1905地点の報文では、大溝埋土(4層)に層理構造は見られず、中・長期的な海浜砂の供給を受けて徐々に埋没したというよりも、洪水イベントなどの突発的な自然現象などによって、短期的に埋没した可能性が指摘されている(福永編 前掲)。また、HZK1803・1805地点では、防塁築造以前の堆積層から複数の自然流路が検出されており、防塁築造直前までは安定した陸地が形成されていなかった可能性が指摘されている(齋藤編 前掲)。

これらの諸点を踏まえると、大溝埋土から出土した遺物は、洪水などの自然現象によって他所から流れ込んだものである可能性が高い。九大箱崎キャンパス内遺跡の東側には宇美川・多々良川が存在している。宇美川・多々良川と九大箱崎キャンパス内遺跡の間にあった過去の痕跡が、洪水などの影



第63図 HZK1805地点の大溝出土遺物

響で削り流され、その土砂が大溝の中に堆積した結果、大溝構築時期よりも古い遺物や炭化物が混入したと考えられるのである

HZK1805地点では、12世紀後半の遺物に加え、14世紀～15世紀代の比較的新しい遺物が出土している。これら新しい時期の土師器類は器面が磨耗しておらず、洪水堆積の可能性を考えた古い遺物群とは、堆積コンテクストが異なることが推測される。HZK1805地点では、元寇防塁の廃絶後に火葬土坑SK07が構築されているのは先述の通りである。火葬土坑SK07からは14世紀後半～15世紀前半

の土師鍋が出土しており、大溝からは、この土師鍋と近い時期の所産である遺物（第63図20・21など）が出土している。このことから、大溝出土の14世紀～15世紀代の遺物は、防塁廃絶後に当該地点付近を茶毘の場などに利用した際に廃棄され、堆積したものと判断できよう。

（2）九大箱崎キャンパス内遺跡における井戸（予察）

井戸は、人々が生活する上で必要な生活用水を供給してくれる重要な構築物である。井戸が造られるということは、その土地である程度定着的な居住・生活が行われていたことの証となる。九大箱崎キャンパス内遺跡からも井戸が見つかっており、それらの築造年代がわかれば、箱崎砂州先端部における定着的な土地利用の開始時期などについて明らかにすることができよう。

九大箱崎キャンパス内遺跡における井戸検出範囲はキャンパス南東部に偏っている。井戸を検出した調査地点はHZK1804・1901・1903・1904・2003地点で、そのうちHZK1901地点E区の井戸SE19のみが報告されている（第6表、福永編 前掲）。井戸SE19は掘り方の形状が方形を呈し、一段テラスを設けたところからさらに掘り込んで木枠を設けている。15世紀～16世紀の遺物が出土しているほか、木枠内からは九州帝国大学時代の建築部材と考えられるレンガ片も出土しており、中世後期以降に造られた井戸が、大正・昭和時代まで廃棄されずに残置されていたものと考えられる。

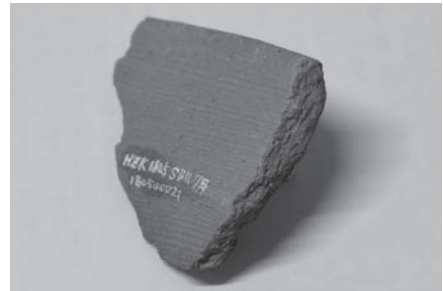
その他の調査地点に関しては、令和4年度以降に報告書刊行予定のため、検出された井戸や出土遺物に関して、いま現在整理作業を行っている最中である。ここでは、各調査地点で検出した井戸の木枠の年代測定結果¹⁾を提示し、かつ、出土遺物の時期も踏まえた上で、井戸の築造年代を把握する。なお、今回提示する井戸の築造年代は速報的なもので、今後の整理作業次第では遺構の年代に変更が生じる可能性があることを記しておきたい。タイトルに「予察」と付記した所以である。

第7表は、出土遺物から判断した井戸の年代と、井戸木枠の年代測定結果とをまとめたものである。出土遺物から判断した年代と木枠の年代測定結果は概ね一致するものが多いが、HZK1903地点B区のSE59やSE77のように一致しないものもある。今回分析した木枠は、全て最終形成年輪以外であると判定されており、木取りした部位によっては著しく古い年代値が出る可能性も十分考えられる。木枠の年代測定値はあくまでも参考程度にとどめ、井戸の年代については出土遺物から最終的に判断するのが賢明であろう。

第7表によると、井戸が造られ始めるのは12世紀後半以降であり、それより遡る年代の井戸は現状では確認できない。その後、15世紀～16世紀まで継続的に築造されており、当該地域における人々の活動が連綿と続いていたことがわかる。13世紀後半～14世紀前半の所産と考えられる井戸も複数確認でき、少なくとも考古学的な時間尺度では、モンゴル襲来前後に当該地域における人々の土地利用が断絶した様子は看取されない。



HKZ1805 地点 トレンチ7 土師坏
(齋藤編 2021、第 56 図 20)



HKZ1805 地点 トレンチ7 土師鍋
(齋藤編 2021、第 56 図 14 (本稿第63図21))

第64図 土師器における磨耗度合の差

第7表 九大箱崎キャンパス内遺跡 井戸年代

調査地点	遺構名	形状	出土遺物から見た遺構年代*	木枠の年代測定結果 (2σ 暦年代範囲)
HZK1804地点 C 区	SE14	円形木桶	12世紀後半～13世紀初頭	1039-1111 cal AD (56.64%)
				1112-1161 cal AD (38.81%)
				1053-1061 cal AD (2.34%)
				1067-1075 cal AD (1.37%)
				1156-1220 cal AD (91.74%)
HZK1903地点 A 区	井戸1	円形木桶	井戸掘方→13世紀後半～14世紀初頭 井戸枠内→14世紀～15世紀	—
HZK1903地点 A 区	井戸3	円形木桶	13世紀後半～14世紀初頭?	—
HZK1903地点 A 区	井戸4	円形木桶	14世紀?	—
HZK1903地点 A 区	井戸5	円形木桶	15世紀～16世紀?	—
HZK1903地点 A 区	井戸6	円形木桶	14世紀?	—
HZK1903地点 B 区	SE58	円形木桶	13世紀後半～14世紀前半	1294-1323 cal AD (39.12%)
				1356-1392 cal AD (56.33%)
				994-1007 cal AD (5.40%)
				1011-1053 cal AD (34.26%)
				1062-1066 cal AD (0.67%)
HZK1903地点 B 区	SE59	円形木桶	15世紀	1076-1156 cal AD (55.12%)
				1053-1061 cal AD (3.45%)
				1067-1075 cal AD (2.35%)
				1156-1219 cal AD (89.65%)
				1179-1191 cal AD (5.06%)
HZK1903地点 B 区	SE60	円形木桶	14世紀?	1204-1266 cal AD (90.39%)
				—
				—
				—
				—
HZK1903地点 B 区	SE61	円形木桶	14世紀～15世紀?	—
HZK1903地点 B 区	SE62	円形木桶	14世紀～15世紀	—
HZK1903地点 B 区	SE64	円形木桶	12世紀後半～13世紀前半	1158-1220 cal AD (95.45%)
HZK1903地点 B 区	SE66	円形木桶	14世紀～15世紀?	1326-1352 cal AD (25.95%)
				1394-1422 cal AD (69.50%)
HZK1903地点 B 区	SE67	円形木桶	13世紀	1181-1187 cal AD (1.63%)
				1213-1268 cal AD (93.82%)
HZK1903地点 B 区	SE68	円形木桶	13世紀後半～14世紀初頭?	—
HZK1903地点 B 区	SE75	円形木桶	—	1046-1084 cal AD (39.00%)
				1094-1103 cal AD (2.41%)
				1124-1215 cal AD (54.04%)
HZK1903地点 B 区	SE76	円形木桶	—	1161-1226 cal AD (95.45%)
				1303-1367 cal AD (75.61%)
				1381-1398 cal AD (19.84%)
HZK1903地点 B 区	SE77	円形木桶	13世紀後半～14世紀初頭?	992-1027 cal AD (95.45%)
				892-991 cal AD (95.45%)
HZK1904地点	SE46	円形木桶	13世紀	—
HZK1904地点	SE55	円形木桶	14世紀?	—
HZK2003地点 D 区	SE4015	円形木桶	15世紀～16世紀	1319-1360 cal AD (65.35%)
				1389-1411 cal AD (30.10%)
				1401-1434 cal AD (95.45%)
				1306-1364 cal AD (76.52%)
				1385-1402 cal AD (18.93%)
				1406-1437 cal AD (95.45%)

※出土遺物は未整理のため、今後の整理作業次第では遺構の年代が変わる可能性あり

4. 箱崎砂州先端部における土地利用史と元寇防塁

元寇以前の箱崎砂州先端部 箱崎砂州先端部において人々の活動痕跡が確認されるのは、12世紀後半以降である。玉縁の白磁碗など12世紀後半を遡る遺物も出土しているが、それらは包含層からの出土であり、かつ、器面の風化・磨耗が著しい。現状では12世紀後半より古い遺構は確認できていない。

こうした古手の遺構は、箱崎キャンパスの南東部に偏って分布していることは注目される。HZK1804地点 C 区や HZK1903地点 B 区では、12世紀後半～13世紀前半や13世紀代の井戸が確認され

ている（第7表）。また、未報告の調査地点ではあるものの、HZK2006地点では12世紀後半～13世紀前半の木棺墓が見つかった²⁾。一方、これまで検討してきたように、元寇防塁推定線上に位置する調査地点では、モンゴル襲来以前と確実に判断できる遺構は確認されていない（第6表）。

元寇防塁を構成する大溝の埋土から出土した遺物は12世紀後半のものが多く、出土遺物の状態などから、洪水などの自然現象によって他所から流れ込んだものである可能性が高いと判断した。これら大溝埋土の出土遺物が元々存在していた場所の候補として、箱崎キャンパス南東部を挙げておきたい。HZK1703・1804・1903・1904・2003・2101地点やHZK2006地点の周辺に存在していた12世紀後半の痕跡が、その東側に位置する宇美川の氾濫を受けて、北西方向に削り流されたものと推察されるのである。

ここで、なぜ箱崎砂州先端部において活動痕跡が確認されるようになるのが12世紀後半からなのかについて考えてみたい。この12世紀後半という時期は、箱崎遺跡においても画期と認識され、生活域が遺跡全域に拡大して都市化していく時期と位置づけられており（榎本 前掲；中尾 前掲）、その点は第57図においても追認したところである。こうした12世紀後半の箱崎遺跡における人々の活動域の拡大現象が、箱崎砂州先端部にも及んだものと考えることができよう。では、なぜ12世紀後半なのであろうか。

その要因の特定は容易ではないものの、ここでは箱崎砂州の地形発達が発達した活動域の拡大現象に影響を及ぼした可能性を指摘しておきたい。九大箱崎キャンパス内遺跡では、HZK1701地点やHZK1802地点においてジオスライサー調査が行われており（福田・森編 前掲；三阪・谷編 前掲）、箱崎砂州先端部の形成過程が議論されてきている。HZK1802地点の調査では、AD1030年前後に起きた大規模な出水により堆積した土砂をベースとして浜堤が形成された可能性、そして、AD1060年以降AD1281年以前に堆積速度が急に増大していることから、洪水によって河川から砂が大量供給され、箱崎砂州先端部が急速に拡大した可能性が指摘されている（市原・下山 2019；下山・三阪・市原 2019a・2019b）。

近年、樹木年輪セルロース酸素同位体比の測定によって、中世日本における年単位での降水量や気温の復元がなされている（中塚 2020）。それによると、10～11世紀は乾燥・温暖の極にあり、それ以降、短期・中期的な変動を繰り返しながらも、長期的には15～16世紀まで一貫して湿潤・冷涼な気候に向かって変化することが示されている。また、11世紀以降、数年単位の小刻みな変動を繰り返しながらもゆっくりと湿潤・冷涼化が進んでいたのに対し、12世紀後半から16世紀までの間は、数十年周期での激しい変動が続いた時期であったことも指摘されている。こうした11世紀以降の湿潤・冷涼化によって、洪水による河川堆積物の大量供給が促進され、箱崎砂州地形が発達した可能性がある³⁾。

11世紀後半以降における急速な箱崎砂州の地形発達が、12世紀後半頃、人々に新たな活動の場を提供したことが推察される。すなわち、12世紀後半以降に、九大箱崎キャンパス内遺跡を含む箱崎遺跡の北側で多くの遺構が検出されるようになるのは、発達過程にあった砂州地形が当該期前後に安定し、人々が活動できる土地が拡大したためと考えるわけである⁴⁾。100年近くの時間差が存在する両現象を因果関係で結びつけることに対しては、論理の飛躍であるとする批判は免れ得ないだろう。発達過程にある砂州地形が、人々の活動の場として安定するまでに、どの程度の期間を要するかについてのデータを持ち合わせていない現状では、両現象の因果関係についてこれ以上追究することは難しい。これまでの考古学・地質学・古気候学的諸データから導き出すことができる仮説の一つとして提示しておきたい。

さらに、12世紀後半頃における政治的・経済的背景も見逃せない。12世紀中頃には、大宰府・国司

が来航商戦を一律に管理下に置き、天皇が貿易の許可・不許可を判断するという、これまでの貿易管理体制が変化したことが指摘されている（榎本 2010）⁵⁾。権門と海商が大宰府を飛び越えて個別に関係を結ぼうとする動きが現れており、12世紀後半頃から博多居留の宋海商（博多綱首）は、博多周辺の寺社・荘園との関係を盛んに構築するようになるという（河辺 2007；榎本 前掲）。筥崎宮も複数の宋海商との関係を有していたと考えられており、筥崎宮の神人であり、大宰府大山寺の寄人でもあった張光安（大庭 1994；佐伯 1988など）は有名である。

このように、12世紀後半以降、博多の周縁に位置する箱崎でも、貿易活動が以前にも増して活発に行われるようになり、当該地域において人や物資の流入が盛んになったことが推察される。今後さらに考古学的・文献史的検討を深めていく必要があるものの、九大箱崎キャンパス内遺跡を含む箱崎遺跡北側への活動域拡大の要因として、こうした貿易活動の展開に伴う人流・物流の変化を想定することも可能であろう。

元寇以後の箱崎砂州先端部 九大箱崎キャンパス内遺跡における元寇防塁付近では、14世紀代になって人々の活動痕跡が認められるようになる（第6表）。特に、HZK1805地点の火葬土坑 SK07（第60図）は重要で、14世紀後半～15世紀前半より前の段階で、防塁は既に管理されることなく、廃絶していたことを示唆している。これまでの文献史学による研究成果により、康永元年（1342）までは元寇防塁の修理・警備がなされたとされる（川添 1971）。文献史学と考古学の研究成果が整合することは興味深い。

さらに注目されるのは、箱崎キャンパス南東部では、12世紀後半から16世紀代までの間、連綿と井戸が造られており、モンゴル襲来前後に当該地域で人々の生活痕跡が途切れる様子は確認できないことである（第7表）。未報告の調査地点であるが、HZK2006地点やHZK2007地点では火葬土坑が多数検出されており、そこから出土した炭化材を年代測定したところ、14世紀初頭から15世紀代の測定値が出ている。これら火葬土坑の年代については正式な報告を待って判断する必要があるが⁶⁾、元寇防塁の管理終了・廃絶の時期を待たずして、当該地域を葬送の場として利用していた可能性がある。

また、箱崎遺跡全体で見た場合でも、13世紀後半と14世紀前半で、遺構検出状況に大きな変化は生じていない（第58図）。元寇防塁推定線のすぐ東側では、13世紀後半から14世紀後半にかけて継続的に井戸が検出されている。

箱崎遺跡では、13世紀後半から14世紀頃のものと考えられる焼土の広がり確認されている。砂丘の北西側南北300m、東西100mの範囲を中心に焼土層が広がっており（第65図）、被熱し表面がただれた陶磁器も多くみられるという。こうした痕跡は、文永の役における被災の痕跡と推定されることが多いようだ（榎本 前掲；佐藤 前掲；中尾 前掲など）。

しかし、もしこの焼土層が文永の役における被災の痕跡だとすると、焼土層が遺跡北西側に偏って見られることにやや違和感を覚える。文永の役の際の戦火によって筥崎宮は炎上したとされており（池内 1931；服部 2017など）、筥崎宮周辺でも焼土層が検出されてもよさそうなものであるが、現状ではほぼ確認されていない。また、箱崎は建武三年（1336）の多々良浜の戦いにおいても被災しており、これら焼土層はその戦火によるものである可能性も指摘されている（佐伯 2001）。箱崎遺跡北西側で検出される焼土層に関しては、今後、当該層の形成時期に関する詳細な検討を行った上で、その位置づけについて再考する必要があるように思う。

このように見てくると、箱崎という地におけるモンゴル襲来時の戦禍の確実な考古学的痕跡は、現状では見出し難いことがわかる。文永十一年（1274）、博多湾西部から上陸したモンゴル軍は、鳥飼や赤坂付近で日本軍と激しい戦いを繰り広げたのち、博多・箱崎方面へ侵攻し、博多の町や筥崎宮を



第65図 箱崎遺跡 焼土分布域

焼き払ったとされる（服部 前掲など）。しかし実際のところ、当時の戦況を伝える『蒙古襲来絵詞』や『八幡愚童訓』といった数少ない史料の中で、箱崎へのモンゴル軍の侵攻や当該地での戦闘に関する記述は確認できない。そのため、モンゴル襲来研究の初期には、赤坂以東へのモンゴル軍侵攻の是非が議論されたこともある（池内 前掲；竹内 1913）。宮崎宮が炎上したことは間違いなさそうであるが（池内 前掲；服部 前掲）、当時の箱崎の状況は未だ不明な点が多いと言わざるを得ない。

文永の役におけるモンゴル軍の侵攻のあり方や戦況を踏まえた上で、モンゴル軍再来への備えが進められたと考えられる。おそらく、元寇防塁の築造場所やその構造をどのようにするか、といった判断にも影響を及ぼしたのではないだろうか⁷⁾。このような観点からすると、各地区における文永の役での戦禍の状況の復元は重要であり、史資料の限界は認識しつつも、考古学的・文献史的データに基づいた研究のさらなる深化が望まれる。

5. おわりに

本稿では、一般民衆の歴史復元の重要性を指摘した上で、モンゴル襲来の脅威が、当時の人々の生活にどのような影響・制約を与えたのか、そしてそれがどのように記憶・忘却されていったのか、について考古学的検討から明らかにすることを目的としていた。

その結果、戦いの最前線に築造された元寇防塁の周辺において、モンゴル襲来前後に人々の生活痕

跡が途切れるといったこともなく、考古学的検討からはモンゴル襲来に対する人々の諸対応を確認することは難しいことがわかった。また、九大箱崎キャンパス内遺跡の検討から、元寇防塁は少なくとも14世紀中頃には廃絶・埋没していたことが確認され、文献史学で言われている防塁の修理・整備の終了時期について、考古学的成果からも追認することとなった。

考古学では資料の性格上、数年、十数年単位での事象の変動を読み取ることは非常に難しい。そのため、モンゴル襲来が人々に与えた影響・制約の実態を、十分に把握できていないことも当然想定される。しかし、それは裏を返せば、仮にモンゴル襲来の戦禍を受けて、人々が生活の場を移動させ、あるいは、そうした場を失ったとしても、考古学的な時間尺度では捉えきれないほどの期間で、復旧したことを示唆しているのである。当時の人々は、再度侵攻してくるかもしれないモンゴル軍への脅威と不安を抱えながら生活していたことであろう。未曾有の国難に直面しても、必死に生きようとする人々の逞しい姿こそ、本稿で明らかにし得た最も重要な成果と言えるかもしれない。

註

- 1) 年代測定については、株式会社パレオ・ラボに分析を依頼した。なお、本分析に関しては、公益財団法人鹿島学術振興財団の2021年度研究助成を受けた。
- 2) 令和4年度以降に報告予定。
- 3) 海水準の変化と気候変動が大局的に一致しており、寒冷期には海退が起り、風成砂丘の形成が促進されることも指摘されている（甲元 2007など）。
- 4) 九大箱崎キャンパス内遺跡で、12世紀後半頃の古手の遺構が検出されているのは、遺跡南東部に限られており、当時人々が活動できるような土地の拡大は、当該域周辺が北限であったと推察される。
- 5) 12世紀中頃前後における平氏政権の対宋貿易政策も見逃せない（石井・村井 2010；大山 1984；島田 1974など）。
- 6) 令和4年度以降に報告予定。
- 7) 箱崎砂州先端部における元寇防塁の構造の脆弱さについて、文永の役での戦況を踏まえた上での防衛戦略と関係していた可能性が指摘されている（福永・齋藤 2021）。

引用文献

- 池内宏 1931『元寇の新研究』財団法人東洋文庫
- 池崎讓二 1988「姿を現わした門前の町一箱崎・馬出遺跡群一」網野善彦・石井進・福田豊彦（監修）川添昭二（編）『よみがえる中世1－東アジアの国際都市 博多』平凡社、49～51頁
- 石井正敏・村井章介 2010「通交・通商圏の拡大」荒野泰典・石井正敏・村井章介（編）『日本の対外関係3 通交・通商圏の拡大』吉川弘文館、1～28頁
- 市原季彦・下山正一 2019「HZK1802地点におけるジオスライサー調査の成果」三阪一徳・谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡一 HZK1701・1702・1704・1705・1706地点一 付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室、118～130頁
- 榎本義嗣 2003「福岡市所在の箱崎遺跡について」『中世都市研究会2003年九州大会 資料集』中世都市研究会2003年九州大会実行委員会、65～74頁
- 榎本義嗣 2008「箱崎」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎（編）『中世都市 博多を掘る』海鳥社、52～55頁
- 榎本涉 2010「東シナ海の宋海商」荒野泰典・石井正敏・村井章介（編）『日本の対外関係3 通交・通商圏の拡大』吉川弘文館、30～59頁
- 大庭康時 1994「博多綱首殺人事件一中世前期博多をめぐる雑感一」『法哈噠』第3号、博多研究会、13～26頁
- 大山喬平 1984「中世の日本と東アジア」歴史学研究会・日本史研究会（編）『講座日本歴史3 中世1』東京大学出版会、1～45頁

- 川添昭二 1971『注解元寇防塁編年史料—異国警固番役史料の研究—』福岡市教育委員会
- 河辺隆宏 2007「日宋貿易における年紀制管理と貿易形態の変化」佐藤信・藤田覚（編）『前近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社、95～113頁
- 甲元眞之 2007「環境変化の考古学的検証」『砂丘形成と寒冷化現象』平成17年度～18年度科学研究費補助金研究成果報告書、7～31頁
- 齋藤瑞穂（編）2020『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 佐伯弘次 1988「大陸貿易と外国人の居留」川添昭二（編）『よみがえる中世1—東アジアの国際都市 博多』平凡社、102～119頁
- 佐伯弘次 2001「軍事的拠点としての中世箱崎津」『博多研究会誌』第9号、博多研究会、33～36頁
- 佐藤一郎 2013「箱崎遺跡—古代末から中世にかけて」『新修福岡市史—特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市、242～247頁
- 島田次郎 1974「平氏政権の対宋貿易の歴史的前提とその展開—十～十二世紀における国際的契機について—」中央大学経済研究所（編）『歴史研究と国際的契機』中央大学出版部、233～271頁
- 下山正一 1989「福岡平野における縄文海進の規模と第四紀層」『九州大学理学部研究報告 地質学』第16巻第1号、37～58頁
- 下山正一・三阪一徳・市原季彦 2019a「HZK1802地点における土層の概要」三阪一徳・谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点— 付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室、131～133頁
- 下山正一・三阪一徳・市原季彦 2019b「箱崎砂州の発達過程の考察」三阪一徳・谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点— 付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室、134～143頁
- 竹内榮喜 1913「蒙古軍上陸に関する新研究」史蹟現地講演会（編）『元寇史蹟の新研究』丸善株式会社
- 中尾祐太 2018「考古学からみた箱崎」九州史学研究会（編）『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠社、10～23頁
- 中塚武 2020「中世における気候変動の概観」中塚武（監修）、伊藤啓介・田村憲美・水野章二（編）『気候変動から読みなおす日本史4 気候変動と中世社会』臨川書店、15～35頁
- 服部英雄 2017『蒙古襲来と神風』中公新書
- 福田正宏・森貴教（編）2018『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 福永将大（編）2021『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 福永将大・齋藤瑞穂 2021「箱崎砂州先端部における元寇防塁とその特質」福永将大（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集、九州大学埋蔵文化財調査室、180～197頁
- 三阪一徳・谷直子（編）2019『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点— 付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 柳田純孝 1984「元寇防塁と博多湾の地形」中山平次郎『古代の博多』九州大学出版会、365～394頁
- 柳田純孝 1988「元寇防塁と中世の海岸線」川添昭二（編）『よみがえる中世1—東アジアの国際都市博多』平凡社、180～194頁

モンゴル襲来と日本の対応

佐伯 弘次

1. はじめに

1274年（文永11）と1281年（弘安4）の二度にわたるモンゴルの襲来（蒙古襲来・元寇）は日本に大きな影響を与えた。本稿は、モンゴル襲来の過程を概観し、その後の日元関係の足跡をたどるものである。適宜、最近の研究についても言及したい。なお、モンゴル襲来に関する研究史を長いスパンでまとめたものに、川添（1977）がある。近年の研究動向をまとめたものに、佐伯（2013）がある。

狭義のモンゴル襲来は、文永・弘安の役を意味するが、広く考えると、アジアにおけるモンゴルの台頭から、モンゴルの中国からの退去まで、すなわち13世紀初頭から14世紀後半までが該当する。さらに限定すると、第5代皇帝フビライが日本国王宛の国書を書いた至元3年（1266）8月から、モンゴルから日本への最後の使者派遣（1299年）、さらには日本における異国警固番役の終焉までを概観していきたい。なお、以下の歴史的推移の叙述は、注記がない場合は主として川添（1977）と佐伯（2003）に依る。

2. 日元交渉

第5代モンゴル皇帝のフビライ（クビライ・世祖）は、1260年に皇帝（ハン）に即位した。それ以前からフビライは中国を攻めていたが、さらに南宋攻略を進めた。1271年に国号を元（大元）と改め、翌年に燕京（現在の北京）を大都と改め、首都とした。

1266年（至元3・文永3）8月、フビライは日本国王宛の国書を書いた。それは以下のようなものであった（書き下し、数字は引用者）。

上天眷命せる大蒙古国皇帝、書を日本国王に奉る。①朕惟うに、古より小国の君、境土相接すれば、尚講信・修睦に努む。況んや我が祖宗、天の明命を受け、区夏を奄有す。遐方の異域威を畏れ徳に懐く者、悉く数うべからず。②朕即位の初め、高麗無辜の民、久しく鋒鏑に瘁るるを以て、即ち兵を罷め、其の疆城を還し、其の旄倪を反さしむ。高麗の君臣、感戴して来朝す。義は君臣といえども、而して歎ぶこと父子のごとし。③計るに王の君臣も亦已に之を知らん。高麗は朕の東藩なり。日本は高麗に密邇し、開国以来、亦時に中国に通ず。朕の躬に至りては、一乗の使の以て和好を通ずるなし。尚、王の国これを知ること未だ審らかならざるを恐る。故に特に使を遣わし、書を持して、朕の志を布告せしむ。④冀くは自今以往、問を通じ好を結び、以て相親睦せん。且つ聖人は四海を以て家と為す。相通好せざるは、あに一家の理ならんや。兵を用うるに至りては、夫れ孰れか好む所ならん。王其れ之を図れ。不宣

至元三年八月日

（東大寺文書「調伏異朝怨敵抄」）

難解な語句を含んでいるが、フビライの意志を記した文書である。①の部分は、天の命を承けて天下を制圧したモンゴル皇帝に対し、多くの国がモンゴルの威を畏れ、皇帝の徳を慕ってくる国が多いことを述べている。さらに②では、フビライが即位すると、高麗の民が戦争で疲弊していたので、戦いを止め領土を返し、家族を帰したこと、高麗の国王や家臣はこれに感謝して来朝したことを述べている。高麗がモンゴルに服属したことをモンゴルの立場から説明したものである。③は、日本は高麗

に接し、開国以来、中国と通じているが、フビライに対しては使者を派遣して好を通じたことがないこと、そこでフビライは使者を日本に派遣して国書を持たせて自分の意志を示したことを述べている。④では、今後、互いに挨拶をして、好を結び、お互いに親睦したいと述べている。この限りでは、日本との外交関係を求めた丁寧な国書である。しかし、その最後に「兵を用うるに至りては、それ敦れか好むところならん」（兵を用いることは誰が好むところであろうか、好みはしない）と戦争をすることをほのめかしている。本文書は、「奉書」の形式であり、大蒙古国皇帝奉書とすべきであること、まだモンゴル帝国の文書の形式やシステムが整備されている最中に出されたものであり、相手に対して敬意を示していることが指摘されている（船田 2009）。

このフビライ国書を持ったモンゴルの使いは、1267年正月、巨済島までやって来たが、風濤の激しさを目の当たりにして渡海を断念し、引き返した。1回目の使節派遣は失敗したのである。同じ国書を持った2回目の使者は、1267年9月に高麗を出発し、対馬を經由して、翌1268年（文永5）正月、大宰府に到着した。大宰府を押さえていた鎌倉幕府の鎮西奉行少弐（武藤）資能は、使者たちを大宰府に止め、鎌倉幕府にモンゴルの使いが国書を持って来日したことを報告した。幕府は使者を京都の朝廷に派遣し、同年2月7日、モンゴル国書の到来を報告した。この国書は、朝廷に大きな衝撃をもたらした。対処法が議論されたが、結局、朝廷から返書は出されず、使節一行は帰国した。文永4年12月26日の鎌倉幕府による徳政令発布は、直前の異常気象とこの時の高麗使節来日によるモンゴル襲来の噂があったという理解もなされている（清水 2010）。

こうしたモンゴルの日本国王に対する通交要求のための使節派遣は、日本招諭と称される。この後、フビライによる日本招諭は、度々行われたが、日本から返書が出されることもなく、使節が日本から派遣されることもなかった。この日本招諭に対して、鎌倉幕府は敏感に反応した。

蒙古人挿凶心、可伺本朝之由、近日所進牒使也、早可用心之旨、可被相触讃岐国御家人等状、依仰執達如件、

文永五年二月二十七日

相模守（北条時宗）

左京権大夫（北条政村）

駿河守（北条有時）殿

（「新式目」）

文永5年（1268）2月27日、鎌倉幕府が讃岐守護北条有時に出した関東御教書である。蒙古人が日本の隙を狙って、近日使節を派遣してきたので、早く用心すべきことを讃岐国の御家人たちに通達するように命じた文書である。鎌倉幕府は、フビライ国書の「用兵」の箇所ですぐさま反応し、こうした文書を出したのである。この文書は、讃岐を対象としたものであるが、讃岐のみに出されたものではなく、西日本各国の守護宛に同内容の文書が出されたに違いない。

鎌倉幕府はこうした武断的な対応を行った。その一環として、蒙古の襲来に備えて、北部九州の防備を固める政策を行った。

蒙古人可襲来之由、有其聞之間、所差遣御家人等於鎮西也、早速自身下向肥後国所領、相伴守護人、且令致異国之防御、且可鎮領内之悪党者、依仰執達如件、

文永八年九月十三日

相模守（花押）

左京権大夫（花押）

小代右衛門尉子息等

（小代文書）

文永8年（1271）9月13日、鎌倉幕府が、蒙古人が襲来するという風聞があるので、肥後に所領を持つ武蔵国御家人の小代重俊の子息等に対して、肥後に下向するように命じた文書である。薩摩の二階堂文書にも同日付で同趣旨の関東御教書が残っている。これらは、この直前に高麗で反乱を起こし

ていた三別抄からの使者が来日し、蒙古の脅威と日本への連帯を訴えたことが契機となって出されたものと考えられる。この時、モンゴルの襲来に備えて、九州に所領を持つ東国御家人たちが九州の所領に下向することとなった。ただしこの鎌倉幕府による突然の下向命令に対して、すぐには従わなかった東国御家人も多かった。九州の御家人に対しても、モンゴル襲来に備えて、防備を固めるように幕府から命令が出されている。

次の史料は、翌文永9年（1272）のものである。

筑前・肥前両国要害守護事、東国人々下向程、至来三月晦日、相催奉行国々御家人、可警固之由、関東御教書到来、仍且請取役所、且為差置御家人御代官等、已打越候畢、不日相尋于彼所、無懈怠、可令勤仕候也、恐々謹言、

文永九年二月朔日

頼泰（花押）

野上太郎殿

（野上文書）

この時、「筑前・肥前両国の要害を守護することについて、東国の人々が下向したので、3月晦日までに担当の国々の御家人を催促し、警固すべし」という関東御教書が豊後守護大友頼泰のもとに届いた。それに従って頼泰は、豊後の御家人野上太郎（資直）に対して、担当箇所に行き、警固を勤務するように命じたのである。九州に所領を持つ東国御家人の下向が前提となっているが、この史料にあるように、文永9年が北部九州を警備する異国警固番役の始まりだとされている。当初の異国警固番役は、筑前と肥前にまたがるものであった。

異国警固番役を勤めた武士に対しては、守護とその関係者が覆勘状という勤務完了証明書を発給した。多くの覆勘状が残存するが、その初見は、延時文書の文永9年5月17日付けの武藤資能覆勘状である（川添 1971）。この覆勘状によると、薩摩の盛岡二郎は、同年4月17日に「上府」すなわち大宰府に到着し、5月16日まで「博多津番役」を勤仕した。発足当初の異国警固番役は、勤務期間は1ヵ月であった。先の野上文書では、警備箇所は筑前・肥前両国とされていたが、初期の覆勘状では「博多津番役」とされているものが多いため、やはり警備の中心地は博多であったと考えられる。

正中2年（1325）3月の「最勝光院莊園目録案」（東寺百合文書ゆ函）は、全国の最勝光院領莊園20カ所を書き上げ、本来の年貢高と近年の年貢の納入状況を莊園ごとに記した報告書である。その中の肥前国松浦庄の箇所に、「但文永七年以来、寄事於蒙古人、全分無所済」とあり、筑後国三原庄の箇所には、「去文永七年以来、寄事於蒙古人、一向無所済」とある。いずれも文永7年（1270）以来、蒙古人にとこと寄せて年貢の納入が全くないことを記している。この松浦庄に関しては、「文永年中ムクリケイコニ被免無之」＝「文永年中、ムクリ（蒙古）警固のために年貢が免除され、納入がない」という注記がなされている。文永7年以降の「事を蒙古人に寄せ」というのは、蒙古警固すなわち異国警固のためであるというのである。この史料の記述を信ずるならば、異国警固番役は文永7年から行われていた可能性があるといえよう。さらなる史料の発掘が期待される。

3. 文永の役

高麗における三別抄の反乱は、1273年に平定され、元の日本攻撃の条件が整った。元は日本遠征の準備を加速させる。1274年（文永11）10月、高麗から元軍は日本に襲来した。その規模については史料によって区々であるが、池内宏氏は、屯田軍・女真軍・水軍からなる元軍は2万人、高麗軍が6千人で、計2万6千人であったとしている（池内 1931）。

元軍は同年10月3日、高麗南岸の合浦を出発した。対馬・壱岐を蹂躪し、松浦地方を経て、10月19

日に博多湾に姿を見せ、翌10月20日に博多湾西部の百道や今津から上陸した。福岡平野では日本の軍勢が待ち構えていたが、博多周辺で激しい合戦が行われた。日本軍は元軍の戦法や見慣れない武器に戸惑い、苦戦した。肥後国御家人竹崎季長は、初め箱崎にいたが、元軍が赤坂に陣取ったという情報を得て、西に移動した。博多の息浜で「日の大将」である少弐景資と対面し、住吉・小松原・赤坂を経て、鳥飼で元軍に遭遇する。そして痛手を負い、馬を射られたが、肥前の白石通泰が後方から大勢でやって来たので、九死に一生を得た（「蒙古襲来絵詞」）。

この竹崎季長の例のように日本軍は苦戦した。「八幡愚童訓」によると、苦戦をした日本軍は、大宰府の水城まで退却したという。翌日、日本軍が博多方面を見渡したところ、元の船は消えていたと同書は記している。文永の役では、かつては「神風」すなわち台風が襲来し、元軍を壊滅させたと言われていたが、現在では、撤退の途中で風波の被害に遭ったという説が有力である。博多の町や宮崎宮は、元軍のために焼失したとされている。

福岡平野の戦いで優勢であった元軍がなぜ短期間で撤退したのかについては、軍議が整わず、また武器が尽きたからであるとか、最初の日本遠征は偵察の意味があったからで自主撤退であるとか、諸説がある。こうした従来の考え方に対して、文永の役は10月20日で終わらなかったという説が出された（服部 2014・2017）。この服部英雄氏の説は、「八幡愚童訓」の文永の役に関する記事を否定し、様々な史料から、10月20日の合戦の後、10月24日に大宰府で合戦があり、10月27日ごろから月末にかけて元軍が撤退したというものである。確かに10月20日1日で元軍が撤退したという説は不自然であり、傾聴に値する考え方である。ただしいくつかの点でさらに論証が必要である。例えば、「蒙古襲来絵詞」では、文永の役に関して、「きよねん（去年＝文永11年）十月二十日もうこかせん（蒙古合戦）の時」とあり、10月21日以降の戦闘についての記述がない。同様に、「歴代皇紀」、「帝王編年記」、「一代要記」等の諸史料は、いずれも10月20日に文永の役が終了したという記述をしている。「八幡愚童訓」を除いても、10月20日で合戦が終わったとする史料は多いのである。

いっぽう、服部氏が根拠とする「関東評定伝」は、「文永十一年十月五日、蒙古異賊寄来、著対馬島、討少弐入道覚恵（資能）代官藤馬允、同二十四日、寄来大宰府、与官軍合戦、異賊敗北」と記している。これが、「鎌倉年代記裏書」文永十一年条では、「十月五日、蒙古寄来、着対馬島、同二十四日、大宰少弐入道覚恵代藤馬允、於大宰府合戦、異賊敗北」と記されている。さらに「武家年代記裏書」では、建治元年（1275）条に、「建治元十一五、小弐入道覚恵代藤馬允、於太宰府合戦異賊、依之被止大番、被置警固人、於国々被置在京人」とある。「関東評定伝」と「鎌倉年代記裏書」では記述が似ているように思われるが、前者では、少弐資能の代官藤馬允は対馬の代官であり、蒙古にそこで討たれたことになっているが、後者では少弐資能の代官藤馬允は、大宰府で蒙古を敗北させたことになっており、全く記述が異なっている。「武家年代記裏書」では、少弐資能の代官藤馬允が大宰府で異賊と合戦したのは建治元年のこととされている。以上の記事はいずれも同一でない。また、文永11年10月20日の合戦のことを記さないことが共通している。少弐資能の代官藤馬允とは、斎藤文書延慶4年6月久祢定能申状に見える、文永蒙古合戦時に対馬島佐須浦で討ち死にした「宗右馬允」、「八幡愚童訓」に見える対馬の「地頭宗馬允資国」と同一人と考えられる（松尾 2020）。以上の3史料に見える「藤馬允」は、「宗右馬允」（資国）の誤りであることになる。「関東評定伝」以下の記載よりも「八幡愚童訓」の記載の方が正確である場合もある。そうすると、10月24日の大宰府合戦を記す記事の信憑性も問われてくるし、そもそも10月20日合戦の記述がないのも不審であり、10月24日大宰府合戦についてはさらなる検討が必要である。また、10月24日の大宰府合戦の大宰府というのは、現在の太宰府地域を意味するのかどうかとも検討されるべきである。

武雄神社文書延慶2年(1309)6月の武雄社大宮司藤原国門申状案には、「又(文カ)永則十月二十夜、鎗矢音出、自。御神殿差賊船方響、二十一日賊徒退散」と記している。文永の役で、文永11年10月20日夜、鎗矢の音が出て、武雄社の神殿から賊船の方に向けて響いたところ、翌21日、賊徒が退散したと述べている。文永の役全体の推移を記したものではないが、鎌倉時代末期の武雄社内部には、文永の役は10月20日の翌日に元軍が撤退したという認識があったことは事実である。この文書は、武雄社が鎌倉幕府から恩賞を獲得するために作成された鎮西探題への訴状であり、モンゴル襲来での勝利に武雄社の神が貢献したという主張をしている。これはいわゆる「神戦」に関する主張であり、多くの神社がこれを主張した。蒙古合戦に参加したり、合戦を実際に見聞した人々がまだ多数生きていたと思われる時期に書かれた訴訟文書であり、文書に記す日付についても正確さが求められたものと思われる。文永の役の終わり方についてはまださらなる検証が必要である。

4. 異国警固と石築地の築造

文永の役の後もフビライは日本遠征の意志を断念せず、日本招諭の使者を送り続けた。とくに建治元年(1275)4月、元使杜世忠一行が長門国室津に到着してからは、鎌倉幕府は再度の襲来を予想し、緊急に防備を固める政策を行った。文永の役の後の使者は、鎌倉や博多で処刑されたが、元の襲来を予想した鎌倉幕府は、様々な対応策を取った。とくに建治元年(1275)の年末、幕府は全国の守護の多くを更迭し、後任に北条氏一門を多く任命した(村井 1988)。まさに北条氏専制化の一環である。さらに同年2月4日には、異国警固番役の制度を改めている(相田 1958、川添 1971)。すなわち「異国警固結番」は以下のように国別の勤務になった。

第8表 1275年2月改定の異国警固番役

時期	担当国
春3ヵ月	筑前・肥後
夏3ヵ月	肥前・豊前
秋3ヵ月	豊後・筑後
冬3ヵ月	日向・大隅・薩摩

各季節3ヵ月ごとに、警固担当国が変わるというシステムであり、九ヵ国四季分担の制と呼ばれている。警固担当国を明記することによって、異国警固体制を強化したのである。

異国警固博多番役事、自三月一日迄同晦日、被勤仕候了、恐々謹言、

建治三年四月一日

経資(花押)

斑島右衛門三郎殿

(斑島文書)

肥前松浦党の斑島淳が建治3年(1277)3月1日から同晦日までの1ヵ月間、異国警固番役を勤務したことを証明した少式経資覆勘状である。経資は当時、肥前守護も兼務していた。したがって、各国の分担期間は3ヵ月であるが、建治3年の斑島淳の場合、勤務する期間は1ヵ月という運用をしていたのである。こうした覆勘状は、石築地役覆勘状も含めて、計86通が確認されている(川添 1971)。それらを見ると、勤務期間は1ヵ月も多いが、15日、2ヵ月、3ヵ月など区々である。

この建治年間には、さらに異国征伐と石築地(元寇防塁)築造という重要な政策が行われた。まず異国征伐について見てみよう。フビライのモンゴル国書が日本に到着して以降、朝廷や幕府は、寺社に対して、異国降伏の祈祷を行わせた。文永の役の後も継続するが、この異国降伏祈祷を、「異国征

伐御祈」とも称している（厳島文書文永11年12月2日藤原定親書下）。異国征伐の第一弾は、異国降伏祈禱すなわち神戦による異国の降伏であった。

建治元年12月8日、鎌倉幕府は安芸守護武田信時に対して、「明年三月比、可被征伐異国也、梶取水手等、鎮西若令不足者、可省充山陰・山陽・南海道等之由、被仰大宰少貳経資了、仰安芸国海辺知行之地頭御家人・本所一円地等、兼日催儲梶取水手等、経資令相触者、守彼配分之員数、早速可令送遣博多也」という内容の文書を出している（東寺百合文書ア函）。「来年の3月ごろ、異国を征伐することになっている。梶取や水手がもし九州で不足したならば、山陰・山陽・南海の3道すなわち中国・四国地方に対して配分すべきことを少貳経資に命じられた。（守護管国の）安芸国の海辺を知行する地頭御家人や本所一円地の輩に命じて、かねてから梶取・水手等を準備しておき、経資が命じたならば、彼の配分の人数に従って、すぐに博多に送り遣わすべきである」という内容である。異国征伐を建治2年3月に決行する予定で、九州で梶取・水手が不足することがあれば、少貳経資の指示に従って、博多へ派遣すべきことを命じているのである。この史料から、異国征伐の時期は建治2年3月であり、九州の武士たちに対して諸準備が命じられたことがわかる。この「異国征伐」の異国とは、元ではなく、高麗であったことが明らかになっている（相田 前掲、川添 1977）。ここで「地頭御家人」のみならず、「本所一円地」にも梶取・水手の準備が命じられている点も注目される。モンゴル襲来という経験のない戦争に対して、鎌倉幕府は直属の武士である地頭御家人だけでなく、本所一円地すなわち荘園領主の土地で地頭が設置されておらず、幕府の管轄外の領域に対しても、軍役の賦課をしているのであり、幕府支配の領域的拡大と位置づけられる。

異国発向用意条々

- 一 所領分限領内大小船呂（櫓）数并水手・梶取交名年齢、可被注申、兼又、以来月中旬、送付博多津之様、可相構事、
 - 一 渡異国之時、可相具上下人数年齢、兵具、同可被注申事、
- 以前条々、且致其用意、且今月二十日以前、可令注申給、若及遁避者、可被行重科之由、其沙汰候也、仍執達如件、

建治二年三月五日

野上太郎殿

前出羽守（大友頼泰）（花押）

〔諸家文書纂〕所収野上文書

この文書は、鎮西東方奉行として、少貳経資とともに九州支配の要にあった大友頼泰が、豊後の野上資直に対して、「異国発向用意条々」すなわち異国征伐に向かう準備に関して出した文書である。その内容は、所領の分限（大きさ）に従って、領内の船・櫓の数と水手・梶取のリスト（年齢も記す）を報告し、来月つまり閏3月中旬までに博多津にそれらを送付すること、異国に渡る時、連れて行く人数（年齢も記す）・武器を同じく報告すべきことを命じ、3月20日以前に報告を出し、もしそれを怠るならば、厳罰に処すことを述べている。異国征伐が目前に迫り、具体化したのである。しかし、前年の安芸国への文書では、実施時期が建治2年3月ごろとされていたが、この文書では、閏3月中旬までに博多津に船等を送付することになっており、若干の遅れが看取される。また、異国警固の中心地も異国征伐の拠点もいずれも博多であったことがわかる。博多の政治・軍事都市化の傾向が高まっている。その後もこの異国征伐については準備がなされ、とくに肥後関係の文書に多く所見があるが、その後、中止された。その原因は不明であるが、後述の石築地の築造と並行して準備したため、無理が生じたのではないだろうか。しかし、これ以後も異国征伐は何度か計画されている。

この異国征伐計画とほぼ同時に、鎌倉幕府によって企画されたのが石築地（元寇防塁）の築造であった。

異国警固之間、要害石築地事、高麗発向輩之外、課于奉行国中、平均所致沙汰候也、今月二十日以前、相具人夫、相向博多津、請取役所、可被致沙汰候、恐々謹言、

建治二年三月十日

少弐（経資）（花押）

深江村地頭殿

（深江文書）

同年三月十日の少弐経資の書状である。内容は、肥前国深江村地頭に対し、「異国警固のための要害石築地の事は、高麗発向の輩の外は、奉行国中に賦課し、平均に沙汰を致すところである。今月20日以前に人夫を伴って、博多津に向かい、担当の場所を受け取り、沙汰を行うべきである」と述べている。少弐経資は当時、鎮西西方奉行であり、肥前守護を兼ねていた。この文書は肥前守護としての文書である。要害石築地は元寇防塁のことで、高麗発向すなわち異国征伐に向かう輩以外は、守護管国中に賦課するというもので、3月20日以前に人夫を伴って博多に来て、分担箇所を築造をすべきことを命じている。ここで「平均」に沙汰を致すとは、一国平均にという意味であり、地頭御家人だけでなく本所一円地の輩にも平均に賦課することを意味している。つまり、異国征伐の賦課方針と全く同じであった。おそらく海辺に所領を持つ地頭御家人・本所一円地の輩は異国征伐を、それ以外の地頭御家人・本所一円地の輩は石築地の築造を命じられたものと考えられる。一国平均に九州全体に石築地の築造が命じられ、築造が開始された。約半年で一応の完成をみたとされている。こうして、建治2年に博多湾一帯に石築地が急ピッチで造成された。

5. 弘安の役

1276年にモンゴルは南宋の杭州臨安府を陥落させ、実質的に南宋は滅亡した。南宋の遺臣は幼い皇帝を担いで、広東まで逃れて元に抵抗したが、1279年、崖山の戦いで南宋軍は敗れ、南宋は最終的に滅亡した。この南宋の滅亡が、元による第2次日本遠征すなわち弘安の役の実施に直結した。

中国には、降伏した旧南宋の軍隊が多数存在した。この旧南宋軍の措置が中国を統一した元の新たな課題となった。この旧南宋軍の一部が第2次日本遠征に投入されたのである。すなわち、弘安4年（1281）の弘安の役では、元軍の構成は、高麗の合浦から出発する東路軍（蒙古・漢・高麗の混成軍4万人、900艘）と中国の慶元（現在の浙江省寧波）から出発する江南軍（蒙古・旧南宋の混成軍10万人、3500艘）の二つに分かれていた。当初の予定では、1281年の6月半ばに壱岐島で合流するという計画になっていた。

忻都・洪茶丘・金方慶に率いられた東路軍は、1281年5月3日に合浦を出発し、対馬を經由して壱岐に襲来した。6月6日、東路軍は志賀島を襲い、一部の軍は長門まで達した。日本側の抵抗も強く、東路軍は壱岐に引き返した。ここで江南軍の到着を待ったのである。この状況を見た日本軍は、6月末から7月にかけて壱岐の東路軍を攻撃した。6月29日の壱岐での合戦には薩摩国御家人比志島時範・河田盛資・島津長久らが、7月2日の壱岐瀬戸浦合戦には肥前国御家人龍造寺家清らが参加したことがわかっている（佐伯 2011）。

一方の江南軍は、総司令官のアラハンが病気のため、アタハイに交代するというアクシデントが起こり、出発が遅れた。同年6月中旬から下旬にかけて、江南軍は慶元付近を出発し、日本を目指した。江南軍が九州西岸に到着すると、壱岐の東路軍は平戸に移り、平戸で江南軍と合流した。7月27日、合流した元軍は大宰府を目指して鷹島に移った。元の大軍が鷹島に集結していた7月30日夜から翌閏7月1日（中国の暦では8月1日）にかけて暴風が吹き、元軍は壊滅的な打撃を受けた。

この鷹島付近を襲った暴風は台風であったとされるが、同時代の日本では神風と称された。日本側

の史料では、「大風」(「勘仲記」弘安4年閏7月14日条)と記された。元側の史料では、「暴風」「風」(「元史」巻208日本伝)、「風濤」(同巻11、世祖本紀、至元18年(1281)8月壬辰)、「颶風」(同巻128相威伝)、「大風」(同巻166楚鼎伝)など出てくる。高麗側の史料では、「大風」とある(「高麗史」巻29忠烈王世家7年6月壬申)。3カ国の史料がいずれも同じような表現をしており、やはり大型台風襲来と考えるべきであろう。

こうして鷹島周辺における暴風の襲来で終わりを迎えるのであるが、「元史」日本伝には、兵士于闐の言として、「官軍(元軍)は6月、海に入り、7月に平壺島(平壺=平戸)に至り、五竜山(鷹島カ)に移った。8月1日(日本暦では閏7月1日)暴風が舟を破った。5日、(范)文虎らの諸将がおのおの自ら堅固な船を選んでこれに乗船し、士卒10余万人をそこに棄て(て、逃げ帰った)」と記している。日本側の史料である「蒙古襲来絵詞」後巻には、弘安の役において、肥前国御家人某が、「たかしま(鷹島)のにしのうち(西の浦)よりわれのこり(破残)候ふね(船)に、賊徒あまた(数多)こみのり(混乗)候を、はらひのけて、しか(然)るへき物とも(者共)とおほえ(覚)候の(乗)せて、はやにけかへり(逃帰)候」と竹崎季長に語っている。「鷹島の西の浦から、破れ残った船に、賊徒(元軍のこと)が数多く乗船していたところ、彼らを払い除けて、主立った者どもと思われる人々を乗せて、逃げ帰っている」と言うのである。これを聞いた季長は、鷹島に向かおうとしたが、自分の船が来ないので、大変苦勞したことを記している。

このように、元と日本双方の史料に同様のことが書かれており、元の主立った人々が、大勢の兵士が乗っている船から兵士を下ろし、その船に乗って急遽帰国したという状況がうかがえる。平戸にいた江南軍の張禧は、砦を築き、戦艦を束ねておのおの50歩ずつの間隔で停泊させ、風濤が当たるのを避けたため、8月1日の暴風でも配下の船は壊れなかった。張禧は、乗る船がない范文虎らに船を与えた。さらに船に積んでいた馬70匹を全て棄て、平戸にいた4千人の兵士を乗せて帰還を果たした(「元史」巻165張禧伝)。こうした帰還した元軍兵士も少なくなかったと思われる。東路軍の高麗軍兵士9960人、梢工・水主17029人の計26989人のうち、19397人が生還している(「高麗史」巻29忠烈王世家7年(1281)11月壬午)。帰還率は71.87%という高率である。東路軍の場合、壱岐から全ての軍船が平戸に移ったわけではなく、かなりの数の兵士・梢工・水主が壱岐に駐留していたものと考えられる。于闐のように、一旦日本軍の捕虜になりながら、逃げ帰った者もいた。

この暴風による影響は大きく、元軍の敗北はこれで決定した。これ以降、鷹島周辺で日本軍による元軍兵士の掃討戦が行われた。この戦いを残敵掃討戦と呼んでいる。この残敵掃討戦に関する日本側の史料はいくつか残っている。閏7月5日の肥前国御厨子崎(千崎カ)海上合戦では、筑後の香西度景・広景兄弟と神山四郎が参加している(五条文書)。閏7月7日の鷹島合戦には、薩摩の比志島時範(比志島文書)、肥前の丹治重茂・福田兼重(福田文書)、豊後の都甲惟親・同惟遠・郎従重遠・旗差末守・志手円範・上総三郎入道ら(都甲文書)が、日付け不明であるが、千崎息(沖)と鷹島棟原の合戦に肥前黒雄社大宮司藤原資門(武雄神社文書)が参加している。なお、弘安の役での暴風以後の掃討戦は、まず志賀島・博多湾で行われ、次に鷹島で行われたという説が出されているが(服部前掲)、閏7月に志賀島や博多で残敵掃討戦が行われたという一次史料はなく、この考え方には首肯できない。

鷹島海域では、1980年以降、水中考古学による調査が行われ、多くの成果を上げている(池田2018、中田・池田2021)。とくに武器や陶磁器・碇・碇石・磚(レンガ)・石臼・帯金具・匙・鍋・櫛・漆碗・擬宝珠・中国銭等々の多くの遺物とともに、元軍船の船体そのものが発見された。それらの一部は引き揚げられ、保存処理や展示がなされている。船体は、隔壁を持った中国船であることが

判明しているが、高麗船はまだ発見されていない。この水中考古学の成果は注目すべきものであり、今後の調査を期待したい。

6. 弘安の役後の日元関係と異国警固

弘安の役以後も元は日本招諭と日本遠征を諦めなかった（植松 2015）。正応5年（1292）には、高麗国使金有成が高麗国書を持って来日した。フビライは、1294年に死去したが、正安元年（1299）には、元の使者一山一寧が元の国書を持って来日した。このように、高麗使・元使の来日によって、日本側は大いに緊張し、鎌倉幕府は防備の強化を図った。

とふひ（烽火）の事、越後国司（北条兼時）御奉書案文如此、如状者、三月二十六日午刻可立之旨、被仰筑前国畢、肥前国分同時可立継之由、可相触島々在所、若其日雨ふ（降）らは、同二十七日可立之云々、壱岐島より始て、島々高き所ニ火を可被立之間、大島ニハ壱岐島の煙を守て、その時をたかへす、たき、（薪）多とりつみ（取積）て、あまた（数多）たくへき也、たかい（互）に火のひかり（光）煙を守て、たかるへし、大島の火を見てたかしま（鷹島）にたきつくへき由、被相触畢、異国用心御大事也、更々不可有緩怠之儀候、仍執達如件、

永仁二年三月六日

修理亮（北条定宗）（花押）

大島又次郎（通清）殿

（来島文書）

永仁2年（1294）3月6日、肥前守護北条定宗が、肥前国御家人大島通清に宛てた文書である。まず冒頭の「越後国司」は北条兼時で、前年に九州に下ってきた北条氏一門である。まずこの北条兼時の「御奉書」が肥前守護北条定宗のもとに届いた。その内容は、「3月26日午刻に烽火を立てるよう筑前国に命じられた。肥前国分も烽火を同時に立て継ぐように、島々在所に連絡しなさい。もしその日に雨が降ったならば、同27日に立てなさい」ということであった。この北条兼時の奉書を承けて、肥前守護の北条定宗が肥前大島の領主大島通清に宛てたものがこの文書である。北条定宗は大島通清に対して、「（烽火は）壱岐島から始めて、島々の高所に火を立てるべきであるから、大島には壱岐島の煙を受けて、時を違えず、薪を多く積んで沢山焚くべきである。互いに火の光・煙をよく見て焚くべきである。大島の火を見て、鷹島に焼き継ぐべきであると命じられた。異国に対する用心が大事である。決して手落ちがあってはならない」と述べている。つまり、鎌倉幕府の指示で、九州博多にいた北条兼時が、筑前と肥前での烽火の訓練を指示したのである。もちろん元軍の襲来に備えた訓練であった。壱岐→大島→鷹島という順序で烽火を立てることが指示されているが、鷹島から以降についても、各地の領主に対して別途指示されたものと考えられる。

ここで重要なことは、「異国用心御大事也」という箇所である。異国警固が重要というのであるが、これは、2年前の高麗使金有成の来日を契機として、対外的な緊張が高まり、鎌倉幕府がその対応策の一つとして烽火の演習を行ったのである。そもそも北条兼時・同時家の下向そのものが、金有成の来日を契機としていた。弘安の役後も鎌倉幕府にとっては、元の再襲来は現実のものであった。このため、異国警固番役や石築地の修理・増築は弘安の役後も必須であった。

嘉元2年（1304）になると、異国警固番役の制度が改められた（川添 1971）。

異賊警固番事、就関東御教書、被結番九州於五番、内一番筑前国役、一年中自正月迄同十二月、被勤仕了、仍状如件、

嘉元二

十二月晦日

（千竈）耀範（花押）

中村弥三郎（続）殿

（中村文書）

異国警固番すなわち異国警固番役は、関東御教書＝鎌倉幕府の命令書によって、九州を5番に分けて順番に交代で勤務に当たることとする。その中の一番は筑前国の分担であり、中村続が正月から12月まで1年間勤務したということ、筑前守護少式盛経の家臣千竈耀範が証明した覆勘状である。この史料によって、嘉元2年に、かつての九ヶ国四季分担の制が破棄され、国ごとに1年ずつ勤務するという制度に変更されたことがわかる。その初年度である嘉元2年は、筑前国の分担であった。以下、2番（嘉元3年）は大隅・薩摩国の分担、3番（嘉元4＝徳治元）は肥前国の分担であったことが判明しているが、4番・5番については、分担国が明確でない（川添 1971）。

年未詳の生桑寺文書の大般若経裏打紙文書には、「異賊防禦」に関して、「於分限疋弱之輩者、可免番役矣」とある。異国警固番役に関して、分限すなわち所領が少ない者は番役を免除するというものである。これが一般的な規定なのか、特殊な事情のものと規定なのか、不明である。また、二階堂文書元徳元年（1329）12月25日鎮西下知状に、「彼役（異賊番役）者、嘉元以来被止畢」とあるが、嘉元以降、異国警固番役が停止された形跡はなく、事情がわからない（川添 1971）。

異国警固番役覆勘状の終見は、次の延慶3年（1310）の文書である（川添 1971）。

警固番役事、被勤仕候了、仍執達如件、

延慶三

十二月十五日

（酒匂）本性（花押）

比志島孫太郎（忠範）殿

（比志島文書）

薩摩の比志島忠範の異国警固番役勤仕を守護代酒匂本性が証明した覆勘状である。これ以降は、覆勘状は見られないが、鎌倉時代の最末期まで異国警固や石築地に関する史料が残っており、異国警固番役は鎌倉時代末までは確実に行われていたといえる。

異賊用心石築地事、如去月二十九日御教書者、来十五日以前可加修固旨、可相触筑前国役人等、於難洪之所々者、可注進交名云々、任被仰下之旨、期日以前、不日向役所、可被加修理候、仍執達如件、

元徳四

二月一日

妙恵（少式貞経）（花押）

中村弥次郎殿

（中村文書）

元徳4年（1332）2月1日、筑前守護の少式貞経が異賊用心石築地すなわち元寇防塁の修理を御家人中村弥次郎に命じた文書である。この文書中の「去月二十九日御教書」とは鎮西探題か鎌倉幕府の御教書とされており、幕府ないし探題の命令で石築地の修理が鎌倉時代末期まで行われていたことを示している。石築地を修理するということは、そこで異国警固が行われたことを意味しており、狭義の異国警固番役も鎌倉時代末まで行われていたと推測される。

その後、南北朝時代から室町時代初期の応永年間まで、肥前国を中心に「博多警固番役」の史料が多数残っている。こうした史料によって、異国警固番役がその時期まで継続していたとされていたが、南北朝時代以降の「博多警固番役」は、室町幕府が博多に設置した鎮西管領（九州探題）の身辺を警固する軍役であり、異国警固番役とは異なるものである（佐伯 2009）。博多を警固するという行為が、対外的なものから対内的な性格に変化したことを物語るものである。日元貿易の活発化等による対外的緊張の緩和と南北朝内乱による対内的緊張の増大がその背景にある。

引用文献

- 相田二郎 1958 『蒙古襲来の研究』 吉川弘文館
- 池内 宏 1931 『元寇の新研究』 1・2、東洋文庫
- 池田榮史 2018 『海底に眠る蒙古襲来』 吉川弘文館
- 植松 正 2015 「第二次日本遠征後の元・麗・日関係外交文書について」 『東方学報』 90、49～89頁
- 川添昭二 1971 『注解元寇防塁編年史料』 福岡市教育委員会
- 川添昭二 1977 『蒙古襲来研究史論』 雄山閣出版
- 佐伯弘次 2003 『日本の中世9 モンゴル襲来の衝撃』 中央公論新社
- 佐伯弘次 2009 「南北朝時代の博多警固番役」、 『史淵』 146、17～40頁
- 佐伯弘次 2011 「蒙古襲来と鷹島」 池田榮史編 『長崎県北松浦郡鷹島周辺海底に眠る元寇関連遺跡・遺物の把握と解明』 琉球大学、137～147頁
- 佐伯弘次 2013 「蒙古襲来研究の歩み」 『考古学ジャーナル』 641、5～7頁
- 清水 亮 2010 「モンゴル襲来の「噂」と文永四年の武家徳政令」 『埼玉大学紀要教育学部』 59、1～10頁
- 中田敦之・池田榮史 2021 『元軍船の発見 鷹島海底遺跡』 新泉社
- 服部英雄 2014 『蒙古襲来』 山川出版社
- 服部英雄 2017 『蒙古襲来と神風』 中公新書、中央公論新社
- 船田善之 2009 「日本宛外交文書からみたモンゴル国の文書形式の展開」 『史淵』 146、1～23頁
- 松尾大輝 2020 「鎌倉期少弐氏による対馬支配と代官宗氏」 『九州史学』 185、1～27頁
- 村井章介 1988 『アジアのなかの中世日本』 校倉書房

高麗の対モンゴル・日本関係と元寇防塁

森平 雅彦

1. 問題の所在

13世紀の中央ユーラシアに誕生した超大国であるモンゴル帝国（元）と、その服属下にあった朝鮮半島の高麗王国は、1274年と1281年の二度にわたって日本に侵攻した。このいわゆる「元寇」（日本史上の文永・弘安の役、朝鮮史上の甲戌・辛巳の役¹⁾）は、これまで主に日本史上の大事件として注目されてきた。外国の軍事的脅威に直接さらされた経験が少ない前近代の日本において、これが未曾有の規模の危機であったことはいうまでもない。

しかし国際戦争を論じる以上、日本以外の当事国からの視点も不可欠である。すでに戦前より、いわゆる満鮮史研究者の池内宏（1931）が侵略国側（モンゴル、高麗）の動向に注意をむけており、戦後には朝鮮史研究者の旗田巍（1965）が、高麗を中心に中国、東南アジアなど、ともにモンゴルの侵略を被った諸地域の被害と抵抗という観点から「元寇」をめぐる状況を描いた。近年にはモンゴル帝国史研究のめざましい進展をうけて、「元寇」をモンゴルの覇権拡大の全体像のなかで相対的にとらえる視点が、日本史研究側からも意識されるようになった（近藤成一編 2003）。

このように「元寇」の歴史的意義は、日本一国史の枠を越えて東アジア、東部ユーラシアの広域にわたる関係諸地域の歴史的過程、および同時代の情勢を広く見据えて論じる必要がある。そしてそのことは、「元寇」の事件史的展開をとりあげる場合のみならず、そのなかで九州の博多湾岸に出現した元寇防塁という局所的な一構造物の歴史的意義を考えるうえでも同様であると考えられる。

本稿ではそのような問題意識から、元寇防塁の歴史的性質を国際的視野のもとで捉える補助線を、日本にさきだってモンゴルの侵略にさらされた高麗の動向という観点から提示することを目的としている。具体的には、現状たがいに交わらないまま進んでいる元寇防塁の源流に関する日韓の議論に着目し、これに対する筆者の見方を示すことにしたい。

2. 元寇防塁の源流に関する日韓の議論

国指定史跡の元寇防塁（第66図）は、モンゴル・高麗軍の侵攻を防ぐべく、博多湾岸に沿って、東は現在の福岡市東区香椎、西は同西区今津までの範囲に築かれた石塁（一部土塁）である。同時代の文献では「石築地」「要害石築地」などと記される。崖や岩場を除く上陸作戦が可能な砂浜に構築され、総延長は約20kmに達する。遺構の一部では、海に面して石垣が垂直に立ち上げられ、内陸側が



第66図 元寇防塁（井上 2008：48頁）

土手になる細部構造が具体的に検出されている。防塁は、モンゴル・高麗軍の第1次侵攻後、1276年3月から約1年間をかけて築造された。九州の武士が筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向・大隅、薩摩の国別に担当区間を分けて工事を進め、その後も国別に担当区間の防塁を維持・管理しつつ、「異国警固」に従事した（柳田 1988、佐伯 2003、井上 2008、堀本 2010）。防塁の状況をいま少し詳しくみると、海浜砂丘の頂部から海側にわずかに下った位置に築かれ、波打ち際からは50mほど離れている（山内・巻内 1972：368頁）。高さは地形的な条件によって幅があるが、2m弱を基準にしていたとみられる（堀本 2010：196頁、服部 2014：475～482頁）。

防塁の機能については、騎馬隊の突進を防ぐ馬防柵としての役割を強調する見解があるが（服部 2003：6～7頁、同2014：469頁、同2017：225～226頁）、高さを利用して寄せ手を撃退する対人効果を含め、幅広くみておくほうが穏当であろう（齋藤ほか 2020：177～178頁²⁾）。モンゴル軍というと、ともすれば騎馬軍団ばかりがイメージされがちだが、日本遠征における騎馬隊の規模と運用実態は必ずしも明らかではない。着岸したばかりの攻め手が防塁の眼前で馬匹の揚陸作業をおこない整陣したうえで騎馬戦を仕掛ける余裕があったのか（そうするものと日本側が想定したのか）も検討の余地がある³⁾。少なくともこのときのモンゴル軍には高麗人、女真人、漢人（北部中国出身者）が多数編入されており、第2次遠征では南宋人も加わる多民族混成集団であった。さらにはここに高麗国軍が加わる。征服地の兵員を次の征服戦争の前面に立たせることは、モンゴルの常套手段である。モンゴル高原出身の牧民戦士が多数を占める状況ではなく、彼らは比較的少数の虎の子の督戦部隊だったと考えられる。防塁の機能評価はプランナーの意図と現場の実情とで異なることもあり得るが、いずれにせよ、上陸した敵軍が内陸部へ侵攻するのを食い止める水際の防御壁だったことは間違いない。

かかる軍事施設はどのようにして着想されたのか。経緯を直接語る史料は確認されていないが、先行の類例について、日本中世史研究者の服部英雄（2017：226頁）は次のようにまとめている。

日本での類例は土塁構造なら大宰府の水城、小水城があるし、平安末期には阿津賀志山防塁（奥州藤原氏・福島県）があった。元寇防塁は馬防柵の機能を短期に実現するため、最低限必要な高さ六尺（一・八メートル）を確保したもので、機能をより確実にするために、まもなく石塁構造に強化したものと推定される。

周知のとおり、水城（第67図）は、7世紀後半に百済を救援すべく朝鮮半島に出兵した日本が唐・新羅連合軍に大敗した結果、両国の侵攻から大宰府を防衛する目的で構築された防御壁である。御笠川が大宰府から博多湾へ流れ下る途中の背振山地と三郡山地の間の平野狭窄部（二日市狭窄帯）を遮断し、全長約1.2km、高さ7～9m、基底部幅約80m、本体部幅約20mの二段構造の土塁をなす。外側（博多湾側）には幅約60mの外濠を擁する（cf. 九州歴史資料館編 2009・2014）。また西側丘陵の小谷を塞ぐ小規模な遮断城が数カ所に構築されており、小水城と呼ばれる（松尾 2008：133頁、九州歴史



第67図 水城（九州歴史資料館編 2009：上 巻頭 PL.1）

資料館編 2014：46～47頁）。

一方、阿津賀志山防塁（第68図）は、12世紀末、奥州藤原氏が鎌倉幕府軍の侵攻を食い止めるために築造した、長さ3.2kmにおよぶ防御壁である。福島盆地の北端、仙台平野・北上川方面に抜ける谷の入口、阿武隈川の左岸において、河畔付近から厚樫山山頂までの空間を河道に対して直角に遮断する形で構築され、二重の堀と三重の土塁が築かれている（木本編 1994）。このたび旧九州大学箱崎キャンパスの元寇防塁でも、内側に幅15mの空堀が設けてあることが判明したが（三阪・谷編 2019）、考古学者の岩永省三（2020：170～173頁）は、これを阿津賀志山防塁との共通性と捉え、防塁と堀を組み合わせる敵軍の進攻を食い止める戦術が平安時代後期にはすでに存在したと指摘している。

元寇防塁の先例を日本列島内にみいだそうとする場合、上の2つの遺構が指摘されるのは自然であろう。特に考古学調査によって判明した細部構造の類似点は重要な知見である。しかし元寇防塁と水城・阿津賀志山防塁との間には看過できない違いもある。すなわち占地コンセプトの違いである。水城や阿津賀志山防塁は、陸上における敵の移動を、ルート上の狭窄部を遮断することで食い止める遮断城である。これに対して元寇防塁は、水上から押し寄せてきた敵を広範囲にわたる海岸線で食い止める水際防御陣地である。特に海外から九州北岸に押し寄せる脅威への対応という具体的目的が共通する水城と比較すると、占地条件が大きく異なることは一目瞭然である。

寡聞にして知らないだけかもしれないが、海岸防御壁という観点からいうと、日本史上に先例を見いだしがたいのではないだろうか。では国外に目をむければどうか。「元寇」の学説史整理をおこなった日本中世史研究者の川添昭二（1977：242頁）は、元寇防塁について、「他国に類似の遺跡もなく、まさに世界史的な遺跡である」と評した。しかしこの評価は当を得ていない。すぐ隣の朝鮮半島において、それも元寇防塁が築かれる直前の時期に、類似した軍事施設が構築されているのである。すなわち日本にさきだってモンゴル軍の侵攻を経験した高麗朝廷が、モンゴル軍と対峙するためにたてこもった江華島、および同朝廷がモンゴルと講和した後になおも抵抗を続けた高麗の軍団三別抄がたてこもった済州島に、それぞれ築造された海岸防御壁である。後者は環海長城ともよばれる。

日朝の建造物の類似性については、韓国において、高麗・モンゴル戦争研究を牽引してきた尹龍嫻（ユン・ヨンヒョク）（2009：187～188頁、2014：295～296頁）が環海長城に関して先駆的に指摘し、近年日本・高麗関係史を専門とする金普漢（キム・ボハン）（2016・2017）が江華島のものを含めて正面から論じている。特に、単に類似するというだけではなく、これら高麗の先例がアイデアとして日本に伝わり、それが元寇防塁のもとになった可能性を指摘した点が注意される。高麗の海岸防御壁が元寇防塁の直接的な源流だ



第68図 阿津賀志山防塁
（吉井 2005：82頁所載図を一部修正）

というわけである。筆者は彼らの指摘に一定の可能性を認める立場だが、日本ではほとんど知られていないか、もしくはかえりみられていない。そこで以下では、高麗の海岸防御壁について既往の学説に補正を加えつつ紹介し、ついで日本への情報伝播の可能性について筆者の見方を示すことにしたい。

3. 江華島の海岸防御壁

1206年にチンギス＝カンが建国したモンゴル帝国は、1211～15年に金が治める北部中国にむけて大規模な侵攻戦を展開し、その過程でモンゴル高原南東部に居住する契丹人勢力を傘下に吸収した。しかしほどなく一部の契丹人集団が離反し、彼らは1216年に遼東地方を経て高麗国内に闖入し、その北部地域を寇略してまわった⁴⁾。

当時の高麗国王は第23代高宗だったが、高麗朝廷は1170年に始まる武臣執権体制下にあり、当時は崔忠献が実権をにぎり、研究者が武臣政権と呼ぶ強固な支配体制を構築しつつあった。1218年、モンゴルが契丹追討のためにカチン、ジャライル両将の率いる軍を高麗に送り込むと、高麗は敵の敵は味方としてこれと共同戦線をはり、翌年、契丹集団を制圧することに成功した。

これをきっかけにモンゴルと高麗は当初友好国として関係をスタートさせた。しかしモンゴルにとっての友好とは高麗を組下におくことを意味し、あいつぐ貢物要求、およびその際の使者の言動に、高麗の支配層は不満を高めていく。そうしたなかで1225年、モンゴルの使者が国境付近で遭難し、両国の交渉はいったん途絶する。当時チンギス＝カンは中央アジアに遠征してホラズム王国を滅ぼしたばかりであり、その後休む間もなく西夏との最終戦争に突入し、その完了直前に死去した。そのためモンゴルは、この段階では高麗に対して特段の措置をとらなかった。

しかし1229年に第2代皇帝オゴデイが即位すると、2年後の1231年、サルタク＝コルチの率いる軍勢が高麗に送られ、あしかけ29年にわたる侵略戦の幕が切って落とされる。出兵にあたっては、使者の遭難を高麗による殺害と断じ、その問責を大義名分に掲げていた。ただ帝国全体を見渡せば、新皇帝の即位とともに新たに企画された各方面への征服活動の一環であった。同時期にはモンゴル本軍による対金最終戦争が推進され、数年後には皇帝の甥バトゥによる有名な西方遠征も実施されている。

高麗ではすでに1219年に崔忠献が死去し、子の崔怡（初名は瑀）が執権者の地位を継承していた。高麗軍は北方の一部の城塞で頑強に抵抗したが、モンゴル軍が王都開京（現 開城市）へと進出するのを食い止められなかった。そこでその鋭鋒の前にいったん降伏し、王都や北方諸城へのダルガチ（監督官）の駐留を受け入れた。しかし早くも翌32年には各処のダルガチを殺害して抵抗を再開し、朝廷の安全をはかるため、崔怡の主導により開京の南西近海の江華島へ遷都を強行した。

江華島は島といっても半島本土に近接し、その東岸と本土の間は狭いところで数百mの幅しかない江華水道（塩河）を隔てるのみである。しかし朝鮮沿岸島嶼では有数の人口収容力を誇ると同時に、最大10m近い干満差がある海に取り囲まれている。海岸には広大な干潟の泥濘が広がり、大きな潮汐によって激しい潮流が発生する。こうした自然条件が敵軍の侵攻を妨げる一方、半島南方の穀倉地帯から舟運によって物資を供給することができる。こうした天険を利用した立地は、5世紀にフン族やランゴバルト族の侵攻を避けてアドリア海の干潟の上に建設された都市ベネチアを彷彿とさせる。

この江都とよばれた臨時首都への遷都は、その年の6月に決定にされ⁵⁾、ただちに仮宮の建設に着手し⁶⁾、その完成をまたずに国王も江華の客館に移御した⁷⁾。そして官衙や寺院等の首都機能に関わる施設の移転・造営も進められていくが、あわせて江都を防衛するための城壁の建造が進められていく。この城壁のことは史料において外城、中城、内城という名称で言及される。そのプランに関する

第9表 江都の城郭に関する主要学説

	①尹龍燦	②金昌賢	③申安湜	④イ・フィイン
外城	海岸防御壁（月串～穴口鎮 約15km）	海岸防御壁（昇天浦～草芝 23km以上）	都城	都城（約11.3km）
中城	都城	都城		官庁里一帯（周長5～6km 前後）
内城	宮城と同一	中城と同一	中城と同一	中城と同一

（イ・フィイン 2016：164頁所載表を再編集。宮城については省略）

主要な学説を整理すると第9表のとおりである。

①は前出した尹龍燦（2011：제3장Ⅳ）の見解であり、これまで通説的な地位を得てきた。すなわち外城は江華島東岸に沿って江華水道北部一帯に構築された海岸防御壁（南端は内陸に延びると想定）であり、中城は都邑を取り囲む城壁、内城は宮城（王宮）部分を指すという。②は高麗の都城研究に大きな成果をあげてきた金昌賢^{キム・チャンヒョン}（2004）の見解であり、外城は東岸の海岸防御壁、中城は都邑全体の城郭だとする点は同じだが、海岸防御壁はより長くほぼ東岸全域に想定され、内城は中城と同一施設であるとする。①説と②説による外城＝海岸防御壁説を図示したものが第69図である（なお以下、江華島内の地名については同図を参照されたい）。

一方、③の申安湜^{シン・アンシク}（2009）の説では、外城は都邑を取り囲む外側の城壁であり、中城はその内側に築かれた二重の城壁で、内城と同一の構造物とする。

④はイ・フィイン（2016）の最新学説である（第70図）。ここでも外城は都邑全体の外郭と想定される。ただし完全に取り囲むのではなく、東方の海岸で両端が途切れる形になり、その間を別途史料に登場する海岸堤防が埋めていたと理解する。そして中城と内城は同一施設であり、宮城（王宮）とその周辺エリアを取り囲むと推定する。

イ・フィインによれば、本来江華島の東岸は出入りの激しいリアス海岸だったが、朝鮮時代後半期の17世紀に湾入部が干拓され、その後、朝鮮朝廷の避難地として江華島の防衛体制を強化すべく新たな海岸線に沿って防御壁が構築された。江都の外城として江華水道沿いに長大で連続的な海岸防御壁を想定する見解は、朝鮮時代後半期に形成された海岸線と干拓堤防上の構造物にひきつけた見解である。そして、この朝鮮時代の海岸防御壁に対する考古学調査では、いまのところその下に高麗時代の防御壁が存在した形跡は確認されない。外城の長さは朝鮮時代の地誌に古蹟情報として記載されているが、これをもともと



第69図 江都外城＝海岸防御壁説
（イ・フィイン 2016：33頁所載図に加筆）

の出入りのある海岸線に想定すると実情に合わない。一方、現在までの考古学調査によって具体的に確認および推定されている江都外縁の城壁ラインは、これと概ね合致する。そこで外城は都邑の外郭ラインとみたほうが自然であり、これとは別途に記録に登場する海岸堤防と組み合わせ、上記のように想定すべきだということである。

中城については、建設の時期と規模が正史に明記され⁸⁾、同時代史料にも登場する⁹⁾。一方、内城



第70図 イ・フィインの江都城壁復元案
(イ・フィイン 2016: 172頁所載図に加筆)

については、モンゴルとの講和交渉において撤去対象として突然登場するのが唯一である¹⁰⁾。しかしそこでは外城と内城の破壊についてのみ言及しており、中城については触れられていない。また内城が破壊された後も国王は10年間にわたり江華島で生活したので、破壊された内城が宮城そのものを指すとは考えられない。こうしたことから、内城は宮城ではなく、中城と同一の施設と捉えるのが妥当である(イ・フィイン 2016: 154~163頁)。すなわち江都は二重の城壁で囲繞されていたことになる。

以上のイ・フィインの所説は、従来の研究が依拠してきた地誌をはじめとする朝鮮時代の関係史料に鋭く批判を加え、この間に積み重ねられてきた考古学調査の成果¹¹⁾と、看過されてきた海岸地形の変化を注意深く考慮した議論である。関係史料が絶対的に不足し、考古学調査もなお途上にあることから、定論とまではいえないかもしれないが、傾聴すべき説得力があると考えられる。ただし金普漢が元寇防塁の史的前提として言及する江華島の海岸防御壁は、上記の江都外城=海岸防御壁説を念頭においたものである。そこで以下では、イ・フィイン説を大枠の前提とした場合、この問題をどのように捉え直すことができるか、筆者の補正意見を加えながら、あらためて関係史料を確認していこう。

まず外城の建設については、「江華の外城を築く(築江華外城)」という簡略な記述が、遷都翌年の1233年¹²⁾、および5年後の1237年の記事にみえる¹³⁾。遷都後、まず都邑を取り囲む城壁が構築されたわけである。4年間隔で2ヵ年の記事に現れる理由は不明だが、紀年の誤りでなければ、遷都直後に第一段階の整備がなされ、数年後に補完工事がなされたと解釈するほかない。中城(内城)の建造はだいぶ遅く、1250年のことである。『高麗史』巻82・兵志・城堡・高宗37年(1250)によると、このとき造られた中城は周長2960余間であり、大小17の門を備えていた¹⁴⁾。江都における二重の城壁の建造は、モンゴル側には高麗に降服の意志がないことを示すものとして受け止められていた¹⁵⁾。そのため講和交渉が進展すると、まず二重城壁の撤去が進められたのである。

史料にみえる外城を海岸防御壁とみる説は、前述のように現状ではそのままは認できない。しかし防御壁としての機能をもつ海岸堤防が存在したこと自体はイ・フィインも認めるところであり、これを元寇防塁の史的前提として捉える視点は依然として有効である。詳しくみていこう。

高麗が遷都した後、当然ながらモンゴル軍の来攻に備えて江華島の防衛体制を整備することが焦眉の課題となった。1235年の閏7月に次のような措置がとられている。

前・後・左・右軍の陣主と知兵馬事に命じ、江に沿って防衛のために駐屯させた。¹⁶⁾

ここにいう「江」は江華水道である。本土から押し寄せる脅威に対して本土と至近距離にある江華水道沿岸の守りを固めるのは当然の措置であろう。前軍、後軍、左軍、右軍は戦時編制の中央軍の諸部隊であり¹⁷⁾、陣主はそれぞれの長官、知兵馬事は次官である。ただし江華水道の両岸には崖が切り立った地形の険しい個所もあり、また潮汐によって中国・長江上流の巫峡の急流にも喩えられる強潮流が発生する¹⁸⁾。特にその中程には流路が大きく屈曲し、流れのなかに岩礁が潜む孫石項（固有語名では손돌곶 [ソントルモク] と呼ぶ）という難所がある。つまり、どこからでも簡単に船で押し渡れる環境ではなく、歴史的には王宮所在地（現 仁川市江華郡江華邑）の東方で海中に突出した甲申（申は岬を意味し固有語で곶 [コッ] と呼ぶ）が東岸唯一の渡航点であった。甲申は現在固有語名で갑고지 [カプゴジ] ともいうが、江華地域の古名「甲比古次」¹⁹⁾ は、その漢字借音表記と考えられる。モンゴル軍は結局江華島への直接攻撃を敢行しなかったが、ときおり付近に進出してきた際には、主として甲申の対岸に姿をみせた²⁰⁾。ここはいうまでもなく都邑の直近でもある。イ・フィインは上記の警戒体制においては甲申エリアが焦点だったと捉えるが、妥当な見解であろう。

そして同じ年の末に、水道に沿って海岸堤防が築かれる。『高麗史節要』（以下『節要』）巻16・高宗22年（1235）12月および『高麗史』巻129・崔忠献伝附 崔怡伝に次のような記事がある。

崔怡は宰枢と協議して、州郡の一品軍を徵発し、江華島で江に沿って堤防を増築させた。²¹⁾

一品軍は地方で組織される一種の工兵隊であり、直前に同じ水道沿いで警備体制が固められていることから、これに対応する措置とみるべきである。「増築」（原文は加築）ということは、何らかの堤防施設自体はすでに存在しており、それを増改築したことを示している。ここから、新たな農地干拓といった単純な経済目的の事業ではなく、主目的は軍事面にあり、増改築された堤防が海岸防御壁の役割を担うことになったと考えられるのである。沿岸警戒体制の重点が甲申であったとすれば、この海岸防御壁もまた同地域を重点として築造されたとみるイ・フィインの所説は妥当であろう。

旧説（第9表の①②）ではこの堤防をそのまま外城と同一視した。しかし外城工事に関する記事とはあくまで年次が違う点に注意する必要がある。イ・フィインは、海岸堤防を外城そのものとは区別しつつ、都邑をとりかこむ外城が海岸で途切れた空白部分を埋める形で築かれたと考える。ただ、海岸堤防に防御壁という軍事上の目的を認めながら、これを城壁と区別するのは、従来の外城＝海岸防御壁説を批判する意味があるとはいえ、やや極論にもおもえる。

同時代の高麗人には、江都の城壁について次のような言及がある。ここでは原文と訳文を本文中に併記して示すが、まず崔滋（1188～1260）の稗官小説『補閑集』の巻中には次のような記載がある（史料訳文中の（＝）は筆者による注釈。以下同じ）。

公（＝崔怡）は新都において江に沿って城壁を廻らせ、また宮闕を造営した。その御寝や正殿はすべて公が私財を傾け、門客を遣わして創建したものである。

（公於新都沿江環堞、又營宮闕。其御寝及正殿、皆公之傾私賄、遣門客所創也）

また崔忠献・崔怡に重用された文人李奎報（1169～1241）の『東国李相国文集』後集巻2・次韻李平章復和前詩見寄には次のようにある。

先日、公が来訪して、「海辺に新たに築いた城壁は壯観で見物だ」といつてきた。そこで一緒に

遊覧しようとおもい、この句を作った。

(前者公来言、海辺新築城、壯観可賞。欲与之遊、故有是句)

イ・フィイン (2016: 152~153頁) はこれらを、あくまで都邑をとりまく外城が水道の近傍に建設されたことを表現していると解釈する。しかし「江沿いに城を築いた (沿江築城)」といった表現ならともかく、「江に沿って城壁を廻らせた (沿江環堞)」としているものを、それ自体は直接水辺に沿っていない——両端部のみが海岸近くに達している——城壁の表現と解釈するのは、いささか無理があるようにおもわれる。

類例として、後述する濟州島の環海長城に関して、『新增東国輿地勝覧』巻38・全羅道・濟州牧・古蹟・古長城には、「海に沿って廻らせ、周長は300余里である (沿海環築、周三百餘里)」と記されている。これは海岸線に沿って築かれた防御壁を意味している。周長とはいうが、海岸に沿って300里 (約120km) 余りでは、濟州島をせいぜい3分の2周する程度である²²⁾。「環」というのは島の外周にそって廻らされたことをいうだけで、完全に圍繞することまでは含意しないのであろう。

一定エリアを完全に取り囲むことを意味するわけではない「環築」の用例は、朝鮮時代の『肅宗実録』巻8・36年 (1701) 6月癸亥にもみえる。すなわち当時の江華府の防御体制構築に関する議論のなかで、右議政金昌集が次のように発言している (史料訳文中の〔 〕は筆者による補足。以下同じ)。

小臣が以前〔江華の〕形勢をみたところ、南山から亭子山まで城壁を廻らせると、工役はたいへん大規模になります。

(小臣曾見形勢、自南山至亭子山環築、則功役甚大矣)

南山は江華邑治の南郊、亭子山は東郊にある山稜である。ここでは邑治の南方から東方までの区間に城壁を廻らせることをいっており、邑治全体を取り囲むプランのことを述べているわけではない。「環築」をそのように解釈できるのであれば、「沿江環堞」もまた、「江に沿って城壁を廻らせる」という意味に解釈してさしつかえないだろう。

李奎報がいう「海辺に新たに築造した城壁」も、都邑を取り囲む城壁を指すとすれば不自然ではないだろうか。それ自体は海岸に沿っていない城壁を、それも城壁内の都邑に暮らす高麗官人が自らの周囲をとりまく城壁を指して、海辺に新たに建造された城壁と表現するだろうか。まして自然の山稜に沿って都邑をとりまく城壁であれば、より大規模なものがもともと開京に存在していた。これを壯観で見物だとわざわざ注目するだろうか。

イ・フィイン (2016: 153頁) が参考的にあげた朝鮮時代半ばの史料についてもみておこう。沈光世 (1577~1624) の『休翁集』巻3・海東樂府并序に収める「撤城怨」では、高麗時代の江都遷都の故事を詠っているが、その序文において次のように述べている。

当初江都の外城を建設した際、江に沿って廻らせ、水辺に木を立て (=木柵か)、その上に望楼を建て、岸を高くして舗を設置して屯営とし、その上に城廊を作って馬で走れるようにした。内側も外側も完璧に固め、周長は数百里近くであった。今もなお遺跡が遺っている。モンゴルの將軍が当初江都を攻めた際、帰還して自らの君主に告げて、「江は狭く甲冑で埋めれば渡れそうだ」といったという。そこで甲申江と名づけられた。

(初設江都外城、沿江環築、浦湫植木、上置楼寨、高岸設舗、以為屯營、上作城廊可以走馬。表

裏完固、周遭幾数百里。至今遺址尚存。蒙將初攻江都、還告其主曰、江狹積甲可渡云。故仍名甲申江)

イ・フィインは、ここにみえる江沿いに廻らされた「外城」も、自らの理解にもとづく江都の外城を説明したものと理解し、「沿江環築」は『補閑集』のフレーズに依拠していると捉える。しかし沈光世が表現する城壁は、水辺に木柵をたて防塁を築き、そのうえに屯営施設を配置するというものであり、場面としても甲申で江華水道を渡ってこようとするモンゴル軍について触れている。本編の詩のなかでも、モンゴル軍が「甲冑で江を埋めて渡ってこようとするので、城壁を築いてその要衝を守った（積甲江擬越、築城防其衝）」と述べている。朝鮮時代半ばの当時に現地に残っていたという遺構が実際に高麗時代の痕跡だったのかはわからず、周長「数百里」というのは明らかに誇張だが（島全体を周回してしまう）、少なくとも沈光世自身のイメージは明らかに、要塞化した海岸堤防を江華水道に沿って廻らせ、本土から寄せくる敵軍の侵入口を遮断するというものであった。都邑全体を取り囲む城壁に焦点を当てたものとはいえない。周長というのも、上記の環海長城の例のように、島の外周に沿って築かれておれば、完全に取り囲んでいなくても用い得るであろう。

以上から、高麗同時代史料にみえる江華水道に沿って廻らされた城壁とは、城壁ライン自体が水辺に沿っていたと素直に解釈すべきであり、前述した海岸堤防を指しているともてよい。高麗でもそれまで類をみない、海岸堤防を防御用に増改築した構造物が、特異な景観として注目されたのであろう。そうであれば、この海岸防御壁もまた都邑を防御する「城」には違いないのである。地盤の堅固な山稜に沿って廻らせるのと海岸線に築くのとでは工法が違ったと考えられるが、イ・フィインが想定する形で海岸防御壁が外城に連結されていたのであれば、これも実質的に外城の一部とみることが可能かもしれない。ただ高麗人たちが上記のように水辺の城壁として区別したのであれば、都邑を包み込む外城とはあくまで別施設とみるべきかもしれない。あるいは海岸防御壁は、外城のラインと完全には連続、一体化してはいなかったのかもしれない。

記録上の工事過程については次のように整理することが可能であろう。1233年の外城工事では都邑を取り囲む山稜沿いの城壁が築造され、1235年にはその沿岸開口部の脆弱性が認識されることで城壁空白部を防御する海岸防御壁が築かれ、1237年には外郭全体の最終整備が実施された。

なお、こうした海岸防御壁は甲申一帯のみに限定されなかった可能性も、念のために想定しておきたい。対モンゴル戦争も終盤の1256年、高麗政府は食糧不足に対処すべく海岸に堤防を築いて屯田を開いたが、それは梯浦と瓦浦の左屯田と、狸浦と草浦の右屯田とからなる²³⁾。このうち梯浦は北東岸にあり、昇天浦とも呼ばれたように対岸の昇天府（現 開城市開豊区域）への渡し場であった。他浦の位置ははっきりしないが、左・右とは江都からの方角であろうから、北東方向にある梯浦が左手ならば、右手の狸浦と草浦は南東方向となる。このうち草浦は江華水道南端にある後の草芝浦かもしれない。いずれにせよ左・右屯田は、甲申付近の海岸防御壁の北方と南方の湾入部、少なくとも4ヵ所の浦に造成されたことになる。農地開発を目的とするが、モンゴル軍が迫る本土の対岸であるからには、そこが侵攻の足がかりにならぬよう、防御性にも配慮したのではないだろうか。屯田ゆえ、耕作者が守備兵を兼ねた可能性も想定できよう。基本的に干拓対象となった浦（湾入部）ごとの話であり、必ずしもそれらが連続した長大な海岸防御壁をイメージするものではないが、結果的に江華島東岸から北東岸の複数個所に断続的に海岸防御壁が築かれた格好になるかもしれないわけである。

またイ・フィイン（2016：148～150頁）は江都の城壁プランを推定する際に珍島の龍藏山城を間接証拠としているので、これについても触れておこう。次節で述べるように、1260年高麗はモンゴルと

講和し、1270年には武臣政権が崩壊するが、その際当時の高麗軍の主力である三別抄が決起して江華島を脱出、朝鮮半島南西近海の珍島に拠って亡命政権を樹立する。その拠点が珍島北東岸に遺構が現存する龍蔵山城である(第71図)。仮宮があった中核部は海岸から離れた山谷内にあるが、これを取り囲む山稜に城壁が廻らされ、しかしそれは閉塞されず、両端が海岸でとぎれた形になっている。イ・フィインは江都の外城も同じように設計されており、龍蔵山城はその再現とみるわけである。龍蔵山城に関して海岸の城壁開口部に海岸防御壁が築かれていたかどうかは文献上にも考古学的にも確認されていないが、当時は時間・人力・物資の制約から、結果的にそこまで整備する余裕がなかったという見方もあり得るだろう。

三別抄がたてこもる珍島の攻略をめざすモンゴル・高麗政府の第1次派遣部隊(主将はモンゴル軍が阿海、高麗軍が金方慶)は、龍蔵山城の対岸に位置する海南の三堅院²⁴⁾に陣取り、海上で攻防をくりひろげた。つまり龍蔵山城の開口部の前洋が主戦場になったのである。その際の模様を『高麗史』巻104・金方慶伝では次のように描写している。



第71図 珍島 龍蔵山城
(チェほか編 2006: 15頁所載図に加筆)

方慶と阿海は三堅院に駐屯し、珍島に対陣した。賊(=三別抄)は奪った艦船にみな怪獣を描き、[それらの船が]江(=珍島と本土の間の鳴梁海峡)を覆って水面に照り映え、飛ぶように動き回り、その勢いはあたるべからざるものがあつた。戦闘に際し、賊軍はまず太鼓を打ち鳴らし、鬨の声をあげて突進した。一進一退が繰り返され、むなしく日々睨み合っていた。そんなおり、潘南(=現 全羅南道羅州市潘南面)の人である洪賛と洪機が阿海に対し、「方慶・孔愉(=高麗軍の部将)らは密かに賊と通じている」と讒言した。阿海は彼らを拘禁し、ダルガチ(=高麗王都に駐在するモンゴルの監督官)に移牒した。ダルガチは方慶を帰還させて賛たちと対弁させることにし、[軍務を]参知政事蔡楨に交替させた。……ダルガチは王(=元宗)に対し、「賛たちの告発はでたらめなので、[彼らを]牢獄に拘束し、方慶は釈放すべきである」と告げた。王はさっそくダルガチに要請して再度方慶に叛賊を討伐させることにし、上將軍の職を授け、慰勞して遣わした。方慶が珍島に到着すると、賊はみな船に乗って盛んに旗幟をはり、海を沸きたたせんばかりに鉦鼓を打ち鳴らした。また城壁上でも大いに太鼓を鳴らして鬨の声をあげ、声で加勢した。阿海は怖じ気づいて船から下り、羅州に撤収することを望んだ。²⁵⁾

三別抄は龍蔵山城前面の海峡に水軍を集結させたが、ここで注目されるのは、三別抄が船上で氣勢

をあげると同時に、「城壁上」でも太鼓をならし、鬨の声をあげて加勢したという点である。この「城壁」は海岸から離れた仮宮付近の山上の城壁のことではなかろう。山稜がそのまま海岸線をなす先端の一部区間でのことを述べているのかもしれないが、現在確認できていないだけで、城壁間の海岸沿いにも要塞化した堤防（防御壁）が築かれていた可能性も皆無ではないのではなかろうか。そうだとすると、まさしくイ・フィインが想定する江都の防御体制にますます類似することになる。

4. 濟州島の環海長城

崔氏政権は崔怡以降、崔沆、崔瑄と代を重ねるなかで次第に求心力を失い、1258年、崔怡子飼いの武将であった金俊（当時は金仁俊）らが一部の有力文臣と手を結んでクーデタを起こし、転覆された。ここまで高麗は江華島に拠って王朝を維持してきたものの、モンゴル軍の侵攻を封じる根本的な打開策を見だし得ないでいた。そこでこの政権交替は高麗にとって大きな転機となった。高麗はそれまでの抵抗政策の責任を崔氏に押しつける形で、モンゴルとの和平交渉に乗り出したのである。

モンゴルはかねて服属の証として高麗王が自ら出頭することを要求してきた。しかし戦争が長期化するなか、このころには態度を軟化させ、王太子の代理出頭を容認するとしていた。そこで1259年、病床にあった高宗の名代として、王太子僖が四川の地で対南宋戦の陣頭指揮にあたった第4代皇帝モンケのもとにむかった。しかし直後に高齢の高宗が死去し、ついでモンケも急死した。するとモンゴルではモンケの実弟であるクビライとアリク＝ブケの間に後継者の地位をめぐる争いが発生する。ここで太子僖はクビライのもとに帰参する道を選び、1260年、クビライによって新たな高麗国王として承認されて帰国し、即位した。これが第24代元宗である。ほどなくクビライは弟に勝利し、皇帝としての地位を固める。すなわち世祖であり、のちに大元という国号も制定される。

しかし高麗では崔氏政権打倒の筆頭功労者である金俊が執権武臣の地位を継承し、モンゴルに対してはなお警戒姿勢を崩していなかった。モンゴルは、高麗が支配層子弟の入質、駅伝（ジャムチ）の設置、戸籍の提出、ダルガチの駐留、軍事協力、物資供出といった服属国の義務を円滑に履行しないことや、江華島から開京になかなか還都しないことに業を煮やし、やがて高麗の廃絶や所領分割までを選択肢とする強硬な対処策を検討しはじめた。

一方、高麗では元宗と金俊の対立が昂じ、1268年、金俊は元宗の指喉をうけた自らの右腕林衍により殺害される。しかし翌年には林衍と元宗の関係が悪化し、林衍は元宗を廃して王弟の安慶公淐を即位させた。これは対モンゴル関係上悪手だった。高麗の二心を疑って介入のタイミングをうかがっていたモンゴルにとって、自らが公認した王をその臣下が無断で廃位することは、モンゴルの権威を否定する叛逆行為になる。林衍の行為はモンゴルに恰好の介入の口実をあたえたのである。

高麗側でこの危機を察知したのは、当時モンゴルで交渉にあたり、高麗への風当たりの厳しさを実感していたであろう太子謹（後の第25代忠烈王）だった。帰国途上で事変を知った太子は、クビライのもとに引き返してこれを通報し、林衍の討伐と元宗の復位を要請した。すなわち王室の親モンゴル姿勢を闡明することで、高麗王朝そのものが除去対象になることを回避しようとしたのである。

モンゴルもまた、南宋や日本への経略を控えた状況で高麗と再び戦端を開くことは得策ではないと判断し、高麗王室を懐柔、支援して反対勢力を封じることで事態を取捨することにした。こうして1269年末、モンゴルの圧力により元宗が復位し、事情聴取のためモンゴルに入朝した。同じく召喚された林衍はこれを拒否したが、ほどなく憂死し、子の惟茂が地位を継承した。翌年、元宗と太子謹がモンゴル軍を帯同して帰国すると、惟茂はこれに抵抗する構えをみせる。しかし元宗の指喉をうけた

腹心の洪文系（後に奎と改名）らによって殺害され、ここに武臣政権は完全な終焉をむかえる。

三別抄は当時の高麗軍の中核部隊であった。崔怡時代に形骸化した旧軍にかわる精鋭として編成され、治安部隊に端を発する左・右2隊の夜別抄と、モンゴル軍の捕虜となつてから脱出してきた軍人を集めた神義軍の3部隊からなり、対モン

ゴル戦争のなかで中心的な役割を担ってきた。三別抄には武臣政権の瓦解とともに解散命令が下された。しかし彼らはこれを拒否し、一部の政府官員を拘束し、物資を奪って船舶で江華島を脱出、朝鮮半島南西近海の珍島に移動し、前述した龍藏山城において王族の承化侯温を擁する亡命政権を樹立した。

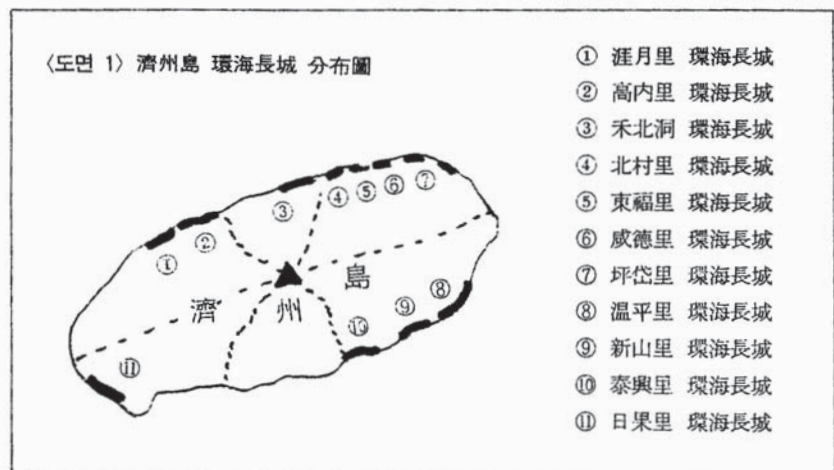
これに対し、高麗国内への進駐を開始したモンゴル軍と、元宗の本国政府軍とが共同で珍島を攻撃する。三別抄は当初こそ勢威をふるったが、1271年に珍島が陥落した。残存勢力は当時耽羅とも呼ばれた済州島に脱出し、抵抗活動を続けたが、1273年、忻都・洪茶丘が率いるモンゴル軍と金方慶が率いる高麗政府軍による済州島への渡海作戦が決行され、ついに平定される。

このとき、済州島にたてこもった三別抄が高麗政府軍・モンゴル軍の上陸を阻止するために構築したとされる海岸防御壁が、いわゆる環海長城である。済州島現地の考古学者である姜彰彦（1991）の調査にもとづき遺構を概観しておこう。

まず長城は島内で第72図のように確認されている。主に島の中心邑があつた北部一帯の海岸を広くカバーしているが、南西岸と南東岸にもみられる。火山島である済州島特有の玄武岩を平均高3m、平均幅2mで積み上げた石塁である。内側・外側に面石を積み上げ、なかを雑石で埋める挟築方式をとる。石材には特別な加工を加えず、大きさは最小20cm弱から最大1m弱の幅で不揃いだが（多くは数十cm規模）、下段ほど大型の、上段にいくに連れて小型の石材を使用する。一部には女牆（ひめがき）が残る個所もある。ただ環海長城の調査はいまだ表面観察にとどまり、本格的な発掘はおこなわれていない。そして朝鮮末期まで繰り返し手を加えて利用されてきたことが記録上にも明らかである。したがって、現存する遺構を高麗時代の姿に直結させることには慎重でなくてはならない。

16世紀前半に成立した朝鮮王朝の官撰地誌『新增東国輿地勝覧』の巻38・全羅道・済州牧・古蹟の「古長城」は、環海長城に関する最も古い記録とされ、その後の済州島の地誌（李元鎮『耽羅志』など）にも継承されている。すなわち次のような内容である。

海岸沿いに廻らされ、周長は300余里（=約120km）である。高麗元宗のとき、三別抄が叛乱をおこして珍島を占拠した。王は侍郎高汝林らを耽羅に遣わし、兵1000名を率いてこれに備えさせた。そこで長城を築いたのである。²⁶⁾



第72図 済州島の環海長城（姜彰彦 1991：136頁）

300余里（約120km）という周長をそのまま受け取ると、島を3分の2周ほどすることになる。島の海岸には懸崖エリアもあるので、全地点にもれなく延伸するわけではなかろうが、海岸に沿って島を一定の範囲で覆うように築かれたことをいうのだろう。とはいえ長大な距離には違いない。ただし濟州島では、三別抄平定後もモンゴル服属期には日本に対する警戒体制がとられていた（森平2013c：16～19頁）。またモンゴル帝室直属の牧場が設置されてモンゴル牧民が送り込まれ、彼らは14世紀後半に高麗政府と繰り返し衝突を起こした（高昌錫^{コ・チャンソク} 1985a・1985b、金日宇^{キム・イル} 2010：IV）。さらに高麗末から朝鮮初にかけて朝鮮半島近海で倭寇が活発に活動していたことはよく知られている。これらの時期の環海長城に関しては記録がなく、状況は不明だが、『新增東国輿地勝覽』に記録された長城もまた、三別抄時代のままではなく、その後の軍事的状況のなかで手が加えられた結果である可能性も考えておいたほうがよい。三別抄の段階では築造・運用期間が短く、半島本土からの侵攻に対処するものであったから、少なくとも南岸にまで築城する必要やその余裕があったとは考えにくい。

それはともかく、上記の記事で重要な点は、三別抄が自らを防衛するために長城を建造したとは記していないことである。実はそのようなことを直接に記した同時代ないしこれに準ずる史料は存在しない。逆に、三別抄が濟州島に侵攻するのを防ぐために、高汝霖ら高麗政府軍が構築したものであるという。ここにみえる高汝霖は、他の史料では高汝霖と記される人物であり、たとえば『節要』巻18・元宗11年（1270）9月に次のようにみえる。

將軍楊東茂・高汝霖らが船軍を率いて珍島を討った。賊（＝三別抄）は長興府に侵入し、官軍20人あまりを殺害し、都領尹萬藏を捕虜にして、財貨・穀物を奪い取った。²⁷⁾

高汝霖は1270年9月の段階で珍島にたてこもる三別抄の討伐に赴いた武将だった。彼が濟州島に移動した事情については、次の『節要』巻18・元宗11年11月の記事から明らかになる。

賊（＝三別抄）が濟州を落とした。当初按察使権咄は靈巖副使金須を遣わし、兵200名で濟州を守らせ、さらに將軍高汝霖を遣わし、兵70名でこれに続かせた。賊が濟州を攻撃すると、須・汝霖らは勇戦して死亡した。²⁸⁾

1270年11月、三別抄は濟州島に侵攻してこれを占領したが、これにさきんじて高麗政府側では金須・高汝霖の部隊を同島に配置して防衛にあたらせたのである。『新增東国輿地勝覽』にいう古長城の建設はこのときのことだった。

金普漢（2017：157～162頁）は当時の状況を次のように推定する。関係史料の日付から高汝霖たちの長城築造期間は1270年9～11月の実質2ヶ月ほどであり、濟州島の海岸線を広くカバーするには時間が足りなかったはずである。そして11月に濟州島を奪った三別抄は、北側海岸から3kmあまり内陸に入った高所（現 濟州市涯月邑上貴里）に二重の土塁からなる拠点城（いわゆる缸波頭里城）を築いたが、江華島において都邑の城壁（内城・中城）と海岸防御壁（外城）を組み合わせ²⁹⁾ モンゴル軍に対処してきた経験を活かし、未完の長城を今度は自身たちのために増改築したはずである。

如上の状況理解は、旧説にもとづく江都の城壁プラン理解は別として、ひとまず説得力が認められるとおもうが、史料に即してもう少し詳しくみておきたい。

高麗政府軍は結果的に防衛に失敗したものの、三別抄にさきんじて濟州島を確保した。このような作戦をとったのはなぜだろうか。海上活動に機動力を発揮して半島南方の各地に軍事活動を展開した

三別抄に対応するため、朝鮮半島南方海域の要衝である濟州島を確保すること自体は当然の判断ともいえるが、さらに積極的な理由があった可能性がある。高麗とモンゴルの講和が成立する当時の出来事として、『節要』巻18・元宗元年（1260）2月に次のような記事がみえる。

〔高麗からモンゴルに寝返った〕金守禪と別将于統はともに髪を剃って（＝モンゴル風の髪型にして）也東達（＝当時高麗経略に従事したモンゴル将帥の1人）の駐屯地におり、「高麗は緊急時には必ず濟州に拠点を選ばせよう。いま再び旧京に都を戻すといっているのは虚言である」と訴えた。也東達はこれ信じ、太子が〔クビライのもとから〕帰国して也東達の駐屯地にいたると、也東達は守禪と太子を対弁させようとした。〔これに対し〕太子は「公はどうして裏切り者の言葉を信じるのか。私は髪をおろしてこの地に拘留されたほうがまだ。どうして裏切り者と対話できようか」と述べた。〔そこで〕也東達は枢密院使金宝鼎ら100名を拘留した……³⁰⁾

江華島にたてこもる高麗朝廷は、いざとなれば濟州島に脱出する計画を予め用意していたというのである。これはモンゴルに寝返った高麗人が両国の講和を妨害するために発した言葉であるから、鵜呑みにはできない。しかしこの後モンゴルに圧迫された三別抄が江華島を脱出して遠く珍島まで一挙に移動するという大胆な動きをみせ、しかも当初はモンゴル軍や高麗政府軍も攻めあぐねるほど強固な防御態勢を珍島に整えた点、その珍島の拠点である龍蔵山城については、考古学調査の結果、三別抄が入る以前の対モンゴル戦争中から整備が進められていたとみられる点などから（チェほか編2006）、当時の高麗朝廷が、江都が危機におちいった場合、濟州島や珍島など南方の主要島に拠点を移して抗戦を継続するプランを早くから用意していた可能性は排除できないとおもう。『高麗史』巻130・金俊伝に、高麗朝廷がなお江都に留まっていた元宗9年（1268）、モンゴルの圧力に反発した権臣金俊が、「深く海中に入」って抵抗を再開すべしと国王に提案したとあることも、それを示唆するのではなかろうか（cf. 金普漢 2017：158～159頁）。

実際、三別抄は最初から濟州島を目指していたと記す史料もある。金須が濟州島で戦死した際の模様を、その遺児である金台鉉の墓誌銘では次のように記している。

父は監察御史の須であり、〔後に〕門下侍中を累贈された。侍中は忠憲王（＝高宗）の乙卯年に進士に登第した。体格・容貌は立派で、人並み外れた胆略を備えていた。中央と地方で勤務し、清廉・有能ぶりが称賛された。至元己巳年（＝1269年）に御史の職をもって知靈光郡に出向した。明年三別抄が叛乱をおこし、江都の人材・物資を掠め、船に乗って南方に下った。目的はまず耽羅を占拠することにあつた。我が朝廷は將軍高汝霖を討伐に派遣し、また牒を全羅道に下し、正官から人格に優れ人を信服させられる者を選抜し、軍勢を率いてともに出動させることにした。侍中は〔この任務に〕選ばれ、帰宅する暇もなく早速兵員を選抜し、すみやかに耽羅で汝霖と会同したが、賊は珍島を確保しただけで、まだ〔耽羅には〕到着していないようだった。そこで昼夜わかず防塞を築いて設備を整え、〔賊の〕進入路を遮断して入島させないように計画した。しかし〔耽羅の〕地方官がぐずぐずして努力せず、〔そのため防御態勢が整わないうちに〕賊が別の進入路から入ってきたことに気づかなかつた。〔苦境のなか〕侍中は常々大義を説いて士卒を鼓舞していたので、人々の多くは感激して勇氣百倍となり、奮い立って鬨の声をあげ、争って陣頭にあがり、賊の先鋒を殺害してほとんど全滅させた。しかし現地住民が敵軍を支援したため、衆寡敵せず、とうとう高將軍とともに陣没して帰らぬ人となった。人々は今のいたるまでこのこ

とを無念としている。〔こうして〕公（＝金台鉉）は10歳にして孤児となった。³¹⁾

みられるように、江華島を脱出した三別抄は濟州島をめざしており、高麗朝廷はこれに対処すべく高汝霖らを派遣した。しかし三別抄はまず珍島に入り、すぐには濟州島まで進出しなかったのも、いったんは政府軍がさきんじて濟州島を確保したというのである。

そして上の墓誌銘では、金須らが三別抄の入島を防ぐために防塞（保）を建設したこと、しかし現地の地方官が尽力せず、それが完成しないうちに想定外のルートから侵攻を許し、さらに濟州島住民が三別抄にくみしたために敗北したことを記している。このような戦闘過程から、防塞は島外から来侵する敵軍の上陸が予想される海岸に設置されたであろうことがうかがわれる。しかし地方官の怠慢（三別抄への同調であった可能性もある）により工事が進まず、裏をかかれて入島を許したのである。

上記の海岸防御施設こそ、『新增東国輿地勝覧』の記す「古長城」にはかならないだろう。しかしそれは未完のまま、手薄な箇所をつかれて敗北する結果に終わった。逆にいえば、三別抄は海岸防御施設の効果を理解していたからこそ、正面突破を避けてその弱点をつくことで勝利したのである。その彼らが、今度は自身を守るために長城の利点を活用すべく、作りかけの城壁を増改築し、弱点の克服に努めた可能性は十分に考えられる。

以上はあくまで蓋然性の評価だが、では三別抄の実際の濟州島防衛戦において海岸防御施設の存在はうかがえるだろうか。『高麗史』巻130・裴仲孫伝に

賊（＝三別抄）はすでに耽羅に入り内城と外城を築いた。ときおり出撃して略奪をおこない、地方を我が物顔で往来し、沿海地方は蕭然となった。³²⁾

とあるように、珍島陥落後に拠点を経済州島に移した三別抄は、内外二重の囲郭からなる拠点城を築いた。前述した缸波頭里城である。一方、海岸防御施設については、少なくとも北西岸の主要港である涯月浦に木城（木製の城柵）が存在したことが、『新增東国輿地勝覧』巻38・全羅道・濟州牧・古蹟・涯月木城に次のように記されている（『耽羅志』にも同文が収められる）。

州の西42里（＝約17km）に所在する。すなわち三別抄が築いて官軍に抵抗した場所である。現在は半ば崩壊している。³³⁾

環海長城の一部をなすのか、それとは区別される城柵なのかは不明だが、木柵を備えた海岸防御陣地も存在したのである。

次に1273年にモンゴル軍と高麗政府軍が濟州島に進攻した際の状況をみてみよう。類似した記事が『高麗史』巻104・金方慶伝と『節要』巻19・元宗14年（1273）4月に収められるが、前者の描写がより詳細で、後者はこれを簡略化した形になっている。そこで前者の記事をみると次の通りである。

〔元宗〕14年、〔金〕方慶を行営中軍兵馬元帥に任じて派遣した。方慶はあらためて兵卒および水軍1万名余りを訓練し、忻都・〔洪〕茶丘とともに潘南県（＝現 全羅南道羅州市潘南面）に駐屯した。出撃しようとするとき、諸道の軍船が〔回航中に〕みな風によって漂流してしまったため、全羅道で用意した160艘を率い、楸子島に停泊して風待ちをした。夜半に風が強まり、どこに進んでいくのか分からなくなり、明け方には耽羅に接近したが、風濤が激しく沸き起こって進退窮

まった。方慶は天を仰いで嘆息し、「社稷の安危はこの一戦にかかっている。今日の時運は私の側になのか」といった。〔すると〕すぐに風浪はおさまった。中軍は咸徳浦から進入した。賊は岩石の間に兵を配置し、〔中軍が接近すると〕躍り上がって大いに氣勢をあげて抗戦した。方慶は諸船を督励して並進させた。隊正高世和が身を挺して賊陣に突入し、士卒は勢いに乗じて争って前進した。続いて將軍羅裕が精鋭を率いて到来し、大勢を殺害、捕獲した。左軍の戦艦30艘は飛揚島方面から〔入島して〕直ちに賊の拠点に攻めた。賊は勢いにおされて子城（＝内城）に逃げ込んだ。官軍は外城を乗り越えて進入した。火矢があちこちで放たれて煙が天を満たし、賊衆は大いに混乱した。賊中から降伏してきた者がおり、「賊はいまや追い詰められて逃亡を謀っているので急いで攻撃されよ」といつてきた。ほどなく賊の首魁である金通精は70余名の徒党を率いて山中に逃げ込み、賊将李順恭・曹時適らは肩肌脱ぎになって降伏した。方慶が諸将を率いて子城に入ったところ、士女が号泣していた。方慶は、「巨魁を誅殺するだけである。そなたらは怖がらなくてよい」と声をかけた。賊の幹部である金允叙ら6名を捕らえ、通りで斬刑に処した。その親党35名をとらえ、降伏した人々1300余名を〔船に〕分載して帰還した。〔島の〕住民はみなこれまでどおりに安堵した。³⁴⁾

この記事で注目されるのは、濟州島の北東岸に位置する咸徳浦での戦闘場面である。中軍の舟艇が一斉に突入して戦闘がはじまったことから、三別抄は海岸線に防御網を構築していたことがうかがわれる。高麗時代の状況は不明だが、少なくとも朝鮮時代において咸徳浦は濟州島の主要な窓口港ではない。このことから、少なくとも濟州島北岸の上陸可能な海浜では、こうした防衛態勢がとられていたとみられる。咸徳浦においてそこは「岩石の間」であった。自然地形かもしれないが、人工を加えた石塁、ないしはそれを含む可能性も想定できよう。第72図の⑥に表示されるように、少なくとも咸徳浦（咸徳里）は現存する環海長城の遺構所在地である。そして前述のごとくその石塁は、現状でも特別な加工を加えていない石材を積み上げたものであり、高麗時代にも同様であった可能性が高い。特に三別抄当時においては短期間で急造したものであったことを考慮すると、傍目には人工構造物ではなく、岩石が堆積した自然物のようにみえた可能性もあるのではないかと。

なお、北西沖の飛揚島から上陸した部隊がただちに攻撃した「賊の拠点」については、北西部の海岸防御施設のようにもみえるが、攻撃をうけた三別抄が子城（内城）に撤収し、ついで「官軍」が「外城」を乗り越えて攻撃を続けたことからみて、上陸時の状況については触れず、缸波頭里城での戦闘を記しているとみるべきであろう。

5. 13世紀の高麗・日本関係

江華島と濟州島の海岸防御壁は、いまだ考古学的に確かな遺構が検出されておらず、現時点で具体的構造に関して元寇防塁と比較することは不可能である。複数の先例に由来する要素が融合して新たな造形物を形作ることも想定すべきであり、元寇防塁のルーツを1つに絞るような議論自体、生産的ではない。海のむこうから押し寄せる脅威に対して海岸防御壁で対抗するという発想もまた、具体的な前例を参照せずとも普遍的に考えつきそうなものではある。とはいえ、かかる構造物が日本列島内に先例を見いだしがたい一方、直近ないしほぼ同時代の朝鮮半島に存在したこともまた事実である。少なくとも、そうした事実が高麗から日本に伝えられた可能性は、朝鮮半島への窓口である九州北岸という元寇防塁の立地からみて、現時点では留意する必要がある。

仮にそのようなことが実際にあったとした場合、伝播の契機はどのように想定できるだろうか。金普漢（2017：172～173頁）は、情報伝達者として1271年に来日した三別抄の使者を想定している。珍島の龍藏山城が同年5月に陥落する直前に発せられたと考えられるこの使者は、同年7月頃、日本に書状を伝達した³⁵⁾。その趣意は日本に対モンゴル共闘を呼びかけるものだったとみられるが、日本側は状況をよく理解できず、疑問点を箇条書きに整理した文書「高麗牒状不審条々」（東京大学史料編纂所蔵）を作成した（石井 2017b）。おりしもモンゴルの使節趙良弼が高麗経由で日本を訪れ、モンゴルの招諭に応じることを求めるが、このとき三別抄の使者は、南宋からきた密使とも連携してその妨害をはかったとみられる（太田 1995：378～382頁、山本 2001：31頁）³⁶⁾。

一方、尹龍嫻（2009：187～188頁、2014：295～296頁）は、三別抄の一部の人々が朝鮮半島での拠点陥落時に日本に脱出して情報を伝えた可能性、および1274年の第1次日本侵攻に際して日本側に捕らえられた高麗人捕虜を通じて情報が伝わった可能性も考慮している。

この金、尹の見解は、積極的な支持材料こそ欠くものの、逆にこれを否定する確実な反証があるわけでもなく、それぞれ一応の可能性を留保しておくことができるとおもわれる³⁷⁾。しかし可能性の有無という次元で論じるならば、何も元寇防塁建設直前の出来事にこだわる必要はなく、さらにさかのぼって想定することも可能である。

10世紀前半の高麗建国直後にはじまる日麗関係³⁸⁾においては、12世紀まで、日本側では対馬・九州北部地域を中心とする在地有力者（在庁官人層やその関係者）、および国際貿易港博多に出入り、ないし居留する華人海商らによって貿易がおこなわれてきた。10世紀の段階では史料文献のなかに痕跡が仄見える程度だが、11世紀後半には記録上の件数が最盛期を迎える。中央政府間に正式な国交は成立しなかったが、相互に漂流民の送還がおこなわれ、必要が生じた際には官衙レベルで公文書もやりとりされた。貿易では主に日本側から高麗に赴き、その際には物品進献の形式がさかんにとられた。公文書の送達ももっぱらこうした商船を介しておこなわれたようだ。高麗側は日本からくる船を基本的に南東岸の金海（金州。現 慶尚南道金海市）に迎え入れ、そこに客館も設置していた。

12世紀以降は記録に現れる交渉件数が減少し、貿易の構造や担い手の変化に関する評価が争点となるが、ともかくも一定の交流は維持されていた。そうしたなか、13世紀に入ると、朝鮮半島南岸においてはじめて倭寇（初期倭寇）の海賊事件が発生する。高麗政府はその禁圧を要請すべくモンゴルの侵攻開始前夜の1227年に日本に遣使して大宰府と交渉するのだが³⁹⁾、すでに鎌倉時代に入っていた日本側でこれに対応したのが、鎌倉将軍の御家人として大宰府を実質的に取り仕切っていた大宰少貳の武藤氏である。このとき武藤氏は高麗側の要請をうけて賊を捕縛してこれを斬首し、かつ通商を申し入れるという積極的な対応をみせた⁴⁰⁾。為政者レベルでは高麗に対して消極的姿勢に終始していたそれまでの動きとの違いが注目される。

モンゴルとの戦争が続いていた1243年には、武藤氏との関係は不明ながら、日本から「遣使」があり、方物の「献」上に加え、高麗人漂流者の送還がおこなわれた⁴¹⁾。

高麗がモンゴルに帰順した直後の1263年には再び倭寇事件が発生し、その禁圧交渉が日本との間でおこなわれた。すなわち同年2月、朝鮮半島南岸の熊神県（現 慶尚南道昌原市鎮海区）の勿島を倭寇が襲い、税貢運搬船を略奪する⁴²⁾。これをうけて4月には大官署丞洪訥と詹事府録事郭王府が日本に赴き、「両国和親之義」を名分に倭寇の禁圧を要請した⁴³⁾。使者は8月に帰還し、海賊の正体が対馬島民であり、略奪の代償として米20石、馬麦30石、牛皮70領を徴発してきたことを報告した⁴⁴⁾。

この1263年には日本船の高麗漂着事件も複数発生した。6月には入宋求法をめざす日本官船大使如真ら僧俗230名が開也召島（現 開也島）に漂着、さらに265名が群山島（現 古群山群島）と楸子島に

漂着した。また「大宰府少卿殿白商船」の78名が宋からの帰国途中に漂流して乗船を失い、当時は宣州（現 平安北道宣川郡・東林郡）に属した加次島に小船でたどり着いた。これらについて高麗は全羅道按察使を通じて食糧と船を用意し、日本まで送還した⁴⁵⁾。

ここにみえる大宰府の「少卿殿」とは何か。少卿は高麗において卿を長官とする中級官衙の次官である。すなわち制度上大宰府の次官級（実質的には現場の最高責任者）である大宰少貳の武藤氏にはかならない。武藤氏が宋に派遣した貿易船の乗員が高麗によって救出され、送還されたのである（「大宰府少卿殿白商船」の「白」は何らかの誤字または衍字か）。

さらに翌7月には日本の商船が、当時は亀州（現 平安北道亀城市）に属した艾島に漂着し、その乗員30名もまた保護され、食糧の支給をうけたうえで送還された⁴⁶⁾。

このように、この時点まで高麗は、対モンゴル関係の展開とは別に日本との交渉を積み重ねてきた。しかしこの状況は、1266年にクビライが日本招諭の意志を表明したことで一変する。筆者（2011：19～22頁、2013b：462～464頁）の研究にもとづき、その経緯を、やりとりされた外交文書の特徴とともにみていこう。皇帝の意をうけ、さっそくモンゴルの使者黒的が高麗を訪れ、高麗政府は日本への嚮導を命じられた。しかし当時の高麗政府は、反モンゴルの気分がなお残っていたことに加え、日本とモンゴルとの間に摩擦・衝突が生じ、そこに自国が巻き込まれるのを恐れたのであろう、使者を窓口港の金海ではなく、その西南方の巨濟島に誘導し、金海にあった客館を破壊して対日関係の隠蔽を画策した。そして使者やモンゴル朝廷に対しては、自国が日本とは交流がないこと、海道が陰阻であること、日本にたどりついても安全が保証されないことを告げ、日本渡航を断念するように説得した。

その結果、使者はいったん撤収したが、クビライもあらかじめ高麗の対日関係について情報を得たうえで指示している。その際、高麗側の弁明を予測して、上記のような高麗の言い逃れを認めないと、あらかじめ釘を刺していた。しかし高麗がその内容をオウム返しに回答したのであるから、当然クビライは激怒し、今度は高麗自身で使者を仕立て、日本にモンゴルの国書を伝達するように命じた。こうして1267年には潘阜を正使とする高麗の使者が日本にむかい、翌年初めには九州に到着していた。

以上の経緯をへて日本にクビライの国書がもたされたが、その同時代の写しが東大寺図書館所蔵の『調伏異朝怨敵抄』に収められている。同書にはさらに、同時に送付された高麗国王元宗の国書、および高麗使潘阜らが日本到着後に大宰府の責任者（武藤氏）に対して提出した書状の写しも収められており、それらを通じて、日本に対する高麗の興味深い姿勢をうかがうことができる。

まず元宗の国書を見ると、丁寧の意を示す書状形式である啓が用いられている。高麗王が日本に対して親書を出したことが異例なのだが、しかも日本を上になたてた形式が用いられたのである。高麗の対外関係全体を見渡しても、国王名義による啓の確実な使用例は、対モンゴル戦争という危機的状況のなかでモンゴルの軍指揮官や宮廷書記官に対して用いた事例がみられる程度である（森平2013b：第5章）。さらにそこでは、モンゴル皇帝に関わる「皇帝」などの語に対し、表敬形式として闕字（前に空格をおく）を施したが、「貴国」など日本を指す語の前にも同じ措置をとっている。すなわち宗主国と日本を同格に扱ったことになる。クビライの国書では、モンゴル帝室に関わる語は通常行頭より高い位置に置く抬頭を施し、これは日本よりも自国を上にしたことを意味する。モンゴルの立場では当然であろう⁴⁷⁾。さらに元宗の国書の内容を見ると、この遣使がモンゴルから厳しい詰責をうけてやむを得ずおこなったことであると述べつつ、日本が返信すればモンゴルは必ず厚遇するはずであるから、まずは「一介之使」（ちょっとした使者）を送って真偽を確かめてみてはどうかと提案している。これもまた、至高の存在であるはずの宗主国皇帝の「みことば」に従えと勧告する服属国の立場とはおもえない物言いである。

次に潘阜たち高麗使の書状をみると、日本に対して善処を求める内容だが、ここでもまたモンゴルの強要を拒みきれず、やむを得ず派遣されたむねを説明したのみならず、さらにふみこんで、モンゴルの遣使要求に対して高麗側が遅延工作をおこない、金海の客館を破壊するという隠蔽工作をおこなったことまでを暴露した。そして書状の表敬形式においては、日本を指す語には平出（改行して行の冒頭に配置する）を施す一方、モンゴルを指す語には前述の闕字を施したが、平出のほうが闕字よりも敬意の程度は高い。もはや敬意の優先度が日本とモンゴルとで逆転しているのである。

こうした異例の、そしてモンゴルに露見した場合高麗にとって致命的にもなりかねない日本への「好意」表明は、もちろん高麗が日本に対して本心からの好意を抱いていたからではあるまい。日本がモンゴルと衝突し、そこに高麗が巻き込まれる事態を回避するための綱渡りだったのであろう。しかしこの「好意」は日本側にもしかるべく伝わっていた可能性が高い。

日本側の好反応を得られずに潘阜らが引き揚げた翌年の1269年、再び高麗経由でモンゴルと高麗の使者が日本にむかったが、彼らは経由地の対馬で島民と衝突をおこし、一部の島民を拉致して帰還した。この対馬島民はクビライのもとに連行された後、対馬に送還されたが、その際にモンゴルの中書省と高麗の慶尚道按察使がそれぞれ牒（公文の一形式）を送付し、日本に通好を勧告した（近年張東翼（2016）により『異国出契』に収めるそれらの録文が紹介された）。

これに対して日本側では返牒を起草したが、『本朝文集』巻67に収められたそれらの録文をみると、モンゴルの中書省に対する太政官名義の「贈蒙古国中書省牒」は、神国意識もあらわにモンゴルの不道を責める内容である。一方、高麗の慶尚道按察使に対する大宰府名義の「贈高麗国牒」では、長年の友好関係に言及し、対馬島民の拉致についても、島民側がトラブルの原因を作ったことに遺憾の意を示すという具合に、いたって友好的であった。結局、これらの返牒は起草されただけで発行されなかったが、モンゴルに対する姿勢と高麗に対する姿勢との落差は、前年の交渉において高麗側が「深意」を日本側に示唆したことを念頭におけば、理解しやすい。

開戦直前の1272年に日本船（おそらく貿易船）が金海に入港したのも、高麗をなお友好国とみなしていたからであろう。しかし当時すでにモンゴルのダルガチとモンゴル軍が高麗国内に駐留していたため、日本との関係がモンゴル側に露見することを恐れた慶尚道安撫使の曹子一は、これを秘匿して帰国させた。しかし結局は露見し、曹子一は罪を一身に背負って処刑されてしまう⁴⁸⁾。

以上のように、高麗と日本は、モンゴルの侵攻をうけて高麗が江華島に遷都して以降、第1次日本侵攻や三別抄の抗戦が始まる以前にも、初期倭寇や漂流者送還、モンゴルの日本招諭をめぐる、利害を一定に共有するなかで、交渉をもつ機会があった。こうしたなか、1243年の漂流高麗人送還、1263年の倭寇禁圧交渉、同年の漂流日本人（特に武藤氏関係者）送還、1267～68年の潘阜の日本訪問、1269年の対馬島民の送還などに際し、モンゴルに対する高麗の防衛戦の経験について情報の提供・収集がなされた可能性は、皆無ではないのではなかろうか。また具体例は1272年のケースなど一部の記録にしか現れないが、この間の通商を目的とした日本商船の高麗往来のなかで情報がキャッチされた可能性も想定できる。当然、三別抄が決起する以前には、濟州島の環海長城は存在しなかったから、その時点で参照され得るのは江華島の海岸防御壁に限られる。しかし三別抄の使者や、逃入してきたその残党（仮にそれが小規模であれ、あったとして）、第1次日本侵攻時の高麗人捕虜など、その後の接触機会を含めて、くりかえし情報が入り、知識がアップデートされていった可能性も想定することができるだろう。

6. おわりに

江華島の海岸防御壁は実戦で機能を示す機会をもたないまま役目を終える。濟州島の環海長城は、1273年、忻都と洪茶丘がひきいるモンゴル軍と金方慶が率いる高麗政府軍によって突破される。このときのモンゴル・高麗部隊はそのまま第1次日本遠征の主軸を担ったとみられるので、濟州島攻略戦は日本にむけた渡海・上陸作戦の予行演習という一面をもつ。そして両国の将官たち、および麾下部隊の生き残りのある部分は、さらに第2次日本遠征にも従事する。その前に元寇防塁が立ちはだかったわけだが、海岸防御壁に対する上陸作戦は、濟州島においてすでに経験済みだったことになる。

一言で海岸防御壁といっても、高麗と日本のそれには様々な相違があったとおもわれる。現場の地質・地形、具体的な構造（高さ、傾斜、素材、土石の積み方、壕などの付随施設）、兵員の配置方式、指揮系統・戦法、個人レベルの戦闘術、戦意などであるが、現状ではそうしたレベルでの厳密な比較は不可能である。また、そこでの戦闘はあくまで短期的な事件であるゆえ、瞬間的な偶然、指揮官・兵士の咄嗟の判断、意志・感情など様々な変数が結果に作用する。防御壁が突破されたか否かという結果だけを見て、築造技術の優劣評価に短絡させないように注意する必要もある。

結局、現時点で高麗の海岸防御壁と元寇防塁の間には厳然たるミッシング・リンクがあり、安易な形で結びつけることは慎まなくてはならない。しかしそこに興味深い共時性があり、そしてその時代の高麗と日本の間に情報連絡のパイプがあったことは確かであり、そのこと自体が、元寇防塁を考察するうえで国際的視点を持つことの重要性を示している。

註

- 1) 甲戌・辛巳の役という呼称は、高麗がこの戦争の当事国でありながら朝鮮史としての呼称が存在しない現状に鑑み、筆者が史料上の表現にもとづき考案したものである（森平2013b：27頁）。
- 2) ただし服部2014（469～471頁）では高位置からの対人効果についても言及している。
- 3) 参考までに、史実性に問題のある文献だが、「元寇」をめぐる八幡神の靈驗記『八幡愚童訓』（甲種本）では、防塁上から海上の敵船に対して直接矢戦を仕掛けたことになっている。
- 4) 本節および次節における高麗・モンゴル関係史の展開に関する叙述は、特に断らないかぎり、筆者のこれまでの研究成果による（森平2011・2013b・2017）。
- 5) 『高麗史』卷23・高宗世家・19年（1232）6月乙丑。
- 6) 『高麗史』卷23・高宗世家・19年6月丙寅。
- 7) 『高麗史』卷23・高宗世家・19年6月丙戌。
- 8) 『高麗史』卷23・高宗世家・37年（1250）8月庚申「築江都中城」、同卷82・兵志・城堡・高宗37年「始築江都中城、周回二千九百六十餘間、大小門凡十七」。
- 9) 「崔沆墓誌銘」（キム・ヨンソン金龍善編2012：387～389頁）「公当避狄遷都之後□患預防、於是創外闕以接蒙使、□中城以屏皇都」。
- 10) 『高麗史』卷24・高宗世家・46年（1259）6月癸未「始壞江都内城。客使督役甚急、諸領府兵、不堪其苦、泣曰、若知如此、不如不城」、同庚寅「客使聞外城不壞曰、外城猶在。可謂誠服乎。尽壞乃還。国家賂以重宝、即令都房壞外城。時都人以謂、内・外城尽壞、必有以也。争買船、船價湧貴」、『高麗史節要』（以下『節要』）卷17・高宗46年6月「……〔元帥余愁達・松吉大王等〕乃遣周者・陶高等来、壞城郭。遂壞江都内城。周者等督役甚急。諸領府兵不堪其苦、泣曰、若知如此、不如不城。城廊摧折、声如疾雷。街童巷婦皆為之悲泣。周者等曰、外城猶在。可謂誠服乎。尽壞乃還。即令都房壞外城。時人以謂、内・外城尽壞、必有以也。争買船、船價湧貴」。
- 11) 国立江華文化財研究所編2017にこの間の調査成果の概要が集成されている。
- 12) 『高麗史』卷82・兵志・城堡・高宗20年（1233）「築江華外城」。
- 13) 『節要』卷16・高宗24年（1237）8月戊子「築江華外城」。

- 14) 原文「始築江都中城、周回二千九百六十餘間、大小門凡十七」。
- 15) 『節要』卷17・高宗40年(1253)4月「原州民被擄入蒙古者還言、阿母侃・洪福源詣帝所言、高麗築重城、無出陸婦款意……」。
- 16) 『高麗史』卷23・高宗世家・22年(1235)閏7月壬午「命前後左右軍陣主・知兵馬事、沿江防戍」。
- 17) このほかにも中軍があった。平時の高麗伝統の中央軍は二軍六衛と呼ばれる体制で、鷹揚軍、龍虎軍、神虎衛、興威衛、金吾衛、千牛衛、監門衛からなる(『高麗史』卷81・兵志・兵制)。
- 18) 徐兢『宣和奉使高麗図経』卷38・海道・急水門。徐兢は1123年に高麗を訪れた北宋使節団の一員であり、現場を直接目睹している。急水門は江華水道のなかでもとりわけ難所だった孫石頂を指すが、このことについては森平2013a:205~207頁参照。
- 19) 『高麗史』卷56・地理志・楊広道・江華県。
- 20) 『節要』卷17・高宗40年(1253)9月「蒙兵十餘騎、剽掠甲申江外」、『高麗史』卷24・高宗世家・42年(1255)正月辛丑「蒙兵二十餘騎、到甲申江外」、『節要』卷17・高宗43年(1256)8月「車羅大・永寧公・洪福源等到甲申江外、大張旗幟、牧馬于田、登通津山、望江都、退屯守安県」、『高麗史』卷24・高宗世家・45年(1257)9月壬子「蒙兵三百餘騎、來屯甲申江外」、『節要』卷17・高宗45年9月「蒙兵自窄梁來、屯甲申江外、籠絡山野」。
- 21) 原文「崔怡与宰相議、徽州郡一品軍、加築江華沿江堤岸」。
- 22) 『新增東国輿地勝覽』に記された済州島3邑の隣邑までの里程を合計すると317里になる。しかしこれはそれぞれの治所から邑境までの路程であり、海岸線に沿った外周ははるかに長く見積もられる。なおこの里程自体、朝鮮後期の地誌ではより長距離に修正されている。
- 23) 『高麗史』卷79・食貨志・農桑・高宗43年(1256)2月「制、諸道被兵凋殘、租賦耗少、其令州県其人、耕閑地、取租補經費。又令文武三品以下權務以上、出丁夫有差、防築梯浦・瓦浦、為左屯田、狸浦・草浦、為右屯田」。
- 24) 三堅院は朝鮮時代の三岐院に相当すると推定される(安鼎福『東史綱目』卷11下・庚午元宗11年)。『新增東国輿地勝覽』卷37・全羅道・海南県・驛院・三岐院に県の西方60里(約24km)に所在するとあり、陸地測量部5万分1地形図「右水営」(1918年)において龍蔵山城の対岸に表示される三巨里・三湖院一帯(現全羅南道海南郡黄山面玉洞里)に相当する。
- 25) 原文「方慶与阿海、屯三堅院、对珍島而陣。賊於所掠船艦、皆画怪獸、蔽江照水、動輒如飛、勢不能当。每戰、賊軍先鼓譟突進、互勝負、曠日相持。会潘南人洪贊・洪機、讒于阿海曰、方慶・孔愉等、陰与賊相通。阿海執而囚之、移牒達魯花赤。達魯花赤令方慶還、与贊等对辨、以參知政事蔡楨代之。……達魯花赤言于王曰、贊等所言誣妄、宜繫牢獄、积方慶。王即請達魯花赤、復令方慶討賊、授上將軍、慰諭遣之。方慶至珍島、賊皆乘船、盛張旗幟、鉦鼓沸海。又於城上、鼓譟大呼、以助声勢。阿海恟下船、欲退屯羅州」。
- 26) 原文「沿海環築、周三百餘里。高麗元宗時、三別抄叛拋珍島。王遣侍郎高汝霖等于耽羅、領兵一千以備之。因築長城」。
- 27) 原文「將軍楊東茂・高汝霖等以舟師討珍島。賊入長興府、殺官軍二十餘人、擒都領尹萬藏、剽掠財穀」。
- 28) 原文「賊陷濟州。初按察使權咀、遣靈巖副使金須、以兵二百守濟州、又遣將軍高汝霖、以兵七十繼之。及賊攻濟州、須・汝霖等力戰死之」。『高麗史』卷103・金成德伝附陳子中和伝にも「按察使權咀、遣靈巖副使金須、以兵二百守濟州。又使將軍高汝霖、率兵七十繼之」とある。
- 29) 金普漢は江都の城郭プランを尹龍麟(2011)の所説と同様に想定している。
- 30) 原文「金守碑与別將于綻俱剃髮、在也東達屯所、訴曰、高麗有急、必遷濟州。今云復都舊京、非也。也東達信之、及太子東還至也東達屯、也東達欲令守碑与太子辯。太子曰、公何信叛人之言。吾寧祝髮被拘於此。豈可与叛人辯哉。也東達拘留樞密院使金寶鼎等百人……」。
- 31) 崔濬『拙藁千百』卷1・金文正公墓誌「父、監察御史諱須、累贈門下侍中。侍中嘗於忠憲王乙卯歲、登進士第。質貌偉麗、胆略過人。從事中外、以廉能称。至元己巳、自御史出知靈光郡。明年、三別抄叛、掠江都人物、舟而南下。志在先拋耽羅。本国遣將軍高汝霖追討、又牒下全羅道、選正官雅為人所信服者、領軍偕進。侍中当其選、不宿家、遂行抄軍、亟會汝霖于耽羅、則賊猶保珍島未至。於是、晝夜築保設械、謀斷來道使無得入。而守土者首鼠不為力、賊由他道至不覺。侍中素以大義勵士卒、人多感激、有百其勇、奮呼爭登、殺賊先鋒殆盡。然而土人資敵、衆寡不侔、竟与高將軍歿陣不還。人冤之至今。公年十歲而孤」。
- 32) 原文「賊既入耽羅、築内外城。時出剽窃、横行州郡、殺守宰、濱海蕭然」。
- 33) 原文「在州西四十二里。即三別抄所築以禦官軍處。今半頽落」

- 34) 原文「十四年、以方慶為行營中軍兵馬元帥、遣之。方慶更鍊卒并水軍萬餘人、与忻都・茶丘、屯潘南県。将発、諸道戰船、皆為風簸蕩、独以全羅道一百六十艘、次楸子島候風。夜半風急、不知所指、黎明已近耽羅、風濤洶湧、進退失拋。方慶仰天太息曰、社稷安危、在此一举。今日之事、不在我乎。俄而風浪止。中軍入自咸德浦。賊伏兵岩石間、踴躍大呼以拒之。方慶厲声趣諸船並進。隊正高世和、挺身突入賊陣、士卒乘勢争赴。將軍羅裕、將銳兵繼至、殺獲甚衆。左軍戰艦三十艘、自飛揚島直擣賊壘。賊風靡、走入子城。官軍踰外城入。火矢四発、烟焰漲天、賊衆大乱。有自賊中来投者曰、賊已勢窮謀遁、可急擊之。既而賊酋金通精、率其徒七十餘人、遁入山中、賊將李順恭・曹時適等、肉袒降。方慶麾諸將、入子城、士女号哭。方慶曰、只誅巨魁耳。汝等勿懼。執其魁金允叙等六人、斬于通街。擒親党三十五人、分載降衆一千三百餘人而還。其居民、悉按堵如故」。
- 35) 三別抄の日本遣使のタイミングについて、本稿では村井章介(1988:186頁注71)、石井正敏(2017b:267頁注22、2017c:274~278頁)の通説的見解が妥当と考えるが、李領^{イ・ヨン}(1999:100~102頁)と尹龍嚇(2009:176頁)に、より早く1271年初に見積もる見解もある。
- 36) なお村井章介(村井・荒野2021:170~173頁)は、「高麗牒状不審条々」に関わる三別抄の使者は珍島から派遣され、趙良弼を妨害した三別抄の関係者は、珍島陥落後に済州島から別途に派遣されたものであると推定する。
- 37) ただし村井章介(2009:193頁)は、三別抄残党の日本逃入という尹龍嚇の見方について、まとまった集団の入国があれば何らかの記録が残るはずであると否定的な立場を示している。
- 38) 以下に概述する12世紀までの日麗関係史の展開とその研究史は、おもに森平2010による。あわせて石井2017aも参照。
- 39) 初期倭寇をめぐる1227年の日麗交渉の展開と関係史料については、近藤剛2019a・2019b参照。
- 40) 近年発見した古文書「嘉祿三年高麗国牒状写断簡及按文」により、日本側の対応に先立って高麗側から通商の呼びかけがあったことが判明した(近藤 2019a)。
- 41) 『高麗史』巻23・高宗世家・30年(1243)9月壬申「金州防禦官報、日本国献方物、又婦我漂風人」。
- 42) 『高麗史』巻25・元宗世家・4年(1263)2月癸酉「倭寇金州管内熊神県勿島、掠諸州県貢船」。
- 43) 『高麗史』巻25・元宗世家・4年4月甲寅「遣大官署丞洪汙・詹事府録事郭王府等、如日本国請禁賊。牒曰、自両国交通以来、歳常進奉一度、船不過二艘、設有他船枉憑他事、濫擾我沿海村里、嚴加徵禁、以為定約。越今年二月二十二日、貴国船一艘、無故来入我境内熊神県界勿島、略其島所泊我国貢船所載多般穀米并一百二十石・紬布并四十三匹将去。又入椽島、居民衣食資生之具、尽奪而去。於元定交通之意、甚大乖反。今遣洪汙等、齎牒以送、詳公牒、并聽口陳、窮推上項奪攘人等、尽皆徵沮、以固両国和親之義」。
- 44) 『高麗史』巻25・元宗世家・4年8月戊申「洪汙・郭王府等自日本還、奏曰、窮推海賊、乃对馬島倭也。徵米二十石・馬麦三十石・牛皮七十領而來」。
- 45) 『高麗史』巻25・元宗世家・4年6月是月「日本官船大使如真等、将入宋求法漂風、僧俗并二百三十人、泊開也召島、二百六十五人、到群山・楸子二島。大宰府少卿殿白商船七十八人、自宋将還本国、漂風失船、以小船泊宣州加次島。命全羅道按察使、給糧船、護送其国」。
- 46) 『高麗史』巻25・元宗世家・4年7月乙巳「日本商船三十人漂風、到龜州艾島。命賜糧護送」。
- 47) ただしこのクビライ国書では、上意下達の形を避けた「奉書」の書式をとるなど、日本側に配慮した要素もうかがわれる(cf. 船田 2009:5~8頁、植松 2017:82~85頁、同 2021:16頁など)。
- 48) 『節要』巻19・元宗13年(1272)7月「倭船到金州。慶尚道安撫使曹子一、恐交通事覚、獲譴于元、密令還国。洪茶丘聞之、嚴鞫子一、鍛鍊其辭、聞于帝、遂殺之」、『高麗史』巻130・洪福源伝附 茶丘伝「明年、倭船泊金州、慶尚道安撫使曹子一、恐元責交通、密令還去。茶丘聞之、嚴鞫子一鍛鍊、以奏曰、高麗与倭相通。王遣張暉、請釈子一囚。一日、茶丘遽還元。人莫知其故。王慰諭之」。

引用文献

【日本語文献】

池内 宏 1931『元寇の新研究』東洋文庫

石井正敏 2017a「高麗との交流」『石井正敏著作集3 高麗・宋元と日本』勉誠出版、84~114頁

石井正敏 2017b「文永八年來日の高麗使について—三別抄の日本通交史料の紹介—」『石井正敏著作集3 高麗・宋元と日本』勉誠出版、252~267頁

- 石井正敏 2017c「文永八年の三別抄牒状について」『石井正敏著作集3 高麗・宋元と日本』勉誠出版、268～307頁
- 井上蘭子 2008「博多の元寇防塁」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎（編）『中世都市・博多を掘る』海鳥社、48～51頁
- 岩永省三 2020「箱崎キャンパス内外の元寇防塁推定線再論」齋藤瑞穂（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化調査室、164～174頁
- 植松 正 2017「『経世大典』にみる元朝の対日本外交論」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要（史学篇）』第16号、京都女子大学大学院文学研究科、73～118頁
- 植松 正 2021「モンゴル・元の対日遣使と日本の対元遣使」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要（史学篇）』第20号、京都女子大学大学院文学研究科、1～60頁
- 太田彌一郎 1995「石刻史料「賛皇復鼎記」にみえる南宋密使瓊林について—元使趙良弼との邂逅—」『東北大学東洋史論集』第6輯、東北大学東洋史論集編集委員会、373～386頁
- 川添昭二 1977『蒙古襲来研究史論』雄山閣
- 木本元治（編）1994『国指定史跡阿津賀志山防塁保存管理計画報告書』国見町教育委員会
- 九州歴史資料館（編）2009『水城跡』上・下、九州歴史資料館
- 九州歴史資料館（編）2014『特別史跡 水城跡』九州歴史資料館
- 近藤成一（編）2003『日本の時代史9 モンゴルの襲来』吉川弘文館
- 近藤 剛 2019a「嘉禄三年来日の高麗使について—「嘉禄三年高麗国牒状写断簡及按文」の検討—」同著『日本高麗関係史』八木書店、303～329頁
- 近藤 剛 2019b「嘉禄・安貞期（高麗高宗代）の日本・高麗交渉と「進奉定約」」同著『日本高麗関係史』八木書店、331～370頁
- 齋藤瑞穂・三阪一徳・福永将大 2020「箱崎キャンパス内外の元寇防塁推定線再論」齋藤瑞穂（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化調査室、175～195頁
- 佐伯弘次 2003『日本の中世9 モンゴル襲来の衝撃』中央公論新社
- 張 東翼 2016「一二六九年大蒙古国中書省牒と日本側の対応」同著『モンゴル帝国期の北東アジア』汲古書院、15～51頁
- 旗田 巍 1965『元寇—蒙古帝国の内部事情—』中央公論社
- 服部英雄 2003「文永十一年・冬の嵐」同著『歴史を読み解くさまざまな史料と視角』青史出版、1～36頁
- 服部英雄 2014『蒙古襲来』山川出版社
- 服部英雄 2017『蒙古襲来と神風—中世の対外戦争の真実—』中央公論新社
- 船田善之 2009「日本宛外交文書からみた大モンゴル国の文書形式の展開—冒頭定型句の過渡期的表現を中心に—」『史淵』第146輯、九州大学大学院人文科学研究院、1～23頁
- 堀本一繁 2010「蒙古襲来と博多—元寇防塁の築造と異国警固体制—」高橋慎一郎編『史跡で読む日本の歴史6 鎌倉の世界』吉川弘文館、186～211頁
- 三阪一徳・谷直子（編）2019『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点—』九州大学埋蔵文化調査室
- 村井章介 1988「高麗三別抄の叛乱と蒙古襲来前夜の日本」同著『アジアのなかの中世日本』校倉書房、44～188頁
- 村井章介・荒野泰典（編）2021『新体系日本史5 対外交流史』山川出版社
- 森平雅彦 2010「10世紀～13世紀前半における日麗関係史の諸問題—日本語による研究成果を中心に—」『第2期日韓歴史共同研究報告書（第2分科会篇）』日韓歴史共同研究委員会、205～222頁
- 森平雅彦 2011『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』山川出版社
- 森平雅彦 2013a「文献と現地の照合による高麗・宋航路の復元—『高麗図経』海道の研究—」同編『中近世の朝鮮半島と海域交流』汲古書院、3～262頁
- 森平雅彦 2013b『モンゴル覇権下の高麗—帝国秩序と王国の対応—』名古屋大学出版会
- 森平雅彦 2013c「高麗・朝鮮時代における対日拠点の変遷—事元期の対日警戒体制を軸として—」『東洋文化研究所紀要』164、東京大学東洋文化研究所、1～50頁
- 森平雅彦 2017「高麗後期」李成市・宮嶋博史・糟谷憲一（編）『世界歴史大系 朝鮮史1』山川出版社、232～287頁

- 松尾洋平 2008 「古代遮断施設(防塁)についての一考察」『古文化談叢』第60集、九州古文化研究会、129~146頁
- 柳田純孝 1988 「元寇防塁と中世の海岸線」川添昭二(編)『よみがえる中世1 東アジアの国際都市 博多』平凡社、180~194頁
- 山内豊聡・巻内勝彦 1972 「元寇防塁構造の土木工学的考察」『九大工学集報』第45巻第3号、九州大学工学部、363~369頁
- 山本光朗 2001 「元使趙良弼について」『史流』第40号、北海道学芸大学史学会、1~48頁
- 吉井 宏 2005 「阿津賀志山防塁を考える」大三輪龍彦・関幸彦・福田豊彦編『義経とその時代』山川出版社、81~93頁
- 李 領 1999 「「元寇」と日本・高麗関係」同著『倭寇と日麗関係史』東京大学出版会、85~117頁
- 【朝鮮語文献】**
- 姜 彰彦 1991 「제주도의 환해장성 연구 [濟州島の環海長城研究]」『耽羅文化』第11号、濟州大学校耽羅文化研究所、107~146頁
- 高 昌錫 1985a 「元代の 濟州島 牧場 [元代の濟州島牧場]」『濟州史學』創刊号、濟州大学校人文大学史学科、5~16頁
- 高 昌錫 1985b 「元・明交替期の 濟州島—牧胡乱을 中心으로— [元・明交替期の濟州島—牧胡乱を中心に—]」『耽羅文化』第4号、濟州大学校耽羅文化研究所、1~24頁
- 국립강화문화재연구소 [国立江華文化財研究所] (編) 2017 『강화 고려도성 학술기반 조성 연구 2 강화 고려도성 고고자료집 [江華高麗都城學術基盤造成研究2 高麗都城考古資料集]』国立江華文化財研究所
- 김 보한 [金普漢] 2016 「제주도 ‘環海長城’ 과 규슈 ‘元寇防塁’ 의 역사적 고찰 [濟州島「環海長城」と九州「元寇防塁」の歴史的考察]」『韓日關係史研究』55、韓日關係史学会、39~59頁
- 김 보한 [金普漢] 2017 「몽골의 고려·일본 침공과 해안성곽의 성격에 대한 고찰 [몽골의高麗·日本侵攻と海岸城郭の性格に関する考察]」『韓日關係史研究』58、韓日關係史学会、151~177頁
- 金 龍善 (編) 2012 『第5版 高麗墓誌銘集成』翰林大学校出版部
- 金 日宇 2010 『高麗時代耽羅史研究』新書苑
- 김 창현 [金昌賢] 2004 「고려 개경과 강도의 도성 비교 고찰 [高麗開京と江都の都城比較考察]」『韓國史研究』127、韓國史研究会、143~176頁
- 무라이 쇼스케 [村井章介] 2009 「「三別抄와 麗日關係」에 대한 토론 [「三別抄と麗日關係」に対する討論]」한일문화교류기금·동북아역사재단 [韓日文化交流基金·東北亞歷史財團] 編 『몽골의 고려·일본 침공과 한일관계 [몽골의高麗·日本侵攻と韓日關係]』景仁文化社、190~193頁
- 신 안식 [申安湜] 2009 「강도시기 도성 성곽의 축조와 위상 [江都時期都城城郭の築造と位相]」『강화 고려궁지 학술조사 학술발표회 자료집 [江華高麗宮址學術調査學術發表會資料集]』江華文化院、82~103頁
- 尹 龍嫻 2009 「삼별초와 여일관계 [三別抄と麗日關係]」한일문화교류기금·동북아역사재단 [韓日文化交流基金·東北亞歷史財團] 編 『몽골의 고려·일본 침공과 한일관계 [몽골의高麗·日本侵攻と韓日關係]』景仁文化社、157~189頁
- 윤 용혁 [尹龍嫻] 2011 『여몽전쟁과 강화도성 연구 [麗蒙戰爭と江華都城研究]』慧眼
- 윤 용혁 [尹龍嫻] 2014 『삼별초—무인정권·몽골, 그리고 바다로의 역사— [三別抄—武人政權·몽골,そして海への歴史—]』慧眼
- 이 희인 [イ・フィイン] 2016 『고려 강화도성 [高麗江華都城]』慧眼
- 최성락 [チェ・ソンナク]·고용규 [코·욘규]·김병수 [김·비온스] (編) 2006 『진도 용장산성 [珍島龍藏山城]』木浦大学校博物館·珍島郡

モンゴル高原からみたモンゴル襲来

白石 典之

1. はじめに

西暦1274（文永11）年と1281（弘安4）年に、モンゴル帝国（1206～1388年）の第5代君主であったクビライ・カアン（位1260～1294年）の命を受けた軍隊が、九州北部一帯に侵攻する事件があった。わが国では江戸時代以来、この出来事を「元寇」とよんできたが、最近の歴史教科書などでは「モンゴル襲来」あるいは「蒙古襲来」と改められるようになってきた。

本稿では前者の「モンゴル襲来」を用いるが、それは「蒙古」という文字に、漢人のモンゴル人に対する侮蔑の意が込められているからである。そこで近年、モンゴルに軸足を置くわが国の研究者の多くは、できる限り「モンゴル」と言い換えや書き換えに努めている。たとえば、「内蒙古」と書くかわりに、「内モンゴル」を用いるようにしている。

さて、筆者に与えられた課題は、モンゴル襲来におけるモンゴル帝国側の戦術や装備の評価である。これは、モンゴル帝国という枠組みが、広範で中身も複雑であったことから、一筋縄ではいかない難問である。モンゴル帝国は後世の歴史家による通称で、正式名称は「大モンゴル・ウルス」といった。ウルスは「国」と訳されるが、本来の意味は「人々の集まり」で、それが示すように、モンゴル帝国を構成する民族は多様であった。

『元史』や『高麗史』などが伝えるモンゴル襲来時の兵士の構成も、モンゴル人、漢人、高麗人、女真人などで、竹崎季長の奮戦を伝える『蒙古襲来絵詞』には、黒人と思しき兵士の姿も描かれている。そのような状況を踏まえると、モンゴル軍といっても、戦術や装備にはさまざまな地域の特色がみられ、とくに多勢を占めた漢人や高麗人のスタイルが多分に採り入れられていたと想定できる。しかも、大陸を舞台とした騎馬戦とは異なり、日本への侵攻は軍船を仕立てた渡海作戦であった。従前のモンゴル式の戦術や軍備は、どちらかといえば、役に立たなかったと思われる。

だが、指揮命令系統にはモンゴル族の幕僚が深く関与していた。たとえば、弘安の役における江南軍の総司令官は、アラカン（阿剌罕）と、彼の死を受けて替わったアタハイ（阿塔海）という人物で、『元史』（巻129）によると、アラカンはジャライル氏、アタハイはスルドス氏という、いずれもモンゴルの有力氏族の出身であった。アラカンの先祖は、初代君主チンギス・カン（位1206～1227年）以来、モンゴル皇室に出仕してきた名門で、アタハイも若き日のチンギスと苦難を分かち合った功臣を祖父にもっていた。ほかにもイエスデル（也速魯兒）という人物は、中央アジアの遊牧民のカンクリ族の出身で、南宋戦で功をあげて万户長になった陸戦の雄であったが、江南軍の数百隻の軍船を率いて襲来し、味方が壊滅的な敗北を喫したなか、全軍が帰還できたことによってクビライから賜与を受けたという（『元史』巻133）。

モンゴル族や遊牧民出身者が中核を構成していたのならば、戦術や装備の根幹には、やはりモンゴル式の戦いに対する思想が、少なからず反映されていたと想定できる。なにしろ、世界の陸地の五分の一にもなる広大な版図を築いた強力な軍勢力である。先進技術を取り入れることで更新されても、根底にあったものが失われていたとは考えにくい。

そのような視座から、本稿ではモンゴル軍の兵制、戦術、武器などについて、文献史料と考古資料を使いながら、その概略を述べたい。モンゴル襲来をモンゴル族の立場からみる試みは、管見の限り

存在しないので、一定の意義はあるとみている。あわせて、日本では馴染みの薄いモンゴル高原の考古学を紹介する機会になればとも考えている。

2. モンゴル軍の特質

モンゴル帝国の中核を担ったモンゴル族は、遊牧民族として生まれながらに身に付けた巧みな乗馬技術を駆使した狡猾な戦術などに、強さの理由があったといわれている。1234年に、モンゴル高原にいた第2代君主オゴデイ・カアン（位1229～1241年）の宮殿を訪れた南宋の彭大雅は、『黒韃事略』のなかで、男は3歳になるとウマにまたがり、4～5歳になると弓矢で遊び、15歳になると一人前の兵士とみなされたと、当時のモンゴル社会のようすを伝えている。

モンゴル帝国の正規軍は、1206年の建国時に95,000人いたことがチンギスの一代記ともいわれる『元朝秘史』から、また、1227年のチンギスの死去の時点では129,000人がいたことが14世紀初頭に成ったペルシア語の史書『集史』からわかる（本田 1991）。意外に少ない人数と思われるかもしれないが、じっさいの戦闘では、征服先から連行された捕虜や奴隷たちが駆り出された。それらを含めれば、かなりの大軍になったといえる。

ひとくちにモンゴル軍といっても時期によって、その戦い方には多少の差がある。勃興期の13世紀初頭は騎馬軍団による野戦が主で、武器も弓矢、槍、刀という単純な構成であった。それが1211年に金朝攻略戦が始まると、従前の野線とは異なり、高い壁に囲まれた都市への攻城戦が中心となり、おのずと戦術と武器の革新が要求された。そのなかでモンゴル軍は、投石機や火薬の威力を目にすることになった。

1219年からの中央アジア遠征、それにつながるヨーロッパ侵攻では、武器・防具のほか、戦い方についても多くの新体験をした。重装の中央アジアや東欧の騎馬軍団が、モンゴル軽騎の神出鬼没の動きに翻弄されたようすが、史料に散見される。ここでもモンゴル軍は多くの攻城戦に勝利し、洋の東西における最先端の軍事技術を身に着けていった。

さらに、1268年からの本格的な南宋攻略では、要塞構築など近代戦に匹敵する用意周到さをみせつけ、巧みな持久戦など戦術面でも大きな進化を遂げた。最新投石機の導入や、水軍の活用など、これまでのモンゴル軍にみられなかった作戦を展開した。おそらく戦術と兵器の両面において、当時の世界最強の軍隊に成長していた。そのような軍隊が日本へ押し寄せたのであった。

それでは、当時のモンゴル軍の武器と防具は、どのようなものであったのか。さぞかし優れた武器を使っていたと思われるかもしれないが、とくべつに目新しく高性能の武器を備えているわけではなかった。1219年に、対金戦争中のモンゴル軍の陣中を訪れた南宋の趙珙が記した『蒙韃備録』には、指揮官の旗印、進軍を指示する太鼓、軽く巧みな木製鞍、張力が約70kgを超える強弓、柳を柄とした矢、薄くて軽い湾刀が特記されている。また、『黒韃事略』は、モンゴル軍のもっとも優れた武器は「弓矢と環刀」と断じている。しかし、そのふたつは、当時どこにでもある武器であり、金・南宋軍、中央アジアのホラズム軍、さらにヨーロッパ諸侯軍と差別化することは難しい。

モンゴル襲来に視点を絞ると、両軍の差異は、当時を伝える文字資料や絵画資料から、おおかた知ることができる。クビライの近くに官吏として使え、また文人としても名高い王恽は、日本戦に従軍した者からの伝聞により、日本兵の武器を「弓、刀、甲があるが、戈、矛はない。（中略）刀は長くて極めて切れ味が鋭い。（中略）弓は木製で、矢は長い、遠くには届かない」（『汎海小録』）と記している。たしかに日本軍の主要武器は太刀と弓矢であった。ただ、戈と矛といった長兵器が欠落して

いる点は、薙刀によって補われていた。文永・弘安の両戦役に従軍した竹崎季長の戦闘とその前後のようすを描いた『蒙古襲来絵詞』において、薙刀はあらゆる場面に登場する。一方、モンゴル軍は、短弓と弩弓からなる投射兵器と、槍と矛を中心とする長兵器を主要な武器としていたとみえる。

3. 基本的な武器

(1) 弓矢

モンゴル襲来時の日本側の装備と対比させながら、モンゴル軍の武器と防具の実態を明らかにしたいと考える。まずは両軍において主要な武器であった弓矢からみてみよう。

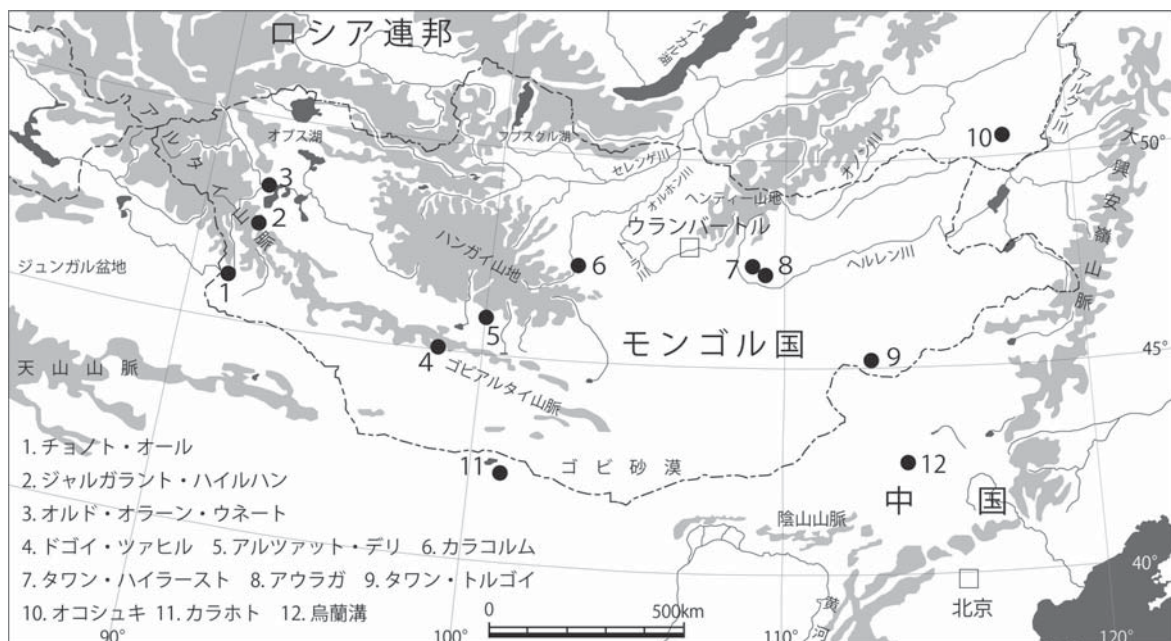
日本軍の弓は、いわゆる「和弓」で、竹材を主材とし、一部に木材を用いて膠などで貼り合わせたものであった。弦は麻を素材に絹糸で強度を増し、松脂と漆で固めたものを利用した。長さは約220cmであったと考えられ、「長弓」に分類される。一方、モンゴル軍の弓は「短弓」とよばれる。材質は骨と木材を貼り合わせた複合弓であった。

長弓と短弓にはそれぞれ長所と短所があり、射る際の安定性などは長弓の方が、扱いやすさでは短弓が優れていた。なお、矢について触れると、当時の日本側の史料には、モンゴルの矢は短い（『八幡愚童訓』）とあり、モンゴル側の史料には、日本の矢は長いが飛距離が短い（『汎海小録』）とある。

当時のモンゴルの弓は、全長130cm程度が一般的であった。同様の弓は、中央アジアから東ヨーロッパの遊牧民族の間で広く用いられていた。にもかかわらず、モンゴル人の使う弓は、とくに騎射の優れていたことから、「モンゴル弓」として、彼らから特別視されていたという（Erdene-Ochir 2014）。

じっさいの出土弓をみてみよう。モンゴル帝国期の遺跡からは副葬品を中心に多くの弓が出土しているが、残念ながらいずれも遺存状態が悪いので、比較的残りの良いモンゴル帝国期よりも若干古い資料をあげる。

モンゴル国西部のアルタイ山脈中にあるホブド県ボルガン郡チョノト・オール岩陰墓（11～13世



第73図 関連遺跡分布図

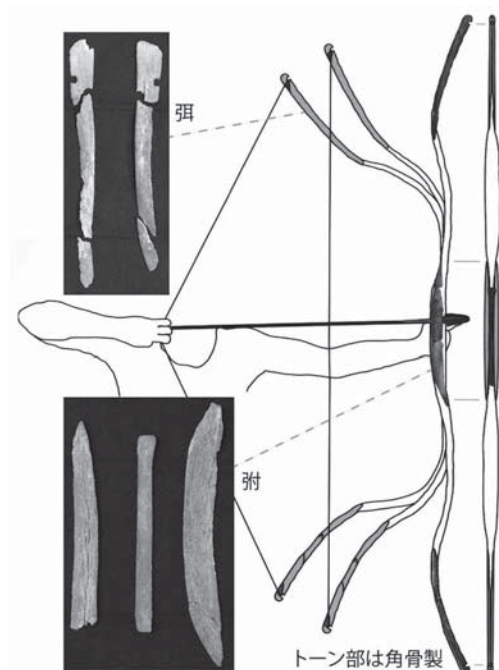
紀)からは柳製の弓が出土している(第73図)。全長133cmで、拵(握り)部分の幅が2.1cm、厚さは3.1cmであった。また、ホブド県マンハン郡ジャルガラント・ハイルハン岩陰墓(6~8世紀)の山桜製の弓は、全長134cm、厚さ4cmであり、ハンガイ山地南麓のバヤンホンゴル県ブンブグル郡アルツァット・デリ岩陰墓(9世紀末~12世紀半ば)の弓は、材質は不詳であるが、現存102cm、復元長125cm前後であった(Turbat et al. 2014)。さらにバヤンホンゴル県バヤンツァガン郡ドゴイ・ツァヒル岩陰墓(9世紀末~12世紀半ば)の弓は、全長は120cm、厚さ3cmで、白樺製で、拵の部分は牛角を板状に加工した板を貼り、全体的に動物の筋を巻き付け、膠状の粘着剤を塗って補強していた。弦は革を撚ったものを使っていた(Erdenebat et al. 2010)。

モンゴル軍が襲来の際に用いた弓が、愛媛県今治市大山祇神社に伝わる。戦いに参加した河野通有が奉納したとされる。この弓は「鯨鬚張半弓」という名が付けられ、長さ178cm、厚さ3.5cmと、モンゴル出土の弓と比べて40~50cm長いのが特徴である。木心の本体の末端には水牛角の弭をつけ、胴部には革を張り重ね、表外両面に鯨鬚を張合せ、その上に樺皮を巻き、さらに薄革を張り、弭部には紺麻布を巻いてあるという¹⁾。これは明らかにモンゴル高原の作りではない。

現在の競技で用いられる和弓の厚さは1.5cm前後で、その張力は15~18kgとされる。張力は厚みが増すごとに増大し、2cm前後になると30kgの張力が必要とされる。一概に比較はできないが、3cmを超える厚さをもつモンゴルの出土弓は、かなりの張力があつたと想定できる。『蒙韃備録』には、モンゴル軍の弓は張力が約70kg(1石)を超えるとある。当時、そのような弓が存在したことは想像に難くないが、すべてが同様であったかには、大いに疑問がある。

では、射程距離はどのくらいであったのか。ロシアのエルミタージュ美術館に収蔵されているイスンゲ紀功碑(チンギス・カン碑石とも。ロシア・後ザバイカル地方のオコシュキ遺跡出土)には、チンギスの甥のイスンゲが遠矢競争で「335アルダ」まで矢を飛ばしたとある。「アルダ」とは身体尺で、大人が両手を広げたときの両指先間の長さをいい、厳密なものではない。飛距離は500~600mといったところであろうか。そのころ遠矢はモンゴル男子の腕自慢のひとつであった。この距離は碑石を立てて称えるべき大記録であったとみられる。また、第2代君主オゴデイ・カアンの腕前も記録に残り、300mほどであったという(『黒韃事略』)。だが、とうぜんながら遠矢と実戦とは異なる。戦闘時における命中度の高さや甲冑を射貫く威力が保たれる距離を承知していなければなるまい。管見による洋の東西の実験例を参照すると、殺傷力を伴う距離は長くても100m程度とみられる。

おおむねモンゴル族が草原で用いていた弓は、本体を木材で、射手が握る部分の「拵」と、弓の両端の弦を掛ける「弭」の部分をも骨角材で作るのが一般的であった(第74図)。『黒韃事略』には、アルガリという野羊の角で作った「頑羊角弓」が出てくる。モンゴル高原のような竹のない地域ではアルガリ、ウシ、シカなどの角が主材料になった。筆者が調査しているチンギス・カンの本営跡とされるヘン



第74図 モンゴル弓の構造
(Erdene-Ochir 2014より筆者改変)

ティー県アウラガ遺跡からは、骨角細工の工房跡がみつき、加工途中のアルガリの角片が数多く出土している。

やや時代がくだるが、明代に書かれた漢文技術書『天工開物』によると、弓の作り方は、おおよそつぎのように書かれている。まず、竹と牛角を切削して短冊状にし、それらを貼り合わせて本体を作る。その両端に桑の木を削って作った弭をつなぎ、先端に弦を付ける刻みをいれる。角の部分が内側になるように弦を張り、背側には弾力を増すために牛筋を膠で貼り、弓全体を覆うように樺の樹皮を巻き固める。ただし、北方は竹の代わりに木を、牛角ではなく羊角を使ったという。また、弓弦は南方では蚕糸を使うが、北方では牛筋を繊維のようにほぐし、それを撚り合せて作ったという。

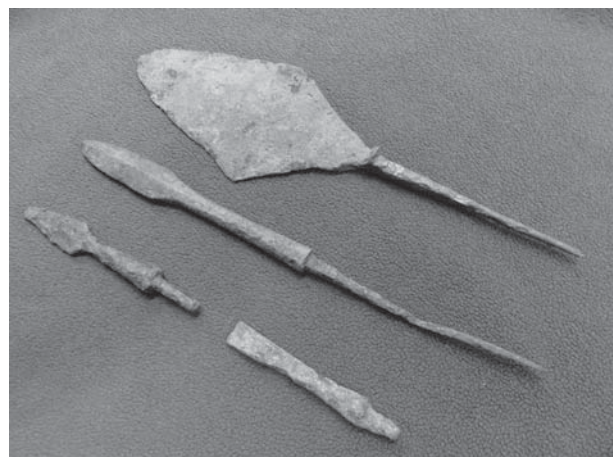
鷹島海底遺跡からは表面に黒漆を塗布した、常緑低木のツルサイカチ属の材を使用した弓の断片が検出されている（松尾編 2011；北野ほか 2011）。中国北部から北にはみられない木なので、この弓が南宋で作られたことはまちがいない。

鏃に目を移そう。モンゴル高原の鏃は、13世紀のごく初期まで骨鏃もあったが、しだいに鉄製に切り替わった。鏃の形は、『黒韃事略』に「響箭（音の出る骨製のソケット付き。いわゆる鏃矢）」、「駝骨箭（ラクダの骨製）」、「梅鏃箭（「迷針」とも書き、おそらく毒矢）」があげられているが、南宋人からみた珍しい鏃だけで、これらがすべてではない。じっさいには柳葉形、三角形、逆三角形、鑿形が多用された。一方で日本軍は、「V」字形の雁又形が多かった。

毒矢は日本で馴染みがなく、鎌倉武士に恐怖心を与えることになったであろう。ただ、律令時代に蝦夷が使用したとの記述がある。一方で東北アジアやシベリアでは毒矢が広く認められ、ふるくからトリカブトなどの植物毒が狩猟の際に使われた。モンゴル高原でも一般的で、かのチンギス・カンも戦闘中に毒矢を受けて生死の境をさまよったことが、『元朝秘史』に記されている。『天工開物』には、「草烏（トリカブト）」を使うとある。おそらくモンゴル軍の使った毒矢も、これと同様であったと考えられる。

マルコ・ポーロなる者の口述が基とされる『東方見聞録』には、モンゴル兵一人につき、遠矢用の細い小さな鏃が付いた矢を30本、接近戦用の幅広の大きな鏃の付いた矢が30本携行されるとある。たしかに、モンゴル高原の遺跡出土の鏃には、長くて幅広の大型品と、やや短く細身の小型品の二種類がある（第75図）。ロシアの後バイカル地方に、モンゴル皇族ジョチ・カサル家の墓所がある。オコシュキ遺跡といい、その4号墓からは、長さ13cm、幅3cmの大型鉄鏃と、長さ9cm、幅1cmの小型鉄鏃が、ひとつの矢筒に入ってみつかった（Bayar 2000）。その矢筒は、長さ79cm、幅17.5cmで、胴部は3枚の白樺樹皮を、すこしの部分が重なるように筒状に巻き、重なった部分は糸状のもので細かく縫い止めてあった。底板も白樺樹皮製であった（Bayar 2000）。

矢筒（箭箠・胡籛）は、モンゴル高原でも漢地でも白樺の樹皮で作られた。一部に補強のため白樺の材を使うこともある。外皮には漆を塗布したものや毛皮をはったものもある。矢筒は、老若男女を問わず、墓の副葬品とされている。少し大型の矢筒には弓も入れて



第75図 鉄鏃
（カラコルム遺跡出土、筆者撮影）

「弓囊」としても使われた。

ほとんどの矢筒は長さ70~80cm、径15cmほどで、当時の矢の長さがおおむね65~80cmであったことと一致していた。ちなみに日本の矢よりも平均で10cmほど短い。前述のように『八幡愚童訓』がモンゴル軍の矢は短い、と伝えていることと一致する。

長崎県鷹島海底遺跡から多数の矢がみつまっている（松尾編 2011）。矢の束でみつまっているが、おそらく矢筒に入ったまま沈没し、矢筒部分だけが朽ちたとみられる。このような矢の束は複数点が検出され、いずれも50~60本程度がまとまっていた。鏃には先端が平坦になる逆三角形や、菱形のものが認められ、細身であるので遠矢用の可能性が高い。矢の柄「筥」は木製で、長さは70cm、太さ8~9mmと、やはり日本の矢よりも短いタイプであった。ただ、大山祇神社に鯨鬚張半弓とともに奉納された木製筥の矢は、98cmもあり²⁾、モンゴル軍のものであったのならば、かなり長い部類に属する。その理由の考究が必要であると考えられる。

筥の材は、モンゴルの考古資料では白樺、柳、ヤマナラシを用いていたことがわかっている（Turbat et al. 2014）。対金戦争中のモンゴル軍は、ゴビ地域に生える沙柳を使っていたと『蒙韃備録』にある。

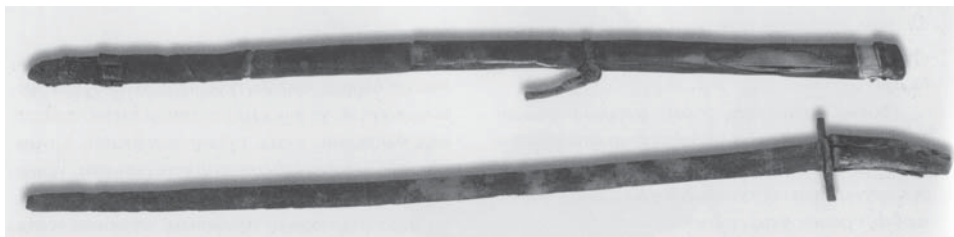
矢羽は、『黒韃事略』に鷲の羽で作るとある。ジャルガラント・ハイルハン岩陰墓の出土品は、イヌワシの羽で作られていた（Turbat et al. 2014）。

(2) 刀剣と槍

つぎに、刀についてみる。『黒韃事略』には「環刀」の名があがる。この名は『元朝秘史』にもみられる。これは腰に佩く太刀で、帯から下げる紐を結ぶ環が鞘についていた。彭大雅の感想として、「イスラム刀（「回回様」）を真似て軽く、切れ味が鋭く、柄が小さく細い。だから振りやすい」とある。イスラム刀は、日本刀に似た“反り”を帯びていた。1245~47年にかけてモンゴル帝国を旅して、第3代君主グク・カン（位1246~49年）の宮廷に至ったプラノ・カルピニ=ジョン修道士の『モンゴル人の歴史』にも、モンゴル兵は「先が尖った片刃のいくぶん反った刀」を持っていたとあるので、反りがモンゴル刀の特徴であったとわかる。

当時の刀の良好な実例は、残念ながら、皆無に等しい。副葬品など考古資料がないからである。博物館に伝世品が展示されているが、来歴が不明なので、真贋も含めて慎重に扱う必要がある。そのように副葬品にみられないのは何故であろうか。『モンゴル人の歴史』には、裕福な者が刀を佩びているとあり、身分の高い人物だけの持ち物、あるいは個人所有が制限されていたからとみられる。この点は後述する。

すこし時代がさかのぼるが、放射性炭素年代で9世紀末~12世紀半ばとされたバヤンホンゴル県のアルツァット・デリ岩陰墓からは、ほぼ完全な形の一振の刀が出土した（Erdene-Ochir 2014）。モンゴルでは各時代を通じてきわめて珍しい例である（第76図）。全長は90cm、刀身の長さ77cm、幅3cm



第76図 鉄刀（アルツァット・デリ遺跡出土、Turbat et al. 2014）

であった。切先だけ両刃であった。鏢は鉄製の棒状のもので、柄は鉄芯に革を巻いて作っている。鞘に何か付帯品のあった痕跡がみられるが、環であったかは明らかでない。鞘は2枚の木材を合わせ、そのうえから革を巻き付けて拵えたものである。刃側が張り出すように、ごくわずかに湾曲をもっているが、史料の記述のような際立った特徴になったとは思えない程度である。

鷹島海底遺跡からも数振の鉄刀がみつき、そのうち一点は全長95cm、刀身74cm、幅4cmで、こちらは緩やかに外反する湾曲刀であった（松尾編 2011）。そうだとすると、10～12世紀と13世紀の間に、モンゴルの刀が湾曲する契機があったということになる。今後、考究すべき課題といえる。

同じように不明なのが剣である。剣は当時の史料に散見でき、『元史』（巻79、80）からは剣を佩びた宮廷儀仗兵がいたことがわかる。しかし、考古資料には、一部の来歴不明の伝世品を除けば見出せなかった。

だが、その実例が2014年にようやく出土した。筆者が調査したヘンティール県デリゲルハーン郡タウン・ハイラスト第5地点5号墓からである。そこはチンギス・カン遺宮のアウラガ遺跡から西北25kmにあり、遺宮関係者の墓所と考えられている。13世紀末のもので、高齢の男性の左大腿部脇に安置されていた。鍛鉄製で刀身は60cm、中央部の幅は1.8cm、厚さ1cmであるが、先端部は幅2.5cm、厚さ1.3cmと、先の方がやや太く厚くなるのが特徴である。柳と思われる材を鞘とし、その上から革を巻いてあった。

さらに、『黒韃事略』には、長短の槍が出てくる。鉄製の槍先で、鑿のような形をしていて、物を突いたときに滑ることがなく、甲の重なった「札（細小の鉄片）」をつき通すことができるという。『蒙古襲来絵詞』をみると、ほぼ一兵士に一本といった具合に、槍（一部は矛か）が登場していることからみて、当時のモンゴル軍の重要な武器であったとわかる。手に携えて相手を突き刺すだけでなく、投げ槍としても使われたようすが描かれている。

ただ残念ながら、モンゴル高原の13～14世紀の考古資料において、槍は、来歴不明の収集品を除くと断片のみで、全体像は不明である。同様に、穂先の基部がソケット状になり、柄の先端にはめ込むタイプの、いわゆる矛もあるが、来歴不明の収集品のみで、出土例は存在しない。対照的に、同時代の中央アジアの墓からは、鉄製の刺突兵器が比較的数量多く出土する（Pletneva et al. 1981）。

刀、剣、槍、矛が墓の副葬品など遺跡から出土しないのは、おそらく、それらが公的な武器庫などで管理され、個人所有が許されていなかったからであろう。クビライの治世には、軍器を保管する庫があり、甲、槍、刀、弩、弓矢が納められ、それらの隠蔽は、死刑を含む罰則をもって厳しく禁じられていた（『元典章』巻35）。私物化されなかっただけで、戦闘に用いられなかったわけではなかった。一方で、弓矢や馬具は私有が認められていた。前述のように『元史』（巻133）によると、江南軍に参加して全軍船で帰還したイエスデルには、クビライから衣服と弓矢、鞍轡といった馬具が下賜されたという。多くの場合、武将への恩賞には、弓矢と馬具が用いられていた。

3. 防具

(1) 鎧甲と冑

モンゴル軍は果敢に攻めるだけでなく、防具も各種そろえていた。まず兵士を守る甲冑、すなわち体部に装着する鎧甲と、頭部に被る冑（兜）があげられる。当時を伝える絵画資料にも文献にも甲冑は登場する。かなりの数量が使用されたと考えられるが、現物資料としては、わずかししか確認されていない。そのほとんどが伝世品、あるいは来歴不詳の出土品である。伝世品には、鉄小札を縫い合わ

せたもの、革製、鎖帷子などがある。

管見ながら、モンゴル高原の当時の墓から、確実な調査で甲冑が出土した例を知らない。ただ、小札は、一片あるいは数片というかたちで、遺跡からしばしばみつかるといえる。小札は名刺あるいは葉書サイズの方形の鉄板で、周囲に小さな孔があいている。その孔に革紐を通して小札をいくつもつなげて縫い合わせることで鎧甲を形づくる。また、タワン・ハイラスト第5地点5号墓からは、胸部の中心に付けられていた「護心鏡」とよばれる径8.5cmの青銅製の円形プレートが出土している。一領全体を副葬せずに、一部だけ納めるといえるのは、シンボリックな意味があったとも考えられる。

鎧甲の作り方は、カルピニの記述によると、まず、鉄札を何枚もつくり、その各々に小さい孔をあけるといえる。そして、それらの小札を互いに一部が重なるように、革帯の上に並べる。孔に革紐を通して、左右の小札とともに革帯に結びつける。このようにすると何枚もの鉄小札が整然と並び留められた一本の帯ができる。さらに、そのような帯を何本も留め合わせて、鎧甲の各部分に仕立てるといえる。

内モンゴル赤峰市翁牛特旗からみつかったとされる鎧甲は、鉄ではなく銅製で、手のひらサイズの大きめの銅板を革紐で綴じたもので、表面には赤漆が塗られ、虎や蓮華の文様が描かれていた（吉田ほか 2008）。

『黒韃事略』は、鎧甲として「柳葉甲」と「羅圈甲」の二種をあげている。柳葉甲については詳細がわからない。ただ、『モンガル人の歴史』に、それを想起させる記述がある。長さは手のひらほど、幅は指くらいの薄い鉄札を使った鎧甲のことである。この鉄札ならば柳葉のように細くて薄いので、そこからとったネーミングかもしれない。年代は14～15世紀とやや下るが、モンゴル国の首都ウランバートルにある国立博物館には、鉄ではなく革で同様の小札をつくり、それらを綴じあげた皮甲が、伝世品として展示されている（Saruulbuyan et al. 2009）。一方、羅圈甲は皮革を六重にしたものだと注記があり、あきらかに皮甲であったことがわかる。カルピニが皮甲の作り方を伝えている。まず、ウシなどの革を手の幅くらいに細長く切り、同じものを3～4枚重ねて膠で貼り合わせるという。おそらく横長長方形の板状の革札にしたのであろう。つぎに、そのような革札を何枚も使い、一部が重なるように革紐でとじながら、甲の各部分の形を成していくという。

このような兵士の身拵えは、鎌倉武士とは大きく異なっていた。『八幡愚童訓』ではモンゴル軍を「鎧は軽い」と評している。それは『蒙古襲来絵詞』をみれば一目瞭然である。モンゴル軍の鎧甲は綿入れの丹前のようなものであるが、これで立派な戦闘服であった。それに対し、鎌倉武士のフル装備は、いわゆる大鎧で、『汎海小録』が伝えるように黄金装飾や玉飾りがみられる豪華なものであった。

福岡市博多区の元寇史料館に収蔵されている伝世品（吉岡 1994）をみると、表面は布製で龍や唐草の刺繍が施してあるが、裏は一辺7cmほどの四方の鉄板が隙間なく編まれている。全体の重量は12kgほどであるという。ほかに鎖帷子や革製の鎧甲もある。大鎧と比べて動きやすかったとみられる。また、革製鎧の残骸が鷹島海底遺跡から出土している。革片を胎として赤漆で塗り固めたものである（北野ほか 2011）。

つぎに冑（兜）をみる。冑の出土品は知られていない。伝世品と絵画資料からの復元である。鉄製が多いが、それ以外に鉄筋革張りのものもある。ヘルメット形で漏斗を逆さにしたようなやや円錐状を呈し、正面下部には庇が付く。冑頂に「纓」という綵が付くほか、首まわりを保護する「鍔」が発達している。鍔は布や革製で、必要に応じて鉄板が縫いつけられている。

元寇史料館には、つないだ鉄札部分を布で包んで裾に垂らした、鍔の残る冑が保管されている。重量は2kgほどである（吉岡 1994）。京都の北野天満宮で2020年にみつかった鉄冑も漏斗状の円錐形

を呈し、正面下部に庇が付くタイプで、高さ22cm、直径23cm、重さ約2kgであるという³⁾。

また、愛媛県今治市の大山祇神社にも、弘安の役に参加した河野通有が奉納したとされるモンゴル軍将兵の冑が伝わる。「黒漆塗革張冑鉢」とよばれ、高28.5cm 前後径23cm、左右径22cm、重さ1320gである。鉢体は表裏二重に革が張られ、その上から黒漆が塗布されている。鉢頂には鉄筒の付いた鉄製半球状の立物台がある。綵を付けた部分であると考えられる。正面下部には鉄庇が付き、唐花唐草の銀象嵌が施されている⁴⁾。

鷹島海底遺跡からも、破片を含めて同形とみなされる鉄冑が10点検出されている。その重量は2.0～3.5kgと報告されている（松尾編 2011）。かなりの海中での付着物がみられるので、それらを除けば、実重はもう少し軽くなると思われる。

以上、概観したところによるモンゴル軍の兵装は、甲冑あわせても15kg程度であった。一方、鎌倉時代の鎧は、春日大社などの伝世品を調べると、その重量は20～25kgほどであった。それに3kgほどの兜、太刀や弓などを加えて完全武装すると、ゆうに30kgを超えることになる。モンゴル軍の倍の重さで、かなりの重装備であったとわかる。

(2) 盾

つぎに『黒韃事略』が伝えている防具に盾がある。まず、革や柳材を編んで作った長方形の盾（「防牌」）があるという。高さ1.5m、幅1mほどで、これと思しきものが、『蒙古襲来絵詞』の亀原の戦いの場面に出てくる。ちょうど一人が隠れることのできる大きさになっている。

つぎに、円形の盾（「団牌」）もあると『黒韃事略』にある。これは片肘に掛けられる程度の大きさで、騎兵が使った。円形盾には植物を編んだもののほか鉄製もあった（「鉄団牌」）。敵陣内に切り込む時に、冑（兜）の代わりになるという。当時のようすを伝えるペルシャの細密画には、円形の楯をもったモンゴル騎兵が描かれている（Morgan 1989）。ほかにも「拐子木盾」というものがあった。攻城戦の時、敵の砲弾を避けるために用いたという。おそらく大型で、支柱によって固定していた。いずれの盾も現存しないので、わからないことが多い。

4. 馬具

(1) ウマとモンゴル族

モンゴル高原に暮らす人々のウマへの愛着は強く深い。遊牧をなりわいとするモンゴル人にとって、ウマは食料として乳、肉を、また生活材として毛や皮を供給するという役割を担っているが、もっとも重要なのは、乗り物として人間の移動を助けるということである。その機動力と牽引力が、平時と戦時の両面でおおいに役立った。

13世紀当時のモンゴル人が乗ったウマは、モンゴル在来馬とよばれるもので、現在よく目にするサラブレッドと比べると小ぶりであった。サラブレッドの体高（足底から肩までの高さ）が1.6～1.7mであるのに対し、13～14世紀の遺跡から出土したモンゴル在来馬は1.2～1.4mであった。なお、そのころ日本にいたウマも小ぶりの種であったので、両軍が使用したウマは体格に差はなかった。

モンゴル軍では、戦いには一人当たり、2～3頭、多ければ6～7頭のウマが伴われたという（『黒韃事略』）。ウマも生き物である。同じウマばかり酷使するのは、その生命を奪うだけでなく、騎乗者にとっても危険であった。長距離移動には平時でも替馬を伴う。また、一日の移動距離も、あまり長くなく、20km弱にとどめたと『黒韃事略』にある。

騎乗するためには、轡、鐙、鞍などの馬具が必要である。これらも武具の一種と位置づけることができる。馬具は開発、伝播、改良を繰り返し、現在までにほとんど同じものが世界各地で用いられている。だが、細部をみると、時代性や地域差を見出すことができる。

彭大雅は、モンゴルの馬具は軽くて便利で、鞍と轡をあわせた重さは4～5kg程度（『黒韃事略』）と驚いているので、南宋の馬具の重さは不明だが、それよりも重かったのは確かであろう。すると、この軽さにモンゴル騎兵の強さの秘密が隠されていると想定することもできよう。

(2) 轡

轡は、ウマの口に装着して、動きを制御するための用具である。当時の轡は、多くの場合、鍛鉄で作られた。モンゴル高原の当該期の墓からは、数多く出土し、それらから当時の轡のようすがうかがい知れる。

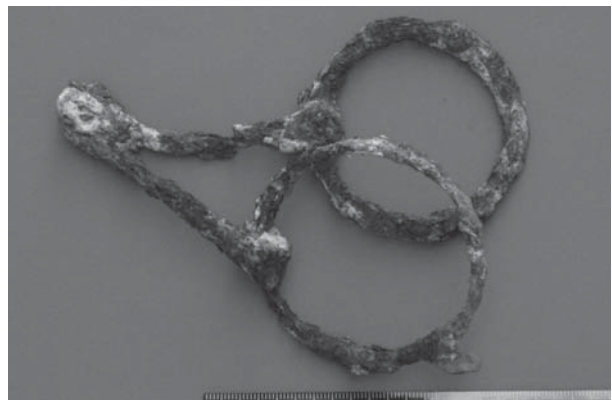
轡のうち、ウマの口の中に入る部分を「銜」という。両端に環をもつ二本の鉄棒を組みあわせていて、真ん中で組みあう環を「脚金」、それぞれ両端の環を「銜先環」という。また、銜が左右にずれるのを防ぐため、銜の左右両端に付けられた金具を「鏡板」といい、装着時にはウマの口角から頬の部分にあたる。鏡板には「立聞」という方孔があり、「面繫」という革ベルトを連結し、轡を馬面に固定する。さらに、銜先環に「手綱」という革ベルトを連結する。手綱は騎手の意思をウマに伝達する。手綱の連結には銜先環に直接結ぶ場合のほか、銜先環に付けた「遊環」に結ぶという形式もあった。

年代や地域差は、鏡板に反映される。その形をみれば、使われた時代や民族、さらには騎乗技術を、ある程度絞り込むことができる。モンゴル高原の10世紀までの鏡板は、棒状で直線あるいはS字形であった。棒状鏡板のほぼ中央には立聞がついて面繫を、銜先環には遊環がついて手綱を連結するというように、きわめて手の込んだ造りであった。それが11世紀以降になると、棒状鏡板が消失し、代わりに銜先環の遊環が径5～10cmほどに大型化した（白石 1996）。これを環状鏡板という。銜留めの役割をもつと同時に、手綱と面繫を連結する器官となった。

13世紀のモンゴル軍の轡は、鉄製の環状鏡板付きのタイプが主流であった。立聞は11世紀までにはほとんどなくなり、また、手綱と鏡板を結ぶ「引手」という金具は、もともと当地に存在しなかった（白石 1996）。このようなパーツの簡略化は、鉄の節約とともに、馬具自体の軽量化にもつながった。

当時の轡の、具体的な出土例をみておこう。スフバートル県タウン・トルゴイ5号墓は、多くの貴金属や宝石製の副葬品が出土したことで、きわめてハイランクの人物の墓と考えられ、放射性炭素年代では14世紀という値が得られている。まるごと一頭のウマが、フル装備の馬具を装着して副葬されていた。その轡を観察すると、立聞などの付加部分のない素環の環状鏡板タイプであった（Erdenebat et al. 2011）。素環タイプの轡は、タウン・ハイラースト遺跡第5地点5号墓など、多くのモンゴル高原の当該期の遺跡から出土している（第77図）。

一方の鎌倉時代の轡も鉄製だが、鏡板は鉄環でなく、杏あるいは銀杏の葉に似た形をしており、「杏葉轡」とよばれる。また、面繫と手綱は、鏡板に直接結ばないで、面繫は立



第77図 鉄轡
（タウン・ハイラースト5-5号墓出土、筆者撮影）

聞、手綱は鉄製棒状の引手を介して連結されるという違いがあった。モンゴル軍の轡に比べ、重量感がある。

(3) 鐙

つぎに鐙をみる。モンゴルにおける鉄製で定型化した鐙の出現は、おおむね5～6世紀といわれる (Eregzen et al. 2014、諫早ほか2018)。それ以前にも木製や革製といった有機質の鐙も存在したと想定されているが、くわしいことはわかっていない。

モンゴル帝国当時の鐙は「輪鐙」とよばれるタイプであった。輪鐙とは形状が環状を呈している鐙のことであるが、正円ではなく、じっさいにはやや下膨れである。下側は「踏込」という足を置く部分である。滑り止めはないが、平らで足裏を置きやすくなっている。『黒韃事略』にも、円形なので立ちやすく、革靴が入りやすいとある。上端には方孔があり、鞍からさがる「鐙革 (力革)」という革ベルトで連結される。

はじめのころのモンゴル高原の輪鐙には、上端には「吊手」という手鐙の柄状の突出部分があった。その先端に方孔が開き、鐙革を連結していた。だが、12世紀初めまでに、吊手は消失、あるいは短縮化した (白石 1996)。その結果、鉄の部分が少なく、軽くなった。轡と連動する機能性の向上の流れといえよう (第78図)。タウン・トルゴイ5号墓の鐙は、鉄製で高さ16.5cm、横幅13.5cmで、重さは一対で1040gであった (Erdenebat et al. 2011)。

鐙革の長さは調節できたようである。『モンガル人の歴史』には「極めて短いあぶみを用い」とあり、また、『黒韃事略』には「鐙革が短いので立ち乗りしたり身体を回したりするのに便利だ」とある。現在の遊牧民もまた、ベルトを短くして、鞍に尻をつけず、膝を伸ばしたまま立ち乗りする。その方が馬上での踏ん張りを助け、背面騎射、槍や刀剣の扱いを容易にしたとみられる。

鐙も鎌倉武士とモンゴル軍の間では大きく異なっていた。鎌倉時代には「舌長鐙」という、世界的にみて特異な形状の鐙が用いられた。足先を入れる部分の左右が開いたサンダル形をしている。足裏全体で踏みつけやすいので、日本式の騎射である前方 (進行) 方向へ矢を放すのに適していたという。『蒙古襲来絵詞』には、そのようすがよく描かれている。

一方、モンゴル遠征軍が使用したの鐙は、もちろん輪鐙であったが、その足をのせる踏板を上からみると円形に近い。モンゴル高原から出土したものは、一様に楕円形をしているので、明確な違いといってよい。踏板が広いということは、その分だけ重いということになる。元寇史料館収蔵の鐙は、片足で2kgもあった。これはモンゴル高原出土品の約4倍にあたる。また、遠征軍の鐙には、輪の部分に鬼文などの凝った装飾があり、明らかに一般の鐙とは違う。騎乗していたのが指揮官に限られていたのであろう。『蒙古襲来絵詞』におけるモンゴル軍の騎乗率は、概観すると2割程度であった。

(4) 鞍

カルピニが『モンガル人の歴史』で報告したように、モンゴル人が立ち乗りを得意にしていたとしても、やはり鞍は重要であった。長距離移動やゆっくりした歩みのときは、腰をおろして乗るからである。



第78図 鉄鐙

(タウン・ハイラースト5-5号墓出土、筆者撮影)

鞍の主体部分の「鞍橋」は木材で作られる。鞍橋の前後には羽根状の突起部分があり、ウマの頭側を「前輪」、尻側を「後輪」といい、人間は前輪と後輪の間のくぼみに座る。じっさいに人間が座るときには、布か革の「鞍褥」を、また、ウマの背に鞍を置く場合も、鞍橋と馬体の間に「鞵」という革製品を敷いた。

『黒韃事略』には、前輪は豎に高くなっているが、後輪は平らになっているので、身体をひねっても尻が痛くならないとある。おそらく、ウマの背に対し、前輪が垂直に立ち、後輪が後傾しているようすを記したのであろう。いわゆる後輪後傾タイプである。それに対するのが、前輪も後輪も垂直に立つタイプの鞍である。腰の位置が固定されるので、馬上の動きが制限される。長時間の騎乗はつらい。

後輪後傾タイプの鞍は、中国では南北朝時代には存在し、わが国でも正倉院御物に存在するように、けっして珍しいものではなかった。とうぜん宋代の鞍にもあったはずである。なぜ彭大雅が後輪後傾タイプに興味を惹かれたのか、不思議である。

長時間の騎乗が可能で、しかも動きやすいならば、後輪後傾タイプの鞍は、モンゴル騎馬軍団にとって必需品であったと思われる。モンゴル高原の鞍は、座布団のような軟式鞍から始まり、3世紀ごろには、後輪後傾タイプの鞍を使っていたことが、アルタイ山脈中のホブド県オールド・オラーン・ウネート岩陰墓からみつかった完形の木鞍から明らかになっている (Bayarsaikhan et al. 2017)。

さて、モンゴル帝国期の鞍は、出土品と伝世品をあわせても、けっして多くないが、管見のかぎりでは、すべて後輪後傾タイプである。また、居木の前後端が、それぞれ前輪と後輪よりも張り出す(居木先)という共通の特徴もある。オコシュキ4号墓出土の木製鞍橋もこのタイプであった (Bayar 2000)。前輪と後輪、それに乗り手が尻を置く「居木」はそれぞれ別に作られ、革紐で連結し組み立てられていた。居木の左右に鉄環が鉄鋌で留めてあった。その鉄環には鐙革を連結していたようである。

木製の鞍橋は、木肌のままのものと、皮革を貼ったものがある。きわめて珍しい例だが、モンゴル国スフバートル県のタウン・トルゴイ1号墓と5号墓や (Erdenebat 2011)、中国内モンゴル自治区シリングゴル盟鑲黄旗の烏蘭溝墓 (内蒙古博物館ほか 1994) などからは、金銀板の鞍飾りを施したものも出土している。もちろんこのような飾鞍は貴人の乗る飾り馬用で、戦闘には用いられなかった。

(5) 馬甲

さいごに馬甲について述べる。これはウマを敵の矢や槍の攻撃から守る、ウマの鎧甲である。『モンガル人の歴史』に馬甲のくわしい記述がある。ウシなどの獣革を何枚か貼り合わせた札をつくり、それを革紐で縫いとじていくというものであった。縫いあげた大きな4枚の革甲で、馬体の両側面、尻、胸を覆うとある。顔は額に鉄板を当てて保護したという。また、『元史』輿服志 (巻79) には馬甲について記載があり、青、赤、黄、白に塗



第79図 馬甲の一部とみられる鉄札
(伝アウラガ遺跡出土、筆者撮影)

り分けられた馬甲を装着した甲騎隊が組織されていたとわかる。ほかにも西方遠征を描いたペルシアなどの絵画資料にも馬甲を装着した騎馬隊の姿が描かれている。

たしかに、ウマを鎌や刃から防ぐことに馬甲は有効である。しかし、遊牧民本来の機動性という点では、かなりマイナスであったといえる。金、南宋、西夏は馬甲に身を固めた重装騎兵を有していたので、それらと戦うなかでは、かなり大掛かりの馬甲を用いる場合もあったようである。

だが、本来モンゴル軍は、フットワークの軽さを重視していたようで、馬甲はあまり用いていなかったとみられる。いまのところ考古資料に確実な例は存在しないが、伝アウラガ遺跡出土資料のなかに、一辺が10cmもある鉄鉾留めの鉄札がある（第79図）。人の鎧用の小札にしては大型なので、馬甲の可能性はある。

5. 新たに導入された武器

(1) 弩

クビライによって国家の中心機能が漠地に移されてから、モンゴル軍の武器のなかで、とりわけ目立つようになったのが弩、投石機、それに火器である。

まず、弩からみてみよう。弩とは、縦に使う弓を横に構え、矢をつがえて引きしぼった弦を「機」という機械装置に掛け、照準の「望山」によって狙いを定めながら機の引き金をひく。西洋のクロスボウ（ボウガン）とほぼ同じ仕組みで、世界各地に類品がみられる。銃身状の部分を「臂」、弓状の部分を「翼」という。

弩は、通常の弓と比べて射程距離が長く、命中精度も高いとされるが、当時の弩の射程がどのくらいであったか、定かではない。1206～07年に金と南宋との間の襄陽（湖北省襄陽市）の攻防戦では、戦闘のあらゆる場面で、両軍の武器の主体が弩であったことが克明に伝えられている（『襄陽守城録』）。襄陽城の周濠を挟んで、両軍が弩を射合ったが、周濠の幅は150～200mであったので、その距離であれば殺傷能力があったとみてよい。なお、固定式の床弩では、射程距離が180～450mもあったと記録されている（『武経総要』）。

日本では「いしゆみ（石弓）」とよばれ、律令時代に大宰府や東北地方の城柵に配備されたが、それ以外では使われなかったと考えられている。もちろんモンゴル襲来での鎌倉武士も使わなかった。一方で、モンゴル軍は弩を用いていた。具体的には、弘安の役において志賀島に上陸していたモンゴル軍が弩を携帯していたと、南宋出身の張成という部将の墓碑銘からわかっている（岩間 1925）。また、志賀島で戦った伊予の河野通有は、モンゴル軍が発射した石弓の矢を受けて左肩を負傷したと『八幡愚童訓』にある。

じっさいに機、臂、翼といった弩の部材が鷹島海底遺跡からみつきり、臂、翼にはニレ属の木材が用いられ、木質の表面には黒漆が塗布されていた（松尾編 2011；北野ほか 2011）。表面に朱書きの文字が残され、その内容から、南宋軍が使っていたものがモンゴルに接収され、この地までもたらされたと考えられている（四日市 2002）。

ところで、弩について調べてみると、ある興味深いことに気がつく。『黒韃事略』のなかに、弩についての記述がないことである。南宋人にとって弩は見慣れた存在であったので、記す必要がなかったとも考えられる。ただ、『モンガル人の歴史』には、弩がモンゴル軍と戦うときに必須な武器として特記され、その理由はモンゴル人が弩を非常に恐れるからだとある。どうもモンゴル軍のあいだには、弩が浸透していなかったようである。たしかに、モンゴル高原の当該期の遺跡から、これまで弩機が

出土した例はない。これらから想定して、モンゴル帝国の勃興期には、弩が用いられなかった可能性がみえてくる。最強の武器であったにもかかわらず、弩が浸透していなかったのはなぜか。また、いつの段階からモンゴル軍で多用されるようになったのか。モンゴルと弩との関係は、今後の重要な研究課題になると考える。

(2) 投石機

弓矢、環刀、槍などの伝統的な武器に加えて、当時のモンゴル軍の戦闘には投石機という最新兵器も使われた。投石機は複雑で高度な装置ではなく、テコの原理を利用して石弾を遠くに飛ばす仕組みの投射兵器であった。角材を組んで脚立状の台座「脚柱」を造り、その上に軸を支点としてシーソーのように可動する棒状の砲身「梢」を置き、その一端に紐付けした革上に石弾を装着し、もう一端に麻を撚って作った長い引き紐「曳索」をつける。この曳索を人力で引っ張ることにより、石弾を遠くに飛ばすという仕掛けであった。



第80図 投石機
 (『武経総要』より筆者加筆)

北宋の軍事事典『武経総要』によると、投石機には種類があり、梢を形成する木材の本数と長さで石弾の重量、すなわち威力が決まった。「単梢砲」という投石機では、1本の木材でできた長さ5～8m、径12cmほどの梢によって、1.2kgほどの石弾を、75m以上飛ばすことができた。ただ、脚柱の長さが3～5mと大型で、長さ12～15mで40～45本もある曳索を操作する人員が40名ほど必要であった(第80図)。さらに、脚注長6.5mもある大型の「七梢砲」では、やはり75m以上の射程で、50～60kgの石弾を、125本の曳索を250名ほどで操作して飛ばしたという。とてつもなく大掛かりな兵器であったことがわかる。そのほか、単梢砲クラスに車輪の付いた移動式の「車行砲」や「砲車」といった、いくぶんか機動性のある投石機もあった。

1207年の金と南宋との襄陽における戦いでは、金側が七梢砲と、さらに大型の「九梢砲」を、あわせて数十台も配備し、25～30kgの石弾を放って、南宋の守る襄陽の城壁に多大な損害を与えた(『襄陽守城録』)。そのときの射程距離は、襄陽城の周濠の幅(約150m)をようやく超えられるぐらいであったと推定できる。

ちょうどそのころ、モンゴルが周辺地域への侵攻を開始した。モンゴル高原内での部族戦争のあいだには、投石機など必要なかったであろう。だが、金朝、西夏、イスラムの城壁都市攻略の中で、その必要性は高まった。軍略家のチンギス・カンがこれを導入したのはまちがいない。ただ、それを史料は伝えていない。

モンゴル軍における確実な投石機の使用は、オゴデイ期に入ってからである。1230～31年の鳳翔(陝西省宝鶏市鳳翔)攻撃で、モンゴル軍は400基もの投石機を使ったと『黒韃事略』は伝える。それがどのくらいの性能があったか定かでないが、頑強な守りの鳳翔は半年あまりで陥落した。

それから40年ほど経たモンゴル襲来のころには、投石機自体がかなり進化していた。クビライはイスラム技術を導入し、新型の投石機を造らせた。これを「回回(襄陽)砲」という。回回とはイスラムのことで、フレグ・ウルス(イル・ハン国)出身のアラー・アッディーン(阿老瓦丁)とイスマイル(亦思馬因)という技術者が製作の中心的役割を果たした。重りの落下エネルギーを利用した、従来機よりも大きな破壊力と飛距離をもつ殺戮兵器であった。

回回砲は、1273年の対南宋戦の決戦となった襄陽攻略の最前線に配備され、大きな戦果をあげた。

漢江をはさみ、北岸の樊城の東南に設置された回回砲が、南岸の襄陽城を襲った。その間の漢江の幅は、狭い部分でも500mはあった。約90kgの石弾を用い、その威力は地面に2m余りくい込むほどであったという（『元史』巻203亦思馬因伝）。

それではモンゴル襲来ではどうか。鷹島海底遺跡からは、投石機用とみられる石弾もみつまっている。重さは2kgほどであった（片多編 2018）。さきに述べた単梢砲クラスならば、船に載せて運ぶことが不可能とはいえない。ただ、操作する人員は相当数が必要であったと思われる。じっさいの搭載や使用の痕跡は確認されていない。

弘安の役の後、改めて日本攻略が計画された際、回回砲の砲手が50名徴用されたという（『元史』巻13世祖本紀）。さいわい再度の遠征はなかったが、もし導入されていたら、その威力が鎌倉武士を震撼させたであろう。

（3）火器

また、「てつほう」という火器の使用も特筆できる。『蒙古襲来絵詞』に描かれていることから、その存在はよく知られている。これは一種の手榴弾で、中国側の呼び名は「震天雷」といい、その起源は北宋で開発されたものであった（岡田 1998）。鉄製あるいは陶製の球状をした容器に、火薬と殺傷力を高めるために鉄片を詰め、導火線に火を点けて敵陣へ投げ込んだ。宋金戦争でその威力が認められ、その後、金朝や南宋は対モンゴル戦線で盛んに使った。モンゴルは金朝を滅ぼしたことでその技術を接収し、みずからの主要武器として高めていた。

長崎県鷹島海底遺跡からは陶製球状の震天雷がみつまっている（松尾編 2011）。直径15cm、器厚1～2cmで、器面の一か所に径4cmほどの開口部が認められた。開口部は火薬などの詰め口とみられる。完形品をX線CTスキャンで調べたところ、内部に陶器片と铸铁片が入っていた。また、開口部には蓋あるいは導火線とみられる繊維の付着痕があった。火薬が抜けた状態でみつき、その重さ約2kgであった。『武経総要』には1.8～2.4kg（「三、四斤」）ほどの火薬が充填されたとあるので、使用時には4kg程度になったと想定できる。これは陸上競技女子の砲丸と同じ重さで、手投げで戦果をあげるのは難しかったと思われる。縄かスリング様の手投げ用投弾具が使用されたのであろう。投石機を用いた可能性も考えられている（中田・池田 2021）。

震天雷をはじめとするモンゴル帝国期の火器の良好な資料は、モンゴルや中国には、ほとんど残っておらず、鷹島海底遺跡から得られた完形品は貴重な存在として注目できる。戦史だけでなく技術史の上からも、その研究の進展が待たれる。

6. おわりに

以上、本稿ではモンゴル軍の兵制、戦術、武器などについて、文献史料と考古資料を使いながら、その概略を述べてみた。遺漏は多々あろうが、これによってモンゴル帝国の基礎となっていたモンゴル族とその周辺、戦争に対する考え方が、ある程度明らかになったと思う。

しかしながら、なぜ世界の陸地の五分の一もの版図を築くことができたのかという課題の解決からは、程遠い結果となった。その理由のひとつに考古資料の少なさがある。モンゴル族の薄葬の伝統とともに、殺傷能力の高い武器が国家の管理下に置かれていたため、個人の墓からの武器の検出例が乏しいことが背景にある。それに加え、多くの戦跡は後世の改変によって遺構や遺物が失われ、往時を知る事が難しくなっているという事情もある。

そのような状況のなか、九州北部の各地に残るモンゴル襲来時の戦跡や遺物は、世界的にみてモンゴル軍の実像を知ることができるきわめて貴重な資料である。今後、防塁や海底遺跡、それに伝世品などを通して、当該分野の研究がますます進展することを期待して筆を擱く。

註

- 1) 大山祇神社 HP (国宝めぐり) <https://oomishimagu.jp/national-treasure/> (2021年11月3日閲覧)。
- 2) 大山祇神社 HP (国宝めぐり) <https://oomishimagu.jp/national-treasure/> (2021年11月3日閲覧)。
- 3) 朝日新聞デジタル (2020年12月22日記事) <https://www.asahi.com/articles/ASNDQ61JNNDQPLZB005.html>
- 4) 大山祇神社 HP (国宝めぐり) <https://oomishimagu.jp/national-treasure/> (2021年11月3日閲覧)。

引用文献

【日本語文献】

- 諫早直人・G. エレゲゼン・L. イシツェレン 2018 「モンゴルの匈奴墓出土馬具」『考古学雑誌』101-1、75～85頁
- 岩間徳也 1925 『元張百戸墓碑考：明の金州衛儒學と其の先師廟碑記』国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3466162> (原載：「元張百戸墓碑考」『満蒙』6-11、14～31頁、1925年)
- 岡田登 1998 「震天雷と飛火槍の淵源～金軍の使用せる火薬使用の武器をめぐって～」『東洋文化』復刻80号、18～31頁
- 片多雅樹 (編) 2018 『鷹島海底遺跡－平成25年度から平成29年度までの調査成果－』(長崎県埋蔵文化財センター調査報告書25)、長崎県教育委員会
- 北野信彦・本多貴之・松尾昭子・高妻洋成 2011 「鷹島海底遺跡出土の元寇関連漆製品に関する調査」『保存科学』50、229～238頁
- 白石典之 1996 「遼・金代における響と鐘の変化とその背景」『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集刊行会、343～360頁
- 白石典之 2015 「武器と防具」『チンギス・カンとその時代』勉誠出版、262～276頁
- 中田敦之・池田榮史 2021 『元軍船の発見 鷹島海底遺跡』(遺跡を学ぶ150) 新泉社
- 本田実信 1991 『モンゴル時代史研究』東京大学出版会
- 松尾昭子 (編) 2011 『松浦市鷹島海底遺跡総集編』(松浦市文化財調査報告書4)、長崎県松浦市教育委員会
- 四日市康博 2002 「鷹島海底遺跡に見る元寇研究の可能性」『史滴』24、111～124頁
- 吉岡完祐 1994 『元寇史料館』(展示図録) 元寇史料館
- 吉田順一・丁勇・蘇東・邵清隆・張彤 2008 『チンギス・ハーンとモンゴルの至宝展』(展示図録)、東映株式会社

【モンゴル語・露語・英語文献】

- Bayar, D., 2000: Баяр, Д. Алтан ургийн язгууртны нэгэн булшийг судалсан нь [黄金家族の貴人の一基の墓の研究]. Адмон, Улаанбаатар [アドモン社、ウランバートル].
- Bayarsaikhan, J. et al., 2017: Баярсайхан, Ж. нар. Хадан гэрийн соёл [岩の家の文化]. Монголын үндэсний музей, Улаанбаатар [モンゴル国立博物館、ウランバートル].
- Erdenebat, U. et al., 2010: Эрдэнэбат, У., нар. Дугуй цахирын хадны оршуулга (10-12 зуун) [ドゴイ・ツァヒルの岩陰墓 (10-12世紀)]. ШУА Археологийн хүрээлэн, Улаанбаатар [モンゴル科学アカデミー考古学研究所、ウランバートル].
- Erdenebat, U. et al., 2011: Эрдэнэбат, У. нар. Онгон нутгийн өв соёл [神聖な地の遺産文化]. Монголын үндэсний музей, Улаанбаатар [モンゴル国立博物館、ウランバートル].
- Erdene-Ochir, N., 2014: Эрдэнэ-Очир, Н. Дундад зууны нүүдэлчийн зэр зэвсэг [中世の遊牧民の武器]. (Turbat et al., 2014) 所収, pp.95-107.
- Eregzen, G. et al., 2014: Эрэгзэн, Г. нар. Худгийн халзангийн олдворын холбогдох он цаг ба Жужаны археологийн судалгааны асуудал [ホドギーン・ハルザンの出土品に関連する年代と柔然の考古学研究の課題]. Stadia Archaeologica. 34, т.264-276, ШУА Археологийн хүрээлэн, Улаанбаатар [モンゴル科学アカデミー考古学

研究所、ウランバートル].

Morgan, D., 1989. The Mongols. Blackwell, Oxford.

Pletneva, S.A. et al., 1981: Плетнева, С. А. и др. Степи Евразии в эпоху средневековья, Археология СССР [中世の草原ユーラシア、ソ連邦の考古学]. Наука, Москва [ナウカ出版、モスクワ].

Saruulbuyan, J. et al., 2009. National museum of Mongolia (Exhibition catalog). Ulaanbaatar.

Turbat, Ts. et al., 2014: Төрбат, Ц. нар. Талын морьтон дайчдын өв соёл [草原の騎乗武人の遺産文化]. ШУА Археологийн хүрээлэн, Улаанбаатар [モンゴル科学アカデミー考古学研究所、ウランバートル].

【中国語文献】

内蒙古博物館・錫林郭勒盟文物管理所1994「鑲黃旗烏蘭溝出土一批蒙元時期金器」『内蒙古文物考古文集』中国大百科全書出版社、北京、605～609頁

【史料】

『八幡愚童訓』：荻原龍夫 [校注] 1975「八幡愚童訓 甲」『日本思想大系』20（寺社縁起）岩波書店、169～205頁

『蒙古襲来絵詞』：九州大学附属図書館コレクション

(https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/hp_db_f/moukoshurai/index.html)

『武経総要』：孫雅蘇ほか [注] 2017『武経総要注』（全二巻）西安出版社、西安

『襄陽守城録』（趙萬年）：1991『叢書集成初編』（3894）、中華書局、北京

『黒韃事略』（彭大雅 [撰]・徐霆 [疏]）：許全勝 [校注] 2014『黒韃事略校注』蘭州大学出版社、蘭州

『蒙韃備録』（趙珙）：陶宗儀（纂）1963「蒙韃備録」『説郛』卷54、台北新興書店、台北、839～843頁

『汎海小録』（王恽）：1989「秋澗先生大全集」卷40『四部叢刊』（225）上海書店、上海

『元典章』：洪金富 [校定] 2016『元典章』中央研究院歴史語言研究所專刊110、台北

『モンガル人の歴史』（プラノ＝カルピニ・ジョン）：高田英樹 [編訳] 2019「モンガル人の歴史」『原典 中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会、31～102頁

『東方見聞録』（マルコ・ポーロ）：愛宕松男 [訳注] 1971『東方見聞録』2、東洋文庫、平凡社

『元史』（宋濂）：1976『元史』校点本、中華書局、北京

『元朝秘史』：栗林均・确精扎布（編）2001『『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』東北大学東北アジア研究センター

『天工開物』（宋應星）：藪内清 [訳注] 1969『天工開物』東洋文庫、平凡社

V 九州大学箱崎キャンパス地区における 元寇防塁研究とその展開

1. はじめに

本報告書は、九州大学埋蔵文化財調査室による2016年度以降の元寇防塁発掘調査を総括するものである。第Ⅱ章では、福岡市域における元寇防塁の発掘調査史を振り返ることで、本報告書で取り組むべき元寇防塁研究の課題を明確化した。第Ⅲ章では、九州大学箱崎キャンパス地区における元寇防塁関係の最後の調査地点である、HZK2005地点（工学研究科共同研究棟東地点）の発掘調査成果を報告した。そして、考古学・日本史・朝鮮史・自然地理学・岩石学といった様々な研究分野の先生方から、元寇防塁を取り巻く諸問題についてご寄稿いただき、それらを第Ⅳ章に掲載した。

本章では、本報告書のこれまでの内容を踏まえながら、第Ⅱ章で掲げた元寇防塁研究の二つの課題、すなわち、(1) 元寇防塁における地域的差異の背景、(2) 元寇防塁の技術的系譜、について考えてみたい。

2. 箱崎キャンパス地区の元寇防塁

(1) 箱崎キャンパス地区元寇防塁の調査研究総括

箱崎キャンパス地区の元寇防塁の諸特徴については、2021年3月に刊行された九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集において既に論じている（福永・齋藤 2021）。その内容について、第Ⅳ章の岩永論文で、批判的に検討していただいたことは、元寇防塁研究をより一層深化させる上で大変有難いことである。ここでは、その批判に答えることで、箱崎キャンパス地区元寇防塁の特質を明確にしたい。

石積み遺構 箱崎キャンパス地区における元寇防塁の特徴の一つは、石積みが一列のみで構成されていることである。背面は砂による盛土で支えられるのみで、控え石などは確認されておらず、粘土層や版築構造による補強もなされていない。最も残存状態が良好であったHZK1603地点で、石積みは最高3段確認されているが（第Ⅱ章第17図）、石積みのこうした脆弱な構造から推し量るに、石は積めてあとせいぜい1～2段が限界ではなかろうか。石積みを用いられる砂岩・礫岩の大きさは、高さ30～40cm程度であるので、最大5段積んだとすると石積みの高さは単純計算で1.5m～2m程度。しかし、実際は石積みの安定性を考えて、基底石に大きな石材を、上に行くほど小さな石材を用いたことが推測されるため、当時の石積みの高さは2mに達することはなかったと考えられる。

これまで、こうした石積みの構造の脆弱性を、箱崎キャンパス地区元寇防塁の特質の一つとして評価してきたわけだが（三阪ほか 2019、福永・齋藤 前掲）、岩永論文ではその評価に対して以下のような疑問が示された。

- ①今津地区の元寇防塁第12次調査2区の調査事例から、海側前面の一例しか石積みが配されない構造は、箱崎キャンパス地区だけではない
- ② HZK1603地点の調査事例から、2段目以上に石積みを補強するための工夫がなされていた可能性を指摘し、基底石しか残存していないHZK1905地点などの調査地点成果を、石積み2段目以降にまで敷衍するのは早計である

①の今津地区元寇防塁第12次調査2区は、2017年の概報では、長さ6m、幅2.5mの石積みを確認したという報告に留まっているが（藏富士 2017）、2019年刊行の『元寇防塁調査総括報告書』ではよ

り詳細な報告がなされている（藏富士編 2019）。その特徴は以下の通りである。

- ・ 前面の石積み及び背面側斜面の石敷きを検出（第81図）
- ・ 前面の石積みは大形塊石を整然と配置したもので、高さ0.8m、1～3段分が残存
- ・ 前面石積みの背後には幅1～1.3m程の控え積みがあるが、これには小礫に加え前面石積石材と変わらない大形塊石も使用されている
- ・ 控え積み背後の幅1.2～1.4mの間で、石材はほとんど出土していない
- ・ 前面石積みより2.4m後方には、前面石積みに平行して列状に並んだ小塊石があり、これら小塊石の上面の高さは前面石積みの高さとほぼ等しい
- ・ それから後方は20°程の緩斜面となり、その上には大小様々な塊石が乱雑に置かれている
- ・ 石積み破損時の転石も一部含まれている可能性もあるが、石積み前面の石材より明らかに大きい石材が存在することや、調査区内の斜面に偏りなく存在すること、すべてを転石と考えるには量が多いことから、これら石材の多くは斜面部分に配置された敷石であると判断



第81図 今津地区元寇防塁第12次調査2区の石積み

この前面石積みとその背面に検出された小塊石の位置づけに関しては二つの解釈が提示されている（藏富士編 前掲）。一つは、背面に並んだ小塊石を背面石積みの基底石とみなし、両者を一体ものとして底面幅3m程の内部に砂を充填した石塁の存在を想定するもので、もう一つは石塁が前面石積みだけの石垣状を呈し、背面には砂を盛り上げた斜面が付き、そこに敷石を配したとみるものである。報文中では後者の解釈をより支持しているように読み取ることができ、類例として箱崎キャンパス地区元寇防塁を挙げている（藏富士編 前掲）。

仮に後者の解釈が正しかったとしても、今津地区元寇防塁第12次調査2区の前面石積みと箱崎キャンパス地区の石積みとでは、その構造に差異があることは明らかである。前者は石積み背後に、大型の石材を用いて幅1～1.3m程の控え積みがなされているのに対し（第81図）、後者ではそのような控え積みは確認できず、石列は1列のみである。海側前面にしか石積みが配されないという点のみを根拠に、両者の類似性を指摘することに違和感を覚えざるを得ない。

また、上述②で指摘された、箱崎キャンパス地区元寇防塁において2段目以上に石積み補強の工夫がなされていた可能性については、現状の調査成果からは「想定可能」としか評価しようがなかろう。だが、その根拠として挙げられているHZK1603地点で裏込め石と評される小礫群は、先の今津地区の事例に見るような控え石と比べてあまりにも小規模であることは指摘できる。失われてしまっている事象についてこれ以上考察を深めることは危険を伴うが、仮にこの程度の小礫群が石積み2段目以降に裏込めされていたとしても、どれほどの補強機能を有していたのか疑問である。

以上の検討より、石積みの構造の脆弱性を、箱崎キャンパス地区元寇防塁の特質の一つとして再度評価しておきたい。そして、これを立脚点として、博多湾沿岸域の他の地区の元寇防塁との比較研究を進めながら、箱崎キャンパス地区元寇防塁の位置づけを試みたいのである。

なお、岩永論文では、元寇防塁の上に兵を配して敵に攻撃を仕掛けることを想定している。確かに

『蒙古襲来絵詞』には生の松原の元寇防塁の上に兵が配されている様子が描かれているが（第82図）、それは幅1.5m前後の石積みと、その背面に砂と粘土を版築状につき固めた盛土が存在する生の松原地区の元寇防塁だからこそ成し得たことであると考えられる。上述してきたような箱崎キャンパス地区元寇防塁の石積みの構造では、その上に兵を配することは難しかろう。防塁を用いた防衛戦略が生松原地区などと同一であったかどうかについては、いま一度考え直す必要がある。



第82図 蒙古襲来絵詞生の松原の場面
（佐伯 2003より転載、一部改変）

背面石列の評価 HZK1706地点と HZK1905地点の境界付近で、石積み背面から東西方向に、北側に石面を揃えて並ぶ石列を確認している。いわゆる背面石列と呼称しているものである。この背面石列については、i) 薩摩国御家人比志島佐範が、建治三年（1277）と弘安七年（1284）の二度にわたって石築地築造に勤仕したことを承認する覆勘状を受けているという文献史学の研究成果¹⁾、ii) 石積み築造の作業工程の断絶を想起させる諸事象が発掘調査で確認されている、という二点を主な根拠として、背面石列は建治三年段階に完成を見た元寇防塁の姿であり、弘安七年段階に何らかの理由で防塁を北側に延長させる必要が生じて築造されたのが、地蔵松原地区まで至る現在の防塁の姿であると解釈した（福永編 2021）。

しかし、岩永論文では、この背面石列の評価に関しても以下のような疑問が示されている。

- ①建治三年段階の東西方向の石積みから北側に向けて浜堤の斜面の下がりがあるはずだが、HZK1905地点の土層断面図ではそれが確認できない
- ②建治三年段階の東西方向の石積みに、他地点と同様に大溝が伴うのであれば、HZK1905地点におけるトレンチⅡ北壁の土層断面図東側にその痕跡が現れるはずだが、確認できない
- ③背面石列を構成している石は、石積みの基底石としては小ぶりである

その上で、背面石列は建治三年段階の石積みラインを示すものではなく、石積み工事分担者の交替の目印として置かれたものと評価した。HZK1706地点の調査成果報告（三阪・谷編 2019）で提示された、「背面石列＝作業単位の境界」説を改めて支持したわけである。

③に関しては、一概にそうとも言えない。HZK1905地点の石積み遺構 SF05では、背面石列を構成する石材と同程度の石材が石積み基底石として用いられているからである。しかし、①・②については、確かにその通りである。HZK1905地点のトレンチⅠ南壁とトレンチⅡ北壁については、石積みに伴う大溝の評価と関係するため、その土層堆積状況の把握には細心の注意を払いながら臨んだ²⁾。そのため、浜堤斜面の下がりや建治三年段階の大溝の痕跡を調査時に見落とししたとは考えられず、両トレンチの壁面ではこれらの痕跡を確認できないことは間違いない。この点に関しては真摯に受け止める必要があろう。

ただ、①に関しては、HZK1905地点におけるトレンチⅠとトレンチⅡの約5mという近い距離の間で、「浜堤斜面の下がり」をどれほど反映しうるのが判然としにくい。しかも、両トレンチ壁面では、大溝の掘り込みによって切られる洪水堆積層が確認されており（福永編 前掲、第71図の8層）、当該地域は防塁築造直前まで不安定な堆積環境にあったことが推察される。そうした堆積状況において、「浜堤斜面の下がり」の微妙な高低差が明確に反映され得るものだろうか。今後、堆積学的・地質学的な観点からの再検討が必要である。

また、背面石列の南東側では、近接して比較的大きな樹木が根を広げている（第83図）。こうした樹木の影響で、背面石列の一部、あるいはその全体が、北側にやや押し出されている可能性も十分想定される。北側に揃っている石面の軸がほんの少し変わるだけでも、それ以東の推定線の位置は大きく変わってしまう。もし以前提示した「背面石列延長ライン」（福永編 前掲、第110図）や、「建治三年段階石積みライン」（福永編 前掲、第111図）が誤りで、ラインがそれらよりもやや南側を通るのだとすれば、上記②の疑問も解消されるのである。



第83図 HZK1905地点 背面石列

仮に「背面石列＝作業単位の境界」説を正しいとした場合、なぜ石積みに対して直交する形で石列を配さないのかについての説明が必要であろう。背面石列の石積みに対する角度は概ね105°を測り、樹木の影響で石列が押し出されたと想定するには角度がありすぎる。石積みに対して元々ある程度の角度をもって、石列が配されていたと考えるのが自然である。

さらに、作業単位の境界を明示するのであれば、木の棒などを打ち立てるのみで事足りる。第IV章の足立論文において、HZK1905地点の石積み用に用いた石材は、多々良川の河川流域で採取されたものである可能性が高いことがわかっている。差し迫った作業期間の中、多少なりとも運搬作業に労力が必要な貴重な石材を、作業単位の境界を明示する程度のことになぜわざわざ用いたのだろうか。いま一つ釈然としない。

なお、博多遺跡群第111次調査では、前面・後面に大きな石を積み上げて、その中をやや小さな石で充填する構造をもった元寇防塁が確認されており、その前面と後面の石積みの間に、石積みの方向に直交するような形で配された石列が見つまっている（佐藤編 2002）。この石列が作業単位の境界をあらわしている可能性もあるが、前面と後面の石積み内部をより強固に補強する機能を果たしていたとも考えられる。いずれにしろ、箱崎キャンパス地区の背面石列とは様相を異にしている。

以上より、今後さらなる検証作業が必要ではあるものの、背面石列を「作業単位の境界」と考えるよりは、「建治三年段階の石積みライン」と考えるほうが、より妥当性の高い説明であると判断しておきたい。

大溝 石積みの構造的脆弱性と並ぶ箱崎キャンパス地区元寇防塁の特徴として、石積みに伴う大溝の存在を挙げることができる。石積みの陸側に一定の距離を保ちながら、石積みに平行する形で人為的に掘り込まれた空堀であり、地点差はあるものの³⁾、その幅は概ね6～9 m程度であったと考えられる（福永・齋藤 前掲、第二章第18図）。

大溝の機能に関しては、石積みと堀の組み合わせでモンゴル軍の騎馬軍や歩兵部隊の侵攻を妨げたとする見解や（岩永 2020、第四章岩永論文）、そうした大溝の防御機能は第二義的なものとして、第一義的には石積み背面の盛土に用いる砂の供給先であったとする見解がある（福永・齋藤 前掲）。

筆者は現在でも後者の見解を支持しているわけだが、その場合でも、大溝の防御機能を完全に否定しているわけではないことは、いま一度強調しておきたい。たとえ第二義的であっても、現地に敷設

されていたからには日本軍側にとって有意義な機能を果たしていたことは疑いないのである。ただし、石積み基底面と大溝最深部の比高差は1 mもなく、幅も6～9 m程度であったとすれば、どれほどの防御機能を果たし得たのか、疑問を持たないわけでもない。第IV章の白石論文で指摘されているように、モンゴル軍の主要な武器は、短弓と弩弓からなる投射兵器と、槍と矛を中心とする長兵器であったと考えられる。こうした遠距離からの攻撃に長けていた当時世界最強の軍隊であるモンゴル軍を、日本軍側は深さ1 m弱、幅6～9 m程度の溝で迎え撃つような策を講じていたのだろうか。より慎重な評価が必要であろう。

また、岩永論文では、箱崎キャンパス地区以外の地区において、防塁本体部分から25mほどの地点まで調査された事例は乏しいとし、大溝を箱崎キャンパス地区のみに見られる特質とするのは早計である、と指摘する。確かにその通りであり、今後、他の地区においても防塁陸側の意識的な調査の実施が望まれよう。

ここで注意しておきたいのは、当時の防塁陸側の地理的環境である。例えば、『蒙古襲来絵詞』に描かれている生の松原の元寇防塁のすぐ後ろには、松原が存在している（第82図）。絵画史料のため遠近感が判然としないが、このように防塁背後に松原が存在している場合は、そこに大溝を築造することは不可能であろう。大溝の築造が可能であったということは、当時、防塁の陸側にはある程度開けた空間が存在していたことを間接的に示しているのである。

元寇防塁推定線 これまでの検討を踏まえて、再度、箱崎キャンパス地区における元寇防塁の推定線を提示しておきたい（第84図）。以前提示した元寇防塁推定線では（福永編 前掲、第111図）、岩永論文で指摘されているように、HZK1901地点 E 区以南の推定線を若干東に振れた線として表現した。これは復元した当時の海岸線を意識してのことであった。しかし、この海岸線の復元も不確かなものであるため、岩永論文の指摘を受けて、HZK1901地点 A 区と同地点 E 区で検出した大溝を結ぶ線をそのまま南に延長する形で微修正している。

HZK2002地点から地蔵松原地区までを折れ線で表現するか、曲線で表現するかに関しては意見が分かれるところであり、岩永論文では両論併記にせざるを得ないとしつつも、「背面石列＝建治三年段階の石積みライン」説を棄却することで、曲線で推定線を描いている（第IV章第30図）。しかし、本章で検討したように、現状では「背面石列＝建治三年段階の石積みライン」説が最も妥当性の高い説明であると考えられる。よって、背面石列にみる建治三年段階の石積みラインのあり方を、弘安七年段階の防塁築造にも適用し、HZK2002地点から農学部二号館を越えたあたりで右折し、地蔵松原へとつながるような推定線を採用しておきたい。

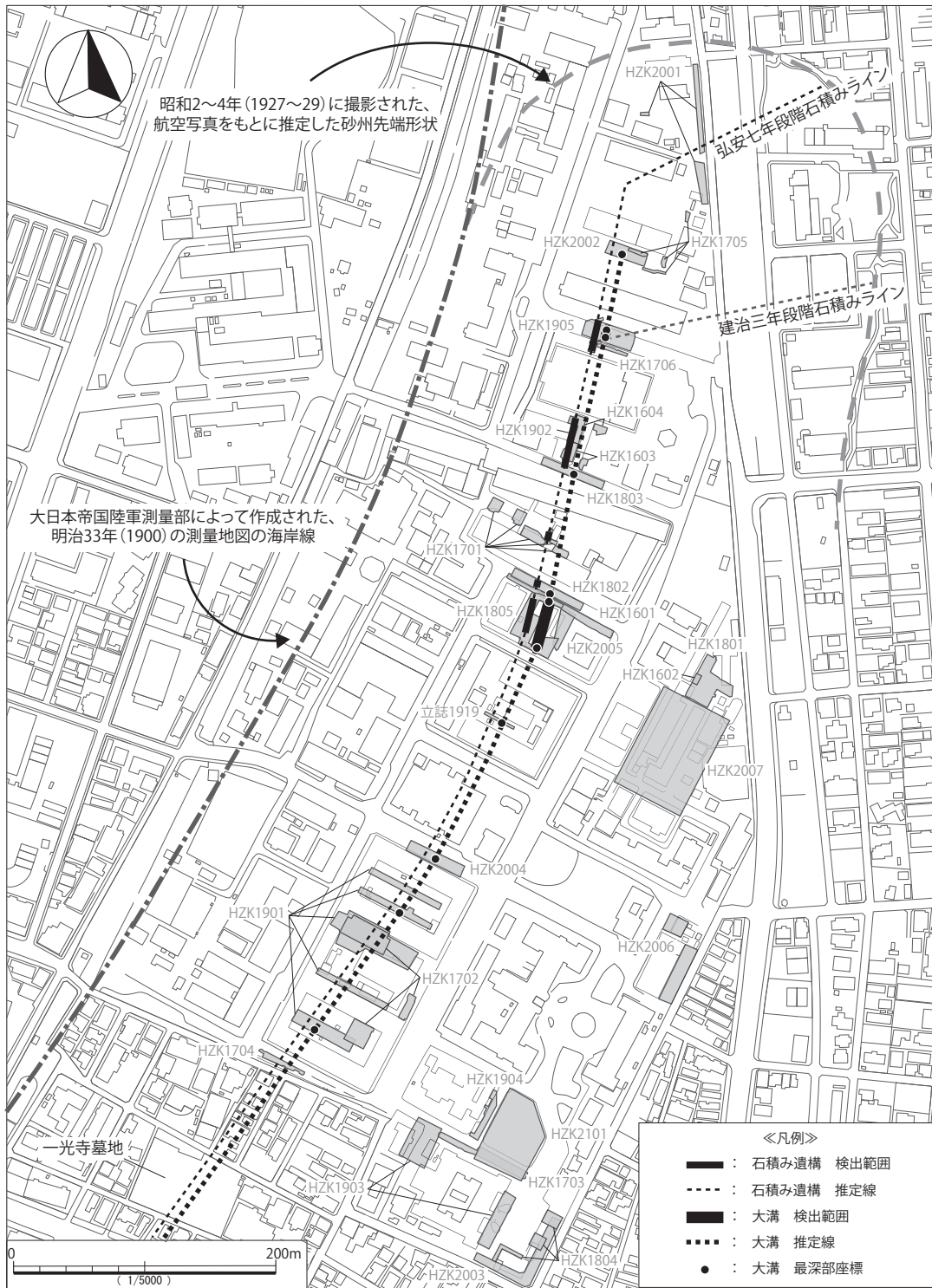
ただし、第84図に破線で示した「建治三年段階の石積みライン」の傾きについては、参考程度にとどめるべきことを付記しておきたい。上述したように、背面石列にみえる北側の石面の軸線が、樹木の影響を受けている可能性を排除できないためである。

第84図をもって、九州大学埋蔵文化財調査室として提示する、箱崎キャンパス地区における最終的な元寇防塁推定線案としたい。

（2）箱崎キャンパス地区元寇防塁の特質の背景

箱崎砂州先端部の地理的環境 箱崎キャンパス地区において、上述してきたような特質を有する元寇防塁が築造されたのはなぜであろうか。その点を考える上で、当時の箱崎砂州先端部における地理的環境を考慮しておくことは重要だと考える（福永・齋藤 前掲）。

HZK1701地点や HZK1802地点で実施されたジオスライサー調査の結果、11世紀前半以降の洪水な



第84図 箱崎砂州先端部における元寇防塁推定線

どによる河川からの砂の大量供給によって、箱崎砂州先端部が急速に拡大した可能性が指摘されている（市原・下山 2019、下山ほか 2019a・2019b）。こうした箱崎砂州先端部の形成過程は、発掘調査成果からも窺うことができ、特に、HZK1905地点では、大溝の掘り込みに切られた宇美川・多々良川の洪水堆積層と考えられる土層堆積を確認している（福永編 前掲）。これらの調査成果から、箱崎キャンパス地区が位置する箱崎砂州先端部は、防塁築造の直前まで形成・発達過程にあり、不安定かつ流動的な地理的環境が広がっていたことが推察されるのである。

11世紀以降の箱崎砂州地形の発達は、当時の気候変動と密接に関係しているものと考えられる。樹木年輪セルロース酸素同位体比の測定によって、中世日本における年単位での降水量や気温の復元がなされた結果、11世紀以降、短期・中期的な変動を繰り返しながらも、長期的には15～16世紀まで一貫して湿潤・冷涼な気候に向かって変化することが示されている（中塚 2020）。こうした11世紀以降の湿潤・冷涼化によって、洪水による河川堆積物の大量供給が促進され、箱崎砂州地形が発達した可能性を指摘しておきたい。

なお、第IV章の鹿島論文では、モンゴルにおいても11世紀以降に寒冷化と乾燥化が生じたことが示されている。湿潤化と乾燥化の違いはあるものの、日本とモンゴルで寒冷化が進行する時期は共通している。11世紀以降にみられる気候変動は、少なくとも東アジア規模で生じた現象である可能性が高い。

さて、防塁築造に際しては、地盤の整地・造成を行い、石積みに用いる石材の運搬や石積み築造に備えた環境整備が必要であった。文献史学の成果によって、石築地は建治二年（1276）三月頃から築造を開始し、約半年後の同年八月中に完成させることを目標にしていたことがわかっており（川添 1971、第IV章佐伯論文）、時間的に非常に厳しい状況の中で作業が進められたと考えられる。上述のような箱崎砂州先端部の地理的環境のもとでは、作業はさらに困難を極め、石材の運搬や石積み築造も必要最小限の労力に抑えられたことが推測される。箱崎キャンパス地区における石積みの脆弱な構造も、そうした作業の省略化に起因しているのではないだろうか（福永・齋藤 前掲）。

また、海岸植生の研究成果を踏まえると（鈴木 1994、寺田ほか 2014）、砂州地形が安定してそこまで年月が経過していない当時の箱崎砂州先端部では、無植生帯であったか、あるいは1、2年草本植生帯が広がる程度であり、マツが生育できる環境にはなかったと考えられる（福永・齋藤 前掲）。これまで実施した各調査地点における採取炭化物の樹種同定でも、マツの出土はごく少数であり、防塁築造当時の箱崎砂州先端部には松原はなかったと推察される。このような植生環境であったがゆえに、石積みの陸側を利用して大溝の築造が可能だったのだろう。

箱崎砂州先端部の歴史的環境 第IV章の岩永論文では、実際の石材運搬や石積み築造は浜堤上での作業であり、そうであれば箱崎も今津や生の松原の防塁に比して難航するとは言えないとする。その通りであり、筆者も箱崎キャンパス地区元寇防塁の特質を、当時の地理的環境のみで説明できるとは考えていない。地理的環境に加えて、当該地域の歴史的環境についても十分考慮する必要がある。

第IV章の本田論文と福永論文によって、箱崎砂州先端部における土地利用の実態が明らかになってきた。本田論文によると、箱崎遺跡の基盤は、東から砂丘①・砂丘②・砂丘③・砂丘④という4つの砂丘列から構成されており（第IV章第53図）、砂丘①が古墳時代前期以前、砂丘②が古代以前、砂丘③・④が12世紀前半～中頃に形成されたという。箱崎キャンパス地区は、この砂丘③の北側に位置している。砂丘③では、砂丘形成方向と同方向に数条の頂部が確認でき、その西端の頂部上に元寇防塁が築造されている。

福永論文によって、箱崎キャンパス内において人々の活動痕跡が確認されるのは、12世紀後半以降

であることが指摘されている。玉縁の白磁碗など12世紀後半を遡る遺物も出土しているが、それらは包含層からの出土であり、現状では12世紀後半より古い遺構は確認できない。こうした古手の遺構は、箱崎キャンパスの南東部に偏って分布しており、HZK1804地点C区やHZK1903地点B区では、12世紀後半～13世紀前半や13世紀代の井戸が確認されている（第IV章第7表）。また、HZK2006地点では12世紀後半～13世紀前半の木棺墓が見つまっている。なお、元寇防塁推定線上に位置する調査地点では、モンゴル襲来以前と確実に判断できる遺構は確認されていない（第IV章第6表）。

こうした箱崎キャンパス内における人々の活動痕跡の空間的様相と、本田論文で示された砂丘列の形成時期は興味深い関係性を示している。12世紀後半～13世紀前半という当該地域でも古手の遺構が検出された調査区（HZK1804地点・HZK1903地点・HZK2006地点など）は、砂丘②と砂丘③がちょうど重複する部分に位置している。砂丘②の形成時期は古代以前とされており、この砂丘②と砂丘③が重複する部分は、箱崎キャンパス内で最も早い段階に砂丘が形成・安定したエリアであった可能性が高い。一方、それより西側に位置する砂丘③、特に元寇防塁が築造される砂丘③西端の頂部上では、基本的にモンゴル襲来以前の遺構は確認されていない。砂丘③の形成時期は12世紀前半～中頃とされており、砂丘②と砂丘③が重複するエリアに比べて、砂丘が形成・安定した時期は新しいと考えられる。

すなわち、モンゴル襲来以前の箱崎砂州先端部における人々の土地利用は、早い段階に砂丘が形成・安定した砂丘②と砂丘③が重複するエリア付近に限られる可能性が高い。しかも、井戸の構築にみられるような日常生活での利用は、当該エリア内でも南側に限定されており（HZK1804地点・HZK1903地点など）、それより北側では、HZK2006地点のように、墓域としての非日常的な利用が確認されるのみである。そして、さらに北側になると、元寇防塁以外の人々の活動痕跡は確認されなくなる。

こうした土地利用のあり方は、筥崎宮を中心として栄えた門前町の北端部の様相を示しており、モンゴル襲来以前の箱崎砂州先端部は、人々が安定した居住・生活の場とするような土地ではなかったと考えられるのである⁴⁾。筥崎宮周辺などの箱崎遺跡の中心部については別途考察が必要であるが、少なくとも箱崎砂州先端部は、その土地利用のあり方を見る限り、博多など他の地区に比べて、そこまで強固な防塁を築造してまで防衛する必要はなかった可能性がある（福永・齋藤 前掲）。

文永の役における箱崎砂州先端部 ここで、文永の役における箱崎の状況について考えてみたい。通説では、文永十一年（1274）十月二十日、モンゴル・高麗軍は早良郡鳥飼周辺に上陸し、鳥飼・赤坂での合戦を繰り広げたのち、博多・箱崎へと進軍したとされている（相田 1958、網野 1974、服部 2014・2017）。これら先学から窺える、文永の役における箱崎被災の根拠は以下の通りである。

- (a) 筥崎宮が炎上したという記載が複数の史料で確認できる
- (b) 多々良潟の乱杭を打たせたという記載が史料で確認できる
- (c) 史資料から箱崎中核部に軍事的拠点があったと推察される
- (d) 箱崎遺跡北西部で13世紀後半～14世紀前半のものと思われる焼土層が検出されている

(b)に見る乱杭は、確かに多々良潟からのモンゴル軍侵入を阻止する目的で設置されたものであろうが、文永の役・弘安の役において、実際に多々良潟から侵入するモンゴル軍がいたかどうかは不明である。(c)に関して、「軍事的拠点が存在した」と「その場所が戦場であった」ことに直接的な因果関係を結ぶことができないことは言うまでもなかろう。また、(d)については、第IV章の福永論文で指摘したように、建武三年（1336）の多々良浜の戦いに起因する痕跡である可能性もあり（佐伯 2001）、モンゴル襲来に関わる痕跡とするには、今後より慎重な検討が求められる。なお、箱

崎遺跡第101次調査では、土坑 SK2088から石弾が出土しており、長崎県松浦市鷹島海底遺跡から出土している石弾と特徴が類似することから、モンゴル襲来に関わる遺物とされている（神編 2021）。当該事例は上述の焼土層と同様の問題を有しており、今後の類例の増加を待って判断する必要がある。

こうして見てみると、文永の役において箱崎で戦いが行われたことを直接的に物語る史資料は、(a)の「筥崎宮が炎上した」という文献記録が唯一と言える。ただし、(a)に関しても、筥崎宮が炎上したことは間違いなさそうだが、「炎上」以外の情報は乏しく、その実態については判然としない。

戦前におけるモンゴル襲来の研究では、博多以東へのモンゴル軍侵攻の是非について議論されていた。竹内榮喜は、自身の陸軍少佐としての軍事的経験を踏まえながら、文永の役の戦況について考察した（竹内 1913）。仮に物資豊富な博多がモンゴル軍に侵攻・占領されたとすれば、モンゴル軍が短期間で退却する理由はない、と問題点を鋭く指摘し、実際にはモンゴル軍は博多・箱崎には進軍できなかったと結論づけている。

一方、池内宏は、竹内とは異なる説を唱えた（池内 1931）。『八幡愚童訓』の「誠ニユ、シキ城ナレ共、博多・筥崎ヲ打捨テ、多クノ大勢一日合戦ニタエカネテ、落籠ル事コソ口惜シケレ」という記述に依拠し、日本軍が水城ないし大宰府に退く前の戦場は博多・箱崎であったとする。そして、赤坂に侵攻した軍と、博多・箱崎に侵攻した軍は別部隊であり、モンゴル軍は同時に複数箇所を攻める作戦を実行したと考えた。

この池内説は、相田二郎などの後学にも影響を与え（相田 前掲）、細部の違いはあれども、博多・箱崎へのモンゴル軍侵攻は半ば定説のように扱われてきている。しかし、博多・箱崎が戦場になったとする池内説も、十分な根拠に基づいたものとは言い難い⁵⁾。竹内説と同様、今後検証が必要な仮説の一つとするのが妥当な評価だと考える。

文永の役の戦況を語る史資料が非常に乏しい現状において、有力な手掛かりとなり得るのは元寇防塁であろう。文永の役におけるモンゴル軍の侵攻のあり方や戦況を踏まえた上で、モンゴル軍再来への備えが進められたと考えられ（齋藤ほか 2020）、元寇防塁の築造場所やその構造をどのようにするか、といった判断にも影響を及ぼしたことが推察される。「一たび敵より襲撃を受け、苦しき経験を嘗めたる方面に対しては、其後に於て十分に力瘤を入れてこの方面を堅むる」（竹内 前掲、17頁）という竹内榮喜の着想を再評価すべきであり、今後、元寇防塁から文永の役の戦況を見通すような研究視点も必要ではないだろうか。

箱崎キャンパス地区の元寇防塁は、大溝の防御機能を加えたとしても、決して堅牢な構造であるとは言えない。もし文永の役の動向を踏まえて当該地域の防衛を重視したのであれば、どれほど劣悪な地理的環境であろうとも、今津・生の松原・西新・博多と同様の構造を有する防塁を築造したであろう。しかし、実態はそうではないのである。

当時の箱崎砂州先端部は、人々が安定して居住・生活できる場所ではなかった可能性を指摘したが、脆弱な構造ながらも元寇防塁が築造されている点や、多々良潟に乱杭を打たせている点などから、当該地域が防衛するに値しない場所と判断されていたとまでは言い難い。しかし、文永の役での戦況を踏まえて、戦略上、箱崎砂州先端部の防備が相対的に重視されなかったことは十分想定し得る。箱崎キャンパス地区元寇防塁の構造的特質が、文永の役において箱崎砂州先端部は大規模な戦場にならなかったことを物語っている可能性がある。

3. 元寇防塁の技術的系譜

(1) 元寇防塁築造の発想

なぜ海岸に石積みを築造して外敵の侵攻を防ごうとしたのか、そして、その防衛思想や技術的系譜はどこに由来するものなのか、については未だよくわかっていない。元寇防塁の石垣構造は、同時期に類例がなく、現状では西日本古代山城から戦国城館の中間に取り残されたように存在する軍事的構築物であると位置づけられている（齋藤・向井 2016）。

第IV章の岩永論文では、文永の役での高麗・モンゴル軍の上陸を許した経験を踏まえて、対上陸防禦施設を検討した自前の発想の産物であったと指摘する。同時期の日本に類例が見いだせない現状では、妥当な説明だと考えられる。

一方、こうした土塁や横堀をもって空間を遮断するような思想について、グスクや朝鮮式山城、万里の長城などの例を挙げながら、アジア的防衛思想から理解する必要性も指摘されている（宮武 2017）。この点に関して、第IV章の森平論文は興味深い。高麗朝廷がモンゴル軍と対峙するためにたてこもった江華島、そして、その後も抵抗を続けた高麗の軍団三別抄がたてこもった済州島には、それぞれ海岸防御壁が築造されている。森平論文では、これら高麗の海岸防御壁と元寇防塁を安易に結びつけることは慎まなければならないとしながらも、両事例の共時性と、その時代における高麗と日本の情報連絡パイプの存在から、元寇防塁の直接的な源流として高麗の海岸防御壁を積極的に評価している。

日本が対モンゴル軍の防衛戦略を練る上で、先だってモンゴル軍の侵攻を受け、それに対処していた高麗の状況を参考にして、江華島や済州島の海岸防御壁から元寇防塁築造の発想を得た可能性は十分に考えられる。ただし、両事例の関係性を論じる場合には、解決すべき課題も多い。

まず、当時の高麗と日本の情報連絡パイプを通じて江華島・済州島に関する情報を随時得ていたのであれば、なぜ文永の役の時に元寇防塁を築造しなかったのが疑問として残る。文永八年（1271）、三別抄からの使者の来日を契機として、鎌倉幕府が肥後に所領を持つ武蔵国御家人に対して、モンゴル襲来に備えて肥後に下向するように命令が出されている（第IV章佐伯論文）。日本は、三別抄の使者を通じて、この段階にモンゴル軍が日本侵攻を策略していることを知り得ていたのだ。こうした状況を踏まえると、おそらく日本は、高麗へのモンゴル軍侵攻の状況や、それに対する高麗・三別抄の対応についても、適時情報を得ていたと考えられる。これらの情報の中に、高麗の海岸防御壁に関することが含まれていれば、そこから着想を得て、直に来る日本侵攻に備えて防塁を築造することも可能だったはずである。そうしなかった理由として、高麗における戦況を知りながらも文永の役の際は防塁築造の必要はないと判断した、あるいは、高麗の海岸防御壁に関する情報伝達が文永の役の後に高麗人捕虜などによってなされた、などが想定されるものの、現状では判然としない。

また、江華島・済州島の海岸防御壁に関する考古学的データが不足しており、元寇防塁の石積み構造や築造技術との具体的な比較検討ができないことも問題を難しくしている。両事例については、その関係性の有無も含めて、今後継続的な調査研究が必要であろう。

(2) 元寇防塁の築造組織

建治二年（1276）、各国御家人に対して「石築地」、いわゆる元寇防塁の築造にあたるよう命が下されている。防塁の築造や修理は、幕府の支配下にはない公領・寺社領・いわゆる本所一円地の非御家人にもその負担が及んだという（川添 2008など）。築造・修理の手順としては、守護が、その管轄内

の領主に築造や修理の命令を出し、命令を受けた領主は、指定された分担の場所に人夫などを連れていき、作業に従事する、というものであったようだ（川添 前掲）。

齋藤瑞穂は、石築地役の監督者とは別に、築造の工事指揮者として律僧の存在を指摘した（齋藤ほか 前掲）。博多遺跡群第111次調査で検出された元寇防塁と箱崎キャンパス地区元寇防塁との間に、石積みに用いられる石材やその大きさに共通点が見られることを議論の立脚点として、架橋、作道、鑿井、港湾整備といった土木事業に長けていた律宗が、元寇防塁築造に際して、その石材の産地把握や搬送ルートの確保を指揮したとする。

この点を考える上で注目されるのが、博多遺跡群第68次調査で検出された、13世紀後半～14世紀前半の所産とされる石積遺構 SX32である。当該遺構は、発掘調査報告書では元寇防塁である可能性が積極的に論じられているが（井沢編 1992）、その後、大塚紀宜によって石積遺構 SX32は護岸の機能を有する石積みと考えるのが適当とし、元寇防塁とする説は否定された（大塚 2013）。大塚が指摘するように、石積遺構 SX32は、香椎地区や博多遺跡群第89次調査で検出された石積みの護岸跡と構造的な類似性が認められる。石積遺構 SX32を護岸跡とする理解は妥当であろう。

しかし、第89次調査の護岸跡（16世紀末～17世紀初頭）には、石積遺構 SX32に見られるような石積み最上部における石列が確認されていないことは特筆すべきと考える。石積遺構 SX32では、1.5mの間隔で大きな石が2列に配列されており、その2列の石列の間は小礫で充填されていることから（第Ⅱ章第15図）、石列の上段には幅1.5m程度の堤防状の石積みがあった可能性が指摘されている（井沢編 前掲）。そして、同様の構造は、第68次調査区に近接する博多遺跡群第103次調査（塩屋・井澤 1998）で検出された石積み遺構でも確認できる。

これらの調査成果を踏まえると、元々存在していた護岸石積みを利用する形で、その上部に元寇防塁の石積みを構築した可能性（あるいはその逆の先後関係も想定可能）、また、石積みと護岸設備のセットが当該地域の元寇防塁の構造的特徴であった可能性が考えられるのではないか（第Ⅱ章）。博多の護岸設備と元寇防塁に密接な関係があったとすれば、港湾整備に長けていた律宗がこれらの築造に関与していたことは想像に難くない。

しかし、近年、福岡市博多区上川端町の冷泉小学校跡地において、11世紀後半から12世紀前半の交易港跡とみられる石積み遺構が発見された⁶⁾ことは留意すべきである。博多における港湾整備が11世紀後半から12世紀前半まで遡るとすれば、それは律宗の教線拡大（狭川 2009）より以前のことになる。律宗の教線拡大以前の港湾整備については、当時博多湾沿岸地域で活発に活動していた中国商人や入宋僧、来日宋僧らが、その土木技術の情報や知識をもたらし、工事の指揮を執っていた可能性がある。そして、彼らの港湾整備への関与が、律宗の教線拡大以後においても継続したことは十分考え得ることである。このように、博多の港湾整備と元寇防塁築造の間に関係性を想定することが許されるのであれば、第Ⅳ章の岩永論文で指摘されているように、元寇防塁築造の土木技術指導について、律宗のみならず禅宗の関与も含めて考える必要も出てこよう。

4. おわりに

2016年に九州大学箱崎キャンパス地区で初めて元寇防塁が発見されてから、2022年で6年が経過したことになる。その間の継続的な発掘調査・研究によって、箱崎キャンパス地区元寇防塁の実態が明らかにされてきた。本報告書では、これまでの調査研究成果を総括しつつ、（1）元寇防塁における地域的差異の背景、（2）元寇防塁の技術的系譜、という二つの具体的な課題の解決を試みてきた。

そうした試みを通して、元寇防塁研究の新たな展開に資する研究視点や研究課題を提示できればと考えた次第である。

また、本報告書では、考古学・日本史・朝鮮史・自然地理学・岩石学といった様々な研究分野の先生方から、元寇防塁を取り巻く諸問題についてご寄稿いただいた。どの論考も大変重要な研究成果が示されており、今後の当該研究分野の発展に寄与することは間違いない。

こうしてみると、元寇防塁という研究テーマは、決して考古学という一つの学問分野のみで扱いきれるものではないことは明らかである。その点において、昭和42年（1967）から同44年（1969）の三年間、鏡山猛を団長として、考古学・国史学・建築学・建築史学・土工土木学・冶金学・地質学からなる学際的調査研究組織を結成して実施された、今津・生の松原・西新地区の元寇防塁発掘調査・研究が、如何に最先端かつ重要なものであったかを改めて痛感するのである。こうした先学の営みを、後進である我々は発展的に継承していかなばなるまい。依然として解決すべき課題は山積しているものの、本報告書が、元寇防塁研究の益々の発展に少しでも貢献しうることを願いつつ、本章の結びとしたい。

（福永将大）

註

- 1) 川添（1971）、佐伯（2018）を参照のこと。
- 2) HZK1905地点のトレンチI南壁では、良好な形で大溝を検出することができたため、福岡市経済観光文化局文化財部文化財活用課の比佐陽一郎氏・福岡市埋蔵文化財センターの板倉有大氏から技術指導を受けて、土層剥ぎ取りを実施している。しかし、土層剥ぎ取りは大溝周辺のみしか実施していないため、指摘があった浜提斜面の下がりや建治三年段階の大溝の痕跡を確認することはできない。なお、土層剥ぎ取り標本は九州大学埋蔵文化財調査室にて保管されている。
- 3) HZK1805地点では大溝最大幅は15.3mを測り、他地点の大溝最大幅に比べて倍近く幅が広い。その理由は判然としないが、HZK1805地点の大溝埋土からは、12世紀後半の遺物に加え、14世紀～15世紀代の比較的新しい遺物が出土している点で、他地点とは異なる様相を示している（第IV章福永論文）。石積み遺構SF00周辺では、14世紀後半～15世紀前半の火葬土坑が検出されており、HZK1805地点の大溝の幅広さは、こうしたモンゴル襲来後における土地利用と関係している可能性もある。なお、他地点の石積み付近で同様の遺構は見つかっていない。
- 4) 元寇防塁に関係する調査以外の調査地点については、現在整理作業を進めており、令和4年度以降に発掘調査成果報告書を刊行する予定である。これらの調査研究成果が公表されることで、箱崎キャンパス地区の土地利用史が、より詳細に復元されるであろう。
- 5) 『八幡愚童訓』にある記述は歴史事実とみなすことは不可能とする言説もある（中山 1913、服部 2014・2017）。
- 6) 西日本新聞（2019年11月5日記事）：<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/556821/>
毎日新聞（2021年3月6日記事）：<https://mainichi.jp/articles/20210306/ddp/014/040/001000c>

引用文献

- 相田二郎 1958 [1982] 『蒙古襲来の研究』増補版、吉川弘文館
 網野善彦 1974 『蒙古襲来』小学館
 池内宏 1931 『元寇の新研究』財団法人東洋文庫
 井沢洋一（編）1992 『博多32』福岡市埋蔵文化財調査報告書第287集、福岡市教育委員会
 市原季彦・下山正一 2019 「HZK1802地点におけるジオスライサー調査の成果」三阪一徳・谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点—付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室、118～130頁
 岩永省三 2020 「箱崎キャンパス内外の元寇防塁推定線再論」齋藤瑞穂（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集、九州大学埋蔵文化財調査室、

164～174頁

- 大塚紀宜 2013「元寇防塁と博多湾—防塁の構造とその戦略的機能について」『新修福岡市史—特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市、302～317頁
- 川添昭二 1971『注解元寇防塁編年史料—異国警固番役史料の研究—』福岡市教育委員会
- 川添昭二 2008『中世・近世博多史論』海鳥社
- 藏富士寛 2017「元寇防塁第12次（GKB12）」本田浩二郎（編）『福岡市埋蔵文化財年報 VOL.32—平成29（2017）年度版—』福岡市教育委員会
- 藏富士寛（編）2019『元寇防塁調査総括報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1328集、福岡市教育委員会
- 齋藤慎一・向井一雄 2016『日本城郭史』吉川弘文館
- 齋藤瑞穂・三阪一徳・福永将大 2020「箱崎砂丘東端の元寇防塁をめぐる二・三の問題」齋藤瑞穂（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集、九州大学埋蔵文化財調査室、175～195頁
- 佐伯弘次 2001「軍事的拠点としての中世箱崎津」『博多研究会誌』第9号、博多研究会 33～36頁
- 佐伯弘次 2003『日本の中世9 モンゴル襲来の衝撃』中央公論新社
- 佐伯弘次 2018「箱崎の元寇防塁と薩摩」福田正宏・森貴教（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、九州大学埋蔵文化財調査室、92～98頁
- 狭川真一 2009「近畿の中世石塔」狭川真一（編）『日本の中世墓』、高志書院、23～40頁
- 佐藤一郎（編）2002『博多85』福岡市埋蔵文化財調査報告書第711集、福岡市教育委員会
- 塩屋勝利・井澤洋一 1998「博多遺跡群第103次調査（HKT-103）」松村道博（編）『福岡市埋蔵文化財年報 Vol.11 1996年度（平成8年度）』福岡市教育委員会
- 下山正一・三阪一徳・市原季彦 2019a「HZK1802地点における土層の概要」三阪一徳・谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点— 付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室、131～133頁
- 下山正一・三阪一徳・市原季彦 2019b「箱崎砂州の発達過程の考察」三阪一徳・谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点— 付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室、134～143頁
- 神啓崇（編）2021『箱崎63』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1428集、福岡市教育委員会
- 鈴木邦雄 1994「日本の海岸植生・塩生植生」『日本海水学会誌』第48巻第5号、日本海水学会、360～366頁
- 竹内榮喜 1913「蒙古軍上陸に関する新研究」史蹟現地講演会（編）『元寇史蹟の新研究』丸善株式会社、1～38頁
- 寺田仁志・川西基博・久保紘史郎 2014「種子島本村海岸の砂丘地植生について」『鹿児島県立博物館研究報告』第33号、鹿児島県立博物館、1～26頁
- 中塚武 2020「中世における気候変動の概観」中塚武（監修）、伊藤啓介・田村憲美・水野章二（編）『気候変動から読みなおす日本史 4 気候変動と中世社会』臨川書店、15～35頁
- 中山平次郎 1913「元寇史研究の三参考文籍」史蹟現地講演会（編）『元寇史蹟の新研究』丸善株式会社、39～171頁
- 服部英雄 2014『蒙古襲来』山川出版社
- 服部英雄 2017『蒙古襲来と神風』中公新書
- 福永将大（編）2021『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 福永将大・齋藤瑞穂 2021「箱崎砂州先端部における元寇防塁とその特質」福永将大（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集、九州大学埋蔵文化財調査室、180～197頁
- 三阪一徳・谷直子（編）2019『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点— 付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 三阪一徳・齋藤瑞穂・福永将大・谷直子・宮本一夫 2019「箱崎地区における元寇防塁の構造と立地環境」『令和元年度九州考古学会総会 研究発表資料集』九州考古学会 80～89頁
- 宮武正登 2017「九州の中世城館の基本的特徴」『平成29年度鹿児島県考古学会総会 九州考古学会・鹿児島県考古学会合同学会 南九州における中世城郭研究の問題点 発表資料集』、21～33頁

VI 総括と展望

2015年に埋蔵文化財調査室を再編し、箱崎キャンパス売却予定経費により、プロジェクト型助教を採用し、箱崎キャンパス跡地の埋蔵文化財調査に限って発掘調査を行うこととした。そこに至る経過は既に記したとおりであるが（宮本 2017）、2015年12月に助教2名を採用し、2016年から発掘調査を始めることとした。

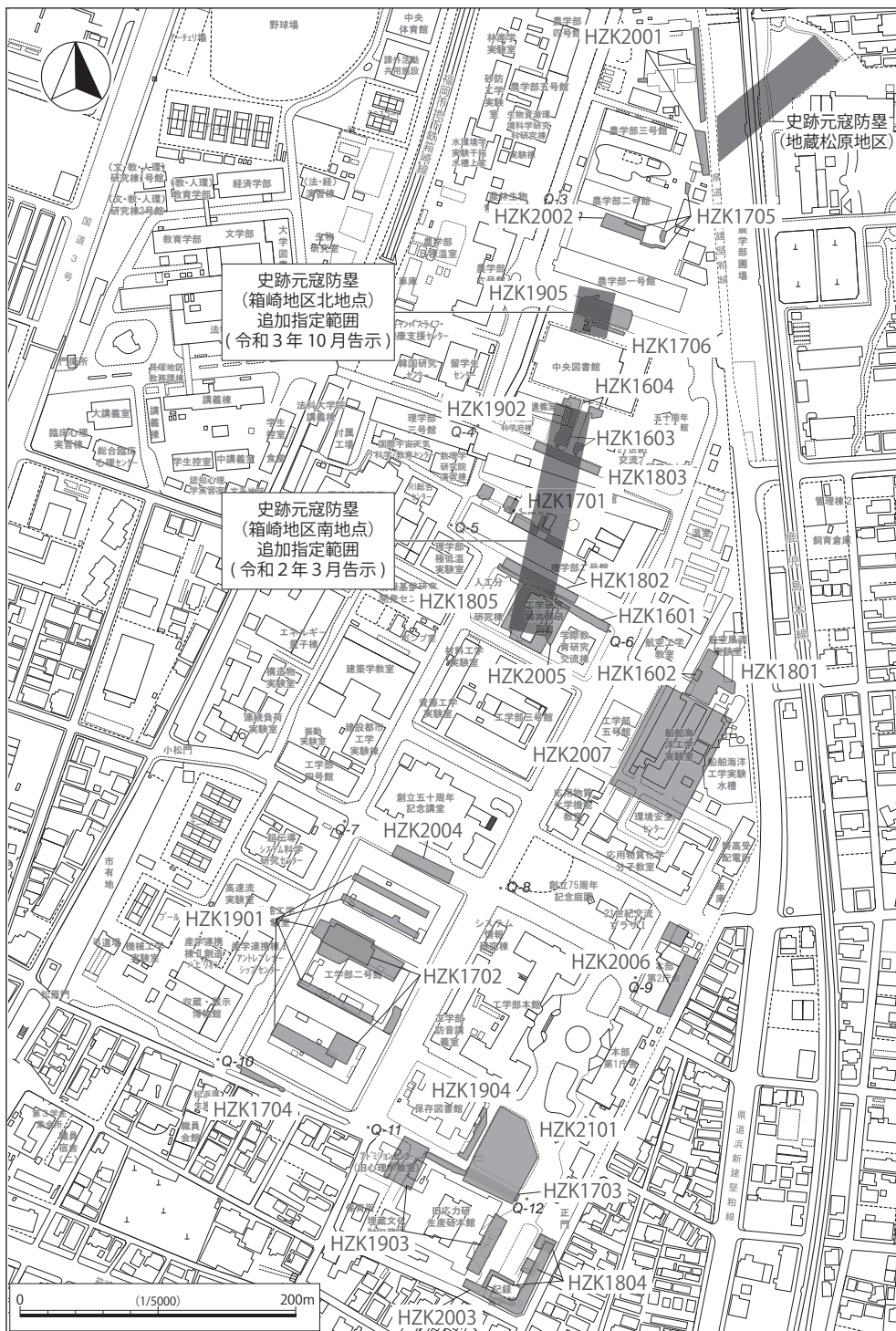
この時期、福岡市経済観光文化局文化財活用部文化財課（以後、福岡市埋蔵文化財課と略称）が行った箱崎キャンパスの試掘調査によって、旧応用力学研究所生産研本館の箱崎キャンパス南東部を中心に中世箱崎遺跡の広がりが見え明らかになりつつあった。また、1913（大正2）年には当時九州帝国大学医学部教授であった中山平次郎が、九州帝国大学工科大学敷地内（箱崎キャンパス）で、博多湾汀線とほぼ平行して走る土手状の隆起を元寇防塁跡と述べていた（中山 1913・1984）。しかし、近年の福岡市埋蔵文化財課の試掘では、元寇防塁跡は発見されない状態で、既に消滅しているものと思われる。

こうした中、埋蔵文化財調査室によって、箱崎キャンパス内での箱崎遺跡の広がりを探るために始めた最初の発掘調査が、HZK1601地点の調査である（第85図）。旧理学部二号館前南地点で2016年5月～6月に行ったものである。この段階で溝状遺構SD01を検出したが、当初、東西方向に走る2列の浜堤の間の谷部にたまった遺物包含層である可能性が考えられた。SD01の埋土では、12世紀から15世紀の遺物が出土していた。結果的には、このSD01の埋土②が、元寇防塁の大溝であることが後に判明する。最初の発掘から、埋蔵文化財調査室では元寇防塁跡の調査を始めていたのである。

元寇防塁跡と判明した最初の調査は、2016年8月から10月に行ったHZK1603地点の調査である（第85図）。この調査の端緒になったのが、HZK1603地点に隣接する東西方向の舗装道路の北端部でのガス配管切り替え工事に伴う福岡市文化財課の立ち会い調査で発見された長径最大60cmほどある大型礫（第86図）であった。2016年5月19日のことである。大型礫は南北方向に続いて配列している可能性があり、元寇防塁の石積みである可能性が考えられた。そこで、HZK1601地点の調査終了後、2016年8月22日から大型礫発見の直ぐ北側の空き地（HZK1603地点）を発掘調査した。その結果、防塁の石積み遺構が発見され（第87図）、最も良好な遺存状態で3段の積石部が確認された。石材直下から発見された土師皿や土塁内の放射性炭素年代から、1277年に薩摩国の御家人によって築造された元寇防塁跡と判断した。2016年9月20日には記者発表を行い、翌21日には現地説明会を開催し、多くの見学者が訪れた。

2017年2月～3月には、HZK1603地点の北側に連続するHZK1604地点（第85図）を調査し、石積み遺構の連続部分を確認している。これより、北側は1973年に建設された旧中央図書館によって元寇防塁遺構は破壊されていたことが判明した。こうしたHZK1603・1604地点の調査成果に基づき、九州大学埋蔵文化財調査委員会では2017年5月18日に現地保存を決定した。

箱崎キャンパス売却予定地では土壤汚染が深刻であり、土壤汚染対策法によって売却前に土壤汚染処理を行うことが義務づけられている。旧理学部に土壤汚染処理のためのプラントを建設することとなり、その建設前に元寇防塁の調査を行うこととした。旧理学部内で想定される元寇防塁の存在地点で、建物などで破壊されていない旧理学部中庭を調査対象とした。2017年5月～7月に調査を行ったHZK1701地点（第85図）である。この調査によって、元寇防塁の石積みが土塁の海側のみに築かれ、陸側には溝状遺構が掘られていることが判明した（第87図）。そこで、元寇防塁の引き続きの発見を



第85図 九州大学埋蔵文化財調査室全調査地点・史跡元寇防塁指定範囲

周知するため、同年6月26日に記者発表を行った。一方、この溝状遺構に関しては、HZK1601地点の溝状遺構も含め人工的に掘りあげられたものか、あるいは列状をなす浜堤列間の谷部であるかが問題となった。これに関しては、2018年にHZK1601地点に隣接して設定したHZK1802地点（第85図）調査時に行ったジオスライサー調査の結果、人工的に掘りあげられた大溝（第87図）であることが判明した（市原・下山2019）。この大溝の基盤層が12～13世紀であり、基盤層を掘り込んだ大溝の最下層には12～13世紀の遺物が、さらに大溝の埋積土には13～14世紀の遺物があり、この段階に大溝が廃棄されたと考えられる。したがって大溝の存続時期が13～14世紀であり、文献では1277年に築造され鎌倉滅亡の1333年まで存続していた箱崎における元寇防塁の存続年代（佐伯 2018）と対応したものであることが判明した。これにより、大溝も元寇防塁の一部であることが明らかとなった。また、ジオスライサーの土壌調査により、防塁が築かれた基盤の土層は、宇美川からの堆積物によって12世紀代に形成された砂州状に築かれていることが判明した。

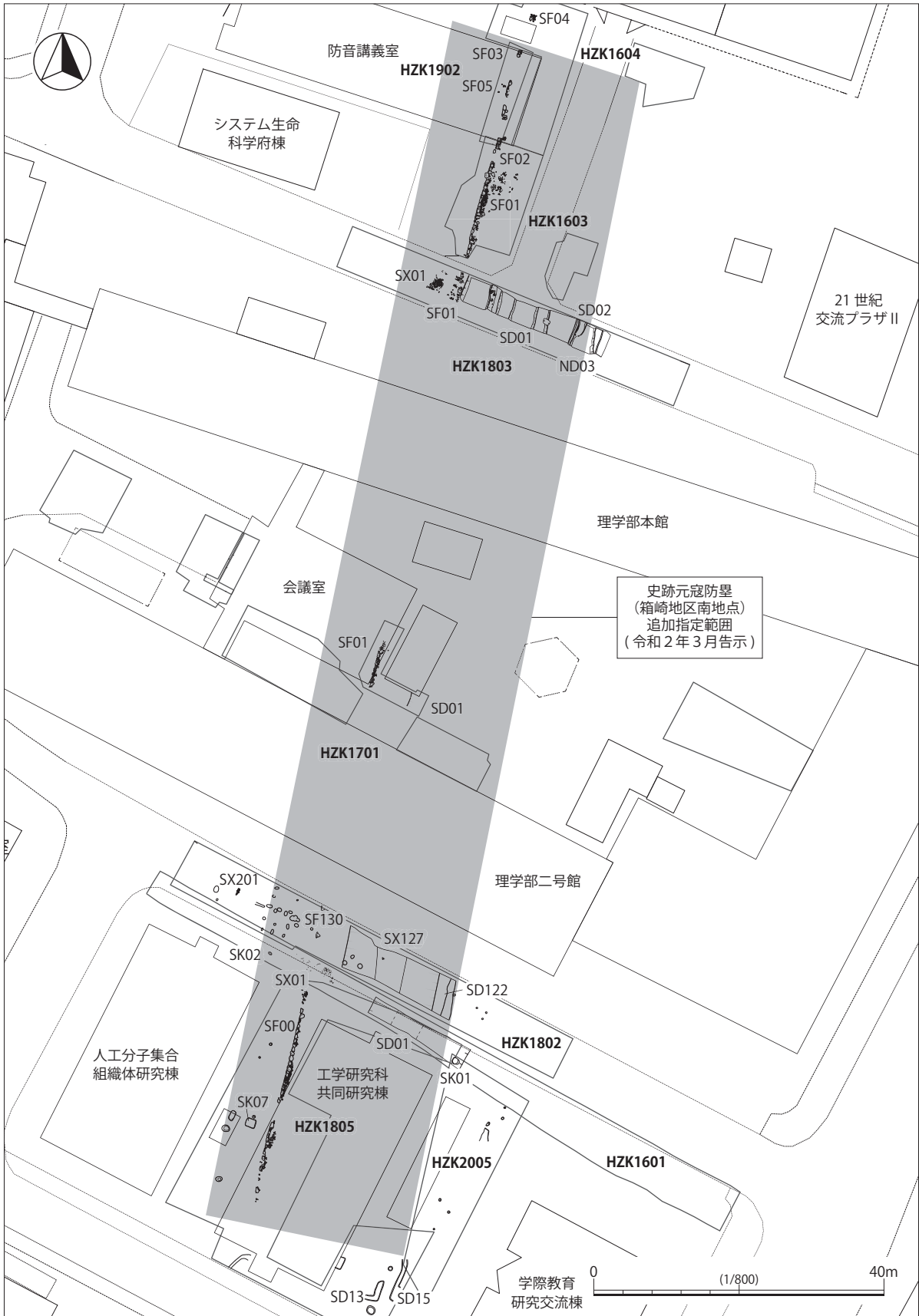
また、石積みから海側に30mの地点が元寇当時の海岸の汀線であると考えられた（福田ほか 2018）。

このような調査成果から、箱崎キャンパスの元寇防塁が、12～13世紀代には安定した砂州上に土塁を築き、海側には石積みが築かれていることが明らかとなった（第88図）。石積みはHZK1601地点で発見された3段の石積みが約90cmの高さを測り、『蒙古襲来絵詞』に描かれた生の松原の防塁が7～8段築かれている様子から復元すると、約2mの高さに積み上げられていたと考えられる。一方で、石積みの背面は、幅約5mの砂による盛り土で支えるのみである（第88図）。第V章では、石積みのこうした脆弱な構造から、石積みはせいぜい4～5段程度のもと考え、高さ1.5m程度と推定した。この石積みの石材は、第IV章で足立達朗が示したように、多々良川河口の隣接した地域から持ち込まれたことが判明している。大溝は、防御的な機能とともに土塁の土盛りのために短期間で土を確保する意味もあったと考えられる。このように、汀線から約30mの海側に石積みを築き背後は土塁で突き固められ、陸側に幅6～9mの空堀である大溝を掘った元寇防塁が存在することが分かった（第88図）。こうした構造は、博多湾に広がる元寇防塁でも特異であり、普請を担当した薩摩の御家人の発案であるかもしれない。しかし、第IV章で岩永省三が述べるように、他の地域でも大溝が掘られていた可能性もあり、今後、他地域の再調査が求められる。また、箱崎遺跡と同様に、石積みが海側に1列のみあるのは、今津地区の元寇防塁第12次調査2区でもみられる（藏富士編 2019）。このように、担当した国ごとあるいは御家人ごとに、その地域の土地環境に応じて創意工夫がなされ、博多湾岸を巡る壮大な元寇防塁が築かれたのである。

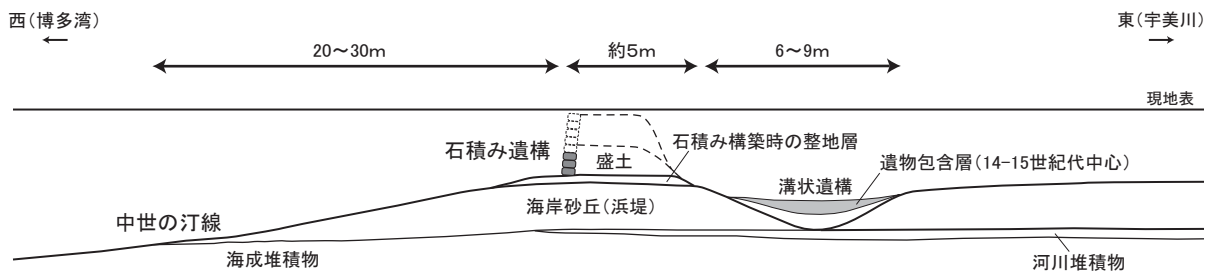
2017年に行った旧工学部二号館のHZK1702地点ならびにHZK1704地点（第85図）では、石積み遺構を含む防塁部分は既に破壊されていることが明らかとなった。また、2017～2018年にかけて行った創立五十周年記念講堂、旧工学部三号館での試掘調査では、後世の攪乱部分が多く、遺跡はほとんど残っていない状態であった。そこで、2018年には、HZK1601地点の北隣にHZK1802地点を設定し、



第86図 HZK1603地点調査の端緒となった大型礫



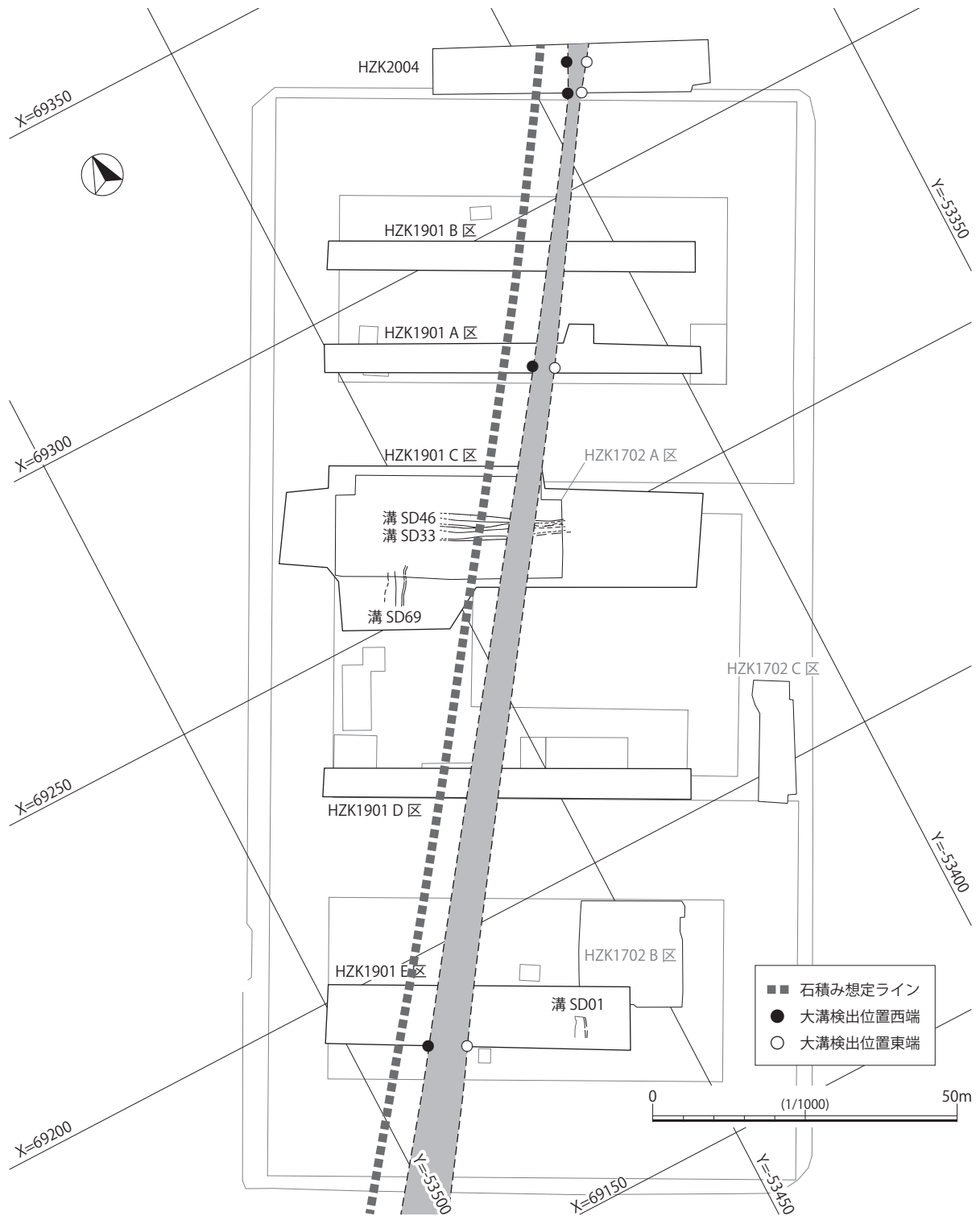
第87図 史跡元寇防塁追加指定範囲（箱崎地区南地点）



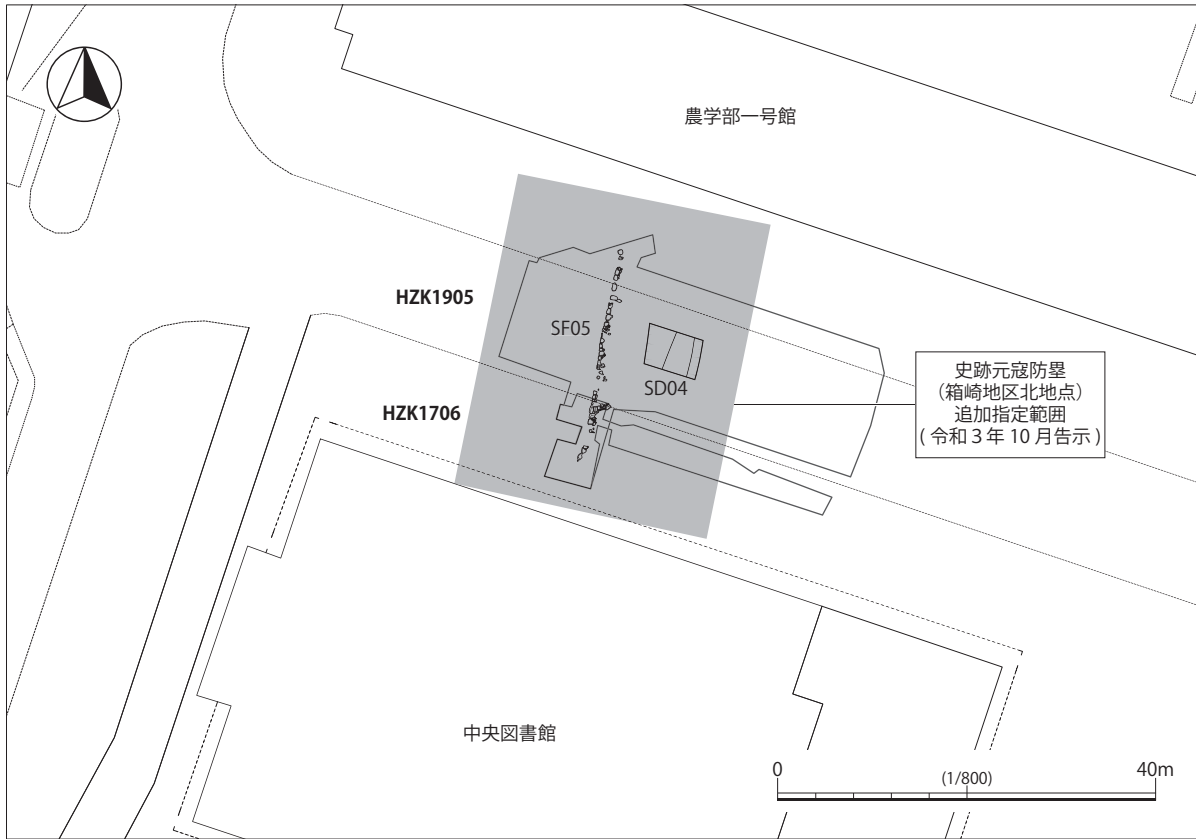
第88図 発掘調査とジオスライサー調査から推定された模式断面

石積みと大溝を発見した（第87図）。また、HZK1601地点に隣接する旧工学研究科共同研究室と人工組織体研究棟の間の僅かな空間地に HZK1805地点を設定したところ、石積みが1段ではあったが25m以上連続して続いていることが判明した。そして、その背後に幅14~15mの大溝 SD11が発見された。さらに、大溝の陸側には区画溝である SD13・15や溝 SD122が発見された（第87図）。大溝の使用時の堆積土には、13~14世紀の龍泉窯や白磁などの輸入陶磁器を中心とした土器が含まれるのに対し、大溝の廃棄後の埋土には13~15世紀の遺物が含まれている。元寇防塁は一般的に1276（元治元）年に築造したと言われるが、文献記録によれば、箱崎地区の元寇防塁は1277年に完成している（佐伯 2018）。その後、何回かの改修を受け、1333年まで薩摩の御家人が石築地を覆勘した記録があり（佐伯 2018）、この段階まで防塁は防衛のため守られていたのである。第IV章の佐伯弘次論文でも1332年の鎌倉末期まで元寇防塁の修理が行われており、その後の南北朝時代以降は異国警護番役の意味が異なったことが示される。すなわち、1276年の築造から1333年の鎌倉幕府滅亡までの約50年間は、元寇防塁が維持されていたと考えられる。大溝の使用時の13~14世紀の遺物は、防塁の維持管理されていた時期を表している。また、防塁の陸側で発見された区画溝は、これら防衛の任にあった武士たちの居宅を囲む区画溝であったと考えられる（宮本 2019）。また、防塁の海側では火葬土壇が発見され（第87図）、火葬土壇 SK07には、14世紀後半~15世紀前半の土師器鍋が使われていた。第IV章で福永将大が検討したように、この火葬土壇は元寇防塁が廃棄された直後の14世紀後半から15世紀前半段階に作られたものである。むしろ、火葬土壇の存在は、鎌倉末期まで元寇防塁が機能していたが、南北朝以降から室町時代初期にかけて元寇防塁が廃棄されたことを意味しており、第IV章の佐伯弘次の文献史的検討と矛盾のないものである。さらに、2018年に調査した HZK1803地点では、2016年の試掘で最初に発見された石積みを含め、石積みとともに大溝が発見されている。この大溝の出土遺物は12世紀中頃から13世紀初頭の遺物であり、大溝が掘り込まれた基盤層の水成堆積の遺物と考えるべきであろう。したがって、大溝使用時の遺物は存在せず、この地点付近には生活痕跡がなかったことを示している。このように、区画溝とともに大溝内に輸入陶磁器を含めた13世紀から14世紀の遺物が多量に出土した HZK1701~HZK1805地点の防塁の陸側には、防塁使用時の生活空間が存在していたと考えられる。それは、防塁を覆勘していた薩摩の御家人たちの居宅が区画溝に囲まれて存在していたと想定される。

以上のように、旧中央図書館の南側から旧工学部三号館北側までは、石積み・土塁と大溝がセットで元寇防塁が構成されていることが明らかとなった（第87・88図）。このような遺構状況に関しては、発掘調査終了後、文化財ワーキンググループによって現状保存の処置が講ぜられていた。こうした提言や文化庁・福岡県文化財課・福岡市埋蔵文化財課の指導に従い、九州大学埋蔵文化財調査委員会では、2018年12月14日に、これらの地点を国の指定史跡「元寇防塁跡」に追加指定すべき指定範囲と決定した。その後、福岡市に設置された九州大学箱崎キャンパス跡地内遺跡検討委員会の審議を経て、



第89図 旧工学部二号館付近の元寇防塁遺構



第90図 史跡元寇防塁追加指定範囲（箱崎地区北地点）

国の史跡審議会に具申され、2020年3月に国の史跡に追加指定された。

指定地以南で遺跡の破壊を免れていたのは、旧工学部二号館であったが、ここでも土壌汚染のため、発掘調査が可能な地点は限られていた。この中で、2017年に行った HZK1702地点ならびに旧工学部二号館前南地点の HZK1704地点では、大溝の推定範囲が検討されたが、その後、2019年に行った旧工学部二号館地点第2次調査の HZK1901地点ならびに2000年に行った HZK2004地点で大溝が発見され、元寇防塁の推定位置を確定することができた（第89図）。この位置に関しては第V章で詳述している。また、HZK1901地点C区では、大溝を切って作られた15～16世紀の区画溝 SD033・046が発見されるとともに、同時期の区画溝がC区のSD069で、E区のSD01である。15・16世紀には、HZK1901地区C区までの元寇防塁が削平され、建物を囲む区画溝や町割に相当する区画溝が作られ、中世箱崎の街並みがこの地点まで延びてきたことが明らかとなった。

一方で、旧中央図書館北側でも元寇防塁遺構が発見された。2017年に行った HZK1706地点で検出した1段分の石積み遺構である（第90図）。2018年2月28日には記者発表をおこない、3月1日に現地説明会を実施した。2018年9月には箱崎キャンパスから伊都キャンパスへの移転が完了し、建物解体に伴い箱崎キャンパスへの一般者の立ち入りが制限されたことから、これが最後の現地説明会となり、多くの参加者を得た。2019年に実施した HZK1905地点は HZK1706地点に隣接する北側から旧農学部一号館前までで実施したが、石積み遺構の延長部分を確認するとともに、防塁に伴う大溝も発見することができた（第90図）。さらに HZK1905地点の延長した石積み遺構で、石積みの背面に東西方向に走る背面石列が発見された。そして、この背面石列の位置づけが問題となった。2020年に行った HZK2002地点では防塁は破壊されていたが、大溝の位置を確認することができた（第91図）。大溝は

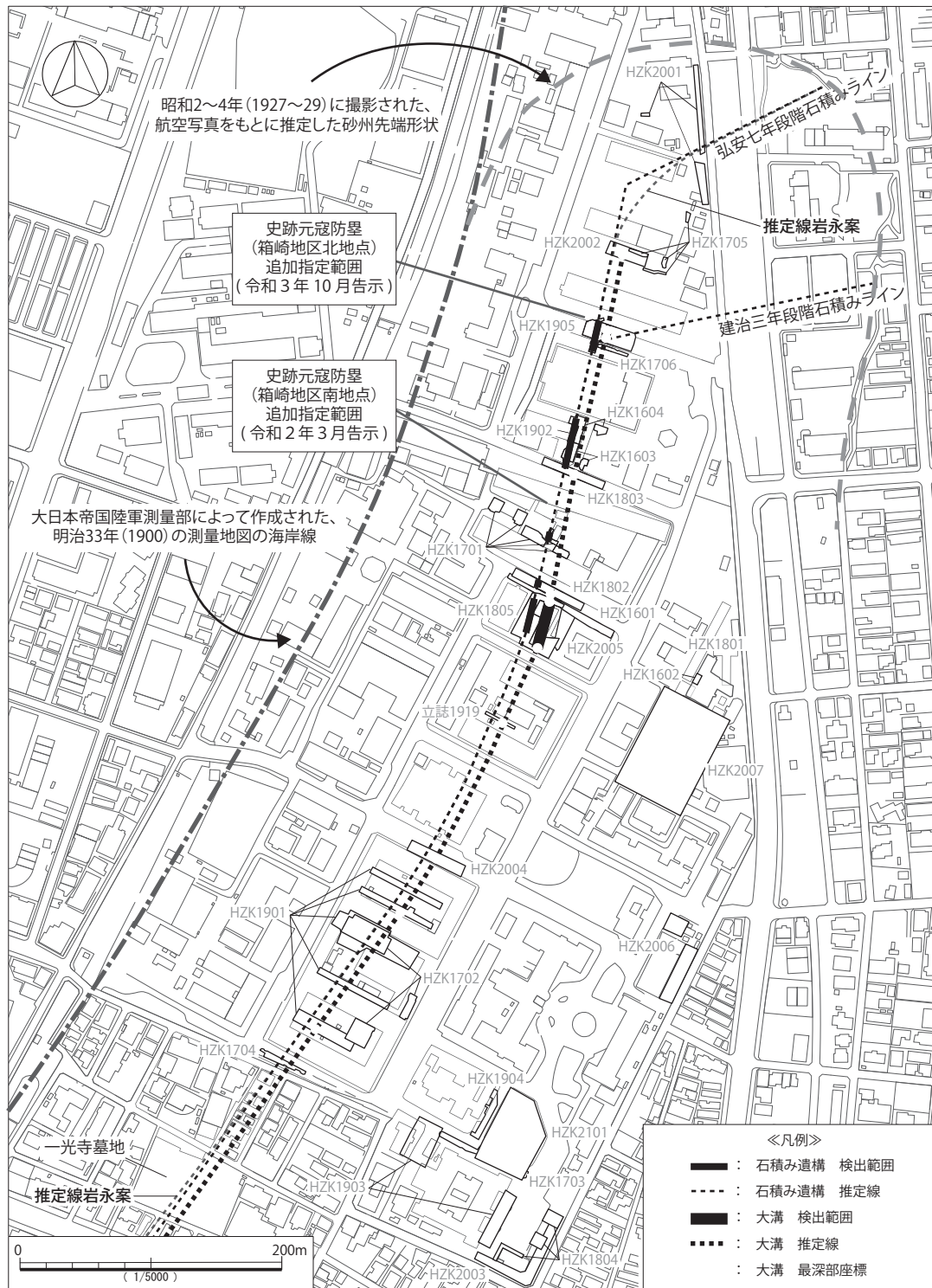
HZK1905地点からHZK2002地点の大溝まで一直線で、この調査過程で、2017年のHZK1705地点で発見していたSX04が石積み遺構ではなく、石積み遺構が攪乱されて、その石塊が散乱している地点であることが明らかとなった。また、2020年に行った地蔵松原指定地区における地中レーダー探査の結果、その方向が「箱崎町地蔵松原元寇防塁附近図」の「防塁露出ヶ所」とほぼ同じ位置であるところから、東西方向の防塁が存在すると考えられた。そして、この方向がHZK1905地点で発見された背面石列と同じ方向であることが注目された。HZK1905地点の背面石列は、石積み遺構に直交して積まれたものではなく、約105°に開くものであり、意図的な積み方の方向性がある。そこで、まずこの背面石列の位置が、1277（建治三）年の防塁完成時の北端と考え、さらにHZK2002地点の大溝地点を越えたところから東西方向に折れ曲がり、地蔵松原の石積みに繋がるものと考えられた（第91図）。これは比志島佐範分の箱崎石築地5丈1尺4寸を勤仕した覆勘状が1277（建治三）年と1284（弘安七）年の2回出ているところから、追加築造か完成後の修理があったと解釈されること（佐伯 2018）を根拠とする。1277年が背面石列まで防塁が作られ、さらに1284年に増築されて地蔵松原まで延びたと想定したのである（福永・齋藤 2021）。また、この8年の間に箱崎の砂州が発達したのと考えられる。第IV章の鹿島薫らによる分析の台風災害が、元寇に伴う弘安の役などの台風災害に特定できるかは別として、台風災害などの自然災害がこうした砂州の形成をもたらした可能性もある。また、第IV章で本田浩二郎が分析した砂丘③に元寇防塁の北端が位置するが、須恵川側からの土砂の流出は急激に砂丘③を発達させる可能性があり、元寇防塁北端の砂州の形成過程を示している。

一方、第IV章で、岩永省三はこうした二段階の変遷を考えることなく、HZK2002地点の大溝付近からカーブを描きながら地蔵松原へと繋がっていくという見解を示している（第91図）。ここでは、両論ともに可能性があるところから、両論を併記して第91図に示しておく。しかし、背面石列の存在を重視するならば、ここでの二段階変遷説の元寇防塁推定線を、埋蔵文化財調査室としては共通見解としておきたい。

このように、旧中央図書館北側の石積み遺構と大溝がセットとなって検出されたHZK1706地点からHZK1905地点までを現地保存とし、国指定史跡元寇防塁の追加指定することを、2020年8月7日の九州大学埋蔵文化財調査委員会で決定した。これを受けて、福岡市埋蔵文化財課では九州大学箱崎キャンパス跡地内遺跡検討委員会の審議の後、国の史跡審議会に具申し、2021（令和3）年10月に告示され、国指定史跡元寇防塁の追加指定となった。

以上のように、箱崎キャンパスで発見された石積み遺構と大溝からなる元寇防塁遺構は、旧工学部工学科共同研究のHZK1805地点から旧理学部さらに旧中央図書館南側のHZK1902地点までの箱崎地区南地点（第87図）と、旧中央図書館北側のHZK1706地点・HZK1905地点の箱崎地区北地点（第90図）に分かれて、国指定史跡元寇防塁として保存されることとなった（第91図）。この二つの地点の間には道路が建設され、さらに緑地帯を挟むことで、長さ約270m、幅27mの全体を見通せる遺跡空間が残される予定である（第91図）。今後はこの保存された歴史的空間が歴史公園として活用できるように、福岡市経済観光文化局文化財活用部での取り組みが求められる。また、2024年度末に埋蔵文化財調査室が解散した後、出土した遺物すべてが九州大学総合研究博物館へ移管される予定である。総合研究博物館は、九州大学箱崎サテライトの旧工学部本館を拠点としてリニューアル・オープンする予定であり、元寇防塁出土遺物も博物館展示などに活用され、研究が続けられるものである。

本報告書の第IV章で検討されたように、元寇防塁を日本史のみならず、モンゴル史や高麗史、あるいは南宋史といった東アジア史視点で眺めることにより、その歴史的意義を再認識できたのではないだろうか。また当時の地理的空間が、箱崎が天然の良港として存在しており、対外交易の拠点で



第91図 箱崎砂州先端部における元寇防塁推定線

あったことを示している。博多や箱崎を含めた博多湾岸が、東アジア交易の拠点であり日本の窓口であったことが理由となって、日本への服属や来貢を促し通商ルートを把握することを主目的としていた元が（杉山 2005）、服属した高麗を使い、後には征服した南宋を使って、博多や箱崎を目指したのは間違いがない。こうした中、1274年の文永の役により、箱崎や博多は元軍の攻撃を受けたことにより、1276年に博多湾に元寇防塁が建設されることとなった。九州各国の御家人たちが建設の賦役を担ったのである。この元寇防塁は日本史上初めて使用された国際紛争の実践的な防御設備である。その建設計画が国内で自ら創案されたものか、あるいは既に始まっていた中国商人を介した日宋貿易における技術伝播であったのか、あるいは高麗からの情報の提供であったのかは、今後も議論されなければならないであろう。しかし、1276年の建設後50年以上にわたって鎌倉幕府は元の脅威を意識していた。そのため、元寇防塁は50年以上も維持運営されていたのであり、九州各国の御家人や鎌倉幕府の負担は相当なものであったことは想像に難くない。このような負担が、鎌倉幕府の衰退をもたらす一つの要因になったのかもしれない。鎌倉幕府滅亡とともに、元寇防塁は歴史的意義を失ったのである。そうした状況が、発掘調査を通じて明らかとなったのである。（宮本一夫）

引用文献

- 市原季彦・下山正一 2019「HZK1802地点におけるジオスライサーの調査の成果」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点— 付 HZK1802・1803地点調査概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、118～130頁
- 藏富士寛（編）2019『元寇防塁調査総括報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1328集、福岡市教育委員会
- 佐伯弘次 2018「箱崎の元寇防塁と薩摩」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、92～98頁
- 杉山正明 2005『中国の歴史01 疾駆する道元の征服者 遼 西夏 金 元』講談社
- 福田正宏・下山正一・市原季彦・森貴教・谷直子 2018「九州大学箱崎キャンパスにおける石積み遺構の立地環境」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、108～124頁
- 福永将大・齋藤瑞穂 2021「箱崎砂州先端部における元寇防塁とその特質」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・200地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集、180～197頁
- 宮本一夫 2017「1.九州大学箱崎キャンパス発掘調査の体制」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、1～4頁
- 宮本一夫 2019「元寇防塁遺跡調査の成果と課題」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点— 付 HZK1802・1803地点調査概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、153～164頁
- 中山平次郎 1913『福岡附近の史蹟—殊に元寇の史蹟—』九州帝国大学医科大学
- 中山平次郎 1984「箱崎の石塁」『古代の博多』九州大学出版会、213～236頁



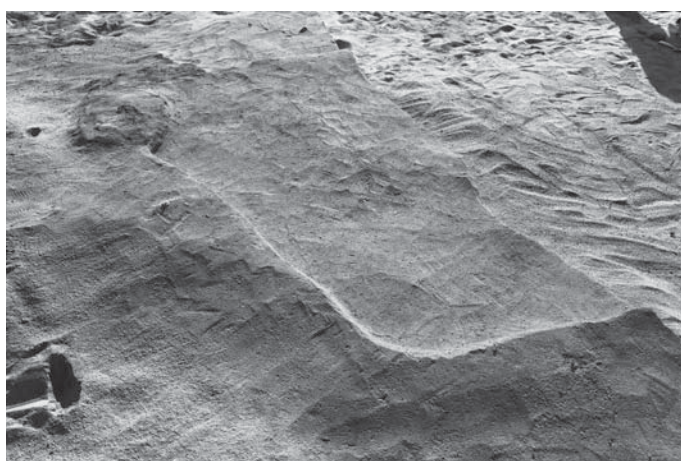
(1) 調査区全景 (北から)



(2) 調査区北側



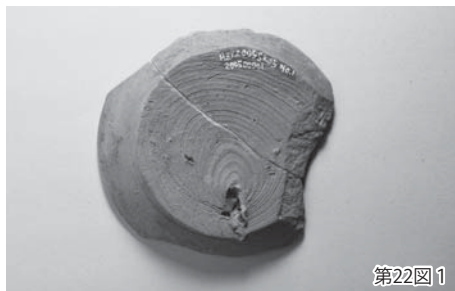
(3) 調査区南側



(4) 竪穴 SI04



(5) 土坑 SK05



第22图1



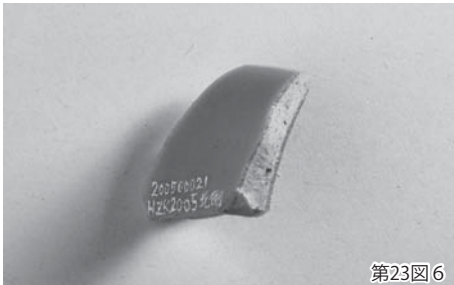
第22图2



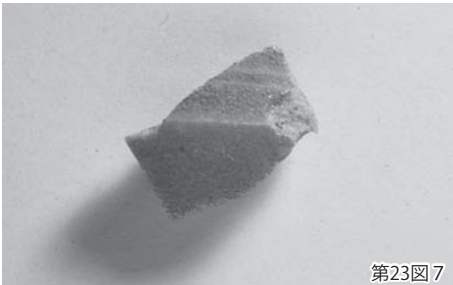
第23图1



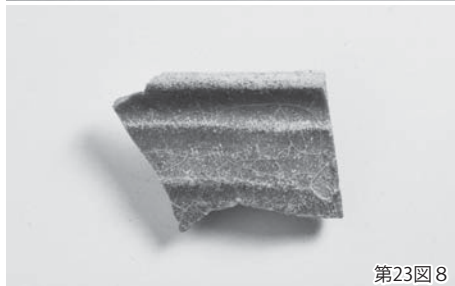
第23图3



第23图6



第23图7



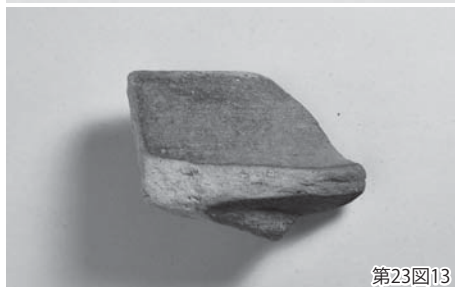
第23图8



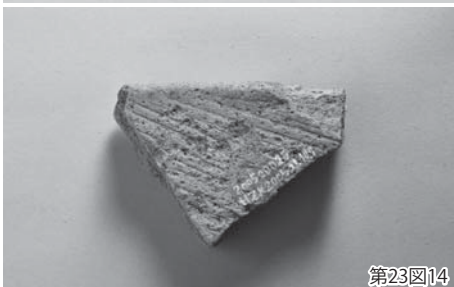
第23图9



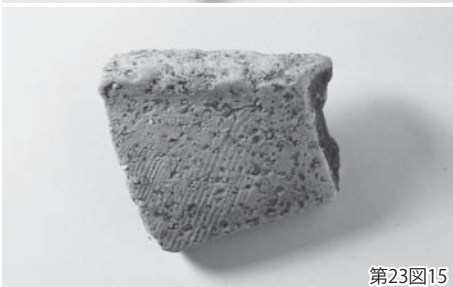
第23图12



第23图13



第23图14



第23图15



第23图19



第23图20



第23图25



第23图27



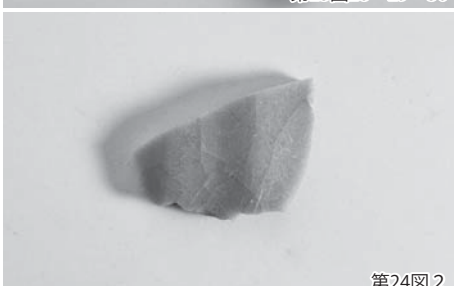
第23图28・29・30



第23图31



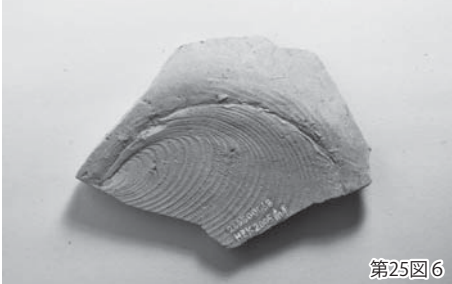
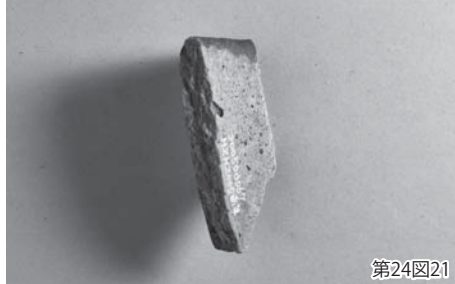
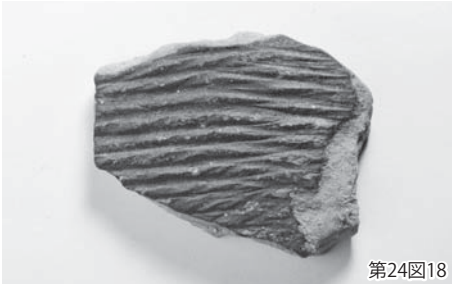
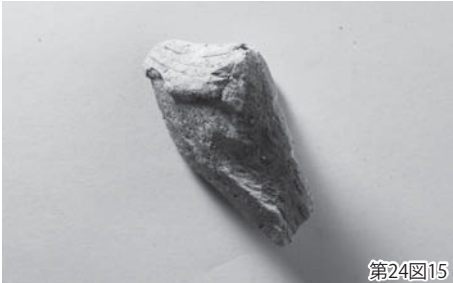
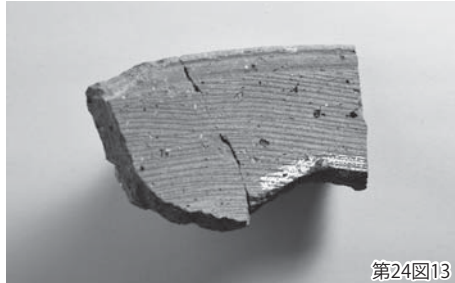
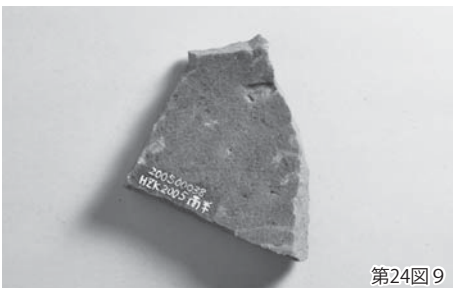
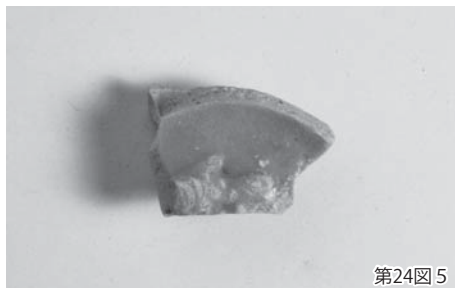
第24图1



第24图2



第24图4



報告書抄録

ふりがな	はごぎきキャンパスちくげんこうほうらい ちょうさそうかつほうこくしょ							
書名	箱崎キャンパス地区元寇防塁 調査総括報告書							
副書名	九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告5							
シリーズ名	九州大学埋蔵文化財調査室報告							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	福永将大(編)・宮本一夫・齋藤瑞穂・谷直子・石井若香菜・足立達朗・岩永省三・鹿島薫・佐伯弘次・白石典之・原口強・福本侑・本田浩二郎・森平雅彦							
編集機関	九州大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6丁目10-1							
発行年月日	2022年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はごぎきせき 箱崎遺跡 HZK2005地点	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 ひがしはごぎき 東区箱崎6丁目	40131	2639	33° 37' 31"	130° 25' 32"	20201005 ～ 20201019	300㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
HZK2005地点	集落	中世	竪穴、土坑	白磁碗、青磁碗・坏、中国陶器、朝鮮王朝陶器、瓦質土器、土師質鍋、土師器甕・皿・坏、近代染付、石鍋、土錘、石錘				
要約	<p>本報告書は、2016年度以降の箱崎キャンパス地区における元寇防塁の発掘調査を総括するものである。第II章では、福岡市域における元寇防塁の発掘調査史を振り返ることで、本報告書で取り組むべき元寇防塁研究の課題を明確化した。第III章では、九州大学箱崎キャンパス地区における元寇防塁関係の最後の調査地点である、HZK2005地点(工学研究科共同研究棟東地点)の発掘調査成果を報告した。当該調査地点は、石積み遺構と大溝が良好に検出された地点(HZK1805地点)の内側にあたるものの、近現代の攪乱が深くまで入るなど状態は悪く、元寇防塁に関係する痕跡を確認するには至っていない。さらに第IV章では、考古学・日本史・朝鮮史・自然地理学・岩石学といった様々な研究分野の先生方から、元寇防塁を取り巻く諸問題についてご寄稿いただいた。</p> <p>これまでの箱崎キャンパス地区における元寇防塁の発掘調査研究の成果と、本報告書の内容を受けて、第V章では、箱崎キャンパス地区元寇防塁の特質について再度検討した。石積み遺構の脆弱性や大溝の評価について改めて確認しつつ、箱崎キャンパス地区元寇防塁の特質が生じた背景について、箱崎砂州先端部における地理的・歴史的環境や文永の役における戦況を踏まえて考察した。また、元寇防塁築造の発想の源流や築造組織の実像についても言及している。こうした元寇防塁研究の今後の展開において、日本を取り巻く東アジア周辺諸地域との対外交渉史への位置づけや、学問分野の垣根を超えた学際的研究の必要性を説いた。</p>							

箱崎キャンパス地区

元寇防塁

調査総括報告書

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第7集

令和4年(2022)3月31日

発行 九州大学埋蔵文化財調査室
福岡市東区箱崎6-10-1

印刷 九州コンピュータ印刷
福岡市南区向野1丁目19-1

